



# 下木有戸 B・C 遺跡

平成 3 年 10 月

茨城県真壁郡関城町

つくば関城工業団地埋蔵文化財発掘調査会



B遺跡出土



C遺跡出土

## 序

水と緑に囲まれた当町は、早くから文化の開けた地域で、古くから台地を中心に集落や古墳等が数多く造られており、現在判っているものだけで100以上の遺跡が確認されています。

今回発掘調査が行われた下木有戸B遺跡・C遺跡は、茨城県開発公社が「つくば関城工業団地」造成に先立ち、事前に調査を行った際に新しく発見されたものであります。この度の発掘調査によって重要な遺跡であることが確認され、貴重な遺物が数多く検出されています。

特に、多数の摺石が出土したことは、この場所が当時の生産拠点であったことをうかがわせ、同じ場所が工業団地として造成されることもあって、歴史の巡り合わせとでもいふべき不思議さを実感しないわけにはまいりません。古代の人々の生産や生活の場であったこの地が、永い眠りから覚め、新たな時代を迎え、人々の生活基盤を塗り上げる工業団地に生まれ変わろうとしているのです。

私たちはこの熾然たる事実を深く受け止め、連綿と続く故郷の歴史の流れを、後世に正しく伝えていく責務があります。故郷の歴史を知ることが、故郷のよりよき将来を創造するために必要不可欠であると確信するものであります。

最後になりましたが、今回の調査に当たりまして、関係各位から寄せられましたご理解やご協力に対し感謝申し上げますとともに、この報告書が、郷土の歴史を知る一助として広く活用されることを念願して挨拶いたします。

平成3年10月

関城町長 齋藤和夫

## 発刊に寄せて

わたしたちの故郷関城町は、水と緑に恵まれ、早くから人々の生活が営まれてきました。古代には果有数の装飾をもつ船玉古墳、中世には南北朝期の関城を巡る攻防戦、近世には鬼怒川を利用した水運等、それぞれの時代に先人の歴史が刻まれています。

今回発掘調査が行われた下木有戸B遺跡・C遺跡は、同地区が「つくば関城工業団地」として造成されるため、事前に調査を行った時に存在が確認され、引き続き発掘調査が行われたもので、重要な遺構、貴重な遺物が多数検出されました。詳細については報告書に述べられているとおりですが、県西地区では発見例が少ない弥生時代の住居や、県内では珍しい有柄石籬（ありがらいしきり）の出土など、多くの成果を上げることができました。当時のこの地域における人々の生活を知る上で、極めて貴重な資料が得られたことは、故郷の歴史を解明する上で大きな前進であったと確信いたします。

私たちが今生きている現在は、過去の祖先の営みのうえに成り立っています。そして、未来もその延長上にあるのです。未来をよりよくするためには、歴史を正しく理解し、現在の私たちを正しく知ることから始まるのです。歴史に愛情をもって接し、祖先の足跡、伝統を正しく学び、反省し、その上ではじめてよりよい未来の建設が可能になるのです。

最後になりましたが、茨城県開発公社をはじめとする関係機関各位、特に真夏の炎天下、発掘作業の指揮をとられた河野辰男団長以下作業にご協力いただいた皆さんに心から感謝申し上げ、この報告書が広く活用されることを願って、刊行の言葉といたします。

平成3年10月

つくば関城工業団地埋蔵文化財発掘調査会長

関城町教育委員会教育長 齊藤 昭

## 例 言

- (1) 本報告書は、平成2年7月15日より、平成2年12月27日までに実施された「筑波関城工業団地」造成に伴う、関城町下木有戸に所在する下木有戸B・C遺跡についての発掘調査報告書である。
- (2) この発掘調査は関城町において結成されたつくば関城工業団地埋蔵文化財発掘調査会が主体となって実施し、本県教育庁文化課の指導助言のもと、河野辰男がこれを担当し、調査員として河野通義、調査補助員として宮本泰男、八城光弘がこれに携わり、その他、地元作業員の協力を得て行った。
- (3) この下木有戸B遺跡・同C遺跡については、作業準備その他の都合によりC遺跡の方からその調査を行い、それを報告書に記載した。
- (4) 本報告書の原稿の執筆は河野辰男、河野通義が担当し、本書の編集は河野辰男が行った。出土遺物の整理には河野通義、八城光弘が当り、図面作成には宮本泰男、鈴木京子、梅田のぶえが担当した。
- (5) 本遺構の記号を下記のとおりとした。

### ① 使用記号

竪穴住居址－S I、掘立柱建物遺構－SB、土壇状遺構－SK、溝状遺構－SD。

### ② 遺構に伴う施設等の表示方法

#### 土層の分類

1	黒色	42	暗黒色(焼土混入)
2	黒色(焼土粒子混入)	43	木根
3	暗黒色	44	暗黒色(茶褐色塊散見)
4	暗黒色(焼土粒混入)	45	暗黒色(砂粒混入)
5	黒土塊	46	焼土粒
6	黒褐色	47	4 焼土粒子
7	黒褐色(焼土混入)	48	明茶色
8	黒褐色(炭・焼土混入)	49	褐色(ローム塊混入)
9	黒褐色(炭混入)	50	茶褐色(黒土粒混入)
10	黒褐色(ローム粒混入)	51	明褐色(焼土混入)
11	黒褐色(ローム塊)	52	明褐色(木炭混入)
12	黒褐色(砂粒混入)	53	淡黒色
13	黒褐色(ローム粒子混入)	54	黒褐色(焼土粒・ローム粒混入)
14	黒褐色(焼土粒子)	55	黒褐色(焼土粒・ローム粒混入)

15	黒褐色(焼土粒)	56	暗黒色(焼土粒・炭粉混入)
16	暗黒褐色(焼土混入)	57	ロームを基調とした茶褐色層に炭焼焼土塊混入
17	褐色	58	焼土塊
18	褐色(焼土粒混入)	59	茶褐色(炭混入)
19	茶褐色	60	暗黒褐色
20	茶褐色(ローム塊混入)	61	茶褐色(ローム混入)
21	茶褐色(焼土混入)	62	黒褐色(焼土粒・炭混入)
22	茶褐色(ローム塊・焼土混入)	63	薄い黒褐色
23	茶褐色(ローム粒混入)	64	薄い黒褐色(ローム粒混入)
24	茶褐色(ローム粒子)	65	黄褐色(焼土塊混入)
25	茶褐色(焼土粒混入)	66	粘土塊
26	茶褐色(焼土粒・ローム粒(中)混入)	67	明茶褐色(ローム混入)
27	明褐色	68	明茶褐色に黒斑
28	明褐色(ローム塊混入)	69	茶褐色に黒斑
29	明茶褐色	70	茶褐色を基調とした黒土塊混入
30	明茶褐色(ローム塊混入)	71	灰褐色
31	明茶褐色(黒土塊)	72	黒褐色(黒土塊混入)
32	明茶褐色(照度混入)	73	明褐色に黒斑
33	黄褐色	74	黒褐色に黒斑
34	ローム	75	黒斑
35	ローム塊	76	ロームを基調とした淡い黒色
36	焼土	77	淡い褐色
37	炭	78	明黄褐色に黒斑
38	明褐色(ローム粒混入)	79	ロームに近い茶褐色
39	竈食木根	80	亜麻色
40	試掘擾乱	81	灰茶褐
41	全体に焼土粒子混入		焼土: カマド が

- (6) この発掘調査及び整理に当たっては、本県教育庁文化課、歴史館、教育財団、四学院大学並びに本県開発公社、地元の指導助言を受けた。また、関城町史に負うところが大きかった。

# 目 次

序 .....	町長 .....	1
発刊によせて .....	教育長 .....	2
例 言 .....		3
I 発掘調査に至る経過 .....		17
II 本遺跡周辺の地理、歴史的環境 .....		27
III 下木有戸C遺跡 .....		39
1. 本遺跡の概況 .....		43
2. 本遺跡の遺構について .....		47
(1) 弥生時代後期の遺構 .....		49
(2) 五領期より和泉期に亘る遺構 .....		49
(3) 平安時代中、後期に亘る遺構 .....		49
ア 竪穴住居址についての概況 .....		50
イ 掘立柱建物遺構についての概況 .....		50
(4) 土擴状遺構の概況について .....		51
(5) 表探、覆土における遺物についての概況 .....		52
3. 各遺構の概況 .....		53
(1) 竪穴住居址 .....		56
(2) 掘立柱建物遺構 .....		105
(3) 土擴状遺構、溝状遺構 .....		133
(4) 覆土よりの遺物 .....		134
(5) 表探遺物 .....		140
4. おわりに .....		143
IV 下木有戸B遺跡 .....		147
1. 本遺跡の概況 .....		153
2. 各遺構の概況 .....		157



(1) 竪穴住居址 .....	159
(2) 土壇状遺構 .....	261
4. おわりに .....	265

## 挿図目次 (C遺跡)

第1図	関城町遺跡分布図……………23	第31図	第13号竪穴住居址遺物実測図……………86
第2図	下木有戸遺跡の地形的位置図と周辺の主要遺跡……………25	第32図	第14号竪穴住居址平面実測図……………90
第3図	鳥羽江復元想定図……………34	第33図	第14号竪穴住居址遺物実測図……………90
第4図	下木有戸遺跡の位置図……………37	第34図	第15号竪穴住居址平面実測図……………92
第5図	C遺跡全区……………55	第35図	第15号竪穴住居址遺物実測図……………93
第6図	第1号竪穴住居址平面実測図……………56	第36図	第16号竪穴住居址平面実測図……………94
第7図	第1号竪穴住居址遺物実測図……………57	第37図	第16号竪穴住居址遺物実測図……………95
第8図	第2号竪穴住居址平面実測図……………59	第38図	第17号竪穴住居址平面実測図……………96
第9図	第2号竪穴住居址遺物実測図……………60	第39図	第17号竪穴住居址遺物実測図……………97
第10図	第3号竪穴住居址平面実測図……………62	第40図	第18号竪穴住居址平面実測図 ……100
第11図	第3号竪穴住居址遺物実測図……………62	第41図	第18号竪穴住居址遺物実測図 ……101
第12図	第4号竪穴住居址平面実測図……………64	第42図	第19号竪穴住居址平面実測図 ……102
第13図	第4号竪穴住居址遺物実測図……………65	第43図	第19号竪穴住居址遺物実測図 ……103
第14図	第5号竪穴住居址平面実測図……………66	第44図	第1号掘立柱建物遺構平面実測図 ……………105
第15図	第5号竪穴住居址遺物実測図……………67	第45図	第1号掘立柱建物遺構遺物実測図 ……………106
第16図	第6号竪穴住居址平面実測図……………68	第46図	第2・3・4号掘立柱建物遺構平面 実測図 ……109
第17図	第6号竪穴住居址遺物実測図……………69	第47図	第3号掘立柱建物遺構遺物実測図 ……………111
第18図	第7号竪穴住居址平面実測図……………71	第48図	第4号掘立柱建物遺構遺物実測図 ……………111
第19図	第7号竪穴住居址遺物実測図……………72	第49図	第5・6・7号掘立柱建物遺構平面 実測図 ……113
第20図	第8号竪穴住居址平面実測図……………74	第50図	第5号掘立柱建物遺構遺物実測図 ……………115
第21図	第8号竪穴住居址遺物実測図……………75	第51図	第6号掘立柱建物遺構遺物実測図 ……………115
第22図	第9号竪穴住居址平面実測図……………77	第52図	第7号掘立柱建物遺構平面実測図 ……………116
第23図	第9号竪穴住居址遺物実測図……………77		
第24図	第10号竪穴住居址平面実測図……………79		
第25図	第10号竪穴住居址遺物実測図……………80		
第26図	第11号竪穴住居址平面実測図……………82		
第27図	第11号竪穴住居址遺物実測図……………82		
第28図	第12号竪穴住居址平面実測図……………84		
第29図	第12号竪穴住居址遺物実測図……………85		
第30図	第13号竪穴住居址平面実測図……………86		

第53図	第9・16・17号掘立柱建物遺構平面 実測図	119
第54図	第9号掘立柱建物遺構遺物実測図	121
第55図	第16号掘立柱建物遺構遺物実測図	121
第56図	第17号掘立柱建物遺構遺物実測図	121
第57図	第8・10・11・12・18号掘立柱建物 遺構平面実測図	125
第58図	第13・14号掘立柱建物遺構平面実測 図	129
第59図	第13号掘立柱建物遺構遺物実測図	131
第60図	第15号掘立柱建物遺構平面実測図	132
第61図	第15号掘立柱建物遺構遺物実測図	132
第62図	土構遺構平面実測図	133
第63図	溝状遺構平面実測図	134
第64図	覆土より出土の遺物(櫛石)	135
第65図	覆土より出土の遺物(敲石)	137
第66図	表探よりの遺物	140

## 插图目次 (B 遺跡)

第 1 图	遺跡全圖 .....	151	第 32 图	第 17 号竪穴住居址平面実測圖 .....	190
第 2 图	第 1 号竪穴住居址平面実測圖 .....	159	第 33 图	第 17 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	191
第 3 图	第 1 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	160	第 34 图	第 18 号竪穴住居址平面実測圖 .....	192
第 4 图	第 2 号竪穴住居址平面実測圖 .....	161	第 35 图	第 18 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	193
第 5 图	第 2 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	162	第 36 图	第 19 号竪穴住居址平面実測圖 .....	194
第 6 图	第 3 号竪穴住居址平面実測圖 .....	163	第 37 图	第 19 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	194
第 7 图	第 3 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	163	第 38 图	第 20 号竪穴住居址平面実測圖 .....	196
第 8 图	第 4 号竪穴住居址平面実測圖 .....	165	第 39 图	第 20 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	196
第 9 图	第 5 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	166	第 40 图	第 21 号竪穴住居址平面実測圖 .....	198
第 10 图	第 5 号竪穴住居址平面実測圖 .....	167	第 41 图	第 21 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	199
第 11 图	第 6 号竪穴住居址平面実測圖 .....	168	第 42 图	第 22 号竪穴住居址平面実測圖 .....	200
第 12 图	第 6 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	169	第 43 图	第 22 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	201
第 13 图	第 7 号竪穴住居址平面実測圖 .....	170	第 44 图	第 23 号竪穴住居址平面実測圖 .....	203
第 14 图	第 7 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	171	第 45 图	第 23 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	203
第 15 图	第 8 号竪穴住居址平面実測圖 .....	172	第 46 图	第 24 号竪穴住居址平面実測圖 .....	205
第 16 图	第 8 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	173	第 47 图	第 24 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	205
第 17 图	第 9 号竪穴住居址平面実測圖 .....	174	第 48 图	第 25 号竪穴住居址平面実測圖 .....	207
第 18 图	第 9 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	175	第 49 图	第 25 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	208
第 19 图	第 10 号竪穴住居址平面実測圖 .....	176	第 50 图	第 26 号竪穴住居址平面実測圖 .....	209
第 20 图	第 10 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	177	第 51 图	第 26 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	210
第 21 图	第 11 号竪穴住居址平面実測圖 .....	178	第 52 图	第 27 号竪穴住居址平面実測圖 .....	211
第 22 图	第 11 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	179	第 53 图	第 27 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	212
第 23 图	第 12 号竪穴住居址平面実測圖 .....	180	第 54 图	第 28・29 号竪穴住居址平面実測圖 .....	213
第 24 图	第 12 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	180	第 55 图	第 28 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	213
第 25 图	第 13 号竪穴住居址平面実測圖 .....	182	第 56 图	第 30 号竪穴住居址平面実測圖 .....	217
第 26 图	第 13 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	183	第 57 图	第 30 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	217
第 27 图	第 14 号竪穴住居址平面実測圖 .....	184	第 58 图	第 31 号竪穴住居址平面実測圖 .....	220
第 28 图	第 14 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	185	第 59 图	第 31 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	221
第 29 图	第 15 号竪穴住居址平面実測圖 .....	186	第 60 图	第 32 号竪穴住居址平面実測圖 .....	222
第 30 图	第 15 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	187	第 61 图	第 32 号竪穴住居址遺物実測圖 .....	223
第 31 图	第 16 号竪穴住居址平面実測圖 .....	189			

第62图	第33号竖穴住居址平面实测图	…225	……………263
第63图	第33号竖穴住居址遗物实测图	…225	第95图 第7号土坑状遗槽平面实测图
第64图	第34号竖穴住居址平面实测图	…227	…264
第65图	第34号竖穴住居址遗物实测图	…228	
第66图	第35号竖穴住居址平面实测图	…230	
第67图	第35号竖穴住居址遗物实测图	…230	
第68图	第36号竖穴住居址平面实测图	…232	
第69图	第37号竖穴住居址平面实测图	…233	
第70图	第37号竖穴住居址遗物实测图	…234	
第71图	第38号竖穴住居址平面实测图	…236	
第72图	第38号竖穴住居址遗物实测图	…236	
第73图	第39号竖穴住居址平面实测图	…238	
第74图	第39号竖穴住居址遗物实测图	…238	
第75图	第40号竖穴住居址平面实测图	…240	
第76图	第40号竖穴住居址遗物实测图	…240	
第77图	第41号竖穴住居址平面实测图	…242	
第78图	第41号竖穴住居址遗物实测图	…243	
第79图	第42号竖穴住居址平面实测图	…244	
第80图	第42号竖穴住居址遗物实测图	…245	
第81图	第43号竖穴住居址平面实测图	…246	
第82图	第43号竖穴住居址遗物实测图	…246	
第83图	第44号竖穴住居址平面实测图	…250	
第84图	第44号竖穴住居址遗物实测图	…250	
第85图	第45号竖穴住居址平面实测图	…252	
第86图	第45号竖穴住居址遗物实测图	…252	
第87图	第46号竖穴住居址平面实测图	…254	
第88图	第46号竖穴住居址遗物实测图	…254	
第89图	第47号竖穴住居址平面实测图	…256	
第90图	第47号竖穴住居址遗物实测图	…256	
第91图	第48号竖穴住居址平面实测图	…259	
第92图	第48号竖穴住居址遗物实测图	…260	
第93图	第1·2·3号土坑状遗槽平面实测图	……………262	
第94图	第4·5·6号土坑状遗槽平面实测图		

## 図 版 目 次 (B遺跡)

<p>図版 1 遺跡景観 .....271</p> <p>(1) B地区遠景 .....271</p> <p>(2) C地区遠景 .....271</p> <p>(3) C地区遠景 .....271</p> <p>(4) C地区遠景 .....271</p> <p>図版 2 遺構確認状況 .....272</p> <p>(5) 遺構確認状況 .....272</p> <p>図版 3 遺構全景 .....273</p> <p>(6) B地区全景 (東南から) .....273</p> <p>(7) C地区全景 (南方から) .....273</p> <p>(8) 同上 (北西から) .....274</p> <p>図版 4 B地区竪穴住居址 .....274</p> <p>(9) S I-01 .....274</p> <p>(10) S I-02 .....274</p> <p>(11) S I-3 .....274</p> <p>(12) S I-4 .....274</p> <p>(13) S I-5 .....274</p> <p>(14) S I-6 .....274</p> <p>(15) S I-7 .....275</p> <p>(16) S I-8 .....275</p> <p>(17) S I-9 .....275</p> <p>(18) S I-10 .....275</p> <p>(19) S I-11, 10 .....275</p> <p>(20) S I-12 .....275</p> <p>(21) S I-13 .....276</p> <p>(22) S I-14 .....276</p>	<p>(23) S I-15 .....276</p> <p>(24) S I-16 .....276</p> <p>(25) S I-17 .....276</p> <p>(26) S I-18 .....276</p> <p>(27) S I-19 .....277</p> <p>(28) S I-20 .....277</p> <p>(29) S I-21 .....277</p> <p>(30) S I-22 .....277</p> <p>(31) S I-23 .....277</p> <p>(32) S I-24 .....277</p> <p>(33) S I-25 .....278</p> <p>(34) S I-26 .....278</p> <p>(35) S I-27 .....278</p> <p>(36) S I-28, 29複合状況 .....278</p> <p>(37) S I-30 .....278</p> <p>(38) S I-31 .....278</p> <p>(39) S I-32 .....279</p> <p>(40) S I-33 .....279</p> <p>(41) S I-34 .....279</p> <p>(42) S I-35 .....279</p> <p>(43) S I-36 .....279</p> <p>(44) S I-37 .....279</p> <p>(45) S I-38 .....280</p> <p>(46) S I-39 .....280</p> <p>(47) S I-40 .....280</p> <p>(48) S I-42 .....280</p> <p>(49) S I-43 .....280</p> <p>(50) S I-44 .....280</p>
--	---

	(51) S I-45	.....281		(79) S B-02, 03複合状況	...286
	(52) S I-46	.....281		(80) S B-05, 06, 07, S K 01	
	(53) S I-47	.....281		複合状況	.....287
	(54) S I-48	.....281		(81) S B-06, S K 01複合状況	
図版5 C	地区竪穴住居址	.....282		S B-08	.....287
	(55) S I-01	.....282		(82) S B 07, 06, S K-01複合	
	(56) S I-02	.....282		状況	.....287
	(57) S I-03	.....282		(83) S B-08	.....288
	(58) S I-04	.....282		(84) S B-09, 16複合状況	288
	(59) S I-05	.....282		(85) S B 10	.....288
	(60) S I-06	.....282		(86) S B-11	.....288
	(61) S I 07	.....283		(87) S B-12	.....289
	(62) S I-08	.....283		(88) S B-13	.....289
	(63) S I-08	.....283		(89) S B 13, 14複合状況	289
	(64) S I-09	.....283		(90) S B-15	.....290
	(64) 同 上 かまど			(91) S B-17	.....290
	(65) S I-10	.....283		(92) S B-18, 12, 10 複合状況	
	(66) S I-11	.....283		.....290	
	(67) S I 12	.....284	図版7	C地区溝状遺構	.....291
	(68) S I-13	.....284		(93) S D-01	.....291
	(69) S I-14	.....284	図版8	B地区土壇状遺構	.....292
	(70) 同 上 焼土炭化物出土			(94) S K-01	.....292
	状況	.....284		(95) S K-02	.....292
	(71) S I-15	.....284		(96) S K-03	.....292
	(72) S I-16	.....284		(97) S K-04	.....292
	(73) S I-17	.....285		(98) S K-05	.....292
	(74) 同 上 かまど	.....285		(99) S K-06	.....292
	(75) S I-18	.....285		(100) S K 07	.....293
	(76) S I-19	.....285	図版9	C地区土壇状遺構	.....294
図版6	C地区堀立柱住居址	.....286		(101) S K-01	.....294
	(77) S B 01, S I-16 複合状			(102) 同 上 セクション	
	況	.....286		.....294	
	(78) S B-02, 03, S I-15複合			(102) S K 01	.....294
	状況	.....286		(103) S K-02	.....294

	(104) SK-03	.....294		.....299
図版10	C地区竪立柱伴居址柱穴断面	.....295	(131) S I-28壺出土状態	.....299
	(105) SB-02~P19	.....295	(132) S I-31壺出土状態	.....299
	(106) SB-03~P19	.....295	(133) S I-32壺出土状態	.....300
	(107) SB 05~P4	.....295	(134) S I-32土器出土状態	.....300
	(108) SB-06~P3	.....295		.....300
	(109) SB-09~P9	.....295	(135) S I-37貯蔵穴の中の土器 出土状態	.....300
	(110) SB-11~P16	.....295	(136) S I-40土器出土状態	.....300
	(111) SB-12~P7	.....296		.....300
	(112) SB-12~P5	.....296	(137) S I-43土器出土状態	.....300
	(113) SB-12~P4	.....296		.....300
	(114) SB-13~P2	.....296	(138) S I-43壺出土状態	.....300
	(115) SB-16~P37	.....296	(139) S I-44壺出土状態	.....301
	(116) SB-17~P1	.....296	(140) S I-46壺出土状態	.....301
	(117) SB 18~P21	.....297	図版12 C地区遺物出土状態	.....302
	(118) SB-18~P5	.....297	(141) S I-02石鏃出土状態	.....302
	(119) SB-18~P15	.....297		.....302
	(120) SB 18~P15	.....297	(142) S I-06土器出土状態	.....302
図版11	B地区遺物出土状況	.....298		.....302
	(121) S I-06壺出土状態	.....298	(143) S I-07壺出土状態	.....302
	(122) S I-06炭化物出土状態	.....298	(144) S I-08かまど附近土器出 土状態	.....302
	(123) S I-07土器出土状態	.....298	(145) S I-09増出土状態	.....302
		.....298	(146) S I-09かまど内土器出 土状態	.....302
	(124) S I-13壺出土状態	.....298	(147) S I-10壺出土状態	.....303
	(125) S I-13土器出土状態	.....298	(148) S I-13土器出土状態	.....303
		.....298		.....303
	(126) S I-20小型坏山状態	.....298	(149) S I-13高坏出土状態	.....303
		.....298		.....303
	(127) S I-22増出土状態	.....299	(150) S I-14壺出土状態	.....303
	(128) S I-22坏出土状態	.....299	(151) S I-16土器出土状態	.....303
	(129) S I-28増出土状態	.....299		.....303
	(130) S I-28土器出土状態	.....299		.....303



(152) S I-17 鋸出土状態	…303	……………	309
(123) S I-17 鎌出土状態	…304	(176) 各遺構出土土師器環	…309
(154) S I-17 刀子出土状態	……………304	(177) 各遺構出土須惠器環	…309
(155) S I-17 坏出土状態	…304	(178) S I-17 出土遺物	…310
(156) S I-17 壺出土状態	…304	(179) S I-18 出土遺物	…310
(157) S I-17 かまど内土器出土状態	……………304	(180) S I-13, 07, 18 坏	…310
(158) S I-17 壺出土状態	…304	(181) S I-13 出土, 坏, 高环, 壺	……………310
(159) S I-17 刀子出土状態	……………305	(182) S I-10 高环	……………311
(160) S I-18 土器出土状態	……………305	(183) 各遺構出土高环	……………311
(161) S I-19 鋸出土状態	…305	(184) S I-05, 15, 17 紡錘車	……………311
図版13 C地区出土遺物	……………306	(185) S I-08 墨書土器	…312
(162) S I-02 深鉢 (弥生)	306	(186) S I-17 墨書土器	…312
(163) S I-10 壺 (土師器)	306	(187) S I-08 墨書土器	…312
(164) S I-17 甕 (土師器)	306	(188) S I-07 墨書土器	…312
(165) S I-14 甕と甔 (土師器)	306	(189) 各遺構出土石製模造剣	……………313
(166) S I-17 甕 (土師器)	307	(190) 各遺構出土石鎌	……………313
(167) 各遺構出土甕 (土師器)	……………307	(191) 各遺構出土石刃 (1)	…313
(168) S I-08 壺片 (須惠器)	……………307	(192) 各遺構出土石刃 (2)	…313
(169) S I-17 甕 (須惠器)	307	(193) S I-04 石器類	……………314
(170) S I-40 甕 (須惠器)	308	(194) S I-07 石器類	……………314
(171) S I-17, 40, 竝, 甕 (土師器)	……………308	(195) S I-12, 17 砥石外	…314
(172) S I-07 高环, 甕, 埴 (土師器)	……………308	(196) S I-10, 08 磨石外	…315
(173) S I-07, 13 埴 (土師器)	308	(197) S I-13, 08 磨石外	…315
(174) S I-17 長鶏瓶と腕付坏 (須惠器)	……………309	(198) S I-18 砥石外	……………315
(175) S I-17 高台付坏 (須惠器)	……………309	(199) S I-17 馬具	……………316
		(200) S I-17 鎌	……………316
		(201) S I-17, 18 鋸	……………316
		(202) S I-15 鉄鏃	……………316
		(203) S I-17 鉄器	……………317
		(204) S I-17 刀子	……………317
		(205) S I-07 手斧	……………317

図版13 B地区出土遺物 .....318

- (206) S I—03環と甕(土師器)  
.....318
- (207) S I—03甕(土師器) 318
- (208) S I—12台付甕(土師器)  
.....318
- (209) S I—44, 13, 壺型土器  
(土師器) .....318
- (210) S I—13甕(土師器) 319
- (211) S I—22, 26埴(土師器)  
.....319
- (212) S I—28壺型土器(土師器)  
.....319
- (213) S I—28壺型土器(土師器)  
.....319
- (214) S I—28壺(土師器) 320
- (215) S I—28壺(土師器) 320
- (216) S I—30器台と壺(土師器)  
.....320
- (217) 各遺構出土壺(土師器)  
.....320
- (218) S I—32, 46, 甕, 壺(土師器)  
.....321
- (219) S I—40壺(土師器) 321
- (220) S I—40器台と環(土師器)  
.....321
- (221) S I—43環(土師器) 322
- (222) 各遺構出土壺型土器(土師器)  
.....322
- (223) S I—46環(土師器) 322
- (224) S I—47甕と壺(土師器)  
.....322
- (225) S I—47環(土師器) 323
- (226) 各遺構出土小型環 .....323

- (227) 各遺構出土環(土師器)  
.....323
- (228) 各遺構出土壺I縁部片(土師器)  
.....323
- (229) 各遺構出土環(土師器)  
.....324
- (230) S I—43, 32甕とI縁部片  
.....324
- (231) 各遺構出土甕底部片①  
.....324
- (232) 各遺構出土甕, 壺底部片②  
.....324
- (233) 各遺構出土器台 .....325
- (234) 各遺構出土器台脚部片  
.....325
- (235) 各遺構出土高環脚部片  
.....325
- (236) 各遺構出土石器類 .....325
- (237) S I—11~15石器類 .....326
- (238) S I—22~28石器類 .....326
- (239) 各遺構出土磨石① .....326
- (240) 各遺構出土磨石② .....327
- (241) 各遺構出土磨石③ .....327

図版14 表採遺物 .....328

- (242) 縄文土器片 .....328
- (243) 古銭 .....328
- (244) 骨帯(須恵器) .....328
- (245) 石器類(定角石片, 石鏃, 石鏃)  
.....328
- (246) 磨石 .....329
- (247) 敲石 .....329
- (248) 円筒埴輪 .....330

図版15 その他 .....331

- (249) 事始神事 .....331

(250) 遺跡から筑波山	.....331
(251) 関城址全景	.....331
(252) 関城址関宗祐墓	.....331
(253) 舟玉古墳羨道入口	.....331
(254) 舟玉古墳	.....331
(255) 遺骨出土に伴う供養 .....	.....332
(256) 作業風景①	.....332
(257) 作業風景②	.....332
(258) 発掘従事者一同	.....332
(259) 有柄石鏝	.....60

## I. 発掘調査に至る経過



## I 発掘調査に至る経過

平成元年11月14日、関城町第2次総合計画並びに市街地整備基本計画に基づき、財団法人茨城県開発公社と関城町で、茨城県立会いのもとに、関城町大字舟生字下木有戸地区に「つくば関城工業団地」を造成するための調印式が行われた。

その後、財団法人茨城県開発公社から茨城県教育庁文化課へ、同工業団地造成予定地内に所在する埋蔵文化財の有無についての照会がなされ、茨城県教育庁文化課により平成元年3月13・14・15日の3日間、同造成予定地の試掘が行われ、2箇所の遺跡の存在が確認された。茨城県教育庁文化課からの連絡を受けた関城町教育委員会は、新しく所在が確認された遺跡に対し、従来の下木有戸遺跡と区別するため、従来の下木有戸遺跡を下木有戸A遺跡、新しく所在が確認された遺跡に対して、それぞれ下木有戸B遺跡、下木有戸C遺跡と命名し、教育庁文化課へ連絡した。

茨城県教育庁文化課は、財団法人茨城県開発公社に対し、つくば関城工業団地造成予定地内に、①下木有戸B遺跡②下木有戸C遺跡の2遺跡が所在している旨回答した。

平成2年4月18日、関城町教育委員会・関城町・財団法人茨城県開発公社の関係機関が協議した結果、上記2遺跡の現状保存についてはさげられないため、発掘調査による記録保存をすることで合意に達した。また、その後の協議により、発掘調査に因して関城町教育委員会内に「つくば関城工業団地埋蔵文化財発掘調査会」を結成し、調査団長に河野辰男氏を迎えることになった。さらに、発掘調査面積、発掘調査費等の詳細についても合意に達した。

平成2年5月24日調査会が発足し、同年7月11日から発掘調査に着手した。

### つくば関城工業団地埋蔵文化財発掘調査会役員名簿

会 長	齊藤 昭	関城町教育委員会教育長
副会長	中山 光雄	関城町教育委員会事務局参事（平成3年3月31日退任）
	松本 利一	関城町教育委員会教育次長兼生涯学習課長（平成3年4月1日就任）
理 事	松本 利	関城町教育委員会事務局局長（平成3年3月31日退任）
	中山 光雄	関城町教育委員会学務課長（平成3年4月1日就任）
	河野 辰男	下木有戸B・C遺跡発掘調査団長
	箱守 重造	関城町文化財保護審議委員

- 西村 恒 関城町文化財保護審議委員  
 石田 隆一 木有戸区長（平成3年3月31日退任）  
 泉 利治 木有戸区長（平成3年4月1日就任）  
 小松 慎治 財団法人茨城県開発公社用地建設部長  
 国府川恒利 関城町企画課長
- 監 事 松本 利一 関城町教育委員会事務局長（平成3年3月31日退任）  
 中山 光雄 関城町教育委員会学務課長（平成3年4月1日就任）  
 植木 裕 財団法人茨城県開発公社用地管理課長（平成3年3月31日退任）  
 小林 勝男 財団法人茨城県開発公社用地管理課長（平成3年4月1日就任）
- 幹 事 和田 次男 関城町教育委員会生涯学習課社会教育係長  
 森 正義 関城町教育委員会生涯学習課社会教育係  
 国府田君子 つくば関城工業団地埋蔵文化財発掘調査会庶務担当者

## 発掘作業にご協力いただいた方

調査団長	河野辰男	〃	金子 輝明
調査員	河野通義	〃	箱守 林一
調査補助員	宮本泰男	〃	植木 定吉（班長）
調査補助員	八城光弘	〃	細川 みき
庶務係	小坂 節子	〃	岡本 法吉
作業員	森 幸三（班長）	〃	大吉 光子
〃	細川 力	〃	鶴川 重男
〃	菊池 桂治	〃	河上 隆弘
〃	小波 いし	〃	細川ことえ
〃	長沢 基夫	〃	松村 敦志
〃	国府田 淳	〃	角谷佐知子
〃	滝田 博美	〃	谷井 博
〃	西田 彩子	〃	初沢由美子
〃	斎藤 寛之	〃	岡田 和美
〃	鈴木 京子	〃	久郷 貴史
〃	津田 勝彦	〃	杉山 寅三
〃	斎藤 珠子	〃	永瀬 イシ

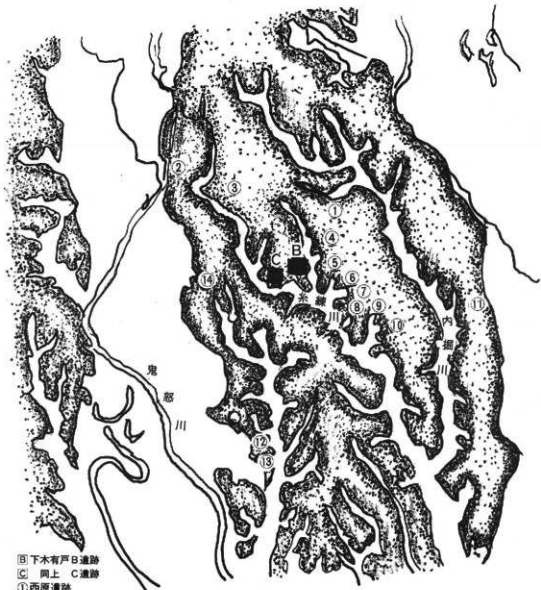
- // 林 千恵子
- // 古谷千鶴子
- // 梅田のぶえ
- // 菊池 一夫

財団法人茨城県開発公社常務理事高橋直氏、同用地管理課の大谷祐二氏、龍耳嘉彦氏、関城町企画課の仲川弘一氏、平間知恵子氏をはじめとする関係各位にご協力いただいた。









- B 下木有戸B遺跡  
 C 同上 C遺跡  
 ① 西原遺跡  
 ② 船玉古墳  
 ③ 上木有戸遺跡  
 ④ 五貫文遺跡  
 ⑤ 裏原遺跡  
 ⑥ 宅地前A遺跡  
 ⑦ 宅地前B遺跡  
 ⑧ 大道西遺跡  
 ⑨ 湊間山遺跡  
 ⑩ 霧山遺跡  
 ⑪ 仲道遺跡  
 ⑫ 板塚古墳  
 ⑬ 茶焼山古墳  
 ⑭ 西山古墳

第2図 下木有戸遺跡の地形的位置図と周辺の主要遺跡



## II. 本遺跡周辺の地理・歴史的環境

## II 本遺跡周辺の歴史・地理的環境

### (一)

**本遺跡周辺の地系。** 本遺跡周辺の東方はるかに筑波の霊山が聳える。小貝川と鬼怒川とに挟まれたこの地方の台地を縫うように、糸繰川と内沼川の流れが豊かな水を湛えながら南流する。その美しい台地と水系、それは水の幸と山の幸とをあらわす関域地方の豊かな、原始、古代の姿であったのである。

関域地方は古墳時代には新治国に属していたが、大化改新における国・郡・里制施行によって、常陸国新治郡に編入された。ここは古くからこの地方の拠点を占めており、原始、古代文化の宝庫として現在でも100を超える数多くの遺跡が残されている。その繁栄の原因は何はともあれこの地域がおりなす、自然と地系とにかかわりあいがあるものと思われる。

ここに関域地方の地系をあらためて概観してみると、この地は極めて複雑な地系を示しているのである。その西方には鬼怒川が、そしてその東方には小貝川がそれぞれ南流するが、更にその間を糸繰川と内沼川とがやはりそれらと平行して南流する。それらの河川の間三つの台地が形成されているが、その台地にもリアス式状に大小の支谷が入り込んでいるのである。(第2図)台地の標高は船玉古墳の墳上で39.40mと高く、その他の台地も平均して30mの標高を保っている。縄文海進期にはそれらの河川や支谷には海水の流入を見たものと言う説もあるが、まだ貝塚等は発見されていない。これらの地系はすでに洪積世末期の頃までには形成されたものと考えられるが、鬼怒川と小貝川との氾濫などによっていくらかの流路の変更はあったものようである。

この台地を縫うように流れる河川には、その当時満々たる水が湛えられ、また、湖沼をなして



本遺跡付近より筑波山を望む

いた所もあった。そして遺跡はそれらの河川の台地上に点在するのである。なお、今回、発掘調査が実施された下木有戸遺跡は、糸織川とその分岐点に当たる下木有戸台地上に所在する。糸織川上流周辺には船玉の地名が存在し、その中流にあたる下木有戸付近には舟生<sup>ふねう</sup>の地名が残されていることからみると、ここは古くから船舶の往来の頻繁な所であり、水上交通の一代拠点<sup>とどろ</sup>を占めていたものと想像されるのである。現に今回、発掘調査を完了した本遺跡よりおびただしい火山岩の礫石、敲石等の原石と製品とが検出されたが、それらは遠くの火山地帯からこの水系を利用して運搬されたもので、搬路の広さを有力に物語るものと言えよう。

## (二)

**縄文時代の遺跡。** 縄文時代全般をととして現在までに発見された遺跡は36ヶ所の多きにのぼるが、そのことは「関城町史史料編」に克明に記録されている。それによると縄文時代の草創期、及び早期については、いくらかは表探で検出をみたものと記述されているが、今回、発掘調査を実施した下木有戸遺跡からも、その敷点が表探において検出されたのである。

なお、関城町史によればこの地方には縄文前期は8ヶ所、中期が最も多くて17ヶ所、そして後期と晩期とで11ヶ所となる。そして本遺跡より前期の黒浜式に位置づけられる土器敷点がみられたのである。更にその他数多くの遺物が検出されたことなどから判断して、縄文集落は本遺跡付近に存在するものであろう。なお、木町における縄文中期の土器として、阿玉台、加曾利E、堀之内式の各土器がそれぞれ検出され、その他に東北系のものと言われる大木9式もまじっていた。更にまた、縄文中期に位置づけられる西原遺跡は先般発掘調査を完了し、数多くの貴重な遺構と遺物が検出されたことはその報告書に記載されたとおりである。

## (三)

**弥生時代の遺跡。** この時代の遺跡はその表探において9ヶ所の検出をみたが、その所在については関城町史の遺跡分布図(第1図)に入念なる記載がなされている。本県においては弥生時代の遺構は極めてその数が少なく、貴重なものとされているが、その大半は全て弥生後期に位置づけられているようである。今回、その発掘調査を完了した下木有戸C遺跡の発掘調査で7軒にのぼる竪穴住居址がそれぞれ検出された。それらの住居址はその支谷両面に沿って台地上に建てられていたが、その遺構はむしろ木エリア外に密集していたかのようであった。出土遺物は土器類が多かったが、それらを本町出土の弥生土器と比較すると土器類は全て後期に位置づけられその他に共通点も多く見られるのである。それらは下野系統の土器、いわゆる二軒尾系のもの、東海系のものなどが混在してみられることである。関城町史はこのことについて「ここに縄文文化の伝統の強い二軒尾、十王台文化と、東海系の水稲農耕を中心とする新文化の合流が、弥生時代後半に小貝川からの小河川の流域において行われた可能性は強い」と述べてある。なおこのことは先般発掘調査を完了した牛久市奥原の天王台遺跡においてもやはり同じ傾向が認められ、甍

ヶ浦文化圏にも共通する性格のものと判断されるのである。

ここに付記したいことは、今回、発掘調査を完了した本遺跡の第2号弥生住より、有柄の石鏡が検出されたことである。石質は翡翠を用い極めて精巧に製作されている。現在までに本県においてはこれと類似するものとして勝田市の東中根遺跡より1点、そして関東では群馬県、埼玉県より数点の出土を見るが、その他においてはまだ検出されていない。果してこの種の石鏡は何を物語るものか、今後の解明が期待されることである。

#### (四)

**古墳時代の遺跡。** 本町は古墳時代をむかえる頃になると、その遺跡は更に増加して33ヶ所の多きにのぼるのである。これについて各時代ごとに分類するならば、五領期9、和泉期7、鬼高期17となる。そして今回発掘調査を完了した本遺跡Bより50軒にのぼる五領期より和泉期に亘る竪穴住居址が検出された。つづいて仲道遺跡からも和泉期に比定される住居址が検出されたのである。なお、今回調査が実施された本遺跡は3基の古墳を伴っていることも判明した。大集落には古墳を伴うことが普通であるから、その集落の様相によっては古墳の性格も異ってくる。

これらの様相について先づ関本地区より概観してみたいと思う。関本地区においてはまだ集落等の発掘調査は実施されていないが現在まで調査されたところによると、五領期の遺跡は6ヶ所、和泉期が5ヶ所、そして鬼高期4となっている。また、律令時代における集落も多く、今回、発掘調査が実施された下木有戸C遺跡は、平安時代中、末期に当る集落址も含まれていることが判明したのである。なお、これらの多くの古い集落を有する関本地区には、貴重な古墳が数多く残され、首長墓的性格を有する古墳も存在する。ここに関本地区における古墳を概観してみると、本地区で最初に築造されたとみられる西山古墳が存在する。この古墳は古式古墳に属する前方後方墳で、その築造年代は四世紀中葉と言う説もある。そしてこの種の古墳は弥生時代に築造された方形周溝墓の変化、発展したもので、関東的在地性の強いものと言われている。関城町史にも



西山1号墳





桜塚古墳後円部

この古墳を取り上げて、「出現期の古墳が関本地区に存在することはかなり重要なことである」と述べてある。かつてはこの種の古墳は出雲地方に最も濃密なる分布をなしていることなどから、出雲地方から伝播されたものという見解をとる先学もあったのである。

ここに、常陸国風土記新治郡の条を見ると「その頃この地方は新治国造の領治下にあった。そして新治国造の出自は出雲氏族であった」と記されているが、これと同じ意味のことが国造本紀にも述べられている。当時の新治国（現在の岩瀬町から協和町を中心とした地域）には出雲に関する地名、伝承、神社等が数多く残されており、前方後方墳の孤塚古墳も築造されている。

更にこれらを補促する意味で述べたいことは、最近俄かに出雲に関する研究が世に浮上し、それと同時に日本海文化圏に関する論集が多く出版されるようになった。それによると四世紀頃における出雲氏族は巫碩となって出雲における原始宗教を各地に伝播し、同時にその政治圏の拡張をも志したようである。関東各地に氷川神社、諏訪神社、大國神社等の延喜式内社が残されているのはそのことを物語るものと思われる。更にまた四世紀の頃出雲氏族は出雲信仰の中心であった熊野神社を南紀に遷し熊野の地名をつけ、後世この熊野の信仰は修験道となって各地にその信仰を移植した。また、出雲氏族は四国に阿波（粟）信仰を移植し、更にこの信仰は千葉、茨城地方にひろまり、各地に阿波神社、大杉神社を残している。なお、この前方後方墳の基制は出雲において発生したものではないにしても、出雲においても濃密なる分布を有するから、出雲氏族やそれらの関係者が各地への移動の際に持参したことは当然なことと思わねばならない。とにかく新治国造の出自が出雲氏族であると言うことは、今後大いに検討さるべき問題ではあるまいか。

関本の西山一号墳は全長20mに及ぶ前方後方墳である。一般に前方後方墳は前方後円墳に比べてその規格は小さいと言われているから、それをもって西山古墳が首長墓的存在ではないとは言いきれない。この古墳は鬼怒川を見渡す関本の西山台地上に築造されているが、最も古式な前方後方墳が関本の地に残されていることは、大変に注目し値することではないかと思われるのである。

この前方後方墳は五世紀前半になる頃前方後円墳の墓制へと変化する。それは大和における政治勢力の東漸によって生じた、前方後方墳の一步後退を意味するものなのであろうか。そしてこの関本地区には前方後円墳五基がかぞえられ、その他円墳や方墳等を入れるとその数は更に増大する。なお、これらの前方後円墳は何れもその規模が大きくて立派である。そしてこの中には五世紀中葉に位置づけられる茶焙山古墳があり、また、六世紀前半の築造と言われる茶焙山古墳も残されている。特に茶焙山古墳は全長80mと大形で、その中におさめられた副葬品は、その質と量とにおいて県下最高の刻印を押されており、そしてこれは現在岡立博物館に収められている。

更にまた関本地区には国造制最後の古墳と言われる船玉古墳が残されているが、これは装飾古墳としては県下最位のものとされている。なお、今回発掘調査を実施した下木有戸B遺跡より50軒を数える五領期後期から和泉期に亘る住居址群が検出され、これに隣接する台地の先端部に3基の円墳が残されているが、それらは何れもその住居址群と関連のあるものと考えられる。

また、河内、黒子の両地区にも多くの古墳がそれぞれその集落を伴って残されているが、これらは全て古墳時代中、後期に亘って繁栄を極めた所であろう。

とにかく関城地方には古墳時代初期より全般に亘って、数多くの有名古墳がその集落を伴って残されていることは、この地方がその当時新治国において極めて重要な拠点を占めていたことを物語っているものである。

## (五)

**大化改新以降における関城地方。** 大化改新によってわが国は中央集権政治の体制をとった。先づ行政区画を定め、全国を国、郡、里にわけたが、新治国造領治下の新治国の大部分は真壁郡となって発足し、関城地方は常陸国新治郡に属した。和名抄によると新治郡は十二郷に分割されたが、関城町はその当時の沼田郷（現在の船玉、井上の地区）の一部、下真郷（現在の井上、黒子、辻、木戸、梶内の地区）の一部、川出郷（関本、船玉、上野、八千代町東部）、月波郷（川内地区）の一部にそれぞれ該当するものと推察される。

八世紀より九世紀の頃に亘ってこの地域には、鳥羽の江（鳥羽淡海）と呼ばれる広大なる湖沼が広がっており、それは当時の月波郷一帯に該当するようで、その沖積平野は澁々たる水を湛えていた。小貝川はこの湖に流入し、鬼怒川は現在の下妻市長塚あたりで東流し、鳥羽の江の南で小貝川と合流して南に流れていたようである。和銅六年（713）に作成された常陸国風土記によれば、鳥羽の淡海としてその長さ2900歩（5.22km）、広さ1500歩（2.2km）と記されてある。東方に筑波の山が聳え、澁々たる水を湛えたその姿はまさに天下の絶景であった。その鳥羽の江の景観を詠んだ歌が万葉集にも残されているのである。今回、発掘調査を実施した下木有戸C遺跡は、平安時代中、後期に該当するが、その頃になるとこの湖が次第に変化しつつある時ではあったが、それにしてもこの遺跡の繁栄はこの湖をぬきにしては考えられないものと思われる。

鬼怒川と小貝川とは幾度かの流路の変更はあったものようであるが、それらの河川の氾濫に



今まで蛇行していた鬼怒川が、新河道掘削によって現在のような形になると、関本地方をうるおしていた豊かな水田地帯は、畑作地帯へと移行し、条里制遺構も消えてしまったものであろう。

なお、ここに付記したいことは、今回発掘調査の下木有戸C遺跡はわが国の律令制時代の最後を飾る集落址である。そしてここより掘立柱建造物遺構18棟が検出され、その建造物の周辺には、これと関連性のあるものと判断される竪穴住居址群が数多く検出された。もっともこれをエリア外まで拡張すれば、更に多くの建造物がみられるものと思われる。このことについては本論において述べてあるが、掘立柱建造物の方は公共の施設、工房址等に該当し、竪穴住居はそこに勤務する人々の住居ではないかと判断した。その住居からは数多くの鉄製品、馬具、墨書土器等が検出されたことから、そこは上級の人々の住まいであったと考えられる。そしてここは関本地区の一部として、やはり政治、経済上の拠点をおいていた所であったと推定せざるを得ないのである。

鎌倉時代になっても大宝沼はまだ満々たる水を湛えていた。そしてこの沼を挟んで関城・大宝城が構築されたが、ここは南北朝時代に南朝最後の拠点としてわが国の正史にその名をとどめているのである。

参考文献 関城町史史料編、関城町史通史編。

新編常陸国誌

常陸国風土記の史的概観（拙著）



### III. 下木有戸C遺跡





下木有尸C遺跡航空写真





## 1. 本遺跡の概況



# 1 本遺跡の概況

## (一)

関城町の歴史・地理的な環境の特色はすでに述べたとおり、その町の西方境域を鬼怒川が、そして東方を小貝川がそれぞれ南流するが、その両河川に挟まれた特殊な地系の中に遺跡は存在する。更にも、これらの河川の間を糸繰川と小沼川の水系が流入し、それらの河川によって三つの台地が形成されるが、この台地の中にも谷津が入り込み、それは極めて複雑な地系をなすのである。この地形は集落形成に極めて有利な条件をそなえていたので、これらの台地上には原始、古代より数多くの集落が繁栄した。

## (二)

今回の発掘調査を実施した下木有戸遺跡も、糸繰谷津とその支流が合流するところの台地上にある。

糸繰川上流に船玉の地名があり、その中流に舟生の地名が残されることなどから、それらの河川は縄文時代以前より大水系をなし、舟の出入りもはげしかったものと想像される。そしてそれらの台地は永年に亘って集落が形成され、繁栄を極めていたものであろう。本遺跡は糸繰川の南面に当る標高33mの下木有戸台地に位置し、交通至便にして政治、経済上の拠点を占め、更にはその東方に筑波の山が眺望される景勝の地に立地する。

## (三)

先づ、本エリアの表土を30cm～40cm削平すると遺構が認められた。その第1として先づその表探、覆土より縄文時代前期、中期の土器片、石鏃・摺石等が検出された。しかしながらその遺構をとらえることはできなかった。遺物の散布はエリア全体には広がっていないことなどからみると、それらの遺物はその周辺から持ち込まれたものと推察した。

第2として、南面する糸繰川の流域台地即ち本エリア南端台地より弥生時代後期における竪穴住居址7軒が検出された。本住はその南岸に面する台地一帯に広がっているものと思われるが、それらの遺構はエリア外に所在することから、その遺構全体を確認することは出来なかった。

第3に本エリアの中央部周辺において、五領末期から和泉期に亘るものと思われる竪穴住居址3軒が検出された。第5図の全体図によってそれを見ると、竪穴住居址は50m程度の間隔をおいて散在していたことが理解される。

第4として本エリア中央部より北部端に亘って平安時代中、後期に亘る竪穴住居址8軒が検出された。

第5に第4の部と同じエリア中央部及び北西部にかけて、掘立柱建物遺構18棟が検出された。それはこの建築様式や遺物等からみて、やはり平安中、後期に亘る遺構と推定したのである。そして前記の竪穴住居址は掘立柱建物群を取り巻くかのように造られているものと見られたので、これらには何らかの関連性があるのではなかろうか。なお、第4の部の竪穴住も、第5の掘立柱建物もエリア外の西、北方、または東方に多くが広がっているものと推定したのである。

第6としてエリア中央部付近より土壇3基、エリア西部より溝状遺構1条が検出された。

以下これらの遺構についてその概観を、それぞれの時代ごとに分類してあげてみたいと思うのである。

## 2. 本遺跡の遺構について



## 2 本遺跡の遺構について

### (1) 弥生時代後期の遺構

本エリア南端部より弥生後期と推定される竪穴住居址7軒が検出された。なお、ここに第11号住と標示した住居址のことについては、本住居址がエリア南端に位置していたがために、その検出がおくれたからであって、本来ならば第1号と標示されるべき住居址なのである。

①本住の規格については、その面積は殆どが同様に平均して15平米程度の小住で、壁高も30cm～40cmと浅く、床面も全て軟らかであって凹凸があり極めて素雑という感じである。第2号住の床面は西方コーナーが15cm程度高く造られていた。第11号住は床面が3段に造られていた。下段には炉の設備があった。中段は人々の寝起していた場所であろう。3段目は北コーナーに欄状に造られ、弥生土器等が残されていた。

②本住の主柱については、その4軒は外柱即ち外壁に造られ、中には12柱も建てられている住居址もあった。その他3軒は全て床面に造られたが、柱の規格については平均して30cm×40cmとなる。

③炉は全て床面中央に設けられ、その規格は小さかった。

④出土遺物は極めて少量で、その殆どが破片からなり完形品はなかった。出土土器片は弥生時代後期に位置づけられ、下野系と東海系のもののがあげられる。

出土遺物で注目されるのは第2号住出土の石鏃で根部に柄が付けられる有柄石鏃で、材質は翡翠である。本県からは勝田市の中根遺跡から出土をみているが他例はない。他県においては埼玉県、群馬県よりそれぞれ検出されている。

### (2) 五領期より和泉期に亘る遺構

上記に該当する竪穴住居址は、S I 10、S I 13、S I 16の3軒で、50m程度の間隔をおいて造られているが、寧ろこれらはその西側台地に多く建てられているものと思われる。何れも1辺が5m～6mの中型住で、壁高60cmに及ぶ重厚な造りである。

主柱は何れも床面に4柱が建てられ、その規格も30cm×40cmと大きく、貯蔵穴も整備されている。出土遺物も多く、S I 13からは祭祀用具も検出された。炉は全て床面中央よりはずれて造られる。

### (3) 平安時代中、後期に亘る遺構

平安時代中、後期に亘る遺構に竪穴住居址18軒、掘立柱建物遺構17棟があげられる。そして竪



穴住居址はあたかも掘立柱建物を取り巻くかの如き状態で検出された。これらは全て同時期のものとして、何らかの関連があるものと考えられる。

これらの遺構はエリア中央部よりその北側寄りにまとまった形で検出されたが、これらの遺構は寧ろそのエリア外に偏在しているものと推定される。遺構の概観については下記の通りである。

#### ア 竪穴住居址について概況

(A) その規格は一般に、小型の住となるが、その壁高は平均60cmが推測され、周溝は整然と四周を巡り、大変に整備された住居址という感じをもつ。

㊸ 支柱は全て外壁上に掘られているのが特徴であった。床面を広く使用するのがその目的であろう。ピットの規格は平均30cm×40cmとなり普通であるが、ピット間の配置は極めて適切である。

㊹ 本住の特徴(特に平安期の住)は極めて整備された規格のよいカマドを持つ点であろう。全てのカマドは壁面外にのぼされ、カマドの両袖には土器を貼りつける。焚口はトンネル型に開き、器物台は丸型に孔を明け、その両サイドに下から舌状の瘤を出し、器物はその上に乗せるように仕組まれている。したがって本住居址のカマドには支脚は用いられていない。なお、壁外にカマドがつくられているから、下屋を造った住居址も認められた。下屋は物置にも使用されていたものであろう。

㊺ 床面は平沢で固く、中には第17住の如く床面が2段に造られたものもあった。

㊻ 第17号住の如きは壁面を粘土で塗り固めたものも見受けられた。

㊼ 床面より多くの遺物が検出されたが、その第1は鉄製品(刀子、鎌、巻、鋸、釘、その他不明鉄片)で、墨書土器等が鉄製品について多く認められた。また、鋸も数点みられたのは、糸織川で漁業が盛んに実施されたことを物語るものであろう。この時代になると、和泉期などの如く祭祀用具は認められなかったが、その頃には祭祀は神社を中心として実施されていたものであろう。

#### イ 掘立柱建物遺構についての概況

掘立柱建物は18棟が検出された。その建物の構造様式と出土遺物等から判断して、平安中、後期に属する建物と判断された。

(A) 建造物の規格は18棟のうち大型建造物(80坪以上)に比定されるもの4棟、中型建造物(30坪以上)に比定されるもの9棟、小型建造物(15坪以上)5棟となる。平面形状は方形プランをなすが、少々不整形方形プランをなすものが大部分であった。

(B) 各柱間の間尺もほぼ整っており、各支柱の規格は大型柱60cm~70cm×50cm、中型で60cm×40cm、小型で50cm×40cmとなり、夫々のピットの規格は揃っており、よく整っていた。

(C) 床面は大型のものは一般に固く、中小型で軟らかいものがあった。したがって大型のもの

は土間になっており、中小型のものには床面に板等が敷かれた建造物もあったものと推定した。

(D) 床面の施設では余り変化は見受けられなかったが、中小型建造物の中に灰、炭化物等の散乱していた場所も確認され、そこにはカマド等の設備があったものと思われた。

(E) 掘立柱建物の屋根に使用した材料については、本建造物からはそれを立証するものは得られなかったが、たまたま前回発掘が実施された本遺跡と同年代に比定される奥原遺跡において、火災のため極めて少量の焼土や炭化材が床面に散乱しており、その中に炭化した茅が検出されたこと等から茅を使用していたことが判明した。本建造物もその類ではないかと思われるが、一般には茅葺の他に板葺もなされていたらしい。もっとも瓦片が検出されないから瓦葺の使用はなかったものであろう。

(F) 掘立柱建物は3重、4重の重複があることが判明したのであるが、ここに数回の立替が行われたことが理解される。一般に掘立柱の耐久年数は20年前後と言われているが、それから計測するとすくなくとも100年前後に亙る期間本遺跡が使用されたものと推定したい。そして鎌倉期になると政治、経済の大変動によって、この場所は消滅し、この住民も全て他所へ移転したものであろう。

(G) 本建造物は何に使用されたものなのか。それらを決定づける資料は得られないが、それを推察するに大型建造物は倉庫、工房、中、小型建造物は事務所、馬舎等に使用されたものか。なお、郷土的存在も考えられる。

なお、この大型建造物の一部を工房と見たのは、掘立柱建造物の覆土及び建物の周辺一帯の覆土から1000個を数えるおびただしい摺石、敲石の製品並びに原石が出土したことによる。それらは河原石が大多数を占めていたが、中には火山岩製の摺石数十個も含まれていた。これらはこの大型建造物の一部で製造され、舟で各所に運ばれたものではあるまいか。またこの中に多数の火山岩が含まれていたことは、それは恐らく浅間山系の原石だと思われるがその需要供給が相当に広がったことを示すものであろう。

更にまたこの小型建物の一部を馬舎ではないかと推定したのは、第17号住より馬の轡が検出されたことによる。これらの馬はその外にも数匹はいたものと思えばなるまい。

(H) 掘立柱建造物の周辺に同時期の竪穴住居が存在しているということは、これらをセットとして見るべきものと思われる。この竪穴住居に住んでいた人々は、掘立柱建造物に何等かの関係を持つ、即ちそこに勤務していた人々ではなからうか。その竪穴住居址の規格の立派なこと、ここから出土の数多くの鉄製品、土器類、更に、数多くみられた墨書土器等は、一般の竪穴住居址のそれとは異なったものが認められるのである。

#### (4) 土壇状遺構の概況について

土壇状遺構3基が検出されたが、それらは全て掘立柱建造物周辺において見られた。それらは地下式墳として食糧の貯蔵に当てられていたものと推定したい。遺物は土器の小片が僅かに検出

されたのみで、明確なる時代判定を欠くが、これは掘立柱建造物に付属する類のものではあるまいか。

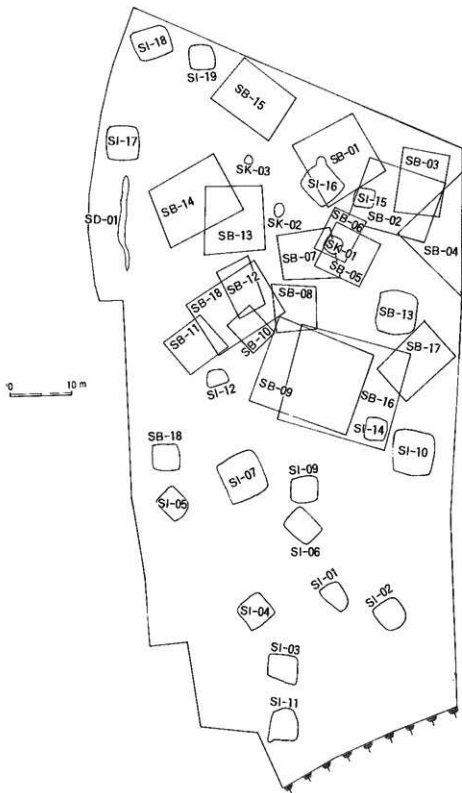
溝状遺構についても掘立柱建造物に関するもので、雑排水処理施設として造られたものと判断された。

(5) 表採、覆土における遺物についての概況

本エリア掘立柱建造物周辺30cm～40cm下の地面より、摺石、敲石、台石の原石、製品1000個近くが検出された。そうすると、掘立柱建造物の一部がそれらを製造する工房に当てられていたものと判断される。中には火山岩の原石、製品が多く含まれていたことから、その搬路は広範囲に亘っていたものであるまいか。

### 3. 各遺構の概況





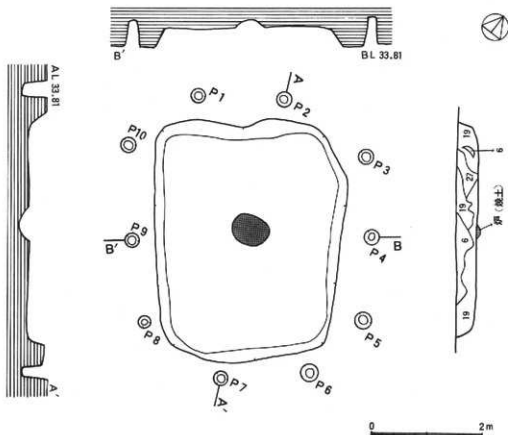
第 5 圖 C 遺跡全圖

(1) 竪穴住居址

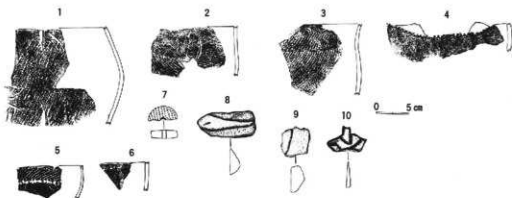
第1号竪穴住居址 (S I 01) (第6・7図)

本住居址はエリアの西北側、S I 02の西隣に所在する。その平面形状は北側で3.20m、南で3.00m、西側で3.60m、そして東側で3.50mとなり、少々不整形方形プランをなす。そしてその軸線を約60°東にかたむける。

壁高は35cm~32cmとなっており、周溝は造られていない。その主柱は床面ではなく床面上部の壁に沿って建てられているが、それは床面を広くする意図からであろう。主柱は10あるがP<sub>1</sub> (29cm×45cm)、P<sub>2</sub> (30cm×40cm)、P<sub>3</sub> (30cm×50cm)、P<sub>4</sub> (30cm×50cm)、P<sub>5</sub> (30cm×35cm)、P<sub>6</sub> (30cm×40cm)、P<sub>7</sub> (30cm×40cm)、P<sub>8</sub> (33cm×40cm)、P<sub>9</sub> (30cm×40cm)、P<sub>10</sub> (30cm×40cm)となる。床面は軟らかで凹凸がみられ、その中央近くに50cm×30cm×13cmの炉が設けられている。本住はその床面上の出土遺物等から判断して弥生時代後期の住居址と判断され、その床面上からの遺物の出土数は多く認められたが、破片がその大半を占めていた。甕、壺、皮剥、紡錘車、摺石等があげられるが、それは下記の通りとなる。



第6図 第1号竪穴住居址平面実測図



第7図 第1号竈穴住居址遺物実測図

(C) S I - 0 1

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕片	③ 0.4	甕の胴部残片。口縁部は横位に平行、波文帯沈線、その下部に細かい爪型文をはいする。外面全体は細かい斜縄文をはりつけてある。	少々良好 灰黒色	胴部残片弥生式土器
2	壺片	③ 0.35	口縁部は平行波文帯沈線を横位につける。その下部は1cmほどの無文帯、そしてその下は数条の波条線を横位につける。胴部は全体に細かい斜縄文をはりつける。	良好 灰黒色	口縁部より胴部一部弥生式土器
3	甕片	③ 0.4	口縁部には平行波文帯沈線を横位にめぐらす。その下は斜縄文となり胴部との間に竹管文、胴部も斜縄文を全体にほどこす。	良好 黒色	口縁部より胴部一部弥生式土器
4	壺片	③ 0.4	頸部と胴部の間には三条の刺突文帯、胴部は全体に斜条縄線文をほどこす。	良好 黒色と茶褐色	胴部残片弥生式土器
5	壺片	③ 0.3	頸部は斜条縄文、胴部との間の刺突文、胴部は平行波文帯沈線。	良好 赤褐色	頸部と胴部の残片弥生式土器
6	壺片	③ 0.3	上部は斜縄文、下は横位の沈線をめぐらしその下位は縦横の線刻となる。	良好 茶褐色	弥生式土器
7	紡錘車	①径 4.0 ②孔径 1.0 ③ 1.0	表は列点文・裏は数条の条線をささむ。	良好 茶褐色	
8	磨石片	① 9.0 ② 4.0 ③ 1.5			砂岩



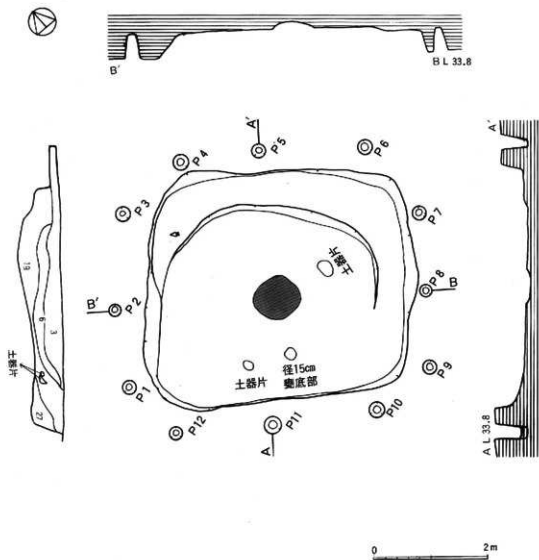
9	砥石	① 4.0(現) ② 3.5(現) ③ 1.6			砂岩
10	石刃	① 5.0 ② 4.0 ③ 0.5			水成岩

## 第2号竪穴住居址 (S102) (第8・9図)

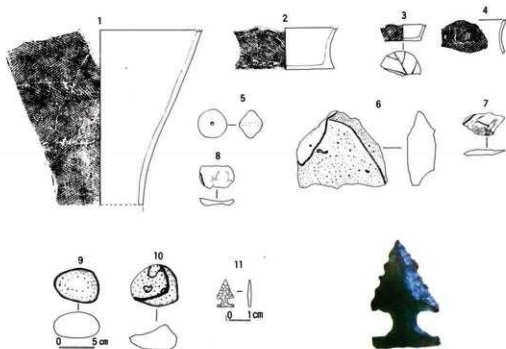
本住居址はエリアのほぼ当南端に位置し、主軸を約50°東方へかたわけて造られている。西北側の長さ4.10m、東南側で3.80m、東北側の長さ3.90m、西南4.00mの少々不整形隅丸方形をなす。

壁高は35cm～40cmとなり削溝はない。支柱はS101と同じく床面外の壁上に沿って、4周にそれぞれ3柱づつ造られている。床面は少々平坦で固いが、床面北西、北東部にその巾約1m、高さ10cmの段が廻わされている。なお、支柱はP<sub>1</sub>(30cm×50cm)、P<sub>2</sub>(25cm×55cm)、P<sub>3</sub>(30cm×55cm)、P<sub>4</sub>(30cm×40cm)、P<sub>5</sub>(25cm×35cm)、P<sub>6</sub>(26cm×40cm)、P<sub>7</sub>(30cm×45cm)、P<sub>8</sub>(33cm×40cm)、P<sub>9</sub>(25cm×35cm)、P<sub>10</sub>(25cm×40cm)、P<sub>11</sub>(24cm×40cm)、P<sub>12</sub>(30cm×40cm)となる。また、床面中央部に60cm×60cm×10cmの炉を有する。

本住はS101と同じく弥生時代後期に当たるが、床面上からの検出遺物も案外多く、それらは破片が多い。主な遺物として壺片4、土鏃1、摺石3等があげられるが、特筆すべきは下記第9図に示す通り有柄状の石鏃が床面から検出されたことである。柄の長さ1.3cm全体の長さ2.2cm、鏃部の巾の長い部分1.3cm、石質はヒスイで極めて精巧に造られている。現在まで勝山市東中根遺跡より出土例があるのみで、他県からは群馬県、埼玉県の遺跡より数本の出土をみている。どのような経路で伝播したものか、そしてどのような目的で使用されたものか、それは今後の研究課題であろう。



第8图 第2号竖穴住居址平面实测图



第9図 第2号竪穴住居址遺物実測図

(259) 有柄石鏃

(C) S I - 02

(法量 1.口縁径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	深鉢 (弥生)	②21.0(現) ③ 0.9	器面全体に斜縄文を施す。	良好 黒まじり褐色	2/3残 口縁部 と底部 は不明 弥生後 期
2	深鉢 (弥生)	①15.0 ② 6.0 ③ 0.7 ④14.5	底部は平底、木葉圧痕あり、立上がりは内反しながら、すぐ外反するが、ふくらみは認められない。斜縄文は器面全体に施す。	良好 砂粒 黒まじり褐色	底部残
3	壺 (弥生)	① 6.5 ② 5.0 ③ 0.5	底部は平底、そして木葉圧痕、内傾しながら立ち上がるが、1cmのところまで内反する。全体に斜縄文を施す。	良好 黒まじり褐色	底部片
4	壺 (弥生)	① 8.9 ② 6.8 ③ 0.6	口縁部には沈線文を数条めぐらす。胴部は全体に斜縄文を施す。	良好 黒まじり褐色	口縁部 残片
5	土鍾	① 4.35 ② 3.35 孔径 0.4		褐色	完形
6	磨石 台石	①12.6 ② 4.8			輝石安 山岩

7	石刃	① 5.8 ② 0.8			チャート
8	石刃	① 2.5 ② 2.3 ③ 0.3			チャート
9	磨石	① 6.4 ② 4.8 ③ 3.6			砂岩
10	磨石	① 6.9 ② 6.0 ③ 3.7			砂岩
11	石鏃		打製石鏃の1型式、三角形の両辺に近いところを、両側から深く欠きとって槍も六角形の柄をつけたような形となる。東海、及び北陸地方の弥生式土葬に伴出することが知られている。関東では群馬県、埼玉県に出土		翡翠

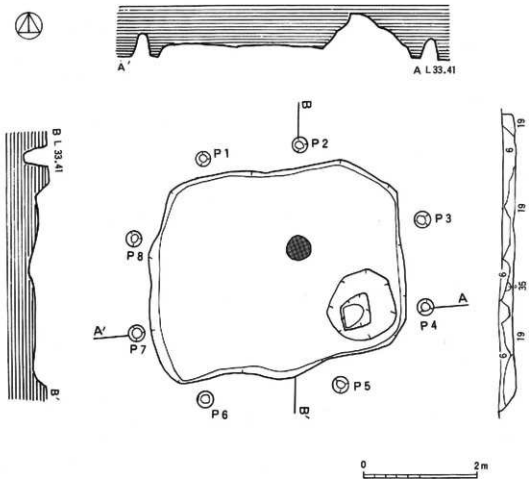
### 第3号竪穴住居址 (S I 03) (第10・11図)

本住居址はエリアのほぼ南端に当たり、S I 11の北隣に位置する。その平面形状は、北側でその長さ4.10m、向いの南で4.20m、東側の長さ2.80m、向いの西で3.20mとなり不整形方形プランをなす。なお、その軸線を約30°東方に向けて建てられている。

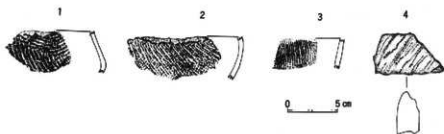
本住も前者と同様に弥生後期の住居址と認められるが、主柱の位置もやはり前者と同じく床面外にある。本住の規格は弥生住としては中型の部類に属する住居址と判断されるが、S I 02、S I 04に比べてそのピット数が8となって少なくなっている。なお、主柱はP<sub>1</sub> (26cm×30cm)、P<sub>2</sub> (38cm×36cm)、P<sub>3</sub> (38cm×29cm)、P<sub>4</sub> (34cm×32cm)、P<sub>5</sub> (30cm×34cm)、P<sub>6</sub> (30cm×32cm)、P<sub>7</sub> (30cm×35cm)、P<sub>8</sub> (30cm×34cm)となっている。壁高は大体25cm、床面は少々平坦であるが軟らかい。炉は床面中央部に60cm×50cm×7cmが認められ、そして床面東南コーナーに110cm×45cm×60cmの貯蔵穴をそなえている。

床面上より壺片2、敲石1、摺石1等が検出された。遺物については下記の通りとなる。

なお、本住の東北部のコーナー側に円筒埴輪片が数百片検出された。周辺に古墳が築造されたものとみて調査を試みたが古墳は認められなかった。また、円筒埴輪片は山積みにして埋土されており、10cm位覆土されていたことから、かつてその付近に古墳があったのを、それを除去するについて、そこにあった円筒埴輪片をこの場所に運んで捨てたものではないか、そしてその時期は江戸時代の頃と想像されるのである。なお、これを捨てた場所には大正時代頃まで堂が建てられていたと言う。(図版248参照)



第10图 第3号竖穴住居址平面实测图



第11图 第3号竖穴住居址遗物实测图

(C) S I - 03

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

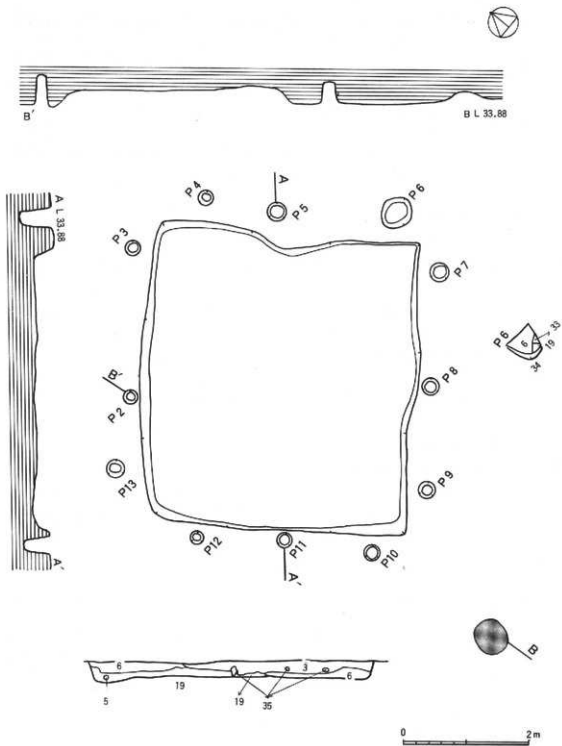
番号	器 種	法 量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備 考
1	壺片	③ 0.3	上部は横位に縄文をはりつけ、その下部は斜縄文を全面にうちだす。	良好 黒色	弥生式 土器
2	壺片	③ 0.4	胴部片と思われるが、全面に斜縄文をはりつける。	良好 黒色	弥生式 土器
3	壺片	③ 0.4	器表面全体に斜縄文をはりつける。	良好 黒色	弥生式 土器
4	磨石片				水成岩

#### 第4号竪穴住居址 (S I 04) (第12・13図)

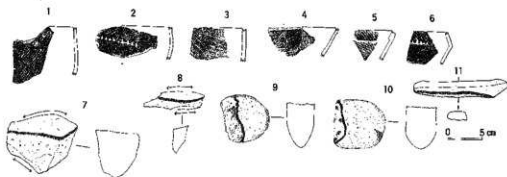
本住居址はS I 01より20m南西に所在する。その平面形状は西北側の長さ4.70m、東の長さは4.10m、南側で4.05mとなり、少々規格の整った方形プランをなす。そしてその軸線を約15°東方に向けて建てられている。

本住も同じく弥生時代後期に位置付けられる住居址であるが、その主柱も前住居址と同様床面外の壁に沿って建てられている。主柱は全て10が認められるがP<sub>1</sub>(32cm×48cm)、P<sub>2</sub>(30cm×50cm)、P<sub>3</sub>(25cm×46cm)、P<sub>4</sub>(35cm×55cm)、P<sub>5</sub>(40cm×48cm)、P<sub>6</sub>(29cm×40cm)、P<sub>7</sub>(27cm×33cm)、P<sub>8</sub>(28cm×35cm)、P<sub>9</sub>(26cm×44cm)、P<sub>10</sub>(30cm×40cm)となっている。壁高は25cm～30cmで周溝は認められない。床面は少々固く平坦であるが、床面には炉がみとめられない。これについては本住南西2mの位置に50cm×60cm×10cmの外炉状遺構が認められたので、そこが本住の炉として使用されていたものと思われる。

本住の覆土より縄文土器片が僅かに出土したことから、おそらくその周辺に縄文住居址が存在するものと判断したが、それは認められなかった。床面上からの出土遺物として弥生後期の甕片4、石錘1、磨石6等が検出されたが、土器類は破片が大半を占めていた。なお、出土遺物については下記の通りとなる。



第12图 第4号竖穴住居址平面实测图



第13図 第4号竪穴住居址遺物実測図

(C) SI-04

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器 種	法 量	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備 考
1	甕片	③ 0.3	胴部の残片で器面全体に斜縄文をはいす。	良好 砂粒あり 黒色	弥生式 土器
2	甕片	③ 0.4	口縁部と胴部の残片。頸部は数条の沈線を横位にはいし、その下に横に列点文を巻き、胴部は全面斜縄文をはる。	良好 砂粒 頸部は茶褐色 胴部は黒	口縁部 と胴部 残片弥 生式土 器
3	甕片	③ 0.6	胴部全面斜縄文。	良好 砂粒 茶褐色	胴部残 片弥生 式土器
4	甕片	③ 0.5	上部は数条の沈線を横位に巻き、胴部は全面に斜縄文。	良好 砂粒 茶褐色	口縁部 と胴部 残片弥 生式土 器
5	甕片	③ 0.5	口縁部の一部と胴部残片。口縁部には斜縄文の突帯を巻き、胴部も全面斜縄文。	良好 砂粒 茶褐色	弥生式 土器
6	甕片	③ 0.4	口縁部の一部と胴部残片。口縁部には沈線を三条めぐらし、空白があつてその下にまた三条の沈線文を横位にめぐらす。頸部と胴部には列点文を廻しその下に斜縄文を全面に巻きつける。	良好 米白色	弥生式 土器
7	礫石				砂岩
8	礫石				砂岩
9	磨石	① 7.0 ② 7.0 ③ 4.0			砂岩
10	磨石	① 7.0 ② 7.0 ③ 4.5			砂岩
11	敲石	① 13.8 ② 2.5 ③ 1.5			砂岩

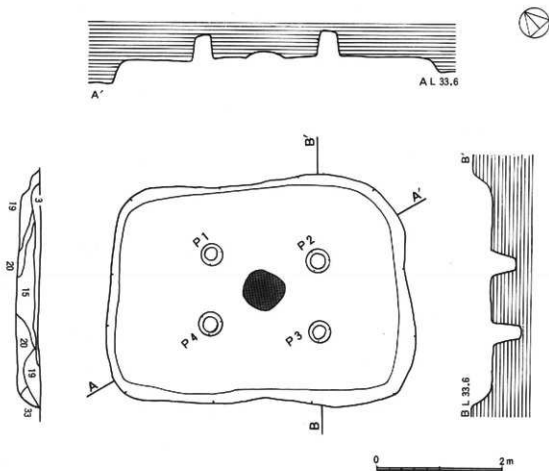


### 第5号竪穴住居址 (S I 05) (第14・15図)

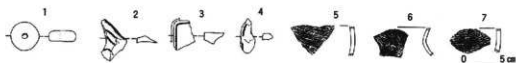
本住居址はS I 08の南隣、本エリアの西端に位置する。その平面形状は、北側の長さ3.10m、向いの南で3.50m、東側の長さ4.10m、向いの西で4.10mとなり、少々不整形隅丸方形プランをなす。なお、そしてその軸線を約60°東に向けて建てられている。

本住も前者と同様に弥生時代後期に位置づけられる住居址であるが、その主柱は前住居址と異なり床面上に4ピットが確認された。それはP<sub>1</sub>(35cm×38cm)、P<sub>2</sub>(35cm×36cm)、P<sub>3</sub>(37cm×35cm)、P<sub>4</sub>(40cm×40cm)となり、規格上からみると中型柱と判断される。なお、壁高はほぼ35cmが計測され、床面は少々凹凸があつて圓い。

床面中央部に50cm×50cm×10cmの炉を有している。床面より弥生後期にあたる甕片4、摺石、紡錘車、皮剥等が検出されたが、中には土師器甕片も混在していた。



第14図 第5号竪穴住居址平面実測図



第15図 第5号壑穴住居址遺物実測図

(C) SI-05

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

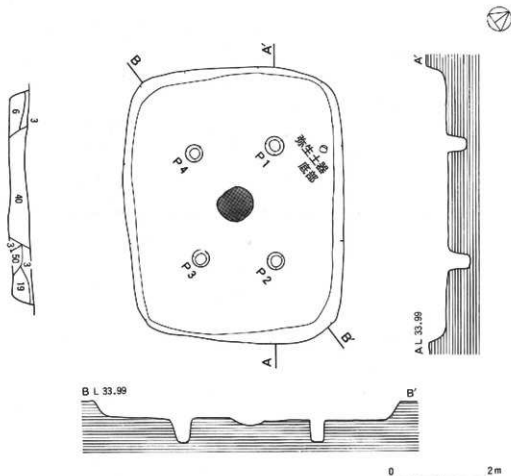
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	紡錘車	3.6×1.5	円筒状を呈し中央に径0.8cmの円孔貫通する。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色	完形
2	石刃	2.8×5.5 ×1.0			粘板岩
3	磨石剥片	2.5×3.9 ×1.5			安山岩
4	石刃	2.0×4.5 ×1.0			チャート
5	深鉢片 (弥生)	5.8×4.5 ×0.4	僅かに内湾する胴部をもつ器で、外壁は横帯に細縄文を施す。	①普通 ②石英粒子 ③褐色	
6	壺片 (弥生)	3.9×4.9 ×0.3	壺の肩部から頸部へかけての残存片であり、外壁は横帯に縄縞文を全面に施す。	①緊まる ②石英粒子 ③褐色	
7	深鉢片 (弥生)	5.5×3.5 ×1.4	前第8項に同じ。	①緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色	

### 第6号竪穴住居址（S I 06）（第16・17図）

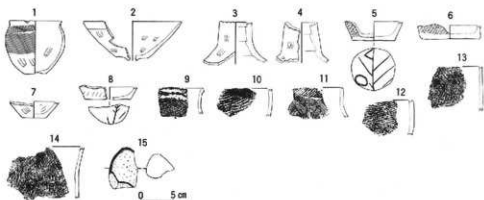
本住居址はS I 09に隣接して所在する。その平面形状は、北側の長さ4.00m、向いの南側で4.30m、東側の長さ5.00m、向いの西側で4.50mとなり、不整形隅丸方形と判断される。その軸線を約30°東に向けて造られている。

壁高は40cmとなり、その支柱は床面上に4本建てられるが、それはP<sub>1</sub>（40cm×37cm）、P<sub>2</sub>（40cm×37cm）、P<sub>3</sub>（37cm×50cm）、P<sub>4</sub>（40cm×45cm）となっていた。なお、床面中央部に70cm×65cm×15cmの炉が認められたが、周溝、貯蔵穴は検出されなかった。

検出された遺物の主なるものは壺片（弥生）5、五領式壺片、壺片、高坏、摺石等、弥生後期の土器片と土師器とが混在していたことである。そのことは同じ場所にはじめに弥生時代後期の住居が造られ、その後になってやはり同じ場所に五領期の住居が造られたことを意味するものであろうか。遺物の主なるものは下記の通りである。



第16図 第6号竪穴住居址平面実測図



第17図 第6号竪穴住居址遺物実測図

(C) S I - 0 6

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	小型甕 (土師)	7.8×8.2 ×3.4×0.3	中央凹の平底から胴部は内湾し立ち上がり頸部で僅かに内傾し、口縁部が直立する。外壁は上辺を斜めに2段に刷毛目を施し下辺は寛削りとする。内壁は磨きによる。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色	完形
2	高环坏部片 (土師)	13.0×6.0 ×0.3~0.5	脚部から当初90°外傾し立ち上がりその後2.3cm附近で僅かに内湾を見せながら45°の傾斜で立ち上がり口唇部に至る。内外壁面共に磨きをかける。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③暗褐色	
3	高环坏部片 (土師)	5.0×5.9 ×10.2× 0.4~0.6	張り出した底辺から円盤状に立ち上がる。外壁は縦の寛削り、内壁は絞りを入れる。	①緊まる ②石英粒子 ③褐色	
4	高环坏部片 (土師)	9.0×6.0 ×0.5~1.5	前項と同じ。	①固く緊まる ②石英微粒子 ③黒褐色	
5	深鉢底部 (弥生)	9.0×2.5 ×6.8×0.5	やや剝離を生じた底部から胴部は直線的に外傾し立ち上がる。外壁はLRの斜縄文を施す。底面に木の葉圧痕。	①普通底部内外 少々亀裂 ②微粒石英 ③黒褐色	
6	深鉢底部 (縄文)	11.0×3.0 ×9.5×0.5 ~0.8	寛削りした底部から胴部は直線的に外傾し立ち上がる。外壁はLRの斜縄文を施す。	①緊まる ②石英粗粒子 ③黒色	
7	壺底部 (土師)	10.0×2.0 ×3.5×0.3	平底から胴部は直線的に外傾し立ち上がる。外壁は寛磨き、内壁は寛削りを施す。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③褐色	
8	壺底部 (土師)	6.6×3.0 ×7.0×0.6	底辺中央部の凹んだ底部から胴部は直線的に外傾し立ち上がる。外壁は斜めに寛削りを施す。底部には木の葉圧痕。	①脆い ②微粒子石英 ③淡黄色	
9	深鉢片 (弥生)	5.0×5.0 ×0.3	口縁部の僅かに外傾する器で、外壁面は、口唇部に鋸歯文を施し、口縁外側上辺に波状の凸帯文を、その下辺帯に櫛掻きによる波縄文を施す。	①緊まる ②石英粒子 ③黒色	

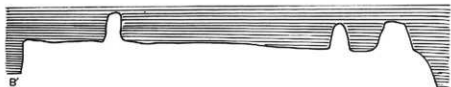
10	深鉢片 (弥生)	6.5×4.2 ×0.4	頸部から胴部にかけての残存片であり、直状に立ち上がった胴部をもつ器である。外壁は頸部に窪みによる山形文を横帯に胴部にLRの斜線文を施す。	①固く緊まる ②石英粗粒子 ③黒色	
11	深鉢片 (弥生)	6.5×5.0 ×0.4	内湾する胴部から僅かに内傾する肩部へと続き、さらに垂直に立ち上がる口縁部となるが、口縁部は複合となる。外壁は複合口縁部にLRの細縦文を施し、肩部は櫛歯きによる山形文を横帯に施す。	①緊まる ②石英粗粒子 ③黒色	
12	深鉢片 (弥生)	5.6×5.3 ×0.5	垂直に立ち上がる胴部をもつ器で、外壁面はRLの縦文を施す。	①脆い ②石英粗粒子、砂質 ③黒褐色	
13	深鉢片 (弥生)	6.5×6.8 ×0.4	垂直に立ち上がる胴部をもつ器で、外壁面は羽状縦文を施す。	①緊まる ②石英粗粒子多い ③褐色	
14	深鉢片 (弥生)	9.5×9.0 ×0.5	胴部は垂直に立ち上がり、肩部において僅かに直線的に外傾を見せる。外壁面は細羽状縦文を施す。	①緊まる ②石英粗粒子多い ③暗褐色	
15	磨石片	4.5×6.5 ×3.9			輝石安山岩

#### 第7号竪穴住居址（S I 07）（第18・19図）

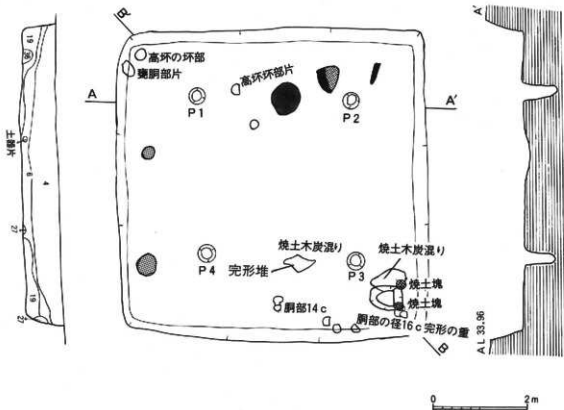
本住居址はS I 09の西側、S I 05の北隣に位置する。その平面形状は、北側の長さ6.20m、向いの南側で6.20m、そして東側と西側でやはり6.20mを計測する、正方形プランとなる。軸線を約35°西方に向けて建てられている。

壁高は70cmで周溝は認められないが、極めて重厚な感じの規格と判断される。主軸は全て床面上に4柱が検出されるが、P<sub>1</sub> (33cm×60cm)、P<sub>2</sub> (35cm×10cm)、P<sub>3</sub> (50cm×40cm)、P<sub>4</sub> (35cm×65cm)となる。炉は床面北側に60cm×50cm×15cmが認められる。また、東南コーナーの床面に55cm×65cm×40cmの貯蔵穴が検出され、その中に上質の粘土が貯蔵されていた。

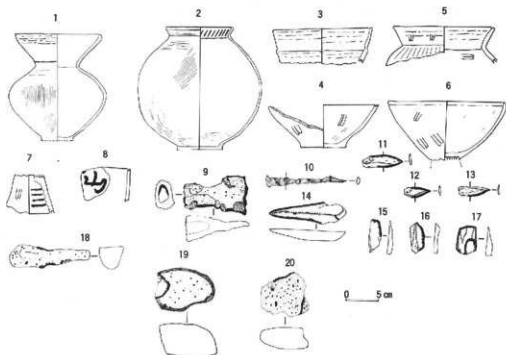
本住は支柱の規格も大きく壁高も極めて重厚で、床面の面積も広く、遺物や炉等の状況から判断して五領期の後半より和泉期に位置付けられる住居で、しかもその出土遺物は豊富である。甕、壺、坏有孔尖板、同じく円板、鉄片、石鏝、皮刺等があげられるが、そのことについては下記の通りとなる。



B.L. 33,96



第18図 第7号竪穴住居址平面実測図



第19図 第7号竪穴住居址遺物実測図

(C) S I - 07

(法量 1.口縁径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	①13.3 ②16.5 ③ 0.4 ④ 4.8	口縁部より胴部は大きくくの字形にひろがり、胴部中央において大きくふくらむ。それが底部に至ると大きくつばまる。口縁部は横寛削り、胴部は縦寛削り、整形。	良好 砂粒を含む 茶褐色	底部欠
2	壺 (土師)	①10.0 ②19.0 ③ 0.4 ④ 7.0	底部からの立ち上がりは丸みを有し大きくふくらむ。胴部より口縁部はくの字形になるが口縁部は極めて短い。縦寛削り整形。	良好 砂粒を含む 茶褐色	完形
3	壺 口縁部 (土師)	①15.7 ② 6.0 (現高) ③ 0.5 ④不明	底部よりの立ち上がり急。口縁部に隆帯を巻きつける。横寛整形。胴部欠損	良好 茶褐色	1/3残
4	壺 (土師)	①15.0(現) ② 6.5(現) ③ 0.7 ④ 7.0	胴部からの立ち上がりは大きく外反する。内外共に寛削りで整形されているが、仕上げは荒い。	良好 砂粒を含む 灰褐色	底部と 胴部の 一部
5	壺口縁部 (土師)	①15.5 ② 6.0(現) ③ 0.5	口縁部より胴部はくの字型になり、胴部になって大きくふくらむ。内外共に寛削り整形。	良好 灰褐色	1/5残

6	高环肌部 (十筋)	① 18.0 ② 9.0(現) ③ 0.5	胴部は破損、趾部のみ残。底部よりの立ち上がりはゆるやかに外反、内外共に横縦寛で整形。内部は少々粗雑である。	良好 赤褐色	1/2概
7	高环脚部 (上脚)	① 2.2 ② 5.0 ③ 1.0 ④ 8.0	底部破損、底部からの立ち上がりは少々丸みをもって外反ざみである。外部は縦寛削り。	良好 灰褐色	1/3
8	坏片 (十筋)	③ 0.1	胴部残片、墨書上器	良好 赤褐色、内部黒染	山の字 あり
9	鉄製品	① 4.0 ② 9.0 ③ 3.0~0.1 ④ 6.0			手斧
10	刀子	① 2.0 ② 13.0 ③ 2.0~0.1	原形をとどめない。		完形なるも折れている
11	石製構造 剣	① 1.0 ② 6.0 ③ 0.3			完形 滑石
12	同上	① 1.0 ② 4.0 ③ 0.3			完形 滑石
13	同上	① 1.2 ② 5.0 ③ 0.3			元部欠 損 滑石
14	石刃	① 3.0 ② 12.0 ③ 2.5			砂岩 完形
15	石刃	① 2.0 ② 5.0 ③ 2.5	握りは欠損。		4枚岩
16	石刃	① 4.0 ② 3.0 ③ 0.5	握りは欠損。		紅レン 岩
17	石刃	① 4.0 ② 3.0 ③ 0.5			頁岩
18	敲石	① 12.0 ② 3.0 ③ 2.0			砂岩
19	磨石	① 9.0 ② 7.0 ③ 3.0			砂岩
20	磨石	① 5.0 ② 6.0 ③ 2.5			火山岩

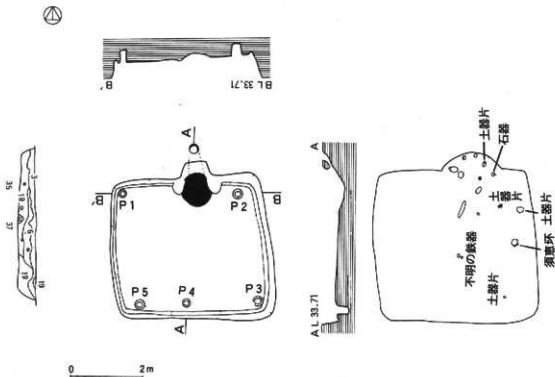


### 第8号竪穴住居址 (S I 08) (第20・21図)

本住居址はエリアの西端に位置し、その西隣にS I 09が所在する。その平面形状は、北側の長さ4.10m、向いの南側で同じく4.10m、そして東側の長さ4.00m、西側で3.60m少々不整形の方形プランをなす。そしてその軸線を約30°西にかたむけて建てられている。

壁高は50cmで極めて重厚な感じで、支柱は床面コーナーすれすれに造られ、その5が認められた。P<sub>1</sub> (28cm×35cm)、P<sub>2</sub> (35cm×25cm)、P<sub>3</sub> (33cm×40cm)、P<sub>4</sub> (26cm×35cm)、P<sub>5</sub> (30cm×35cm)となる。なお、20cm×10cmの周溝が四周し、大変に規格のよい中型住である。床面は平坦で固く、四隅に支柱を配置したので広く使用されるのである。

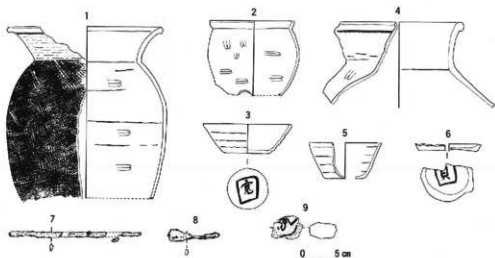
カマドは床面北側中央に造られ、それは90cm×70cm×30cmとなり、大型のカマドであるが、現在おしつぶされて原形を失っている。なお、本住はその規格と出土物等から判断して平安時代中末期に亘る住居址とおもわれるが、その出土遺物は極めて多い。その主なるものは甕(須恵器、土師器)、坏、刀子、鉄器類、墨書土器等があげられるが、それは下記にあげておいた。



注1 全般的に焼土粒及び炭粉を豊富に含有する  
しかも軟かい

注2 北壁にかまどを有し土師の遺物は豊富であった

第20図 第8号竪穴住居址平面実測図



第21図 第8号竪穴住居址遺物実測図

(C) SI-08

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 (土師)	①21.0 ②26.0 ③ 0.5 0.4	底部からの立ち上がりは急でふくらみがない。口縁部は長く外反する。内側は、篋織りで、外部は布目整形。	良好 砂粒 茶褐色	2/5残
2	甕 (土師)	①12.0 ②11.5(現) ③ 0.3	口唇部はM字型の帯をめぐらす。口縁部は短く、くの字型で胴部に至る。胴部は稍々ふくらみを有する。篋削り整形なるも砂粒を含むので極めて荒い。	普通 砂粒 茶褐色	2/3残
3	坏 (須恵)	①13.0 ② 4.1 ③ 0.4 ④ 6.0	底部からの立ち上がりは稍々急で外反する。口縁部は横篋整形。	良好 灰白色	4/5残 墨書土器
4	甕 (須恵)	①10.0(現) ②11.0(現) ③ 1.1	口唇部はM字型の帯帯、口縁部は長く、くの字型に胴部に向かって大きく開く。外部は篋削り整形して布目をはる。	良好 砂粒 青黑色	1/10残
5	坏 (須恵)	① 5.0 ② 4.0 ③ 0.4	底部は平底、胴部の立ち上がりは大きく外反し、そのまま開いて口唇部に至る。内外共に輪痕痕を有する。	良好 灰色	1/10残
6	坏 底部 (須恵)	① 7.0(底) ②不明 ③ 0.3	底部からの立ち上がりは大きく開く。底部に墨書あり。	良好 灰色	1/10残 墨書土器 字不明
7	刀子	①15.0 ② 1.0 ③ 0.8			
9	鉄滓				

### 第9号竪穴住居址 (SI09)第22、23図

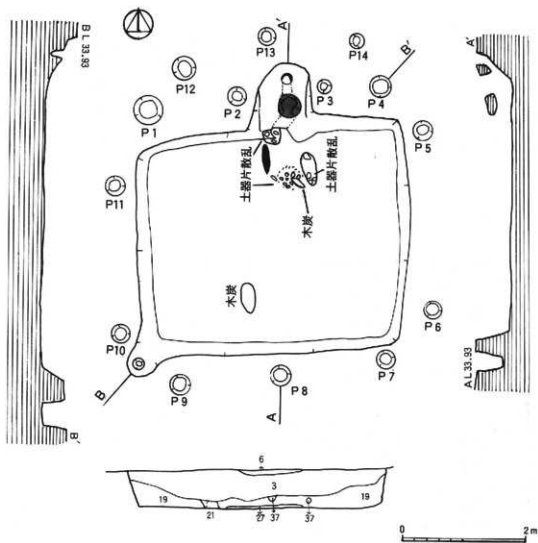
本住居址はエリアのほぼ中央部に位置し、SI07の東隣に所在する。その平面形状は北側の長さ4.40m、向かいの南側で同じく4.40m、そして東側で3.40m、西側で同じく3.40mとなり、規格のよい方形プランをなす。そして軸線を約20°西方に向けて建てられている。

壁高は80cmとなり極めて厚重である。主柱は全て床面には造らず、墩上周辺に10が認められる。P 1 (30cm×40cm)、P 2 (32cm×45cm)、P 3 (30cm×40cm)、P 4 (32cm×45cm)、P 5 (30cm×45cm)、P 6 (30cm×50cm)、P 7 (30cm×47cm)、P 8 (35cm×40cm)、P 9 (35cm×45cm)、P 10 (55cm×50cm)、P 11 (30cm×40cm)となる。カマドの存在する北側に下屋を造るが、その主柱はP 12 (32cm×45cm)、P 13 (35cm×40cm)、P 14 (35cm×40cm)となる。

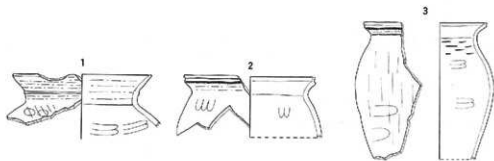
カマドについて。カマドは欠損することなくそのまま残されていた。第22図によってこれを見ると、カマドを造るのに厚さ約10cmの粘土をつき固め巾40cm、高さ35cm、奥行90cmのカマドを造る。そして上部に40cm×45cmの丸型の孔をあけるがそれは煮沸用の器物を入れる孔である。一般のカマドはその孔の下部に器物をささえる器台を置くが、ここでは同の如く孔の両側より粘土で舌状の台を造り器物をその上に乗せるように造られている。焚口は横幅40cm、高さ35cmで半楕円状に大きく開いており、そのおくに径約10cmの煙突が設けられている。

なお、本住は火災にかかり消失したようで、焼土や炭化材が散乱していた。完全燃焼したらしく炭化材の残存は案外少なかった。残存の炭化材の下には床面より10cm程度の上がたまっていたことから、廃屋後しばらく経過して後火災にかかったものと思われる。

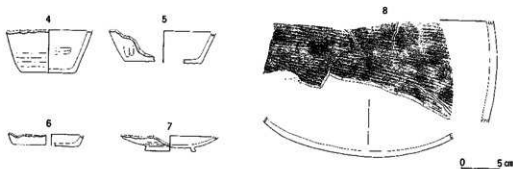
本住は住居の構造様式や検出遺物等から判断して、平安中、後期に位置付けられるものと判断されるが、中壘住としてはその規格も立派で、特にカマドの様式も特色がある。更にまた下屋がおろされていることも極めて珍しい。検出された遺物も数多くあったが、その主なるものは下記に上げておいた。が特に石製模造剣と丸玉は祭礼用具として注目される。



第22图 第9号竖穴住居址平面实测图



第23图 第9号竖穴住居址遗物实测图



(C) SI-09

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種 (土師)	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕口縁部	18.0×8.6 ×19.6× 0.5	内湾する胴部から肩部が内傾し、直線的に外傾する口縁部へ接続する。頸部に口縁部との接続痕を残す。口縁部内外壁面は横に刷毛目仕上げ、肩部内外壁は篋削りが主体となっているが、外壁に僅かに刷毛目残る。	①緊まる ②微粒子石英 ③黄褐色	
2	甕口縁部	17.0×8.5 ×19.0× 0.5	内湾する胴部から肩部が内傾し、僅かに外反して立ち上がる口縁部は口唇部において、さらに僅かに外反し断面M字形となる。口縁部内外壁面は手撫でにより、また肩部外壁は篋磨き、内壁は縦の篋削りによる。	①緊まる ②石英粗粒散見 ③暗褐色	
3	甕口縁部	20.0×18.0 ×0.3~0.4	内湾し立ち上がる胴部から肩部が内傾し、外反し立ち上がる口縁部は口唇部において断面M字状を呈し縁どっている。口縁内外壁面は手撫でにより、胴部外壁は縦に、内壁は横にそれぞれ篋削りを施す。	①脆弱性あり ②石英粒子 ③褐色	鬼高式
4	壺底部	11.6×5.6 ×7.0×0.5	中央の僅かに凹んだ平底から胴部は当初直線的に外傾し立ち上がる。外壁面は横篋削り、内壁は横手撫でを施す。	①緊まる ②石英粒子 ③黄褐色	
5	壺底部	8.0×5.0 ×0.6	底部の不整形な平底から直線的に外傾し立ち上がる。外壁面は縦に篋削り、内壁は剃離す。	①脆い ②石英粗粒子 ③淡黒褐色	
6	坏底部片	6.0×1.5 ×0.3	平底から外傾し立ち上がる。底部内側は波うって不整。ロクロ仕上げ。	①緊まる ②微粒子石英 ③灰色	
7	高台付坏底部	11.0×2.5 ×0.4	付けたしの高台から僅かに内湾を見せる立ち上がりである。外壁は篋磨き、僅かに篋削り痕残る。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③赤褐色	
8	薬片	24.5×12.5 ×1.0	胴径40cmを想定する須惠器の大甕。外壁は平行叩き目、内壁は石の叩きを施す。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③灰色	

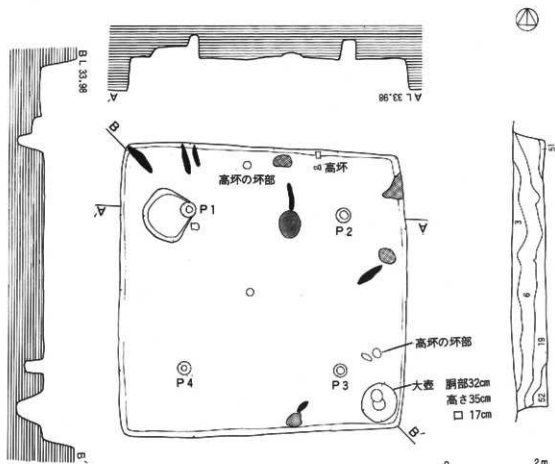
### 第10号竪穴住居址 (SI10) 第24、25図

本住居址はエリア中央部の西端に位置し、SI13の南隣に所在する。その平面形状は北側の長さ向かいの南側の長さとともに6m、そして東、西の長さも同じく6mとなり、正方形プランをなす。その軸線を約15°西方に向けて造られている。

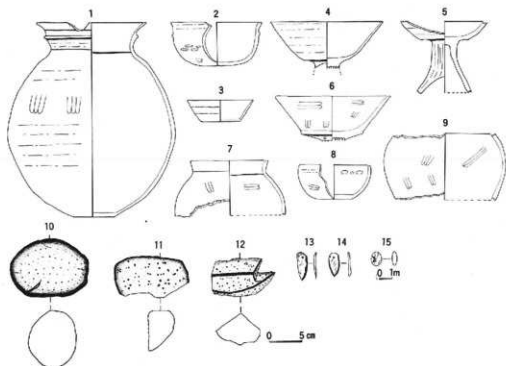
壁高は60cmとなり極めて重厚である。主柱は床面に4が認められ、P1 (30cm×60cm)、P2 (40cm×40cm)、P4 (30cm×50cm)、P3 (30cm×60cm) となる。床面は固く平坦となり、床面中央の東側に50cm×45cm×15cmの炉を設け、その南東隅に70cm×30cm×65cmの貯蔵穴、更に北西隅に1.00m×40cm×25cmの貯蔵穴を有する。

本住はその構造様式や出土遺物から判断して五領期の終わりより和泉期にかけての住居址とみられるが、その規格も整然としており大型住の部類に属するものではなかろうか。

床面からの出土遺物も多く、その主なるものとして坏、高坏、壺、祭礼用具等完型品も多かった。その主なるものは下記の通りである。



第24図 第10号竪穴住居址平面実測図



第25図 第10号竪穴住居址遺物実測図

(C) S I - 1 0

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	17.0×30.0 ×0.5~0.6 ×6.0	底部から大きく内湾して立ち上がり胴中央部で最大膨らみとなり、内傾して頸部に至る。口縁部は垂直に立ち上がった後複合口縁となり外反する。整形は蹴割り後手撫でが施されている。	①良好 ②緻密粘土 ③赤褐色	復元完形
2	坏 (土師)	①14.0 26.5 ③ 0.3	底部はゆるやかな丸底、稜を有するが、口縁部は大きく外反する。外部は横篋使用するが粗雑である。	良好 茶褐色	稍々完形
3	坏 (土師)	①11.3 ② 3.3 ③0.3~0.5 ④ 6.0	底部は平底底部からの立ち上がりはゆるやかに外反ぎみに立ち上がり、口縁部に至る。輪積み方式をとり後に寛で整形。仕上げは少々粗雑である。	普通 灰白色	2/3残
4	高坏皿部 (土師)	①17.5 ② 6.0 ③ 4.0	脚部の上部に僅かに稜を有し口縁部に向かって外反して開く。外部は縦横両用に寛で整形している。	少々良好 灰褐色	皿部残 脚部は欠損
5	高坏 脚部 (土師)	1. 14.0 2. 11.3 3. 0.6~0.7 4. 4.0	脚部と皿部の1/3を残して後は欠損。脚部は太く短い。皿部は僅かに稜を有し、口縁部に向かって大きく開く。外面は縦篋を使用するが、極めて粗雑である。器内の厚い造りである。	少々良好 砂粒を含む 灰白色	1/2残

6	高坏 (土師器)	①18.0 ② 7.7 ③ 0.5	皿部の下からの立ち上がりは大きく開き縁を有し、口縁部に坐って更に開く。上部は横寛、下部は縦寛整形。	良好 赤褐色	皿部残
7	甕片 (土師器)	①12.0 ② 9.0(現) ③ 0.3	口縁部はくの字型となって胴部にいたる。胴部は大きなふくらみをもって外反し胴部中央において最大径となる。篋削り整形。	良好 砂粒 黒色	胴部下部より 底部欠損 1/3残
8	坏片 (土師器)	①不 ② 5.5 ③ 0.5 ④ 6.0	底部は平底、立ち上がりは丸味をもって、口縁部に至り少々内湾さみ。横削り整形。	良好 灰黒色	1/2残
9	甕片 (土師器)		胴部のふくらみは大きく、胴部中央において最大径をなす。篋削り整形。	良好 灰黒色	胴部残 1/2残
10	磨石	(2) 9.0 ③ 8.0			砂岩 穴形
11	磨石	② 6.0 ③ 3.0			輝石安 山岩
12	磨石	② 5.5 ③ 5.0			安山岩
13	石製模造 剣	② 4.5 ③ 0.2			滑石
14	同上	② 3.5 ③ 0.3			滑石
15	丸く網	② 1.0 ③ 0.4			珪瑁

### 第11号竪穴住居址 (SI11) (第26、27図)

本住居址はエリアの最南端、台地が谷津に落ち込もうとするところに建てられている。そして弥生期の住居址の点在する領域にあるのだが、実は本住の検出確認が遅く他の弥生住にすでに番号をつけてしまったので第11号としたのである。

その平面形状は、北側の長さ3.00m、向かいの南側で4.70m、そして東側の長さ3.50m、西で4.00mとなり不整形方形プランをなす。そして、軸線を約20°西方に向けて建てられている。

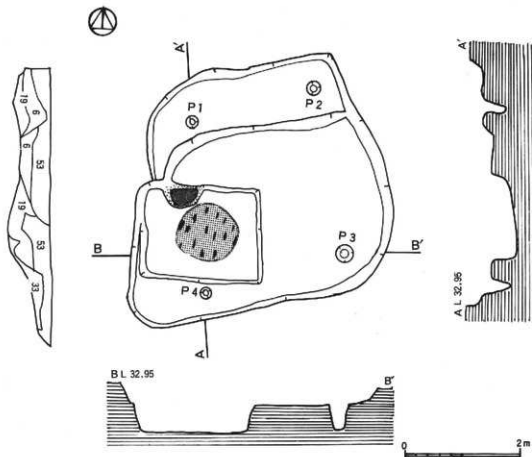
主柱は床面に4が認められるが、P1 (20cm×35cm)、P2 (25cm×45cm)、P3 (35cm×45cm)、P4 (25cm×40cm)となる。本住の床面は3段に分類されるが、右の平面図によるとそのNo1の中段床面が最も広く、その壁高30cmとなり、No2は北側床面にその巾約40cmとなって設けられ、その壁高は10cm×20cmとなる。これは棚等に使用するために造られたものなのか。最下部(Na3)は西壁の床面を更に掘下げ(壁高45cmとなる)、方形土に(北長2.00m、南長2.00m、東長1.60m、西長1.60m)掘込んで造られる。その東壁床面に炉状の施設が認められたが、床面に焼土や炭化材が残されているところをみると、この部分だけ火災にかかったものであろうか。したがってその状況を確認することはできなかった。周辺には弥生土器片が認められた。

なお、中段 (No1) の面積は西側3.00m、東2.70m、南側の長さ4.70m、北3.10mとなり、上段

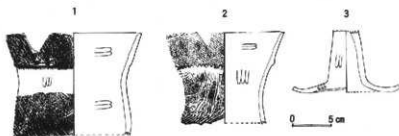


(No 2) は西方の長さ1.30m、東1.10mねそして北、南の長さ共に3mとなり、中斷 (No 1) より10cm~20cm高い。

床面より弥生時代後期の土器片が認められた。



第26図 第11号竪穴住居址平面実測図



第27図 第11号竪穴住居址遺物実測図

(C) SI-11

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

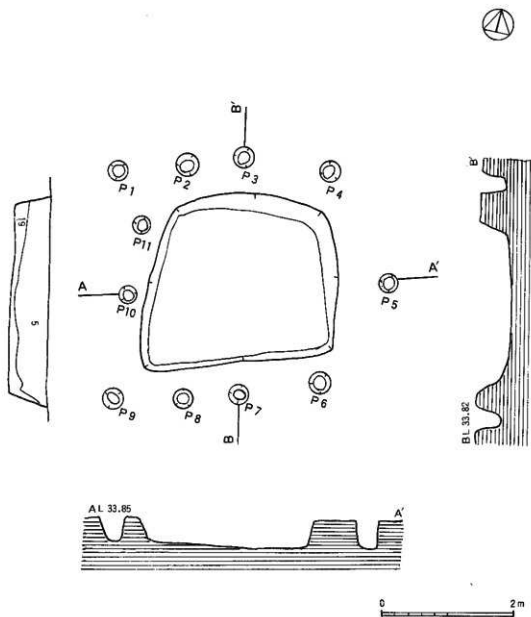
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	深鉢 (弥生)	18.0×13.5 ×14.8× 0.5	胴部は僅かに膨らみをもち内湾し立ち上がり肩部で僅かに内傾した後頸部に至り緩く外反を示し、直線的に外傾する口縁部に接続し、さらに口縁部は複合となる。外壁面、口縁部及び胴部はR Lの斜縄文を施し、口縁部下端に凸起浮文2個づつ5個所に配置する。	①緊まる ②石英粒子多い ③黒色微粒子	1/2残
2	深鉢 (弥生)	15.6×11.0 ×11.0× 0.4	僅かに内湾し立ち上がった胴部は頸部で絞りを入れた後、頸部上辺から口縁部へかけて直線的に外傾を示し口唇部に至り、口縁部は複合となる。外壁面、口縁部はR Lの斜縄文、胴部はL Rの斜縄文を施し、口唇部に刺歯文を施す。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③黒色	1/2残
3	高坪脚部 (土師)	3.5×8.2 ×7.0×0.3 ~1.0	扁平な脚底部から円錐状に立ち上がる外壁は立ち上がり部で縦に、底辺は横にそれぞれ縦割り、立ち上がり内壁は紋りによる。	①緊まる ②微粒子石英 ③黄褐色	和泉式

## 第12号竪穴住居址 (SI12) 第28、29図

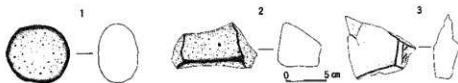
本住居址はエリア中央部西側所在する。その平面形状は北側の長さ2.40m南も同じ2.40m、そして東2.20m、西で2.50mとなり、正方形プランをなす。そしてその軸線を約35°西にかた向けて造られている。

壁高は43cmとなり、支柱は全て外壁上に造られているが、そのP 1 (34cm×40cm)、P 2 (37cm×48cm)、P 3 (30cm×36cm)、P 4 (30cm×45cm)、P 5 (30cm×40cm)、P 6 (35cm×45cm)、P 7 (30cm×35cm)、P 8 (30cm×35cm)、P 9 (30cm×40cm)、P 10 (30cm×40cm)、P 11 (30cm×45cm)となる。

床面は凹凸が少々あり、軟らかい。割合に規格の小さい住居で、カマド、炉の類は認められない。その出土遺物より判断して本住は平安時代中期より後期に亘るものと思われる。床面より出土した土器類については壺、壺、葎石等が認められたが、それらは全て小片なので土器類のみ記載しておいた。



第28图 第12号竖穴住居址平面实测图



第29図 第12号竪穴住居址遺物実測図

(C) SI 12

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	磨石	① 8.00 ② 5.00 ③ 7.00			砂岩
2	砥石	① 9.5 ② 5.2 ③ 5.0			砂岩
3	砥石	① 8.5 ② 3.5 ③ 6.0			砂岩

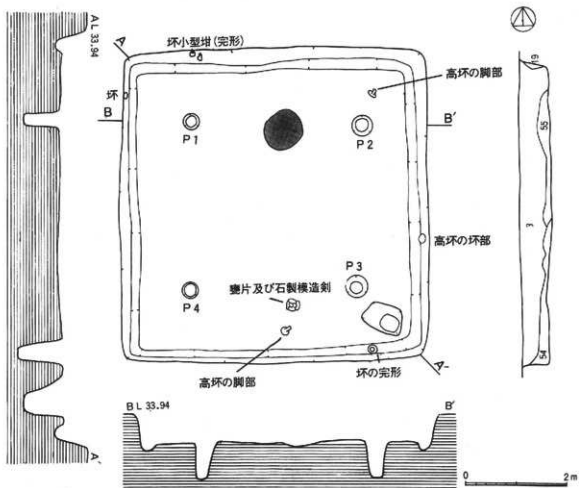
### 第13号竪穴住居址 (SI13) (第30、31図)

本住居址はエリア中央部の東端に所在する。その平面形状は四辺の長さは全て5.70mの正方形プランをなす。そして軸線を東へ約45°東方へ向けて建てられている。

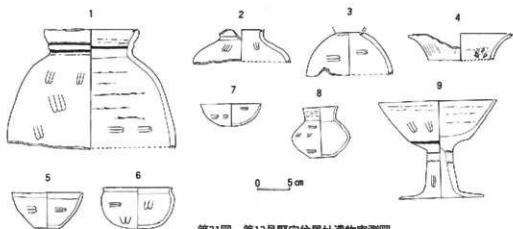
壁高は60cmと重厚な感じで、その主柱四は全て床面より検出されたが、P 1 (30cm×70cm)、P 2 (40cm×70cm)、P 3 (30cm×60cm)、P 4 (40cm×90cm)となる。床面は平坦で固く、そして20cm×15cmの溝が整然とめぐらされている。扉は床面中央部より少々北にかたむけて造られ、その規格は60cm×15cmとなる。なお、床面西南コーナーに70cm×70cm×80cmの貯蔵穴を有する。

本住はその住居の構造様式と出土遺物等から判断して、元朝期の終末より和泉期に亘る住居址と思われるが、その規格等が極めて整備された中型の部類に属する住居址と認められる。

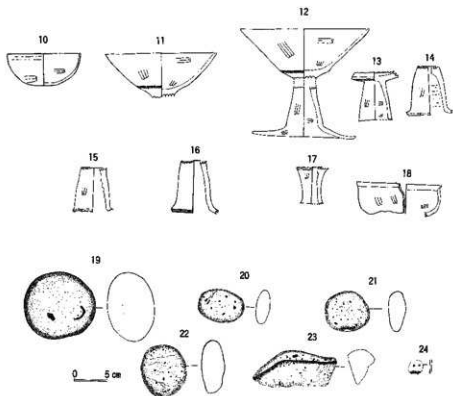
検出された土器類は甕、坏、高坏、祭礼用石器(石製模造鏡)等があげられるが、その主なるものは下記の通りである。



第30图 第13号竪穴住居址平面実測図



第31图 第13号竪穴住居址遺物実測図



(C) SI-13

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	①19.5 ②17.5 ③0.7	口縁部より胴部にかけてはくの字型をなし胴部中央より底部にかけて大きくふくらむ。内外共に横寛なで、底部にいたって縦寛なでの部分もある。	良好 砂粒を少々含む 灰白色	3/4残
2	壺胴上部 (土師)	①7.0 ②5.0 ③0.7	口縁部は殆どが欠損するが、口縁部より胴部にかけてはくの字型に曲がり胴部は大きくふくらむ。内外共に縦寛削りとなる。	良好 灰白色	1/5残
3	寛胴片 (土師)	①4.0 ②5.5 ③0.6	胴部は大きくふくらみを有する。内外共に寛なで整形。	良好 赤褐色	1/5残
4	壺口縁部 (土師)	①16.0 ②4.2 ③0.4	口縁部は大きく外反する。胴部は不明。外部は縦寛整形。	良好 砂粒を含む 灰赤色	1/6残
5	椀 (土師)	①10.8 ②5.5 ③0.4 ④3.8	底部は平底、胴部への立ち上がりは外反するが口縁部は少々内湾さみ。内外共に寛なで整形となるが仕上げは粗雑。	普通 灰白色	完形

6	坏 (上節)	①14.0 ② 6.4 ③ 0.5 ④ 3.2	底部は少々丸みを帯び、胴部はふくらみを持って立ち上がる。そして口縁部は少々内湾がみ。内外共に寛削り整形。仕上げは稍々粗削。	良好 赤褐色	完形
7	坏 (上節)	① 9.2 ② 3.4 ③ 0.3	底部は丸味をなし、胴部もふくらみを持ちながら口縁部に至る。内外共に寛削り整形をなすが、仕上げは粗雑である。	良好 灰白色	完形
8	埴 (土師)	① 5.4 ② 7.8 ③ 0.3 ④ 4.0	底部は平底、底部よりの立ち上がりは大きく外反し胴部中央において最大のふくらみを有する。胴部中央より口縁部は大きく内湾し、くの字型をもって口縁部に至る。内外共に寛削り整形。	良好 灰白色	完形
9	高坏土師 皿部 (土師)	①18.0 ② 6.2(現) ③ 0.5	皿部底部からの立ち上がりは外反し、口縁部に至って開く。胴部は欠損するが少々歪直ぐみに底部に向かって開く。内外共に寛磨き整形。	良好 灰褐色	皿部の み脚部 少ない 残
10	坏 上節	①11.2 ② 4.9 ③ 0.5 ④ 4.0	底部は少々平底で立ち上がりはふくらみを有する。内外共に横寛削り整形。	良好 灰白色	完形
11	高坏 (土師)	①20.0 ② 3.2(現) ③ 0.4	底部より口縁部は外反して立ち上がり、その口縁部は開く。内外共に寛磨き整形。	良好 褐色	皿部の み脚部 少々残
12	高坏 (上節)	①17.2 ③ 0.5	脚部よりの立ち上がりは大きく外反して口縁部に至って開く。内外壁共に寛磨き。	良好 赤褐色	皿部の み残
13	器台脚部 (土師)	① 7.5 ③ 0.5	脚部は少々丸みを有する。皿部は大きく開く。縦寛削り整形。	良好 灰白色	脚部の み
14	高坏脚部 (土師)	① 3.9 ② 7.0 ③ 0.9 ④ 7.3	器台部は少々丸味をもって底部に入る。縦寛削り整形するが少々荒い。	良好 砂粒 灰褐色	1/3残
15	高坏脚部 (土師)	① 4.0 ② 6.6 ③ 0.9 ④ 6.3	同上	良好 砂粒 褐色	1/3残
16	高坏脚部 (上節)	① 4.0 ② 7.5 ③ 1.0 ④ 6.9	同上	良好 褐色	1/3残
17	高坏脚部 (上節)	① 3.6 ③ 0.9 ④ 3.2	同上	良好 砂粒 灰赤色	1/5残
18	坏胴部片 (土師)	9.0 4.5 0.4	口径部より胴部は浅いくの字型、胴部はふくらみをもって内反しながら底部に至る。寛なでロクロ整形。	良好 黒色	1/3残
19	礫石	①10.0 ② 8.0 ③ 5.3			砂岩
20	磨石	① 8.0 ② 7.0 ③ 4.0			砂岩

21	出石	① 7.0 ② 5.5 ③ 2.3			砂岩
22	磨石	① 6.7 ② 8.0 ③ 3.0			砂岩
23	嵌石	① 11.5 ② 5.3 ③ 2.5			砂岩
24	有孔門板	① 2.0 ② 1.5 ③ 0.3			水成岩

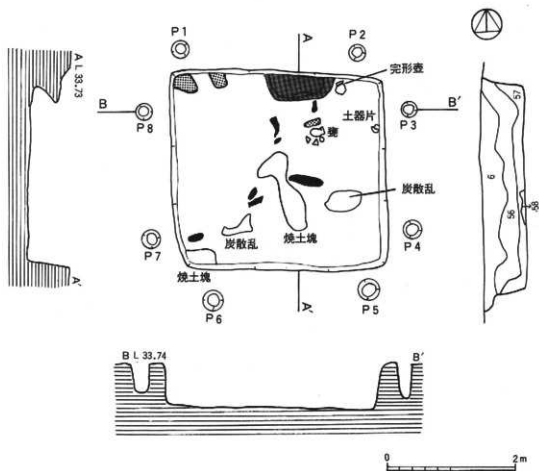
#### 第14号竪穴住居址 (SI14) 第32、33図

本住居址はSI13に隣接する。その平面形状は北側の長さ、3.20m、その南3.00、そして東側の長さ3.00m、西で3.10mとなり、少々不整形方形プランをなす。そしてその軸線を約30°西にかたむけて造られている。

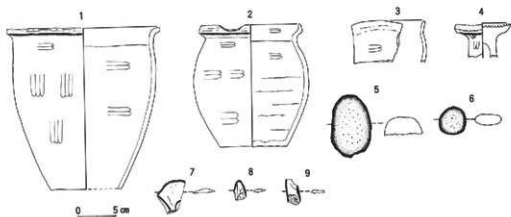
壁高は65cm、そして支柱は全て外壁に造られ、そのP 1 (26cm×40cm)、P 2 (25cm×45cm)、P 3 (24cm×40cm)、P 4 (28cm×43cm)、P 5 (35cm×50cm)、P 6 (32cm×50cm)、P 7 (26cm×50cm)、P 8 (27cm×44cm)となる。床面は平坦で固く、北側中央に80cm (巾)×50cm (高)を有す。カマドは壁面外側に向かって造られていて、上部からの圧力で押しつぶされているが、その規格だけは知ることが出来る。

本住は平安時代中期より後期に亘る住居址と判定されるが、出土遺物は多く、その主なるものは土師器の甕、須恵器の甕、坏、皮割等であるが、それは下記にあげた通りである。





第32图 第14号竖穴住居址平面实测图



第33图 第14号竖穴住居址遗物实测图

(C) SI-14

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

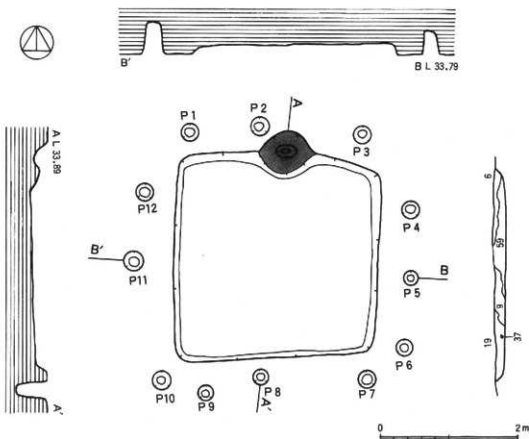
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	瓶 (土師)	20.0×21.2 ×9.5×0.4	底面の無い底辺から当初直線的に外傾し立ち上がり、中央部附近で僅かに内湾し、肩部において僅かに内傾し口縁部と接続する。口縁部は外反して立ち上がり、口唇縁端において直角に切断する。内外壁面は磨き。	①固く緊まる ②微粒石英 ③茶褐色	完形
2	壺 (土師)	13.0×16.0 ×9.0×0.4	不整形の平底から当初直線的に外傾し立ち上がり中央部附近で内湾し肩部において内傾する。口縁部は外反し立ち上がり、外側に稜を作り、口唇先端に凸帯を回らす。外壁面は横磨削り、内壁面も横磨を施すが、輪痕が多く残る。	①普通 ②石英粒子、砂質 ③淡赤褐色	完形
3	坏片 (須恵)	7.5×5.5 ×0.3	内湾する胴部をもち口縁部は僅かに外傾する。壁面は内外共に磨き。	①緊まる ②微粒石英 ③灰色に導付着	
4	高坏片 (土師)	8.6×4.6 ×4.0	垂直に立ち上がった脚部から坏部がほぼ直角に外傾し、外側に稜をもつ。外壁面、坏部は斜めに、脚部は縦に磨き、内壁面磨きかかると。	①固く緊まる ②微粒石英 ③褐色	
5	敷石	5.2×8.2 ×2.5			安山岩
6	磨石	3.9×3.7 ×1.5			安山岩
7	石刃	3.5×4.2 ×0.5			縹砂岩
8	磨石刃	1.5×2.5 ×0.4			チャート
9	磨石刃	1.9×3.2 ×0.4			チャート

### 第15号竪穴住居址 (SI15) (第34、35図)

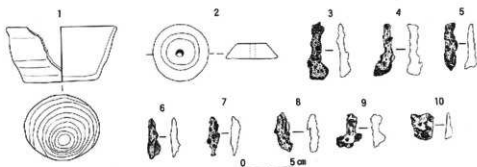
本住居址はSI16に隣接する。その平面形状は四壁の長さどれも3.00mとなり、正方形プランをなす。そして軸線を約30°西方へ向けて建てられている。

壁高は僅かに10cmとなり、極めて浅い。主柱については全て壁上をめぐって建てられ12が検出された。P 1 (30cm×40cm)、P 2 (26cm×35cm)、P 3 (27cm×40cm)、P 4 (25cm×40cm)、P 5 (25cm×33cm)、P 6 (25cm×40cm)、P 7 (30cm×40cm)、P 8 (25cm×40cm)、P 9 (24cm×50cm)、P 10 (30cm×43cm)、P 11 (30cm×45cm)、P 12 (25cm×38cm) となる。床面は軟らかく平坦で、その北壁外部に亘って50cm×50cm×15cmのカマドが造られている。カマドは押しつぶされた状態で検出されたが、割合に小規模である。

本住も平安時代中、後期に亘る住居址とみられるが、住居規模が小さいにもかかわらず、出土遺物は極めて豊富である。その主なるものを見ると、甕片、坏、鉄片(20)、紡錘車、皮刺、土鏝、燧石等、また墨書土器もあげられる。それについては下記の通りである。



第34図 第15号竪穴住居址平面実測図



第35図 第15号竪穴住居址遺物実測図

(C) S I - 15

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

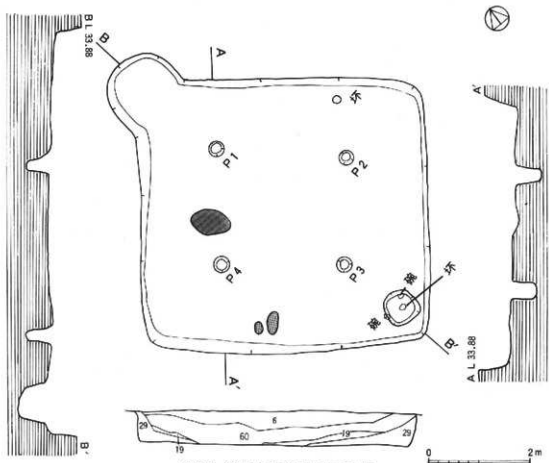
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (須恵)	11.0×5.5 ×6.0×0.3 ~0.35	平底から直線的に外傾し立ち上がり口唇に至る。外壁は横位に波状の凹凸を生ずる。底部に糸きり痕、ロクロ整形。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③灰色	1/2残
2	紡錘車 (土師)	3.0×1.5 ×5.2	側面形状台形。各面共厚磨きがかかる、中央に径0.4cm円孔を貫通する。	①良く緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色	完形
3 4 9	鉄鏃	2.0×5.5×2.0 2.0×5.0×2.0 1.5×4.5×1.5 1.2×4.0×1.0 1.1×4.0×1.0 1.9×3.9×1.0 3.0×3.5×1.5			

### 第16号竪穴住居址 (SI17) 第36、37図

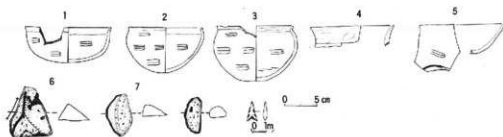
本住居址はエリアの北端、そしてSI15に隣接して所在する。その平面形状は北側の長さ5.50m、向かいの南で5.10m、そしてその東側の長さ4.60m、向かいの西側で5.10mとなり、不整形方形プランをなす。そして軸線を西方に約45°むけて建てられている。

壁高は60cmとなりかなり重厚につくられている。支柱は床面上に4が見られ、そのP1 (30cm×43cm)、P2 (30cm×44cm)、P3 (30cm×44cm)、P4 (30cm×50cm)となる。床面は平坦で固く、そして床面中央より少々西へかたむいた方向に70cm×50cm×15cmの炉を有す。なお、東南コーナー床面に65cm×50cm×13cmの炉が認められた。更にまた西北コーナーに120cm (径)×50 (高さ)の土壇を掘込む。これは本住不使用後に造られたのものであろう。

本住も五領期後半より和泉期に位置付けられるもので、中型住として大変に規格のよい重厚な住居址である。床面より検出された遺物として壺、土師環等の他に、その覆土より縄文早期の土器片や、石鏃等もみられた。



第36図 第16号竪穴住居址平面実測図



第37図 第16号竪穴住居址遺物実測図

(C) S1-16

(法量 1.口縁直径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

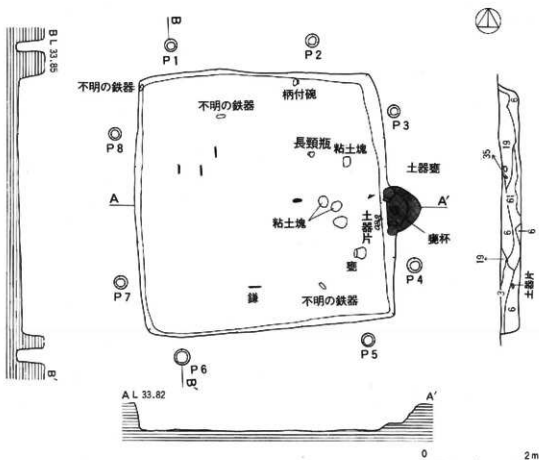
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	13.5×5.5 ×0.4	丸底から内湾し立ち上がり、最も開いた肩部で口縁に接続する。口縁は直線的に僅かに外傾する。内外壁面は横に笕削りを施す。	①内壁面に剝離あり ②石英粒子 ③赤褐色	4/5残
2	坏 (土師)	11.4×7.0 ×0.4	前項と同じ。	①固く緊まる ②微粒石英 ③赤褐色	完形
3	腕彩土器 (土師)	11.6×8.5 ×3.2×0.4	平底から内湾し立ち上がり肩部において内傾し、外反する細い口縁部に接続する。内外壁共に横に笕削きをかける。	①普通 ②石英粒子 ③褐色	1/4残
4	壺口縁部 片 (土師)	14.0×3.5 ×0.3~0.5	肩部と口縁部の接続部分が分厚く口唇部が薄く外反しているのが特徴である。外壁面は殆ど剝離、内壁は笕削きかかる。	①普通 ②微粒石英 ③赤褐色	
5	高坪坏部 片 (土師)	8.5×9.0 ×0.3~0.5	坏部外壁下辺に稜をもつ。内外壁面は笕削きをかける。	①固く緊まる ②微粒石英 ③赤褐色	
6	磨石片	7.0×8.0 ×2.8			輝石安山岩
7	磨石	4.0×6.8 ×1.9			輝石安山岩
8	磨石	2.9×5.5 ×1.7			浴岩
9	石鏝	0.8×1.5 ×0.4			黒曜石

第17号竪穴住居址 (SI17) (第38、39図)

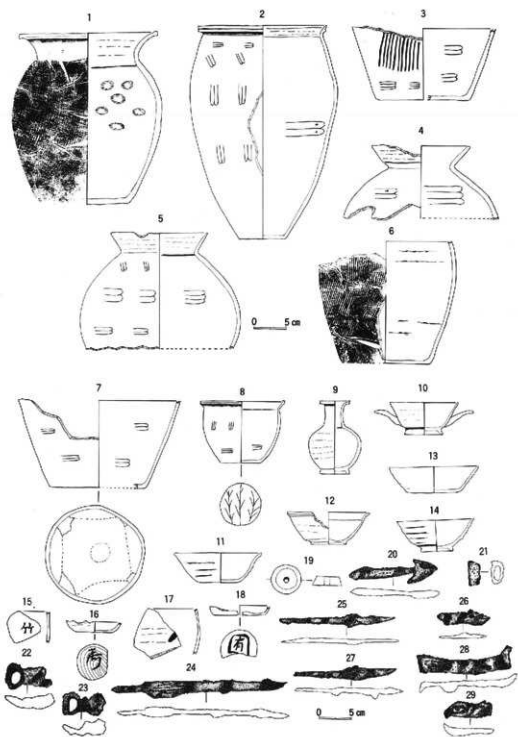
本住居址はSI18に隣接する。その平面形状は北側の長さ4.80m、向かいの南側で4.87m、そして東側4.70m、その向かいの西側で4.80mとなり、ほぼ正方形プランをなす。その軸線を約30°西方へむけて建てられている。

壁高は30cmとなっており、支柱は壁面上部に8柱がもうけられているが、そのP1 (30cm×50cm)、P2 (25cm×45cm)、P3 (25cm×50cm)、P4 (30cm×50cm)、P6 (40cm×50cm)、P7 (30cm×50cm)、P8 (27cm×45cm)となる。東側中央壁に外側に向けて80cm(巾)×50cm(高さ)×90cm(奥行)のカマドが造られている。そして焚口両端に土器片をはりつけていることである。カマド内部の原形は押しつぶされてなくなっている。

本住はその出土遺物から判断して平安時代中、後期に亘るものとおもわれるが、床面からの出土遺物は極めて多い。壺、甕、坏、長頸瓶、墨書土器等、その他特に鉄器類が多く検出されたことである。その主なるものについては下記の通りとなる。



第38図 第17号竪穴住居址平面実測図



第39图 第17号竖穴住居址遺物実測図



番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (須恵)	①21.0 ②26.0 ③ 0.7 ④14.0	口縁部には隆帯をめぐらす。口縁部より胴部はくの字型となり、胴部中央は少々ふくらみを有する。外部は縦帯で整形してある。内部は縦帯の筋を使用する。極めて形の整った壺である。	良好 灰青色	完形
2	壺 (土師)	①20.0 ②23.0 ③ 0.4 ④ 7.2	底部は平底。立ち上がりは少々外反さみになり、胴部上部において少々ふくらみを持ち、内湾して口縁部につながる。口唇部断面はM字型をめぐらす。外面は帯でなである。	良好 砂粒 灰褐色	1/3残
3	壺 (土師)	①20.5 ② 8.7 ③ 0.4	底部より外反して立ち上がり内外共に縦帯で。	良好 砂粒 灰赤色	1/3残
4	壺 (土師)	①15.0 ②11.2 ③ 0.7	口縁部はくの字型で胴部に至り、胴部は外反して大きく開く。外部は横帯で整形する。	良好 砂粒 茶褐色	1/3残
5	壺 (土師)	①15.5 ②18.5 ③ 0.6	口縁部はくの字型をもって胴部に至り、胴部中央において最大径をなす横帯彫り整形。	良好 黒赤色	2/3残
6	壺 (須恵)	①12.5 ②19.0 ③ 0.6 ④13.5	底部は大きなふくらみを持って立ち上がり胴部より内傾して口縁部に至る。輪痕みで縦帯で整形で甲子目模様のなす。	良好 砂粒 灰茶褐色	
7	壺 (須恵)	①24.5 ②13.5 ③ 0.6 ④15.0	胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。口縁部は不明、横帯彫り整形。底部の筋の構造は欠損のため不明。	良好 砂粒 内外共に淡灰色	1/2残
8	壺 (土師)	①12.5 ② 9.6 ③ 0.4 ④ 6.5	口縁部は短いがくの字型になって胴部に至る。胴部はふくらみをもっているが、胴部中央あたりから内反しながら底部に至る。底部は木の葉比旗を有する。砂粒を含むので仕上げは磨削りであるが荒い。	普通 砂粒 茶褐色	完形に近い
9	長頸瓶 (陶質土師)	① 4.8 ②11.4 ③ 02.03 ④ 4.7	高台を付し、内湾しながら立ち上がり胴部附近で最大径のふくらみを作り頸部に至る。頸部は僅かに反りをつけ立ち上がり口縁部に至り直角に外方にせり出し、さらに口唇部は一段と高く、縷取りを施している。全般的にロクロ仕上げ。外壁は薄く灰輪かかる。	①良好 ②白土に灰輪かかる ③灰青色	平安期 狭投
10	高台付杯 (須恵)	10.5×5.0 ×5.8×0.2 ~0.3	径5.0mmの高台を付け、僅かに外反する如く立ち上がり、口唇部に至る。外壁両端に2個の懸架用の腕を付す。内壁面はロクロ仕上げ。高台はつけたし。小型器で祭祀用のもの。	①良好 ②石英微粒子 ③紺色	3/5残
11	杯 (須恵)	13.4×4.4 0.5~0.55 6.5	平底の底部でゆるやかに立ち上がり口縁部は外反する。内外共に横帯で整形されているが、内側は砂粒がまじり、極めて粗雑である。	普通 砂粒あり 内側灰黒色 灰青色	完形
12	高台付杯 (須恵)	① 12.0 ② 5.0 ③ 0.3 5.5	底部は高台付で、底部よりゆるやかに立ち上がり口縁部で外反する。	良好 灰黒色	

13	坏 (須恵)	①14.0 ② 4.0 ③ 0.3 ④ 7.5	底部は平底で底部より直線的に外傾し、立ち上がり口縁部に至る。口縁部は少々外反する。ロクロ仕上げ。	良好 砂粒を含む 灰青色	完形
14	高台付坏 (土師)	①12.0 ② 4.9 ③ 0.4 ④ 6.0	底部は高台を付ける。底部よりの立ち上がりは丸味をもち、口縁部に至り少々外反する。内外共に横割削り整形。	良好 灰茶色 内面黒	2/3残
15	坏底部片 (須恵)		底面の整形は不均一で凹凸面あり。全体的器形不明。	①普通 ②微粒子粘土 ③灰色	墨書土器「竹」
16	坏底部片	9.0×2.0 ×0.3~0.4	底部から僅かに内湾して立ち上がり、外壁面はロクロ整形。底部に糸切り痕に墨書あり。	①青褐色 ②粘土微粒子 ③灰色	墨書土器「秀」
17	坏胴部片 (須恵)	7.5×7.4 ×0.2~0.4	全体的器形は不明であるが、外壁にロクロ使用痕を残す。内面は黒色塗り。	①良好 ②石英粒微密 ③薄い灰色	墨書土器書体の一画残る
18	坏底部片 (須恵)	7.5×2.0 ×0.3~0.4	底部から外反して立ち上がる。外壁は斜右下がりの荒削り、底面は横に荒削り、底部の内側は不均一である。	①普通 ②石英粒微密 ③灰色	墨書土器ていぶ内面に「有」
19	鈴鉢座	① 3.4 ② 1.8 ③ 4.0 ④ 5.7	台形、中央に径0.5cm穿孔を貫通する。		中心部の穴に芯棒とおもわれる竹の炭化物の丸棒0.65×3.2が入っていた。
20	鉢	14.0 3.7×10.3			
21	鉄製器	3.5×2.2			不明
22	馬具	7.0×2.5			骨
23	馬具	6.5×1.5			骨
24	刀子	27.2×1.8 ×1.0			完形
25	刀子	18.0×1.0			完形
26	鎌	7.9×1.7			1/4残
27	刀子	15.8×1.9			
28	鎌	14.8×2.3			
29	鎌	7.3×2.0			

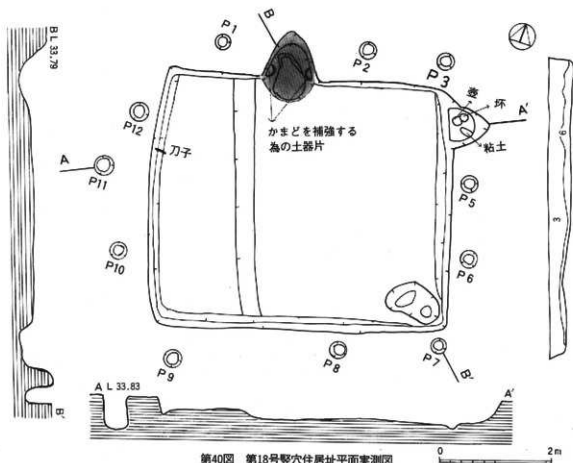
#### 第18号竪穴住居址 (SI18) (第40、41図)

本住居址はエリア西端に位置しSI19の隣に所在する。その平面形状は北側の長さ5.25m、向かいの南側で同じく5.25m、そして東側4.15m、西で4.30mとなり、方形プランをなす。そしてそ

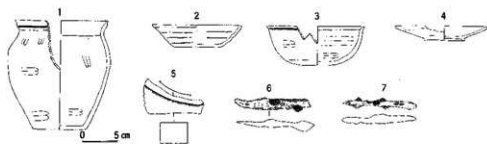
の軸線を約40°西方へむけて造られている。

壁高は50cm～40cmとなり、北側壁は粘土で盤築されていた。支柱は全て壁上の周辺に12柱造られるが、P 1 (30cm×44cm)、P 2 (34cm×53cm)、P 3 (30cm×50cm)、P 4 (ここは後で工作されたピット状のものがあって、その中に粘土塊があったから、貯蔵穴か。そしてその規格は60cm×50cm×30cm)、P 5 (30cm×50cm)、P 6 (30cm×40cm)、P 7 (33cm×50cm)、P 8 (30cm×40cm)、P 9 (30cm×45cm)、P 10 (33cm×50cm)、P 11 (24cm×50cm)、P 12 (36cm×50cm)となる。なお、15cm×10cmの周溝が整然と四周していた。床面は平坦で固いが、その床面西方は巾2mで18cm×20cm高く造られていて2段床になっている。カマドは北壁に外側に突出して造られているが、押しつぶされて原形は不明であった。なお、焚口両側は土器がはりつけてあった。カマド全体の規格は焚口巾1.00m、高さ50cm、奥行90cmかと推定される。なお、北東部床面コーナーにあるピットは貯蔵穴と思われるが、それは70cm×60cm×30cmとなる。

本住からの出土遺物は極めて多く、土師器、須恵器両質の壺、環、高環、高台付環、刀子2等があげられるが、その主なるものについて下記の通りとなる。



第40図 第18号竪穴住居址平面実測図



第41図 第18号竪穴住居址遺物実測図

(C) S I - 18

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

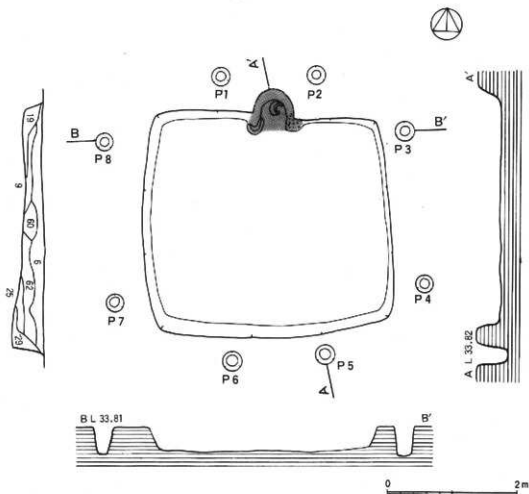
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	13.5×15.3 0.3~0.4 ×8.0	底部から斜め上方に立ち上がり2/3の高さで最大の膨らみ、口縁部に内傾する。口縁部は緩く外方斜め上方に立ち上がる。口唇部は鋭角な三角形となる。技法としては輪積みのこんせきを残しており、作りは少々粗雑である。また外壁面は石英粒子が多い。	①普通 ②石英粒子及び砂質 ③黒褐色を基調とした茶褐色	完形
2	坏 (土師)	13.3×3.2 0.3~0.4 ×6.5	底部から少々内湾ぎみに立ち上がり口縁部に至る。技法としては輪積みの痕跡を残しており、作りは少々粗雑である。内外共に横筋削り整形。	①普通 ②石英粒子及砂質 ③黒褐色を基調として茶褐色	完形
3	坏 (土師)	14.5×3.5 0.4~0.5 ×4.5	稍々丸底で底部からの立ち上がりはゆるやかで、口縁部にいたり口唇部はくの字型を呈する。技法としては輪積み痕跡を残しており、作りは少々粗雑である。横筋などで整形する。	①良好 ②砂粒 ③灰褐色	2/3残
4	坏 (土師)	①13.5 ② 2.0 ③ 0.3 ④ 6.0	底部からの立ち上がりは極めて大きく開いて口縁部に至る。そして底部は高台、横筋使用。	1. 良好 2. 砂粒 3. 灰褐色内部は黒塗り	皿部の口縁部は欠損あり
5	砥石	①10.0 (長さ) ②5.0~2.0 ③4.0~2.0			1/2残 泥岩
6	刀子	①10.0(長) ② 2.0(中) ③ 0.5			
7	刀子	①11.5 ② 1.8 ③ 0.4			

第19号竪穴住居址 (SI19) (第42、43図)

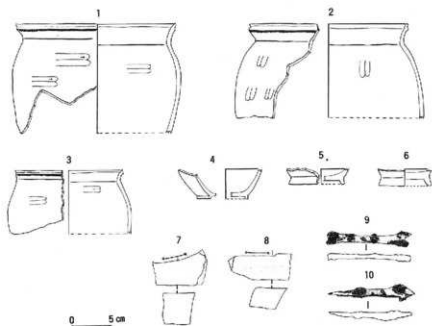
本住居址はエリア北端に位置しSI18に隣接して所在する。その平面形状は北側の長さ3.30m、その向かいの南側で同じく3.50m、そして東側3.00m、西側の長さ3.30mとなり、少々不整形なプランをなす。そして軸線を約20°西方にむけて造られている。

壁高は35cmとなり周溝はつくられていない、支柱は全て壁上に8柱が建てられ、P 1 (25cm×40cm)、P 2 (30cm×45cm)、P 3 (30cm×45cm)、P 4 (30cm×40cm)、P 5 (30cm×54cm)、P 6 (30cm×53cm)、P 7 (30cm×40cm)、P 8 (30cm×40cm) となる。カマドは北壁中央に外側に向かって造られ、その原形をとどめてはいないが、おおよそ60cm (巾)×30 (高さ) cm×50cm (奥行) となっており、焚口両袖に土器を貼り付けている。なお、床面は固く平坦である。

本住も平安中、後期に位置付けられるが、検出遺物も極めて多かった。その主なるものをあげると、土師、須恵器の壺、坏、高台椀、磁石、刀子等となるが、それは下記にあげておいた。



第42図 第19号竪穴住居址平面実測図



第43図 第19号竪穴住居址遺物実測図

(C) SI-19

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色面	備考
1	甕口縁部 (土師)	①20.7 ②14.0 ③ 0.4	口唇部はM字型の突帯を巻き、口縁部よりくの字型をなして胴部に至る。胴部のふくらみは極めて小さい。横篔で整形するが砂粒を含むため粗雑である。	普通 砂粒 茶褐色	1/2残
2	甕口縁部片 (土師)	①21.0 ② 5.0(現) ③ 0.4	口唇部はM字型の突帯をめぐらす。そして口縁部よりくの字型をなして胴部に至る。胴部はふくらみをもって底部に入る。内外共に縦篔削りの整形。	良好 褐色	1/3残
3	甕 (土師)	①14.0 ②10.0(現) ③ 0.3	口唇部はM字型の突帯を巻き、くの字型で胴部に至り、胴部のふくらみは極めて小さい。横篔削りであるが砂粒を含むため整形は荒い。	良好 灰茶色	1/4残
4	高台付坏片 (須恵)	①不 ② 3.8 ③ 0.4 ④ 2.8	底部と胴部の1部が残。底部は高台をめぐらす。底部よりの立ち上がりはゆるやかに開く。内部は灰細をほどこす。外部の整形。		1/5残
5	高台付坏片 (須恵)	① 2.3 ② 0.5 ③ 2.8	底部は高台をめぐらす。胴部の立ち上がりはゆるやか。横篔削り整形。	①良好 灰白色	
6	高台付坏片底部 (須恵)	② 1.0 (高台) ③ 0.4 ④ 6.8	底部は高台、高台の立ち上がりは内湾ぎみ。縦削り整形。	良好 灰白色	底部

7	藍石	① 7.0 ② 3.0 ③ 5.0			砂岩
8	紙石	① 9.0 ② 4.0 ③ 4.0			砂岩
9	鉄礫	①10.0 ② 1.0 ③ 0.8			1/4鉄 (鑛欠)
10	銅	①10.0 ② 1.5 ③ 1.8			完形な れど腐 蝕

## (2) 掘立柱建物遺構

### 第1号掘立柱建物遺構 (SB01) (第44、45図)

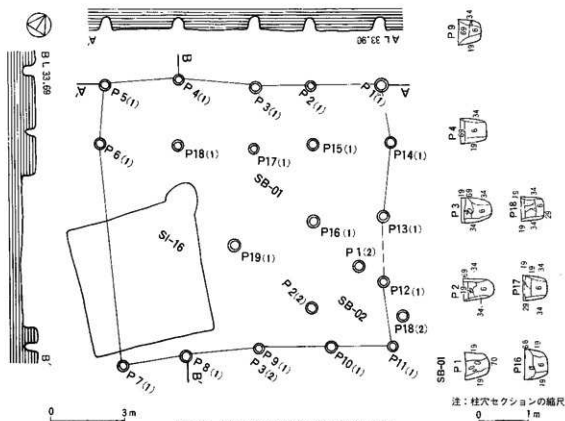
本建物は本エリアの中央部に位置しSB12・SB18と重複する。その平面形状は北側の長さ7.80m、南で11.40m、そして東側の長さ11.00m、西側でも11.00mとなり、不整形方形プランをなす。そしてその軸線を約30°西方向に向けて建てられている。

ピットの規格 (SB01) (長径×短径×深さ) cm

P 1 55×50×50	P 2 55×60×58	P 3 50×60×60	P 4 50×46×50	P 5 45×50×45
P 6 50×45×45	P 7 50×50×47	P 8 55×50×47	P 9 50×45×45	P10 58×50×52
P11 60×50×51	P12 50×50×52	P13 50×43×52	P14 55×50×45	P15 60×40×42
P16 50×50×42	P17 50×40×50	P18 55×50×45	P19 55×50×46	P20

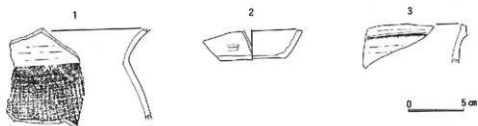
床面は平坦で固い。床面上には土師器片、礫石等が散乱しているのみで、カマド、貯蔵穴等の施設らしきものは認められなかった。

出土遺物は平安時代中、後期の土師器片の甕、坏、須恵器の甕、坏等で、完形品はなかった。



第44図 第1号掘立柱建物遺構平面実測図





第45図 第1号掘立柱建物遺構遺物実測図

(C) SB-01

(法量 1.口縁径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺片 (須恵器)	③ 0.6	口縁部はくの字型になって外反し、胴部は大きくふくらみを有する。胴部には輪積みの痕跡を有し、口縁部は横窪、胴部は縦窪整形。	良好 砂粒 灰青色	口縁部と胴部残片
2	坏 (土師器)	② 2.7 ③ 0.4 ④ 6.0	底部は平底、底部よりの立ち上がりは大きく外反して口縁部に至る。輪積みのあと有り。笠削り整形。	良好 灰白色	1/2残
3	壺片 (土師器)	③ 0.5	口唇部上部はM字型をし、隆帯を巻いている。笠削り整形。	良好 灰白色	口縁部の一部残片

### 第2号掘立柱建物遺構 (SB02) 第46図

本建物は本エリアの北東部に位置しSB03・SB04と重複する。その平面形状は北側の長さ17.70m、南側で12.80m、そして東側の長さ12.80m、西の長さ10.70mとなり、不整形な方形プランをなす。そしてその軸線を約40°西方に向けて建てられている。なお、本建物にSI-15が掘り込まれている。また支柱も大体等間隔に造られており、その径も60cm、深さも30cm～40cmぐらいになっていた。

ピットの規格 (SB-02) (長径×短径×深さ) cm

P 1 50×55×48	P 2 53×50×55	P 3 50×50×48	P 4 50×50×50	P 5 50×50×50
P 6 50×50×50	P 7 50×35×40	P 8 50×40×43	P 9 60×50×46	P10 60×60×46
P11 50×36×46	P12 60×45×44	P13 50×36×43	P14 60×45×48	P15 50×40×48
P16 50×40×47	P17 60×50×52	P18 50×50×55	P19 50×50×50	P20 70×60×54
P21 50×55×60	P22 50×50×50	P23 70×50×52	P24 60×50×53	P25 50×50×50
P26 50×50×52	P27 55×50×50	P28 60×50×48	P29	P29

床面は平坦で極めて固いが、そこには床板の類はなくて直接土間が使用されていたものである

う。カマド、貯蔵穴等は認められないことから、倉庫等に使用されたものではあるまいか。

床面からの検出土器片で平安中期の建造物とみとめられるが、それらは全て破片なので記載すべきものはなかった。

### 第3号掘立柱建物遺構（SB03）（第46、47図）

本建物はSB02・SB04と重複する。その平面形状は北の長さ7.40m、南で6.85m、そして東の長さ11.80m、西で10.15mとなり、少々不整形建造物で掘立柱建物としては中型の部類に属するものと思われる。そしてその軸線を約40°西方に向けて建てられている。

主柱の間隔も整っており、その径も60cm～50cm、深さ50cm～40cmとなってその規格も大きい。

ピットの規格（SB 03）（長径×短径×深さ）cm

P 1 70×50×55	P 2 60×50×52	P 3 50×50×50	P 4 50×50×50	P 5 50×45×50
P 6 50×45×50	P 7 55×50×56	P 8 60×50×52	P 9 45×50×46	P 10 57×40×50
P 11 60×40×45	P 12 60×50×53	P 13 50×50×52	P 14 50×50×50	P 15 50×50×46
P 16 55×50×50	P 17 70×30×52	P 18 54×45×50	P 19 70×30×32	P 20 50×50×54

床面は平坦で軟らかい。それらは重複しているので床面の性格を全て把握することは困難であった。床面には極めて僅かの焼土と灰が検出されたところを見ると、煮焚等のことが行われたものか。床面に検出される土器片も何れの建造物に属するものかは判明しないが、それらは全て平安中後期の所産と認められた。

### 第4号掘立柱建物遺構（SB04）（第46、48図）

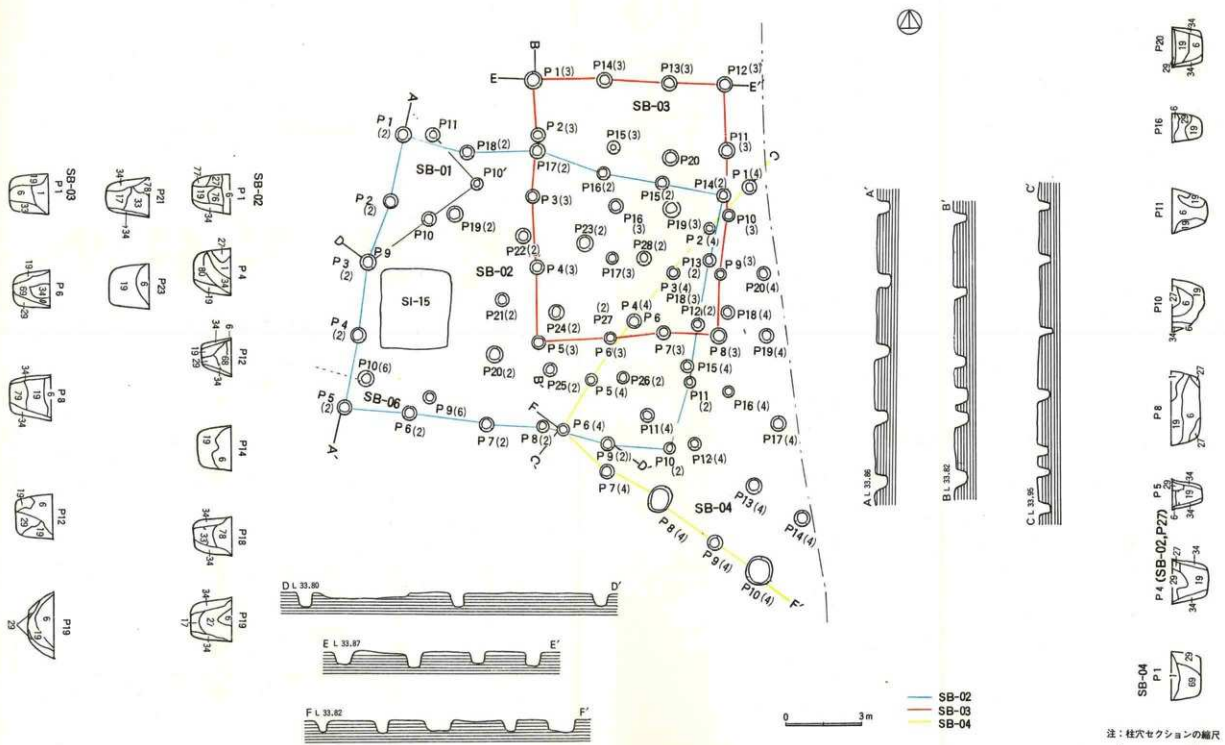
本建物はエリア東北側にあつてSB03と重複している。したがって東側は境界になっているため計測不明となる。しかしながらその遺構の3分2はこのこされているが、その平面形状をみると南側で9.5m、東側の長さ12.00m、となり（北と東側は不明）、方形プランをなしているものと認められる。そしてその軸線を約60°西方に向けて建てられている。なお、本建物の東南隅に120cm×90cm×45cmのSK02が造られている。

主柱は大体等間隔で建てられ、その径も平均50cm、深さ40cmぐらいとなっている。出土遺物も極めて少なく、それらは破片が多く平安中後期の土師器片と須恵器片が多かった。なお、本建物のコーナーより須恵器の大甍片が検出された。

ピットの規格（SB-04）（長径×短径×深さ）cm

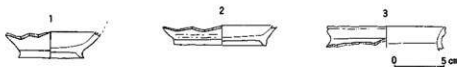
P 1 56×40×48	P 2 50×43×43	P 3 56×46×50	P 4 57×50×50	P 5 45×37×46
P 6 50×37×40	P 7 60×45×46	P 8 95×45×40	P 9 60×50×45	P 10 SB02と重複 (120×45×45)
P 11 40×30×50	P 12 50×50×50	P 13 50×50×47	P 14 60×45×48	P 15 50×40×48
P 16 40×30×40	P 17 60×45×56	P 18 50×45×48	P 19 60×50×46	P 20 50×40×45
P 21	P 22	P 23	P 24	P 25



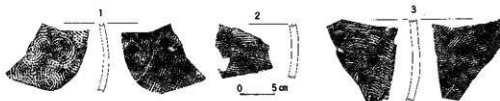


第46図 第2・3・4号独立柱建物遺構平面実測図

注：柱穴セクションの縮尺  
0 1m



第47図 第3号掘立柱建物遺構遺物実測図



第48図 第4号掘立柱建物遺構遺物実測図

(C) SB-03 (法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付椀 (土師器)	③ 0.7	底部は高台をなし、胴部よりの立ち上がりは大きく外反。横篋削り整形。内部は黒色。	良好 赤褐色	底部残片
		④ 7.0			
2	高台付椀 (須恵器)	③ 0.5	底部は高台、底部よりの立ち上がりは大きく外反。輪稜痕あり。篋削り整形。	良好 青白色	底部残片
		④ 6.0(現)			
3	甃片 (土師器)		口脣部はM字型の隆帯を巻きつける。く字型で胴部に入る。横篋削り整形。	良好 褐色	口縁部の残片

(C) SB-04 (法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甃片 (須恵器)	③ 1.0	胴部残片で、外面全体に(平行叩き目)を、裏面は(渦巻文の叩き)を全体にほどこす。	良好 砂粒 青白色	胴部残片
2	甃片 (須恵器)	② 1.2	胴部残片。器外面は全体に斜条線をほどこす。器内面は横篋削り整形。	良好 砂粒 青白色	胴部残片
3	甃片 (須恵器)	③ 1.3	胴部残片。器外面は(斜条線)、内面は渦巻叩文様で緊める。	良好 青白色	胴部残片

### 第5号掘立柱建物遺構 (SB05) (第49、50図)

本建物はエリアの北側よりに位置しSB06・SB07と重複する。その平面形状をみると、北側の長さ7.60m、南側で7.70m、そして東側の長さ7.70m、西側で7.60mの少々正方形プランをなす。そしてその軸線を約30°西方に向けて建てられている。

主柱は全て17柱が確認されたが、柱間の間尺も少々整っており、その柱の径も70cm～60cmと太い。

ピットの規格 (SB-05) (長径×短径×深さ) cm

P 1 60×30×50	P 2 60×60×43	P 3 60×60×40	P 4 60×56×47	P 5 60×60×46
P 6 56×60×47	P 7 60×60×43	P 8 60×60×38	P 9 58×56×42	P 10 60×60×44
P 11 60×60×45	P 12 60×60×47	P 13 70×60×43	P 14 60×60×50	P 15 70×60×45
P 16 60×60×40	P 17	P 18	P 19	P 20

床面は平坦で固いことから、本建物も床板等はなく土間を使用していたものと思われる。倉庫か作業施設として使用していたものか。

検出遺物は極めて少なく、僅かに須恵器の壘片を見たのみである。

### 第6号掘立柱建物遺構 (SB06) (第49、51図)

本建物はSB07と重複する。その平面形状をみると、北側の長さ5.50m、南で5.20m、そして東の長さ7.10m、西で7.40mの方形プランをなし、小規模柱の部類に属する。そして軸線を約40°西方に向けて建てられている。床面にSK01が造られている。

主柱は全て11柱が認められたが、柱間の間尺については少々不統一であった。なお、主柱は径50cm、深さは40cmぐらいとなる。

ピットの規格 (SB-06) (長径×短径×深さ) cm

P 1 55×48×49	P 2 70×40×48	P 3 55×40×41	P 4 40×48×48	P 5 50×46×43
P 6 53×50×47	P 7 55×50×40	P 8 50×50×47	P 9 60×46×48	P 10 50×50×51
P 11 50×52×45	P 12	P 13	P 14	P 15

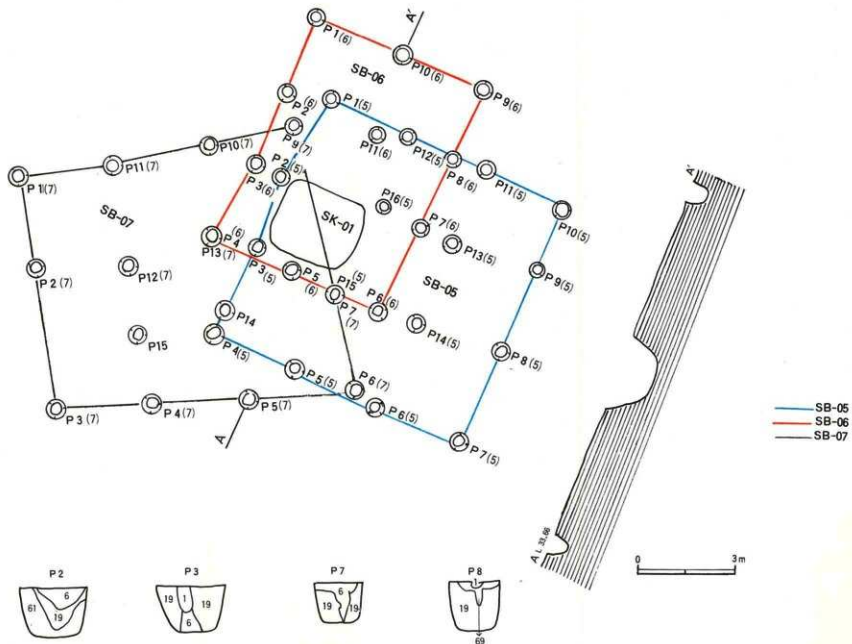
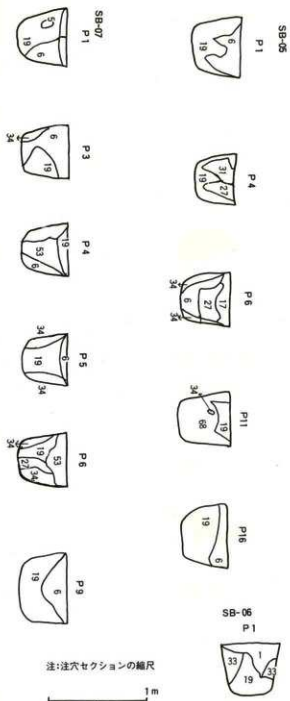
床面は平坦で極めて軟らかいことから床板等の施設があったものと考えられる。事務所等の施設に使われたものであるまいか。

検出遺物は極めて少なく、土師器、須恵器片等がみられた。

### 第7号掘立柱建物遺構 (SB07) (第52、59図)

本建物はSB06と重複する。その平面形状をみると、北側の長さ8.40m、その南で9.00m、そして東側の長さ8.00m、西で7.00mの方形プランをなす。そしてその軸線を約20°東方に向けて建てられている。なお、東側にSK01が掘り込まれている。

主柱は全部で15柱となるが、その柱間の間尺は少々不同がある。主柱の径については約60cm～50



第49図 第5・6・7号掘立柱建物遺構平面実測図

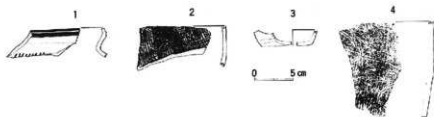
cm、深さは40cm程度となる。

ピットの規格 (SB-07) (長径×短径×深さ) cm

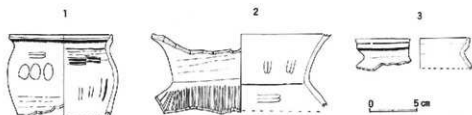
P 1 58×30×48	P 2 47×53×47	P 3 52×30×50	P 4 52×40×50	P 5 52×37×45
P 6 55×40×46	P 7 58×35×45	P 8 SK01に重複	P 9 55×70×51	P10 60×55×46
P11 60×40×55	P12 55×39×48	P13 55×40×48	P14 53×39×45	P10 73×62×47

床面は重複のため明確にとらえることは出来ないが、大体において極めて固い。床面コーナーに僅かの焼土と灰等が散乱したところによると煮焚等の設備もなされていたものか。

出土遺物は極めて少なく、僅かに土師器坏の底部が認められた。

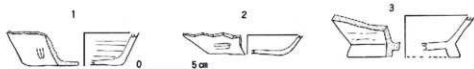


第50図 第5号掘立柱建物遺構遺物実測図



第51図 第6号掘立柱建物遺構遺物実測図





第52図 第7号掘立柱建物遺構遺物実測図

(C) SB-05

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	葉片 (須恵器)	③ 0.7	口唇部はM字型の隆帯をまきつける。胴部はくの字型になって胴部に至り、胴部は大きなふくらみをもつ。口縁部は横位に条線を数条めぐらし、胴部は斜条線を器面全体に入れる。	良好 青白色	口縁部 残片
2	葉片 (須恵器)	③ 0.5	輪襷痕あり、器外面は斜位に平行叩き目となる。	良好 灰白色	胴部残片
3	坏片 (須恵器)	③ 0.4	底部平底。底部よりの立ち上がりは大きく外反。寛削り整形。	良好 灰白色	底部、 胴部の 一部残
4	葉片土師器	③ 0.5	胴部残片。上部は横位の斜条線。下部は縦位の条線。輪襷痕あり。寛削り整形。	良好 灰褐色	胴部残片

(C) SB-06

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	葉 (土師器)	①12.0 ② 7.0(現) ③ 0.5	口唇部はM字型の隆帯を巻き、くの字型に胴部に至る。胴部は稍々大きくふくらむ。内外共に寛削りで整形。	良好 砂粒 褐色	1/3残
2	葉片 (須恵器)	③ 0.6	口縁部はくの字型で胴部に至る。胴部は大きくふくらむ。器面外部には縦の条線を全面に入れる。	良好 砂粒 灰白色	口縁部 の一部 と胴部 の一部
3	葉片 (土師器)	③ 0.4	口縁部はくの字型で胴部に至る。胴部は大きくふくらむ。寛削り整形。	良好 砂粒 茶褐色	口縁部 残

(C) SB-07

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏片 (土師器)	③ 0.7	底部平底。立ち上がりは稍々ゆるやかに外反しながら口縁部に至る。輪襷方式で外面寛削り整形。	良好 砂粒 灰褐色	底部、 胴部の 一部
2	坏片 (土師器)		底部は平底。立ち上がりは大きく外反して口縁部で開く。輪襷痕を有し外面は横寛削り整形。	良好 灰褐色	底部、 胴部の 一部
3	高台付碗 (須恵器)		高台は厚い、立ち上がりは大きく外反。刷毛などで整形。	良好 灰白色	底部、 胴部片

### 第9号掘立柱建物遺構 (SB09) (第53、54図)

本建物は本エリアのほぼ中央部に位置しSB16と重複する。その平面形状は北側の長さ16.70m、向かいの南で16.80m、そして東側の長さ13.70m、西で14.40mの方形プランをなす。そしてその軸線を約30°西方に向けて建てられている。

主柱は全部で48柱を有する大型住である。各柱間の間尺はほぼ整っており、主柱の径60cmが大部分を占め70cmのものもあるが、その規格は建物の大きな割合に比べればそう大型ピットとは思われない。

ピットの規格 (SB-09) (長径×短径×深さ) cm

P 1 60×40×42	P 2 65×35×45	P 3 70×30×46	P 4 70×37×46	P 5 70×40×42
P 6 70×50×44	P 7 65×40×47	P 8 60×45×45	P 9 60×40×40	P 10 60×35×40
P 11 56×37×43	P 12 60×40×41	P 13 60×60×47	P 14 65×40×50	P 15 70×45×51
P 16 65×70×52	P 17 65×40×53	P 18 60×40×45	P 19 60×40×45	P 20 60×33×48
P 21 60×40×45	P 22 65×30×46	P 23 60×40×43	P 24 60×40×50	P 25 66×36×45
P 26 63×37×50	P 27 66×46×46	P 28 70×40×44	P 29 66×47×40	P 30 66×40×50
P 31 60×40×46	P 32 55×60×50	P 33 60×40×48	P 34 60×27×45	P 35 70×60×43
P 36 60×40×50	P 37 60×33×45	P 38 60×38×44	P 39 65×40×43	P 40 70×70×50
P 41 60×70×50	P 42 60×70×36	P 43 63×67×55	P 44 60×44×43	P 45 67×38×46
P 46 75×70×50	P 47 65×75×55	P 48 不明		

本建物はピット数47を数え、北側長16.70m、西14.40mを計る大規模建造物である。床面は重複があるので明確には判断しにくい、その一部が軟らかく大部分が固いことなどからみて床板を一部分張り付け、その他の床面は土間になっており、倉庫か工房等に使用されていたものか。なお床面には摺石、敲石等の製品や原石が数多く散乱していたが、焼土等の炭化物は検出されなかった。

床面からの出土遺物は極めて少なく、須恵器片、土師器片等が認められたが、それ等は全て平安期のものと推定された。

### 第16号掘立柱建物遺構 (SB016) (第53、55図)

本建物はエリアの中央部に位置しSB09と重複する。その平面形状は北側の長さ18.20m、向かいの南側で18.10m、そして東側の長さ15.90m、西で15.70mの方形プランをなす。なおその軸線は約35°西方に向けて建てられている。

本建物も大型の建造物で、主柱55を数えられた。各柱間の間尺も割合整っており、その径も平均60cm～70cmのものが大部分である。

ピットの規格 (SB-16) (長径×短径×深さ) cm

P 1 76×96×50	P 2 50×60×50	P 3 60×35×46	P 4 63×40×45	P 5 64×49×48
P 6 55×50×46	P 7 90×77×50	P 8 55×47×46	P 9 54×64×42	P 10 54×60×50
P 11 65×55×44	P 12 70×56×43	P 13 53×30×42	P 14 57×40×40	P 15 67×60×46
P 16 54×50×38	P 17 55×38×40	P 18 65×60×44	P 19 67×40×52	P 20 66×60×46
P 21 68×38×50	P 22 58×38×60	P 23 65×45×42	P 24 63×40×45	P 25 65×40×50
P 26 65×40×48	P 27 63×35×55	P 28 55×40×46	P 29 66×38×52	P 30 66×56×50
P 31 60×33×48	P 32 63×40×50	P 33 66×34×48	P 34 62×40×53	P 35 57×54×52
P 36 63×72×52	P 37 65×60×53	P 38 80×65×48	P 39 76×67×50	P 40 60×34×45
P 41 70×40×36	P 42 70×50×40	P 43 65×60×46	P 44 75×64×36	P 45 65×37×50
P 46 75×43×50	P 47 64×40×43	P 48 65×50×40	P 49 63×55×42	P 50 52×60×46
P 51 63×46×43	P 52 54×40×46	P 53 64×40×52	P 54 57×35×50	P 55 62×35×47

床面は平坦で一般に同いが重複があるのでそれを明確に把握することはできなかった。約300㎡に亘る本建物もやはり倉庫か工房等に使用されたものではなからうか。床面には何等工作の跡も見受けられず、検出遺物も土器片と摺石、敲石等の製品、原石等以外には認められなかった。

なお、本建物は床面の土器片からみて平安期のものではないかと推定される。

#### 第17号掘立柱建物遺構 (SB 017) (第53、56図)

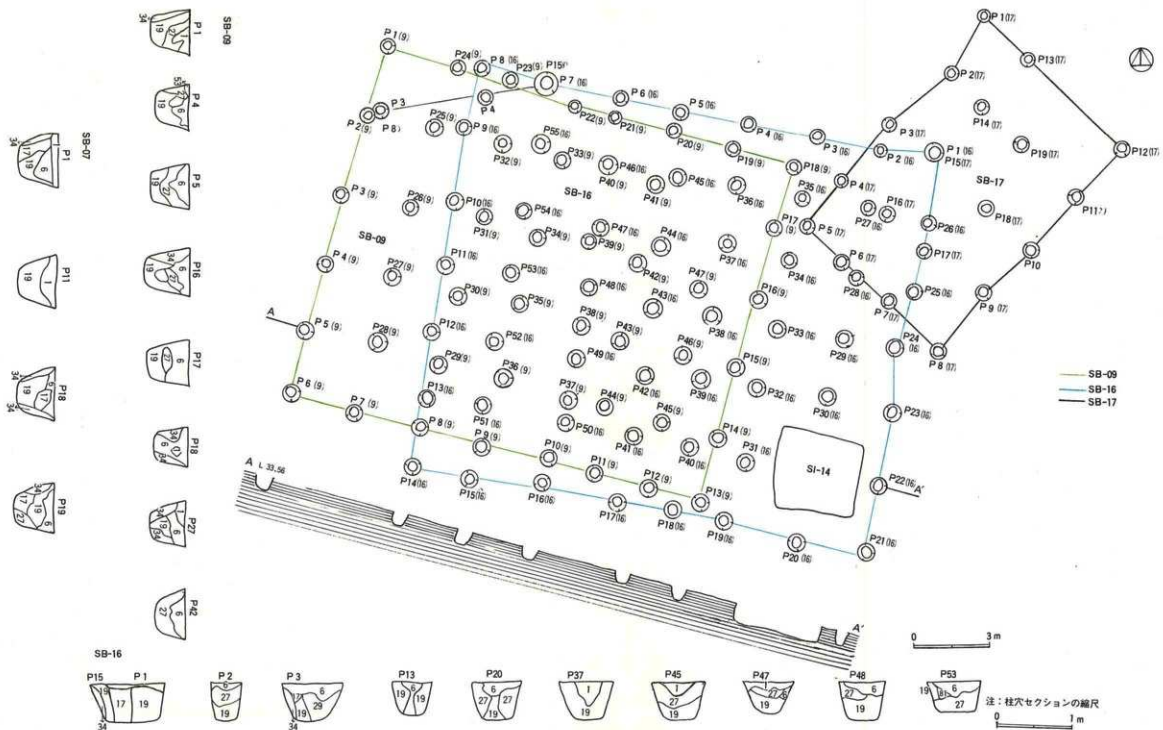
本建物はエリアのほぼ中央部当たり、SB09と重複する。その平面形状は北側の長さ7.45m、向かいの南で6.90m、そして東側の長さ10.80m、西側も同じ10.80mとなり、方形プランをなす。そして軸線を約45°西方向に向けて建てられている。

主柱は全て19柱で№12と№13の間では判明しなかった。各主柱間の間尺も割合によく整っており、その径も平均60cmとなっている。

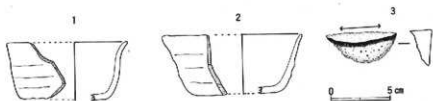
ピットの規格 (SB-17) (長径×短径×深さ) cm

P 1 63×28×55	P 2 56×30×48	P 3 56×30×52	P 4 53×46×47	P 5 65×53×50
P 6 67×36×58	P 7 65×33×52	P 8 65×50×50	P 9 62×50×46	P 10 61×52×50
P 11 60×55×53	P 12 63×52×50	P 13 60×50×50	P 14 65×60×56	P 15 77×90×50
P 16 60×55×53	P 17 58×57×52	P 18 60×50×52	P 19 65×52×54	P 20

床面は平坦であるが軟らかい。本柱は約80㎡程度の小建造物で床板が張られ事務室等に使用されたものであるまいか。遺物等の出土も極めて少なく僅かに高台付の土器片の底部を認めるのみであった。



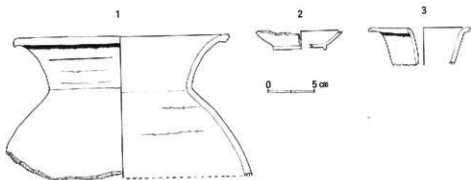
第53図 第9・16・17号掘立柱建物遺構平面実測図



第54图 第9号掘立柱建物遺構遺物実測図



第55图 第16号掘立柱建物遺構遺物実測図



第56图 第17号掘立柱建物遺構遺物実測図

(C) SB-09

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏片 (土師器)	② 4.5 ③ 0.4 ④ 5.1(現)	底部は平底、底部よりの立ち上がり大きく外反するが丸味はない。輪積方式、寛削り整形。	良好 灰白色	1/4残
2	坏片 (土師器)	② 4.5 ③ 0.4 ④ 2.3(現)	底部は丸底、立ち上がりは外反し丸味をもって口縁部で開く。輪積方式で寛削り整形。	良好 灰褐色	1/5残
3	断片	① 6.2 ② 3.5 ③ 1.5			残片 砂岩

(C) SB-16

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師器)	② 4.5 0.4	底部は平底、胴部は稍々ふくらみをもって立ち上がる。輪積痕を残し、寛削り整形。	良好 灰白色	2/3残
2	坏 (土師器)	② 4.2 ③ 0.4	底部は平底。立ち上がりはあまりゆるやかではない。内外共に輪積みの痕跡を残す。	良好 白色に少々赤味を持つ。	1/4残
3	坏 (土師器)	③ 0.5	底部は平底。立ち上がりは丸味を帯びながら大きく外反する。輪積痕を残し、横寛削り整形。	良好 灰白色	1/5残
4	残片 (土師器)	③ 0.7	口縁部にはM字型の隆帯をめぐらす。横寛削り整形。	良好灰白色	口縁部 残

(C) SB-17

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕(陶質土器)	① 23.5 ② 14.0(現) ③ 0.7	口縁部より胴部はくの字型となり、胴部は大きく膨らみ胴部中央で最大径をなす。輪積痕を有し寛削り整形。灰黒色の釉が内外共にかけられる。	良好 灰黒色	1/2残 口縁部 と胴部 の一部
2	高台付坏 (土師器)	③ 0.5 ④ 6.1	底部は高台付、立ち上がりは外反、横削り整形。	良好 赤褐色	底部残 片
3	坏 (土師器)	③ 0.6	胴部はゆるやかに立ち上がり、口縁部が口唇部は外反する。横削り整形。	良好 褐色	胴部残 片

### 第8号掘立柱建物遺構 (SB08) (第57図)

本柱はエリア中央部の少々東に寄った位置に建てられ、SB10、SB11、SB12、SB18と重複している。その平面形状は北側の長さは7.40m、南で6.70m、そして東側の長さ7.20m、西で7.7mとなり方形プランをなす。そして軸線を約35°東へ向けて建てられる。

主柱は全て12柱となるがP4、P11は認められない。本建物も小規模柱であるが、各主柱間の間尺も整い、そしてその径は平均60cmとなる。

ピットの規格 (SB) (長径×短径×深さ) cm

P1 60×40×48	P2 50×27×47	P3 70×45×50	P4 なし	P5 60×40×50
P6 90×85×52	P7 70×50×48	P8 55×35×48	P9 50×35×47	P10 55×40×48
P11 なし	P12 60×40×45	P13	P14	P15

### 第10号掘立柱建物遺構 (SB10) (第57図)

本建物はエリア中央部の東方よりに所在し、SB08、SB11、SB12と重複する。その平面形状は北側の長さ5.00m、南で4.50m、そしてその東側の長さ5.80m、西で6.30mの少々不整形プランをなす。その軸線は約西方に向けて建てられている。

主柱は12が認められるが、建物としては小規模柱である。各主柱間の間尺も整っており、柱の径も平均60cmと規格が大きい。

ピットの規格 (SB-10) (長径×短径×深さ)

P1 50×35×43	P2 60×40×40	P3 50×60×45	P4 60×40×38	P5 60×45×46
P6 55×30×46	P7 60×40×45	P8 60×45×48	P9 60×45×45	P10 50×30×48
P11 50×60×40	P12 50×60×46			

床面は軟く平坦となる。しかし他の建物と重複して建てられていたから、検出遺物も何れかの建物に属するものか判断しない。床面から僅かながら土師器片と須恵器片とが認められた。

### 第11号掘立柱建物遺構 (SB11) (第57図)

本建物はSB08、SB10、SB12と重複する。その平面形状は北側の長さ6.70m、南で7.00m、東側の長さ7.50m、その西の長さは7.40mとなり、方形プランをなす。その軸線は約35°西方に向けて建てられている。

主柱は全て16柱が認められたが、主柱間の間尺も割合に整っており、柱の径も平均60cmと大きい規模である。

ピットの規格 (SB-11) (長径×短径×深さ)

P1 60×35×45	P2 67×40×40	P3 60×36×40	P4 64×46×55	P5 66×46×46
----------------	----------------	----------------	----------------	----------------

P 6 60×40×45	P 7 55×38×48	P 8 70×60×32	P 9 50×40×44	P 10 60×37×50
P 11 70×42×48	P 12 63×38×40	P 13 70×40×43	P 14 60×36×40	P 15 64×35×40
P 16 60×45×48				

床面は一部は固いが軟い部分もある。しかしこの建物も重複しているから明確には理解されない。検出遺物は土師器片、摺石が少量認められた。本住も平安中後期の頃に位置付けられようか。

#### 第12号掘立柱建物遺構 (SB12) (第57図)

本建物はSB08、SB10、SB11と重複する。その平面形状は北側の長さ5.50m、向かいの南で5.00m、そして東側で8.00m、向かいの西側でも同じ8.00mとなり、方形プランをなす。そしてその軸線はほぼ30°東方に向けて建てられている。

主柱は全て12柱が認められるが、各主柱間の間尺も割合に整っており、ピットの径も平均60cmとなり揃っている。

ピットの規格 (SB-12) (長径×短径×深さ)

P 1 60×35×43	P 2 60×35×55	P 3 60×40×44	P 4 60×35×40	P 5 60×36×43
P 6 50×35×42	P 7 60×50×42	P 8 60×35×48	P 9 60×30×32	P 10 50×60×48
P 11 60×35×46	P 12 60×30×45			

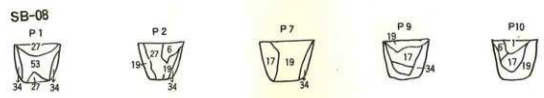
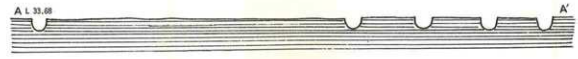
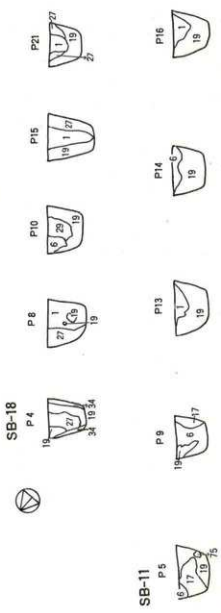
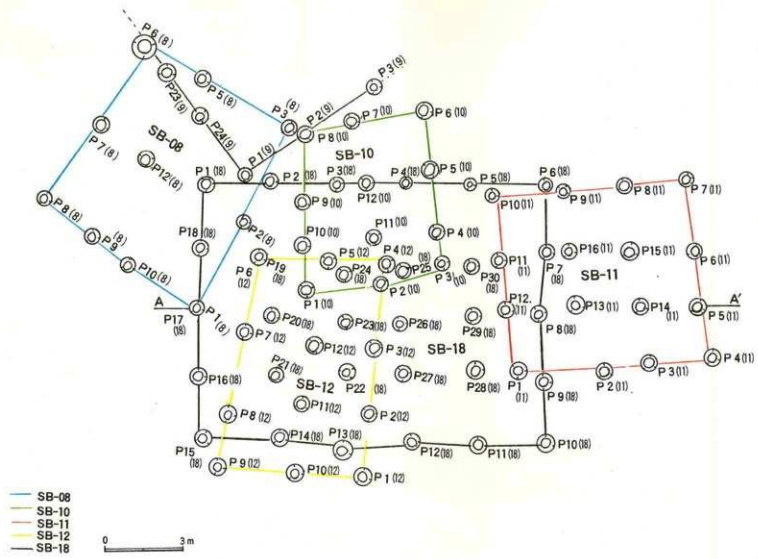
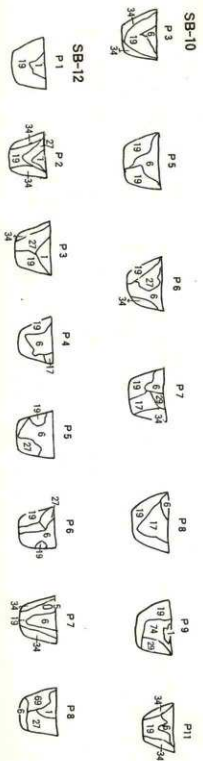
床面は軟らかく少々凹凸が認められるが、建物が重複しているので明確な状況は把握出来なかった。床面には何等工作のあとも認められず、焼土、灰等の一片も認められなかった。検出遺物も極めて少量で、土師器片、燧石片や須恵器片、摺石、敲石等が見受けられた。

#### 第18号掘立柱建物遺構 (SB18) (第57図)

本建物はSB08、SB10、SB11、SB12と重複して建てられる。その平面形状は北側の長さ13.25m、向かいの南側で同じ13.25m、そして東は9.08m、西で同じく9.08mの方形プランをなす。そしてその軸線は約45°東方に向けて建てられている。

主柱は全部で30柱検出をみたが、各ピット間の間尺も適切であり、ピットの規格も平均70cm×45cmと大型であった。





注：柱穴セクションの縮尺  
0 1m

第57図 第8・10・11・12・18号独立柱建物遺構平面実測図

ピットの規格 (SB 18) (長径×短径×深さ)

P 1 70×70×42	P 2 60×60×38	P 3 60×60×40	P 4 50×50×30	P 5 50×50×35
P 6 70×65×40	P 7 70×70×46	P 8 70×70×48	P 9 65×70×45	P 10 70×60×43
P 11 70×70×45	P 12 80×80×50	P 13 80×60×43	P 14 70×70×44	P 15 70×70×56
P 16 60×60×46	P 17 60×60×48	P 18 70×70×46	P 19 70×70×42	P 20 65×70×40
P 21 65×50×42	P 22 60×60×50	P 23 60×60×50	P 24 60×60×48	P 25 60×65×45
P 26 60×60×46	P 27 70×70×48	P 28 60×60×47	P 29 60×70×48	P 30 60×60×43

床面は平坦で軟らかく、カマド、貯蔵穴その他の施設は認められなかった。遺物は少量の土器片が認められたが、建物が重複しているので、どの建造物に属するものか明確に把握することは出来なかった。しかしながら、それらは何れも、平安時代中、後期における土器片と見受けられた。

なお、この掘立柱建物の床面に生活様式を語る遺物等が全然なかったわけではない。これらは竪穴住居址と違ってその保管に問題があったものと思われる。とにかく床面が全て地上にある様式であったことから、一度施屋になると風化作用等によって遺物等は忽ちのうちに四散するのである。そのことは竪穴住居址の場合とはその様相が異なるのである。なお、このことは筆者が経験した全ての遺跡に共通することであった。

### 第13号掘立柱建物遺構 (SB13) (第58、59図)

本建物は本エリア東南部に位置しSB14と重複する。その平面形状は北側の長さ9.35m、南で9.90m、そして東側の長さ10.22m、西で10.26mとなり、方形プランをなす。その軸線を約15°東方に向けて建てられている。

主柱は全て25柱が認められるが、各主柱間の間尺も割合に整っており、柱の径は平均60cmとなり規格のよい建物であった。

ピットの規格 (SB-13) (長径×短径×深さ)

P 1 72×44×50	P 2 74×40×50	P 3 64×40×52	P 4 64×40×48	P 5 65×34×52
P 6 68×42×55	P 7 60×35×50	P 8 67×43×52	P 9 64×40×50	P 10 65×36×53
P 11 67×40×48	P 12 60×40×48	P 13 45×45×45	P 14 60×38×48	P 15 66×37×50
P 16 70×48×46	P 17 70×40×52	P 18 75×43×55	P 19 70×38×50	P 20 65×43×48
P 21 65×40×47	P 22 62×40×48	P 23 70×43×55	P 24 62×37×48	P 25 63×33×46

床面は平坦で固い。本建物もSB13と重複しているので出土遺物も何れの建物に属するものかわからないが、土師製片、坏片、石器類等が認められた。その他床面からは何等の資料を得ることは出来なかった。

### 第14号掘立柱建物遺構 (SB14) (第58図)

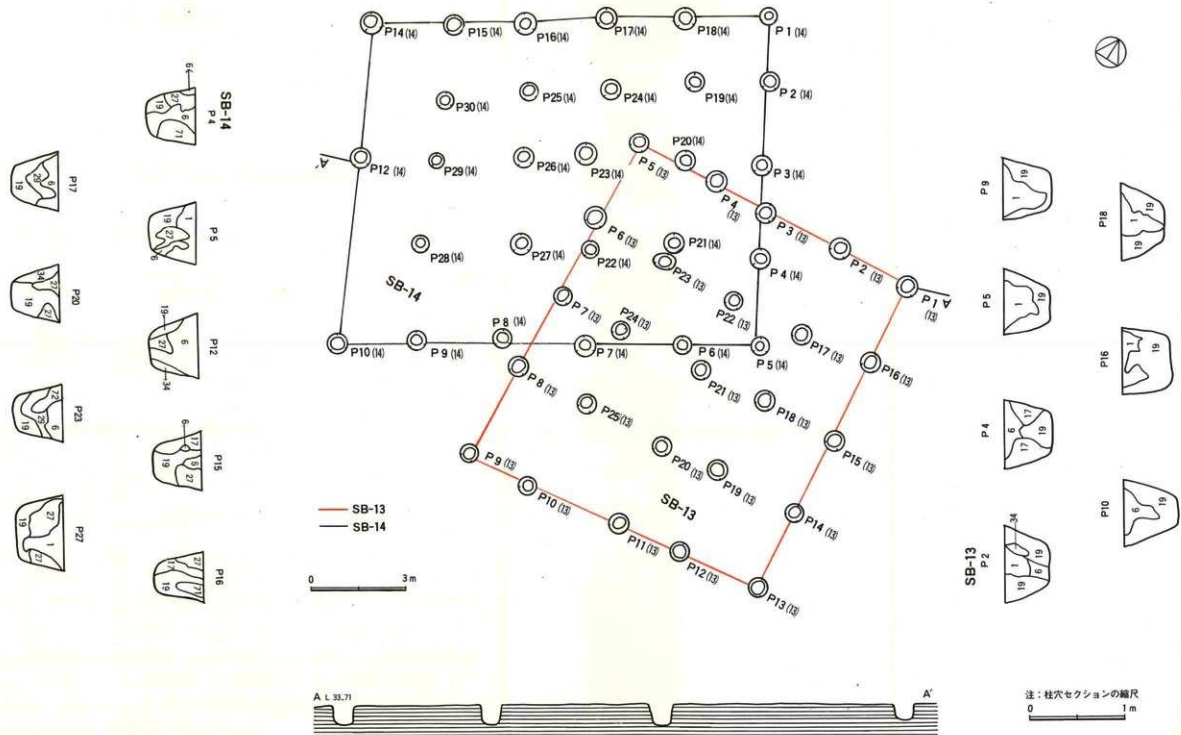
本建物はSB13と重複する。平面形状についてはその北側の長さ12.20m、南13.10m、そして東側の長さ10.20m、西で10.00mとなり、方形プランをなす。そして軸線は約20°東方に向けて建てられる。

主柱は全部で30柱となり、各主柱の間尺も割合整っている。主柱の径は平均して60cmで規格等もしっかりしていた。

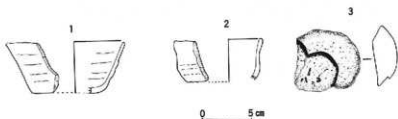
ピットの規格 (SB-14) (長径×短径×深さ)

P 1 55×37×48	P 2 65×38×50	P 3 73×38×52	P 4 63×39×52	P 5 63×37×45
P 6 62×37×46	P 7 60×60×47	P 8 63×38×47	P 9 70×40×55	P 10 65×42×50
P 11 不明	P 12 65×35×48	P 13 不明	P 14 60×35×50	P 15 63×33×52
P 16 34×33×50	P 17 65×13×50	P 18 64×34×48	P 19 55×45×51	P 20 64×40×58
P 21 62×37×62	P 22 59×41×50	P 23 60×41×47	P 24 64×40×52	P 25 65×42×52
P 26 65×45×49	P 27 85×54×47	P 28 59×42×47	P 29 60×45×54	P 30 60×41×51

床面は平坦で軟いがSB13と重複しているので明確にこれを把握することは出来なかった。



第58図 第13・14号掘立柱建物遺構平面実測図



第59図 第13号掘立柱建物遺構遺物実測図

(C) SB-13

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏片 (土師器)	② 4.1 ③ 0.4 0.6 ④ 5.8	底部平底、底部からの立ち上がりはゆるやかに外反して口縁部で開く。輪痕あり。横篦削り整形。	良好 灰褐色	胴部残片1/6残
2	坏片 (土師器)	③ 0.4	胴部は少々のかぶり込みを有する。横篦削り整形。	良好 褐色	胴部残片
3	磨石片	③ 2.2			砂岩

### 第15号掘立柱建物遺構 (SB15) (第60、61図)

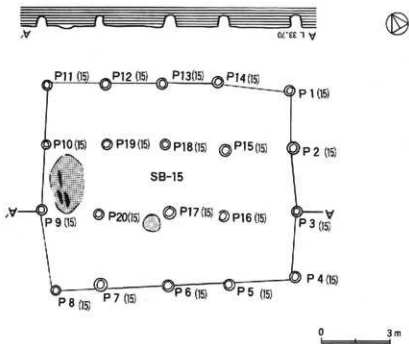
本建物は本エリア東端の中央部にある。その平面形状は北側の長さ11.00m、向かいの南側で11.15m、そして東側で8.00m、その向かいの西側で8.30mとなり、方形プランをなす。そして軸線を約45°西方に向けて建てられる。

主柱は全部で20柱となるが、主柱間の間尺も整っており、その柱の径も平均50cmとなる。

ピットの規格 (SB-15) (長径×短径×深さ)

P 1 50×42×52	P 2 60×50×56	P 3 62×55×46	P 4 50×40×46	P 5 53×35×45
P 6 57×30×45	P 7 60×40×43	P 8 45×45×52	P 9 53×36×44	P 10 42×34×50
P 11 45×37×45	P 12 50×35×50	P 13 50×40×50	P 14 45×40×48	P 15 50×40×56
P 16 48×30×48	P 17 58×38×46	P 18 50×38×44	P 19 50×40×48	P 20 52×35×43

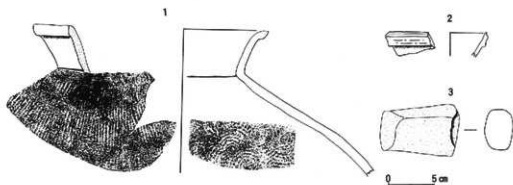
床面は平坦で固いが、その床面西側に1.00m×90cmに亘って焼土や炭化材が散布し、その周辺は特に固くつき固められていた。炊事場等の施設があった場所ではなかろうか。出土遺物としては土師器の坏、甕片、須恵器の甕等があげられる。



注：柱穴セクションの縮尺



第60図 第15号掘立柱建物遺構平面実測図



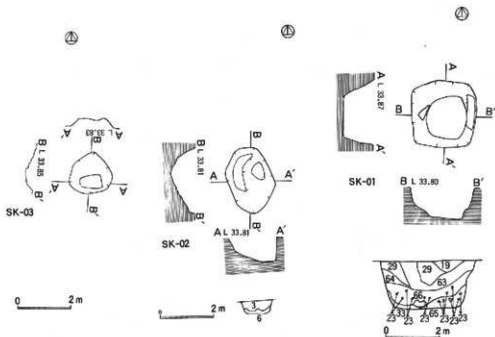
第61図 第15号掘立柱建物遺構遺物実測図

(3) 土坑状遺構 (SK01、SK02、SK03) (第62図)。

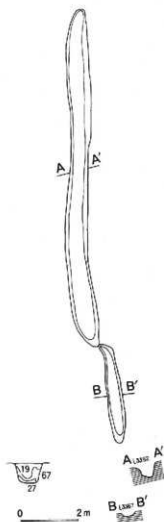
溝状遺構 (SD01) (第62図)

本遺跡より土坑状遺構3と溝状遺構1が認められた。それは下記の通りとなる。

No	位置	径(上縁、底面、深さ)cm	形状	解説
SK01	SB05、SB06、SB07の中に造られる。	上縁部2.20m×2.30m、底面部1.05m×1.05m、深さ1.17m	方形	大型の貯蔵穴で諸道具食糧等の貯蔵等に使用されたものであろうか。上縁部より斜めに造られ、底面は固い。覆土は暗黒色土、ローム粒混入。遺物は極めて少なく、僅かに土師器片が5片程度、平安中、後期に位置付けられるものである。
SK02	SK07、SB13にはさまれる。	上縁部2.46m×1.53m、底面部95cm×72cm、深さ95cm	不整形半円形	これも貯蔵穴の部類に属するものと思われる。上縁部より斜面をもって造られ、底面は固い。遺物は見受けられなかった。
SK03	SB17にはさまれる。	上縁部1.40m×1.40m、底面部90cm×60cm、深さ32	円形	上円部より底面は斜面をなし、底部は軟らかい。遺物は全然認められなかった。墓塚状遺構かと推定されたが。
SD01	本エリアの西端。南から北にながれる。	図面を参照。全長11.30m。最下部で巾60cm、下面巾40cm、深さ25cm。中部で巾63cm、下面巾45cm、深さ46cmとなり、上部は巾5cm、深さ10cmとなる。		栗研状の溝で遺物の出土はない。後世に掘られたものと推定した。



第62図 土坑状遺構平面実測図

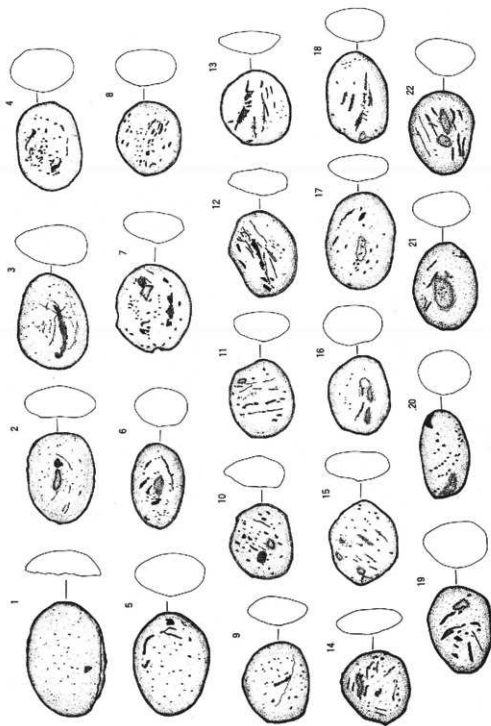


第63図 溝状遺構平面実測図

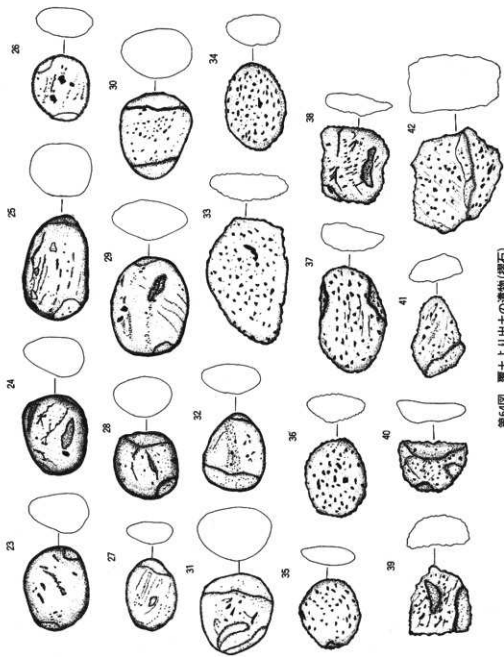
#### (4) 覆土よりの遺物 (第63、64図)

本エリアの掘立柱建物遺構群の周辺の30cm~40cmの覆土面より、摺石、敲石、台石等の原石及び製品が検出された。小片まで入れるとその数1000個を下らない。そしてその掘立柱建造物の一部がそれを製作する工房にあっていたものと思われる。その中には火山岩も多く含まれていた。それらの一部を平面図にしてあげておいた。

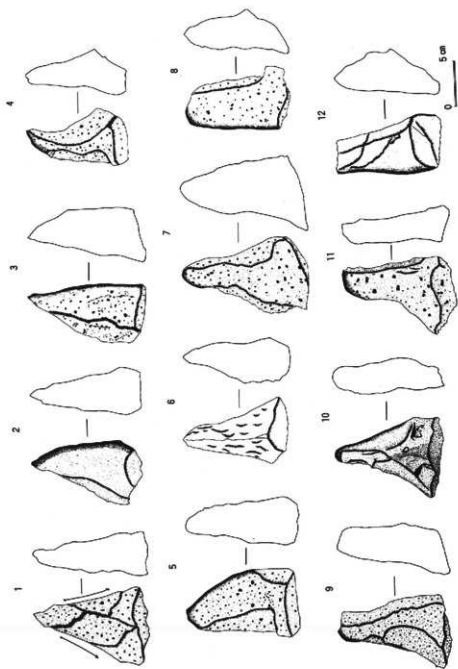




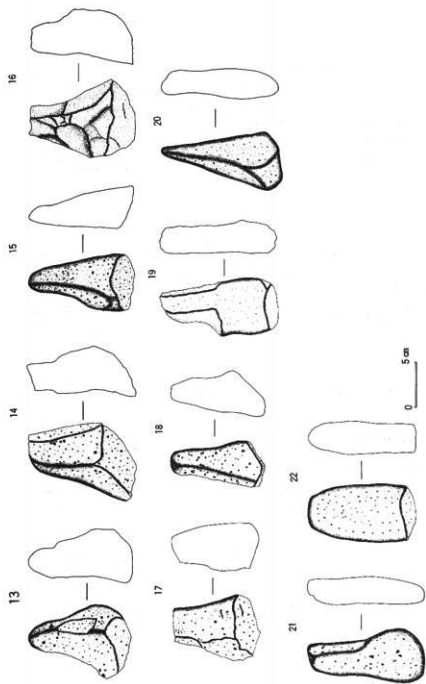
第64図 覆土より出土の遺物(浮石)



第64図 礫土より出土の遺物(摺石)



第65図 覆土より出土の遺物(燧石)



第65図 覆土より出土の遺物(燧石)

C遺跡表探、覆上出土遺物層石一覽表 法量(真径×短径×厚さ) cm

No	層種	法量	備考	No	層種	法量	備考
1	磨石	13.5×9.0×2.5	砂岩	22	磨石	9.0×2.0×4.0	砂岩
2	〃	10.0×7.5×2.5	〃	23	〃	9.0×7.0×4.0	〃
3	〃	10.0×8.0×3.0	〃	24	〃	8.0×7.0×4.0	〃
4	〃	10.0×7.0×4.0	〃	25	〃	12.7×7.0×6.0	〃
5	〃	10.5×7.5×4.0	〃	26	〃	7.0×6.5×3.3	〃
6	〃	9.0×6.0×2.5	〃	27	〃	8.0×6.0×2.0	〃
7	〃	10.0×8.5×3.0	〃	27	〃	8.0×6.0×2.0	〃
8	〃	8.0×7.0×2.5	輝石安山岩	28	〃	7.0×7.0×4.3	〃
9	〃	6.0×7.3×3.5	安山岩	29	〃	11.0×8.0×4.5	〃
10	〃	8.0×7.0×3.5	〃	30	〃	9.0×7.0×5.0	〃
11	〃	7.0×8.0×3.5	砂岩	31	磨石	9.0×8.0×5.0	〃
12	〃	9.5×7.5×3.0	〃	32	〃	8.8×7.0×3.0	〃
13	〃	8.0×7.5×2.5	〃	33	〃	13.0×9.0×3.0	火山岩
14	〃	8.0×7.0×2.5	〃	34	〃	9.0×7.0×3.5	〃
15	〃	9.0×7.5×3.5	〃	35	〃	7.8×6.5×2.0	〃
16	〃	9.0×6.5×4.0	〃	36	〃	8.0×6.0×3.0	〃
17	〃	11.0×7.5×3.0	〃	37	〃	11.5×7.0×3.0	〃
18	〃	11.5×7.5×3.8	〃	38	〃	8.0×7.0×2.5	〃
19	〃	9.5×7.0×5.0	〃	39	〃	7.0×6.5×3.0	〃
20	〃	10.0×5.0×5.0	〃	40	〃	8.0×6.0×2.0	〃
21	〃	9.8×7.0×4.0	〃	42	〃	11.0×9.0×6.0	火山岩台石

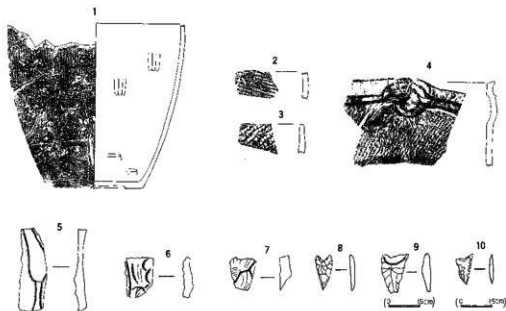
C遺跡表探、覆土出土遺物(敲石)一覧表 法量(長径×短径×厚さ) cm

No	器種	法量	備考	No	器種	法量	備考
1	敲石	12.0×9.0×4.0	輝石安山岩	12	敲石	11.0×6.0×4.0	粘板岩
2	〃	12.5×7.0×4.0	閃緑岩	13	〃	12.0×7.5×5.0	輝石安山岩
3	〃	12.0×6.0×5.0	輝石安山岩	14	〃	11.5×7.0×4.5	〃
4	〃	11.5×5.0×3.5	〃	15	〃	11.0×7.0×4.0	〃
5	〃	12.0×7.0×5.0	〃	16	〃	10.0×7.0×5.0	硬砂岩
6	〃	12.0×6.0×5.0	頁岩	17	〃	8.0×7.0×5.0	輝石安山岩
7	〃	14.0×10.0×3.5	輝石安山岩	18	〃	11.0×6.5×3.5	〃
8	〃	12.0×6.0×4.0	〃	19	〃	12.0×5.0×3.0	泥岩
9	〃	12.0×8.0×5.0	〃	20	〃	12.5×5.5×3.0	輝石安山岩
10	〃	11.5×8.0×4.0	石灰岩	21	〃	12.0×6.0×2.5	輝石安山岩
11	〃	12.0×7.0×3.0	輝石安山岩	22	〃	12.6×6.0×3.0	〃

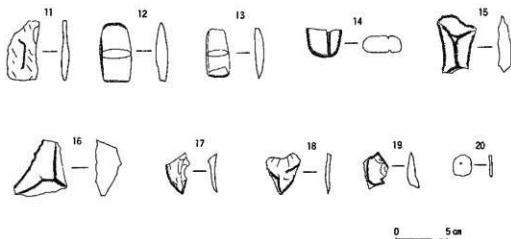
## (5) 表探遺物

表探遺物として縄文早、前期に位置づけられるかと思われるチャートの石核、石槍、それに黒浜式土器、中期の加曾利E1式土器等がそれぞれ検出された。

なお、本エリアのSI03、SI11の間に埴輪円筒が小片となって数百個重なって出土した。封土が除去された古墳がその周辺にあるのではないかと思って調査したが、遺構は検出されなかった。何処からか持参してまたまここに捨てたものと判断した。なおこゝには昭和の初期頃まではお堂が建てられていたと言われる。



第66図 表探よりの遺物



C遺跡表採 (法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (須志)	26.0×24.5 ×14.0× 0.5	底部から緩く内湾し立ち上がる。肩部及び口縁部は欠損する。外壁上辺は縦位に平行線叩き目、下辺は横位に窪撫で、内壁上辺は縦位に、下辺は横位にそれぞれ窪撫でを施す。	①緊まる ②白土及び石英粗粒 ③灰色	2/3残存、骨粉として使用されていた。
2	深鉢片 (縄文)	6.5×5.0 ×0.6	横位に太縄文を施した内湾ぎみの深鉢である。	①内壁は亀裂脆い ②織維土器 ③黒褐色	
3	深鉢口縁部片 (縄文)	6.3×4.9 ×0.6	底部から直線的に外傾し口縁に至る深鉢であり、外壁にLRの太縄文を施す	①緊まる ②織維土器 ③褐色	
4	深鉢口縁部片 (縄文)	16.0×12.0 ×0.4	口縁外側に横位に2条の紐線隆帯を配し末端に渦巻文様を作る。胴部はLRの太縄文を全面に施す。底部から直線的に外傾を示す深鉢である。	①緊まる ②褐色土、石英微粒子 ③黄褐色	

C遺跡表採、覆土出土遺物類石一覧表 法量(長径×短径×厚さ)

No	器種	法量 cm	備考	No	器種	法量	備考
5	石楯	8.0×2.8×1.0	早・前・期? チャート	13	定角石斧	4.7×2.1×0.7	緑泥片岩
6	石刃	4.3×2.7×0.9	早・前・期? 珪岩	14	石錘	3.0×3.3×1.6	硬砂岩
7	石刃	3.5×2.1×2.2	早・前・期? 珪岩	15	皮剥	5.5×3.1×1.2	硬砂岩
8	石鏃	3.2×1.5×0.3	珪岩	16	皮剥	4.9×3.3×1.4	砂岩
9	石鏃	1.5×1.0×0.3	チャート	17	皮剥	4.0×1.8×0.4	珪岩
10	石鏃	1.8×1.3×0.5	珪岩	18	皮剥	4.0×3.2×0.6	珪岩
11	包丁	5.8×3.0×0.7	藍内片岩	19	皮剥	2.8×2.2×0.6	黒曜石
12	定角石斧	5.6×3.1×1.1	緑泥片岩	20	有孔円板	2.0×1.7×0.3	滑石





#### 4. おわりに



## 4. おわりに

① 本遺跡は豊かな自然と、その地系が水陸交通の拠点を占めていたこと等で繁栄を極めたものと推定される。

② その表探において縄文早期と思われる石器類、前期、中期の土器片、石器等が検出されたが、実際に遺構の検出をみたのは、弥生時代後期の住居址、丸領、和泉期に亘る住居址、平安中、後期の住居址と掘立柱建物遺構、そしてそれらに付属する土壇状遺構等であった。

③ 弥生時代の住居は全て谷津に望む台地上にあった。そして、検出された遺物等から判断してそれは弥生時代後期に位置付けられるもので、そしてこれは二軒屋系のもので、東海系のもとの混在が認められたことである。更に、このことは本県南部の弥生遺跡と共通する性格を有するものであった。

④ 第2号住より検出された有柄の石鏝は翡翠を用い、極めて精巧に製作されている。同類の石鏝は本県では勝田市の中根遺跡より僅かに1鏝、関東では群馬県、埼玉県より数鏝の出土をみるのみである。これらの系統はどのような経路において伝播されたものなのか、そしてそれは単なる実用に供せられたものだけとは考えられないのである。今後これについての究明がなされなければならない。

⑤ 竪穴住居址の構造上の問題で全般を通じて見られることは、床面上に主柱を設けずに壁面上にたてられているものが多いことである。それは弥生住が7軒中4軒、平安期の住で8軒中6軒となっている。また、下屋をもうけた住(SI09)があった。更にまた、第11号住のように床面が2段構造になっているものもあった。

⑥ 竪穴住居址の特色としてカマドの構造があげられる。そしてこのことは本遺構の平安期の住に全般的に言えることであった。カマドは壁面外にのびる、カマドの両袖には土器を貼りつける。焚口はトンネル型に開く。器物置台は丸型の孔をあける。その両サイドに下から舌状の瘤を出し器物はその上に乗せる仕組みになっている。したがってカマドには支脚は使用されていない。第9号竪穴住居址にはそのカマドが原形のままで検出されたのである。

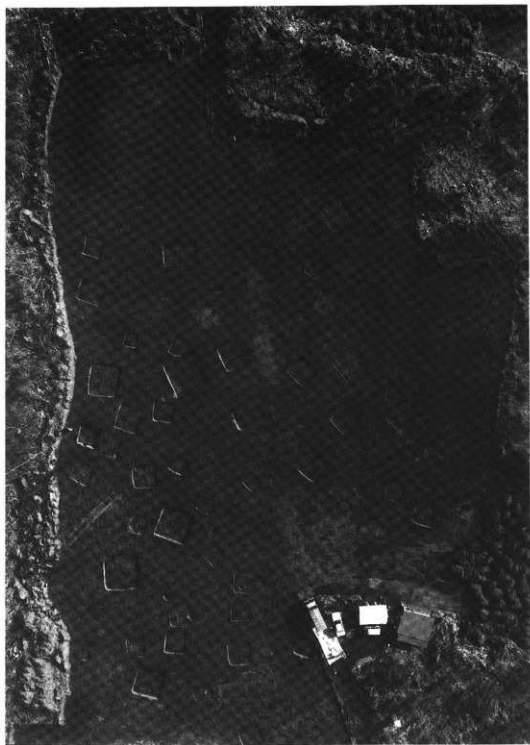
⑦ 掘立柱建物遺構17棟が検出され、その周囲を取り巻くかの如く竪穴住居址群が検出されたが、それらは全て時代を同じくすることからセットとして取り上げるべきものと思われる。これらの様相については、「2. 遺構の概況」のところに詳細に亘って記録しておいたとおり、80坪以上の大型建造物が4棟、30坪以上が9棟、そして15坪以上が5棟となっていた。その遺物等からみて平安中、後期に位置づけられる建造物と判断した。これらは事務所、倉庫、物置、馬舎、工房の類ではないかと推定された。そしてそれらを取り巻く竪穴住居址は、その建造物施設に勤務する人々の住居とみただのである。

その竪穴住居址の規格の立派なこと、そしてここから検出された数多くの鉄製品、土器類、更に数多く出土した墨書土器等は、一般の竪穴住のそれとは異なった性格が認められた。関本地区周辺は新治国の政治、経済上の拠点を占め、すでに縄文時代、弥生時代には集落が発生し、古墳時代前期には多くの集落が繁栄を極め、首長級の前方後方墳、前方後円墳数基も残されている。なおこの地は律令制度施行による条里制をしいた場所と言われており、新治郡の拠点として重要な役割を演じていた所であることが立証されたわけである。

⑧ 本エリアは約30cm～40cm掘下げて遺構面を見出したものであるが、その際にそれらの地面において掘立柱建造物の周辺一帯より1000個に近い摺石、敲石、それらの台石等に当たる原石、製品を検出した。そうするとその掘立柱建造物の一部がその工房にあてられていたものと考えざるを得ない。原石は周辺支谷や東怒川・小貝川の河原石を用い、製品は周辺水系を利用して各地に運搬されていたものであろう。そしてこの中には火山岩の原石、製品が数多く含まれていたことから、それらの搬路は相当広範囲におよんでいたことが窺えるのである。

## IV. 下木有戸B遺跡

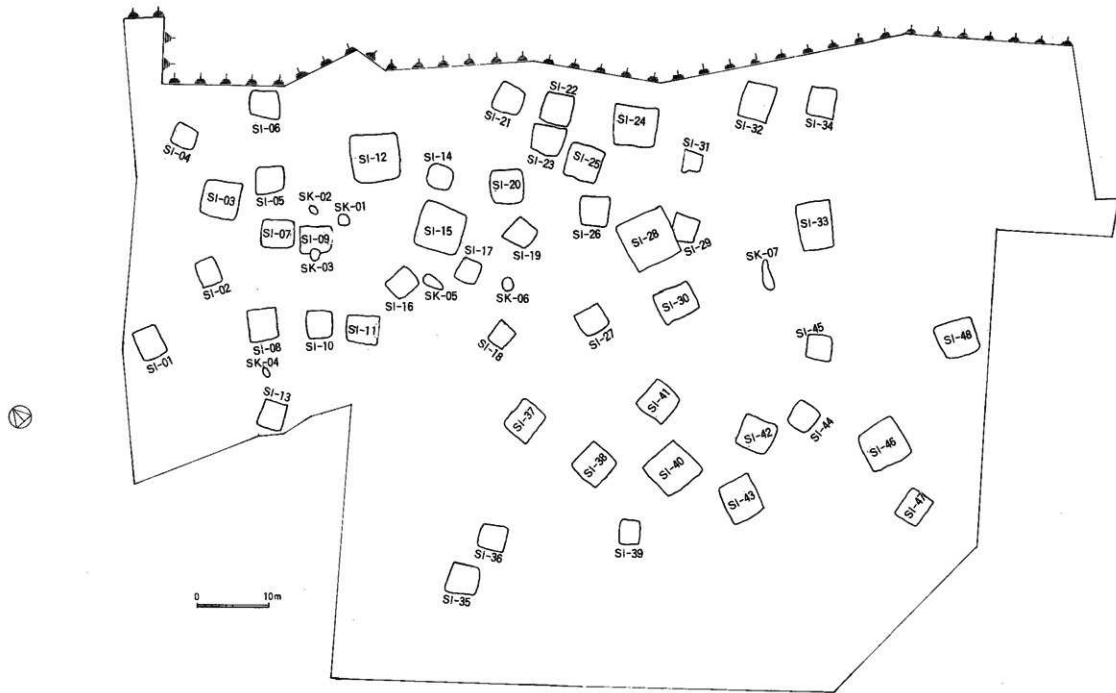




下木有戸B遺跡航空写真







第1図 遺跡全図

# 1. 本遺跡の概況



# 1. 本遺跡の概況

## (一)

本遺跡は下木有戸C遺跡の東方500mの下木有戸台地上に所在する。その台地の西面は糸織川が東南の方向に向かって流れ、そしてその台地東面は糸織川支流が東南流し、板木橋付近において糸織川と合流するのであるが、本遺跡はその合流地点の標高約33mの台地上に所在するのである。本集落の繁栄を極めた五領期末期より和泉期にかけて、糸織川は鬼怒川水系と合流しており舟玉の地より舟生の地を通過して、現在の谷津いっばいに水系となって流れていたものと想像するのである。本遺跡東方には筑波の霊山が聳えるが、本遺跡付近より眺めた筑波山が一番美しいと言われる。

今回、調査の対象となる下木有戸B遺跡の面積は9000m<sup>2</sup>であるが、戦時中に西側地域は耕作されて芋畑等となっており、残りの大半は山林原野となっていたものである。

山林を伐採して30cm～40cm掘削してみるとロームの先端部が現れて遺構が認められた。それらの遺構はエリア西部や北部の地域には検出されないで、主にその中央部より東部斜面までの間に認められたのである。

## (二)

**竪穴住居址。**検出遺構の第1は竪穴住居址があげられるが、それはエリア全域より48軒が検出された。遺構や遺物等によって検討すると、その遺構の全ては五領期の末期より和泉期に亘るのであることが理解されたのである。

本住居址の重複は認められず、相当な間隔をおいて建てられていたが、これはこの時代の集落の一般的傾向と見られよう。住居址48軒について先づ第1に建物について規格を検討してみると、大型住と認められるもの4軒でそれはその平面形状の一辺がほぼ8m以上となるものを当てたものである。そして中型住（平面形状の一辺がほぼ5m以上）と認められるもの24軒、更には小型住（平面形状の一辺が5m以下）と認められるもの18軒となった。

第2として、主柱の配列状況についてみると、それが床面に4本建てられている住は38軒でその大半は大、中型住が占めていた。また、主柱が外壁上に建てられている住は9軒となるが、その中で主柱8柱が8軒、6柱のもの1軒となる。更には床面の壁面すれすれに13柱を建てた住が1軒あった。それらの大半は小型住に多かったが、何れも床面を広く使用する意図によるものであろう。

第3に、この時代の住については、床面に炉が設けられているのを特色とするが、炉の造られていない住が8軒あった。そしてそれらの大半は小型住であった。もっともこれらの住は床面が

火災に狭いので外炉がその周辺に造られているものもあるが、外炉状遺構は僅かに1ヶ所が検出されたのみで、あとは判明しなかった。なお、炉は大型炉においてはその規格が大で、中には炉2基を有している住が3軒もあった。

第4として、貯蔵穴の設けられていない住が22軒で、それは中型住に8軒、残りは小型住となっていた。また一軒の住に貯蔵穴が2ヶ所あるところが4軒もあった。

第5に、周溝の検出された住は第43号住の僅か1軒だけで、その他は全然なかった。

第6に、火災にかかったと思われる住は8軒となっていたが、極めて燃焼度が強かったとみえて、炭化材は少なく焼土が多かった。中には廃屋になってから燃焼したと思われる住も認められた。

第7に、住居に使用された材料については、残された炭化材等から判断して楡、櫟、栗の類が多く、屋根は焼土中に茅が認められたことから、茅が使用されていたものであろう。

遺物。本住からの出土遺物については、土師器片の出土が多く完形品は極めて少なかった。土師器の大半は甕、坏、竝の類で、それに台付甕、高坏、となっており、石器類については磨石、敲石が認められたのみであった。その他、祭祀用具とみられる有孔円板、有孔尖板、玉頸と、そして漁具の類等はみられなかった。なお本住から僅かに不明の鉄片が検出された。また、表探、覆土より縄文土器片、そして僅かの弥生土器が認められた。

### (三)

土壇状遺構。本遺跡より土壇状遺構と認められる遺構7基が検出された。それは貯蔵穴、墓壇状遺構と判定されるものもあったが、不明の遺構が多かった。中には動物捕獲穴ではないかとみられるものもあった。それらは全て下記に表にして記載することにした。

### (四)

その他の遺構。その他の遺構として道路状遺構があげられるが、これは調査の結果、近現代的所産として理解されたので、ここでは全体図には入れて置いたが、説明については省略した。

なお、本集落遺構については、糸線川支流谷津北西台地や東部台地に認められるが、ここでは直接調査の対象となった本エリアだけの調査に留めた。したがって本集落の全体的様相について、それを把握することは出来なかったことを付記して置きたいのである。

### (五)

以下、上記遺構について、そして遺構と遺物の平面図を記載して、その解説を加えることとする。なお、支柱の計測は縦×横×深さ(30cm×35cm×20cm)を意味し、それは炉、貯蔵穴も同じである。

## 2. 各遺構の概況

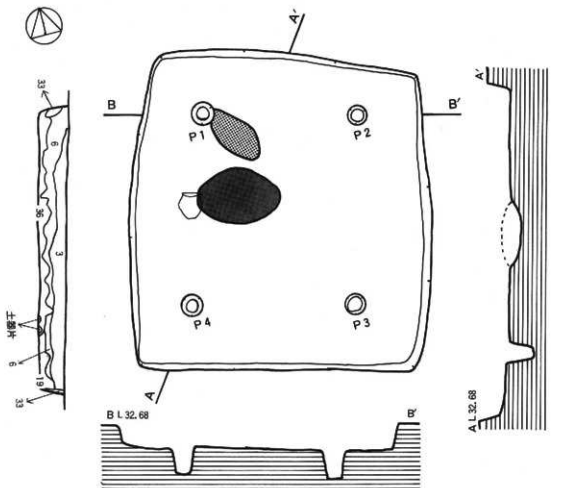


## 2. 各遺構の概観

### (1) 竪穴住居址

#### 第1号竪穴住居址 (S110) (第2、3図)

本住はエリア西隅に位置し、SI02に隣接する。その平面形状は北側で3.50m、南側で4.10m、そして東3.50m、西方で4.10mの少々不整形方形プランをなす。そして軸線を約25°東方に向けて建てられている。壁高30cmで周溝はない。主柱は床面に4柱が認められ、そのP1で30cm×33cm×



第2図 第1号竪穴住居址平面実測図



20cm、P 2で30cm×36cm×20cm、P 3で30cm×36cm×20cm、P 4で30cm×31cm×20cmとなる。炉は床面の少々東北よりに140cm×75cm×10cmと規格は大きい。床面南側に灰が散乱していたが捨て灰したものか。床面は平坦で固い。

本住は規格としては中型住とも言えるもので、五領期後期より和泉期に亘るものではないか。出土遺物は土器片が多く土師器の甕、坏等がみられたが、それは下記の通りとなる。



第3図 第1号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 0 1

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)cm

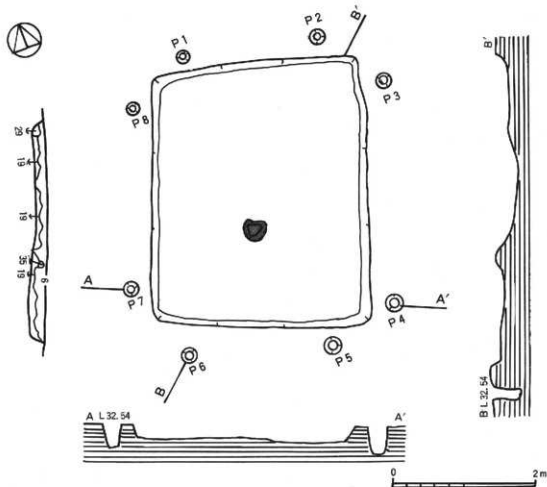
番号	器 種	法 量 cm	器 形 の 特 徴 ・ 整 形 の 技 法	焼 成 ・ 胎 土 ・ 色 調	備 考
1	壺片 (土師)	9.0×5.5 0.4~0.6	口縁部及び胴部の一部の残存であるが、口縁部は僅かに外傾して立ち上がり縁辺で複合となる。外壁面は縦位の篋磨きを施す。	①緊まる ②石英粒子散見 ③淡黄色	
2	罎 (土師)	25.0×8.2 ×0.4	胴部は扁平化した球状を呈し、口縁部は欠落する。外壁面は篋磨きを施す。	①緊まる ②砂質でざらつき多し ③丹褐色	
3	甕口縁部 (土師)	13.0×8.5 ×0.3	胴部は内湾し、口縁部は僅かに外反する如く立ち上がる。内外壁面共に篋削りの後、撫でを施す。	①緊まる ②緻密な粘土質 ③淡黄色	
4	甕口縁部 (土師)	17.4×4.2 ×0.3	胴部は扁平球状を呈し、口縁部は僅かに外反するごとく立ち上がる。外壁面は丹念な手撫で仕上げ。	①固く緊まる ②緻密な粘土質に石英粒子混ざる ③灰褐色	

## 第2号竪穴住居址（S101）第4、5図

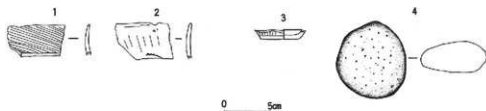
本住は本エリア東方に位置し、S101に隣接する。その平面形状は北側で3.00m、南側同じ3.00m、そして東側で3.70m、西で3.50mの方形プランをなす。そして軸線を約35°東方に向けて建てられる。

壁高は13cmと浅く、支柱は壁面上に8柱が認められたが、そのP1(17cm×30cm×18cm)、P2(20cm×30cm×17cm)、P3(17cm×27cm×15cm)、P4(23cm×35cm×13cm)、P5(20cm×40cm×12cm)、P6(20cm×35cm×13cm)、P7(20cm×30cm×13cm)、P8(20cm×30cm×13cm)となつてその規格は小さい。炉は床面中央に35cm×20cm×12cmが設けられるが、その規模は小さかった。床面は平坦であるが軟らかい。

本住も前者と同じ五領末期より和泉期に位置づけられるものと思われ、規格は小型で粗雑であった。遺物も少なく、主に土師器の破片が認められた。



第4図 第2号竪穴住居址平面実測図



第5図 第2号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 0 2

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)cm

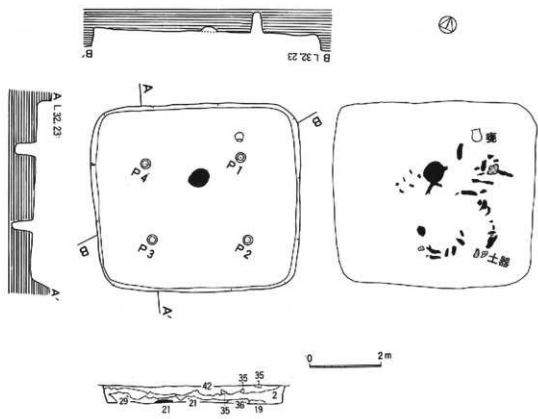
番号	器 種	法 量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備 考
1	壺口縁部 (土師)	6.5×3.5 0.2~0.3	口縁部の一部残存であるが、内外壁面共に横位に刷毛目が施されている。	①良く緊まる ②石英粒子 ③外面黒色、内面褐色	
2	壺口縁部 (土師)	6.5×4.0 ×0.4	口縁部の一部残存であるが、縦位に荒撫でを施す。	①緊まる ②石英粒子 ③褐色	
3	壺底部片 (土師)	底部径 4.0cm	底部の一部だけの残存であるので、全体的な器形は判明し難いが、底部の径、立ち上がりの状況から見て、小型の竈に属するものと思われる。胴部は底部から大きく外傾して立ち上がる。外壁面は縦位の刷毛目残る。	①緊まる ②石英粒子 ③黒褐色	
4	磨石	8.0×7.1 ×3.1			硬砂岩

### 第3号竪穴住居址 (S I 0 3) (第6、7図)

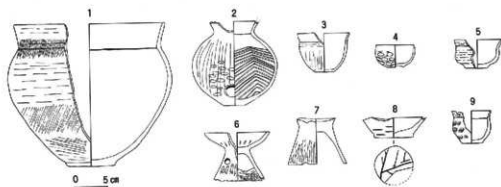
本住はSI02の南西隣に所在する。その平面形状は北側で5.50m、南側で5.50m、そして東側5.00m、西側で5.00mの方形プランをなす。そして軸線を約45°東方に向けて建てられている。本住は極めて規格のよい重厚な感じの中型住で、これも前者と同じ五領末期から和泉期にかけての住居である。

壁高は40cm~50cmと重厚で、主柱は床面に4柱が認められた。そのP1で30cm×50cm×20cm、P2で30cm×60cm×25cm、P3で30cm×55cm×22cm、P4で33cm×60cm×20cmとなる。炉は床面中央に77cm×60cm×15cmとなり規格は立派である。床面は平坦で固い。なお床面には焼土や炭化材が散乱していたが火災にかかったものであろう。

床面からの遺物は極めて多量で、主に土師器壺、壺、坏等が多かった。



第6图 第3号竖穴住居址平面实测图



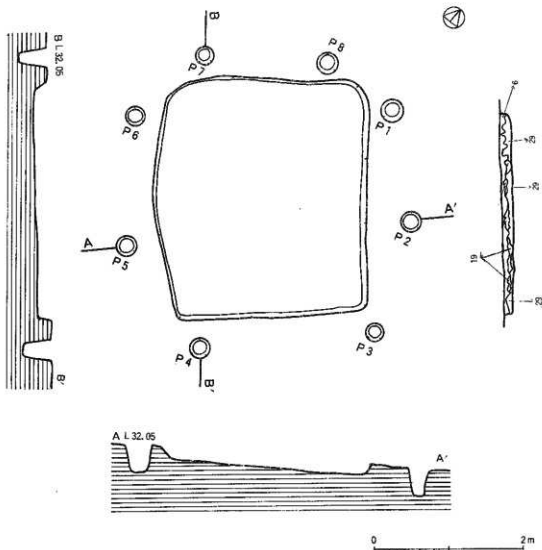
第7图 第3号竖穴住居址遗物实测图

番号	器 種	法 量 cm	器 形 の 特 徴 ・ 整 形 の 技 法	焼 成 ・ 胎 土 ・ 色 調	備 考
1	甕 (土師)	23.5×22.0 ×7.5×0.4 ~0.6	底部から内灣し立ち上がり、底辺から2/3付近で最大の膨らみとなり、その後内傾して、口縁部に至る。口縁部は外反するごとく立ち上がる。全体的器形としては、底部に対し口縁部の広い逆半球状となる。外壁面は口縁部及び肩部は縦に、胴部は斜位に、底辺は横にそれぞれ刷毛目を施す。	①緊まる ②微粒子石英 ③褐色を基調とし 外周に使用度煤 付着	2/3残
2	壺 (土師)	8.0×12.5 ×0.3~0.4	球形の胴部を呈し、口縁部は直線的に外傾する。底辺は橋端に小さく安定感悪い。外壁面は寛削りと従位に刷毛目が施こされている。内壁面は横位に刷毛目。底辺部に近く3.0~4.0cmの円窓を穿つ。	①緊まる ②微粒子石英混入 ③黄褐色	殆ど完 形
3	小型甕 (土師)	8.0×6.0 ×0.2~0.3	底部から斜上方に弧を描き下ろし立ち上がる。口縁部はやや外方に直線的に立ち上がる。外壁は縦の寛削り、内壁は横に手撫で。	①緊まる ②石英粒子、微粒 子 ③赤褐色	ほぼ完 形
4	小型杯 (土師)	5.0×3.5 ×0.2~0.5	手づくねの器で、全体的にいびつである。内外壁面は丹念に指頭撫でが施されている。	①普通 ②緻密な粘土 ③黒色	完形
5	小型杯 (土師)	7.5×4.5 ×0.3~0.4	前項同様手づくね器で、内外面共に寛削り、指頭撫でを行い全体的に均整のとれた作りである。	①普通 ②石英粒子混入 ③黄褐色	4/5残
6	器台片 (土師)	推定 9.0×8.0 ×0.3~0.4	脚部は直線的に開き安定を回り、台部は内灣し緩く立ち上がる。脚部腹に径1.3cmの円窓を穿つ、壁面調整は内外に縦位に寛削り。	①良く緊まる ②緻密な粘土 ③赤褐色	1/5残
7	台付甕脚 部 (土師)	6.7×7.0 ×9.0	直線的に円錐状をなし安定を回る。外壁面は従位に刷毛目仕上げ、内壁面は斜位に手撫でが施されている。	①緊まる ②緻密な粘土と微 粒子石英 ③褐色	
8	壺底部 (土師)	9.3×3.0 ×0.2~0.5	底辺から橋端に外傾する立ち上がりを見せる。立ち上がり付近の外壁は横位の手撫でを施す。底辺に木の葉印痕。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色	
9	小型杯 (土師)	6.0×5.0 ×3.5×0.3 ~0.4	底部から内灣し立ち上がり、胴部中央で最大の膨らみとなり、その後内傾し口縁部と接続する。口縁部は垂直に立ち上がる。外壁面は横位の寛削り。	①緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色	口縁辺 欠損の 他完形

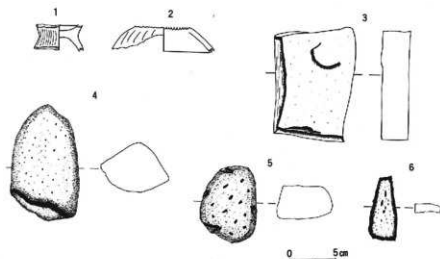
#### 第4号竪穴住居址 (S104) 第8、9図

本住はエリア最北端で谷津に望む。その平面形状は北側で2.60m、南側同じく2.60m、そして東で3.10m、西で3.00mの方形プランをなす。そして軸線を約30°東方に向ける。

極めて小型の住居で斜面に建てられ、壁高も15cm～8cmと浅い。主柱全て外壁上に8柱が認められたが、そのP1 (30cm×35cm×20cm)、P2 (25cm×30cm×20cm)、P3 (28cm×30cm×20cm)、P4 (30cm×35cm×20cm)、P5 (25cm×35cm×20cm)、P6 (30cm×33cm×20cm)、P7 (30cm×30cm×20cm)、P8 (30cm×30cm×16cm)となる。炉は認められず、床面は平坦で固い。



第8図 第4号竪穴住居址平面実測図



第9図 第5号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 0 5

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)cm

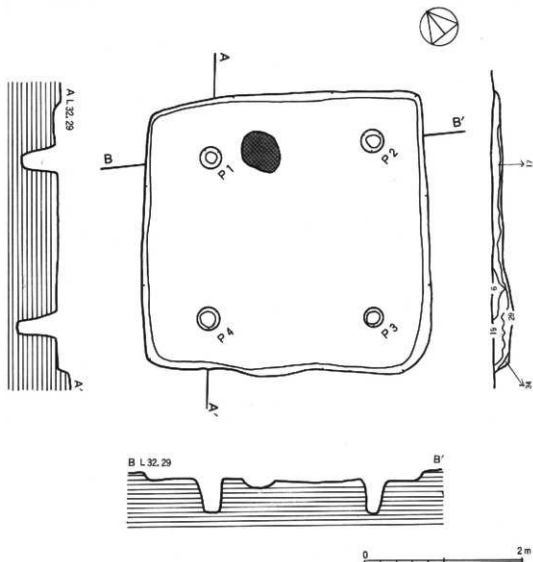
番号	器種	法量	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	台付臺の一部 (土師)	5.0×2.3 ×5.5	台部と胴部の接合部分であり、外壁面は徒位の刷毛目が施されている。	①普通 ②石英粒子荒い ③黄褐色	
2	埴の一部 (土師)	6.0×2.1 ×11.0	胴部上縁と口縁部との接合部分であり、外壁面は刷毛で、内壁面は横位に手撫でが施されている。	①緊まる ②微粒子石英 ③赤色	
3	敲石	8.0×15.0 ×3.0			粘板岩
4	敲石	7.0×15.0 ×5.5	三面に磨きの使用痕を残すが、先端部分は欠損している。		硬砂岩
5	土師骨材	6.0×8.0 ×3.5			泥岩
6	石皿	3.0×7.0 ×1.5			滑岩

### 第5号竪穴住居址 (S105) (第10・11図)

本住はS103、S107に隣接して建てられる。その平面形状は、北側3.50m、南側で同じ3.50m、東も西も同じ3.50mとなり、正方形プランをなす。そして軸線を約50°東方に向けている。

壁高は20cm～6cmと浅く、主柱は全て床面に4柱が認められ、P1で26cm×40cm×20cm、P2で30cm×35cm×20cm、P3で30cm×40cm×20cmとなる。炉は床面北側に64cm×45cm×10cmが認められた。

本柱も前者と同時期に属するが、小型住としては割合規格の整った住居とみられた。遺物は少いが台付甕の底部が検出された。



第10図 第5号竪穴住居址平面実測図

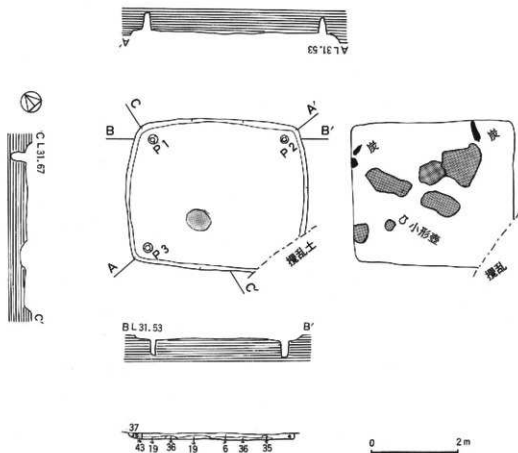


第6号竪穴住居址 (S106) (第11、12図)

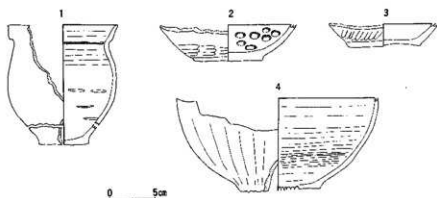
本住はS104の隣に所在する。その平面形状は北側で3.70m、南側で3.60m、そして東と西は同じく3.30mの方形プランをなす。そして軸線を約40°東へ向けて建てられている。

壁高は15cm～10cmと浅く、主柱は床面に4柱が認められるが、P1で20cm×25cm×15cm、P2で20cm×35cm×10cm、P3で20cm×35cm×10cm、P4で20cm×22cm×15cmとなる。炉は床面西よりに、38cm×20cm×10cmとなりその規格は小さい。

本住は前方の谷津に直面して建てられているから前方の掘り込みは浅く、床面は固いが凹凸がある。主柱は床面コーナーに付けて造られている。なお、本住は火災にかかったとみえて焼土や炭化材が床面に散乱していた。遺物は土師器の甕、壺等が認められたが、その数は少なかった。



第11図 第6号竪穴住居址平面実測図



第12図 第6号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 0 6

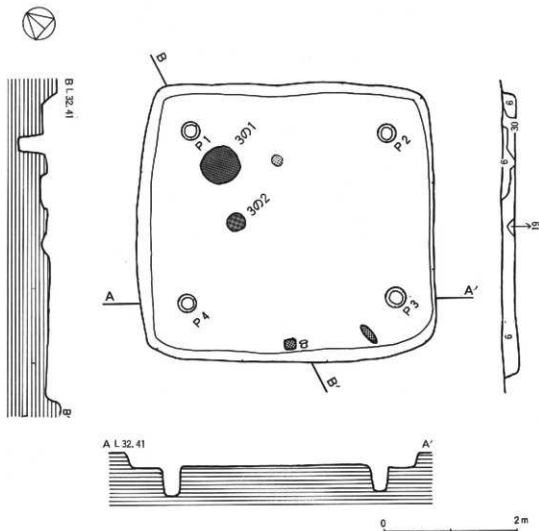
(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	推定 口縁12.0 高 13.0 0.3~0.5	底部から内湾し立ち上がり、胴中央部付近で最大の膨らみを見せ、緩やかに内傾し口縁部に至る。口縁部は僅かに直接的に外傾し、複合口縁となる。外壁面、上辺は斜右下がりの、底部付近は縦位にそれぞれ刷毛目を施す。内壁面は手撫でによる。	①良く緊まる ②石英微粒子 ③赤色	1/5残
2	壺底部 (土師)	15.0×4.0 ×0.3~0.4 ×4.0	底部から内湾し立ち上がる。外壁面は底部付近で横位の刷毛目、内壁面は石の叩き。	①緊まる ②石英微粒子 ③赤褐色	底部残存
3	壺底部 (土師)	12.0×2.5 ×80×0.3 ~0.4	底部から内湾し立ち上がる。外壁面底部付近で斜左下りに刷毛目、内壁面は石の叩き。	①普通 ②石英微粒子 ③赤褐色	底部 2/3残存
4	壺胴部 (土師)	12.0×14.0 ×0.4	底部から内湾し立ち上がる。外壁面は縦位の刷毛目であるが、少々刷毛目寂も残る。内壁面は横位の刷毛目仕上げ。	①緊まる ②石英、粘土共に微粒子 ③赤色	

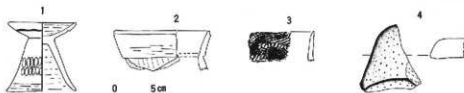
### 第7号竪穴住居址 (S107) (第13、14図)

本住はS103 S105に隣接して建てられる。その平面形状は一辺が4.10mの正方形プランをなす。そして軸線を約50°東方へ向けて建てられている。

壁高は20cmとなって浅く、主柱は床面に4柱が認められ、P1で27cm×35cm×22cm、P2で27cm×40cm×23cm、P3で30cm×40cm×26cm、P4で25cm×40cm×20cmとなる。炉は床面の稍々中央部に2基が検出されたが3①で60cm×50cm×10cm、3②で33cm×33cm×6cmとなるが、一軒の住に炉が2基もあるのは珍しい。床面は固いが少々凹凸がある。本住も五領期(II)より和泉期に亘る住居で、土師器の甕、壺片が検出された。



第13図 第7号竪穴住居址平面実測図



第14図 第7号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 0 7

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

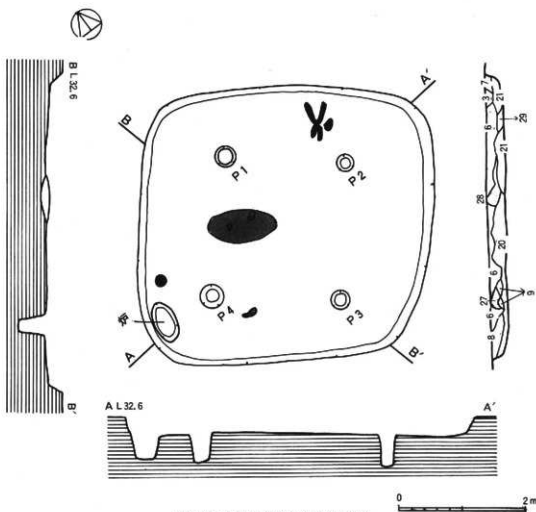
番号	器 種	法 量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備 考
1	高环 (土師)	9.0×8.5 ×9.0×0.3 ~0.4	脚部は備かに弧を描きながら外反し、安定を図る。坏部は僅かに内湾し縁辺に至る。口縁部は1.0cm巾の複合となる。内外壁面共に磨蹭きかかる。	①緊まる ②緻密な粘土、石英 ③黄褐色	ほぼ完形
2	壺口縁片 (土師)	8.0×5.0 ×0.3~0.4	巾3.5cmの複合口縁をもつ、外壁面口縁部は横位の手撫で、胴部は縦位の刷毛目を施す。	①緊まる ②石英粒子 ③赤褐色	
3	深鉢口縁部片 (弥生)	5.0×4.0 ×0.3~0.4	深鉢口縁部の一部であり、外壁は沈線を羽状に施し、その下位に刺突文を横位に施す。	①普通 ②砂質 ③赤色	
4	蔵石	7.5×8.5 ×3.0			安山岩

第8号竪穴住居址（S108）（第15、16図）

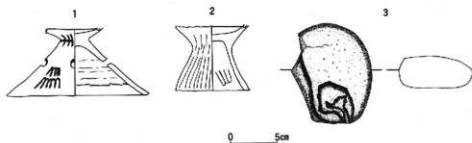
本住はS110に隣接して建てられる。その平面形状は一边がほぼ3.70m正方形プランをなす。そして軸線を約45°東方へ向けて建てられている。

壁高は平均20cmと浅く、支柱は床面に4柱が認められた。そのP1で30cm×46cm×30cm、P2で30cm×46cm×20cm、P3で30cm×40cm×25cm、P4で33cm×40cm×23cmとなる。炬は床面中央部に1.10m×50cm×10cmと少々その規格は大きく、更に本住床面の西側コーナーに60cm×50cm×30cmの貯蔵穴が設けられていた。床面は平坦で固い。

本住も前住と同じく五領期（II）から和泉期に位置付けられるもので規格としては中型住居の部類に属するものと思われる。遺物は土師器の器台、壺片等が認められた。



第15図 第8号竪穴住居址平面実測図



第16図 第8号竪穴住居址遺物実測図

(B) SI-08

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

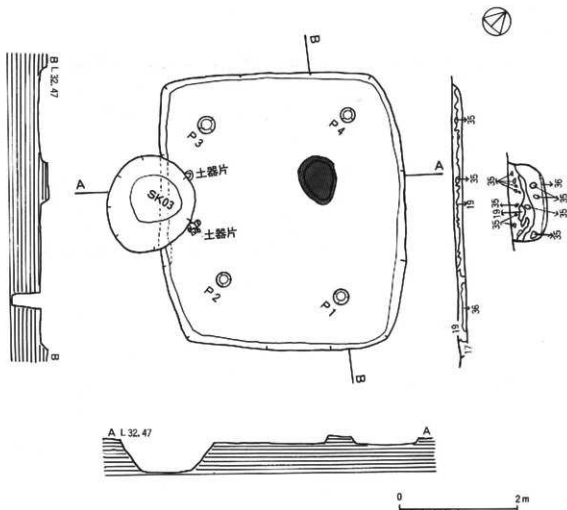
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	器台 (土師)	6.0×7.5 ×15.0× 0.3~0.4	脚部は僅かに弧を描き乍ら内傾し立ち上がり器の安定を図り、所謂円錐形状をなす。台部は僅かに内湾し立ち上がる。外壁は縦位の寛磨き、脚部内壁は横位にかすかな刷毛目、台部内壁は寛磨きかかる。脚部壁に径1.0cmの円窓3個を穿つ。	①良く緊まる ②緻密な石英粒子、粘土 ③赤黒色	脚部完形 台部1/2残存
2	台付礎部 (土師)	8.0×7.0 ×9.5×0.3 ~0.5	脚部は直線的に内傾し立ち上がり脚部と接続する。脚部は内湾し立ち上がる。外壁と縦位の刷毛目、内壁は寛削りによる。	①普通 ②石英粒子多い ③赤褐色	脚部のみ残存
3	敲石	7.5×11.0 ×3.5	一部欠損		硬砂岩

第9号竪穴住居址（S109）（第17、18図）

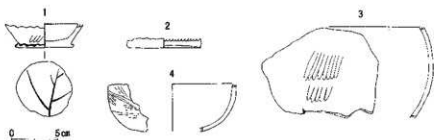
本住はS107に隣接する。その平面形状は北側で3.80m、南で3.50m、そして東側で4.40m、西4.30mの方形プランをなす。そして軸線を約40°東方へ向けて造られている。

壁高は10cmと極めて浅く、主柱は床面に4柱が認められた。そのP1で30cm×40cm×20cm、P2で30cm×48cm×40cm、P3で25cm×50cm×20cm、P4で30cm×40cm×20cmとなる。炉は床面の稍々中央部と思われるところに68cm×40cm×15cmが認められた。床面は平坦で軟らかい。

検出された土器も少量で甕、坏壺片等が見られたが破片が多かった。本住の西壁面中央に土墳（SK03）が検出された。



第17図 第9号竪穴住居址平面実測図



第18図 第9号竪穴住居址遺物実測図

(B) S1-09

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	竪底部 (土師)	8.9×2.5 ×6.0×0.5 ~0.6	胴部は底部から外反し立ち上がるが、底部だけの残存である。外壁は斜下りの篋削り、底面に木の葉圧痕。	①普通 ②石英粒了 ③淡い黒褐色	
2	竪底部 (土師)	8.0×1.0	底辺のみの残存であり全容不明内外面共に剝離、虫食い多く整形は粗雑である。	①脆い ②石英粒子 ③黒褐色	
3	壺胴部片 (土師)	13.0×9.5 ×0.3~0.5	残存片の大きさおよび湾曲から大型に属する壺である。外壁面は縦位の篋削り、内壁は横位に手撫でを施す。	①普通 ②石英粒子粗大 ③黒褐色	
4	坏片 (土師)	6.0×8.0 ×0.3~1.4	丸底の坏で、外壁面は細かい刷毛目を残す付的な仕上げである。	①緊まる ②石英粒子粗大 ③灰白色	

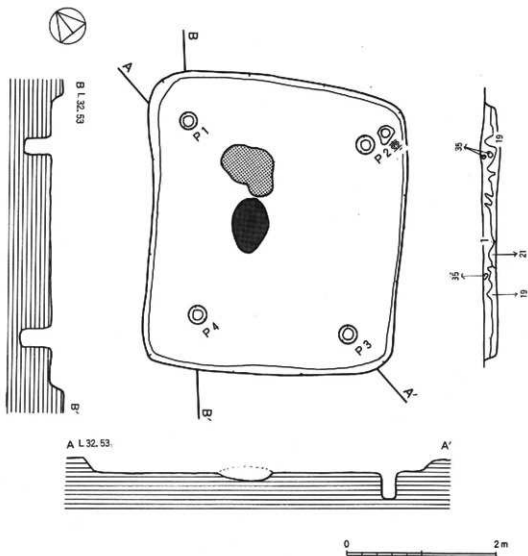


第10号竪穴住居址 (S110) (第19、20図)

本住はSI08、SI11に隣接する。その平面形状は北側で3.40m、南側と西側とで同じく3.40mとなり、東側3.80mの不整形の方形プランをなす。

壁高は20cmと浅く、支柱は床面に4柱が認められた。そのP1で25cm×35cm×20cm、P2で30cm×40cm×20cm、P3で20cm×35cm×20cm、P4で22cm×35cm×20cmとなる。炉は床面中央に120cm×70cm×16cmとその規格が大きい。床面は平坦で固い。

床面より土師器の壺、坏等が検出された。



第19図 第10号竪穴住居址平面実測図



第20図 第10号壺穴住居址遺物実測図

(B) S I - 10

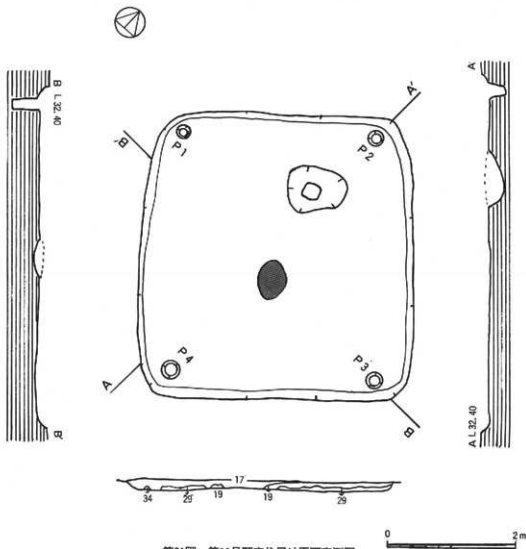
(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器 種	法 量 cm	器 形 の 特 徴 ・ 整 形 の 技 法	焼 成 ・ 胎 土 ・ 色 調	備 考
1	深鉢片 (縄文)	8.0×5.0 ×0.9	上辺に山形沈線を施し、他は横位の縄文を施す胴部片である。	①脆い ②繊維土層 ③黒色	
2	深鉢片 (縄文)	6.5×3.0 ×0.7	全面に斜縄文を施す深鉢の胴部片である。	①普通 ②石英粒子 ③黒色	
3	深鉢片 (弥生)	5.0×4.5 ×0.25	上辺は横位に、下辺は斜右下がりの刷毛目を施した小型の壺である。	①緊まる ②石英微粒子 ③茶褐色	
4	磨石	6.5×4.1 ×1.9	一部欠損		安山岩
5	壺口縁部 (土師)	14.0×8.0 ×0.3~0.4	口縁部は胴肩部から直接的に外傾する。口縁部内外壁共に手撫で、胴部外壁は横位の刷毛目をそれぞれ施す。	①脆い ②石英粒、砂粒多し ③黄色	

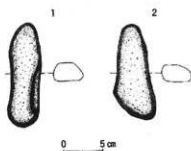
第11号竪穴住居址 (S 1 1 1) (第21、22図)

本住はSI10に隣接する。その平面形状は北側及び南側の長さは4.50m、東西の長さ4.10mの方形プランをなす。そして軸線を約45°東方へ向けて建てられている。

壁高は15cmと極めて浅く、支柱は全て床面に4柱が認められた。そのP 1で30cm×40cm×23cm、P 2で30cm×30cm×20cm、P 3で30cm×20cm×18cm、P 4で20cm×23cm×20cmとなるが、これらは全て床面コーナーの床面の四隅に付けて建てられていた。炉は床面中央から少々北東側よりに60cm×40cm×6cmの規格で設けられていた。床面は平坦で固い。遺物は全て破片で検出されたが、壺片が多かった。



第21図 第11号竪穴住居址平面実測図



第22図 第11号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 1 1

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

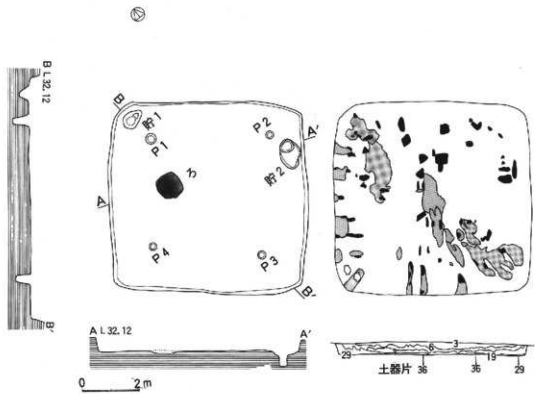
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	磨石	3.8×13.5 ×2.4			砂岩
2	磨石	4.2×11.8 ×2.3			砂岩

### 第12号竪穴住居址 (S I 1 2) (第23、24図)

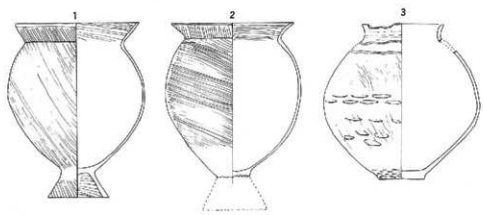
本住はSI14に隣接する。その平面形状は北、南側の長さ共に9.40m、西、東側も同じ9.40mの正方形プランをなす。その軸線を約40°東方へ向けて建てられている。

壁高は45cmと割合に重厚な感じで、主柱は全て床面に4柱が認められたが、P 1で35cm×55cm×25cm、P 2で26cm×42cm×20cm、P 3で27cm×50cm×20cm、P 4で30cm×50cm×20cmとなる。扉は床面中央部少々北寄りに90cm×90cm×10cmが計測された。なお、本住には貯蔵穴が2基認められたが、その(1)は床面東北コーナーにあつて70cm×30cm×30cm、その(2)は南東コーナーに50cm×50cm×40cmが計測された。

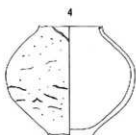
本住は大型住の規格に入るべき住居で、全体的に整っている。なお、本住は廃屋になって火災にかかったらしく、炭化財と焼土が床面に散乱していた。床面より台付甕、坏等が検出されたが、それは下記の通りとなる。



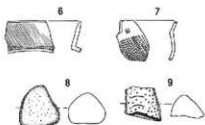
第23图 第12号竖穴住居址平面实测图



第24图 第12号竖穴住居址遗物实测图



0 5 cm



(B) S1-12

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

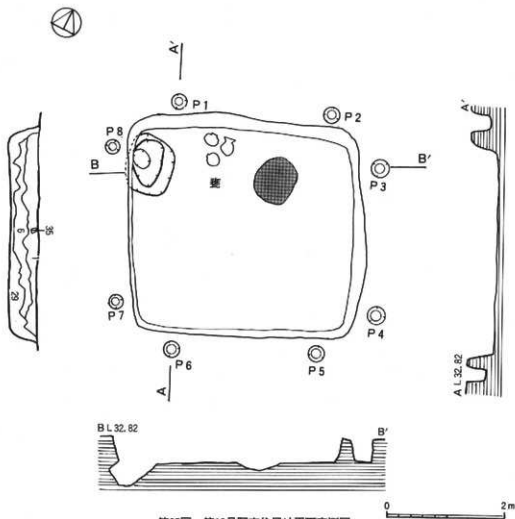
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	台付甕 (土師)	19.0×27.0 0.2~0.4	底部に円錐形状の台部を設け、胴部は大きく内湾し立ち上がり中央部付近で最大の膨らみとなり、その後内傾して頸部に至る。口縁部は直線的に外傾する。外壁面整形は全面に刷毛目仕上げ。内壁面は手撫でにより丹念な仕上げ。器台内壁及び口縁内壁共に刷毛目仕上げである。胴部は0.2cmと極めて薄く形成されている。	①緊まる ②微粒子粘土、石英 ③黒褐色	完形 五領式
2	台付甕 (土師)	18.5×21.0 ×0.2×0.4	器形の特徴および整形は前項と全く同様である。台部が欠落している。	①緊まる ②微粒子粘土、石英粒子 ③黒色を基調とした褐色	4/5 残存 五領式
3	甕 (土師)	15.0×2.3 ×7.0×0.3	全般的な器形は扁平球状を呈し、底部から内湾し立ち上がり、中央部付近で最大の膨らみとなり、その後内傾し頸部に至る。口縁部は殆ど垂直に立ち上がり口唇部において僅かに外反する。外壁面は僅かに斜右下がりの刷毛目、内壁面は手撫での状態悪くざらつき多い。	①普通 ②石英粒多し ③褐色を基調とし胴部全体に煤帯を残す。	4/5 残存 五領式
4	甕 (土師)	9.5×17.0 ×0.4~0.5 ×7.0	器形は前第3項の甕と同様であるが、外壁面に縦位の塗削りが施されているが、底部付近において削り屑が停滞している。	①緊まる ②微粒子石英、粘土 ③褐色	上辺欠落下辺 1/2 残存 五領式
5	器台片 (土師)	4.0×6.0 ×0.3	底辺から内傾し立ち上がり台部に接続する。外壁面は縦位の刷毛目仕上げ、内壁面上部は縦り、裾部は手撫で、脚部に径1.3cmの円窓3個を穿つ。	①緊まる ②石英微粒子 ③丹塗り	台部欠落脚部 1/2 残存
6	台付甕口 縁部片 (土師)	7.0×5.1 ×0.3	頸部から直線的に外傾し立ち上がる。外壁面は斜位に刷毛目、内壁面は横にそれぞれ刷毛目を施す。	①固く緊まる ②微粒石英 ③黒褐色	
7	甕片 (弥生)	5.0×7.0 ×0.3	内湾した胴部から口縁部が外反して立ち上がる。外壁胴部はRLの細、縄文を施す。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色	
8	巖石	6.4×6.5 ×4.8			砂岩
9	磨石	5.5×5.5 ×3.5			角閃安山岩

第13号竪穴住居址 (S113) (第25、26図)

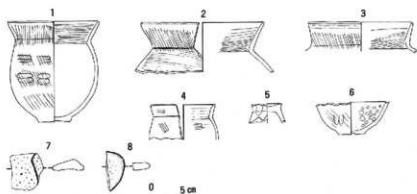
本住はエリア最西端に位置し、S108に隣接する。その平面形状は北側の長さ4.00m、南側で3.60m、そして東側で3.60m、西側で3.60mの不整形方形プランをなす。そして軸線を約45°東方へ向けて建てられている。

壁高は45cm~50cmと割合に深く、支柱は壁面上に8柱が認められた。炉は床面東北部に75cm×15cmが計測された。なお、本住は床面西北部に貯蔵穴100cm×67cm×75cmが計測された。本住は中住ながらも規格の整った住で、床面も平坦で固かった。

出土遺物は土器片が多く、それは甕、坏、壺等であった。



第25図 第13号竪穴住居址平面実測図



第26図 第13号竈穴住居址遺物実測図

(B) S1-13

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色割	備考
1	甕 (土師)	14.5×15.5 ×5.0×0.4 ~0.5	底部から内湾し立ち上がり肩部で内傾し頸部と接続する。口縁部は直線的に外傾する。外壁面、口縁部は縦位の刷毛目、胴部は当地産削りを施した後、斜位に刷毛目、口縁内壁は横位に刷毛目が施されている。	①普通 ②石英粗粒子 ③黒褐色	五領式 完形
2	狭口縁部 (土師)	16.0×8.0 ×0.4~0.5	内傾した肩部から口縁部は直線的に外傾する。外壁面、口縁部は縦位に、肩部は横位に刷毛目を、口縁内壁は横位にそれぞれ刷毛目を施す。	①普通 ②微粒石英 ③黒褐色	
3	狭口縁部 (土師)	20.0×4.8 ×0.3~0.5	内傾した肩部から口縁部は直線的に外傾し立ち上がる。外壁面、口縁部は縦位に、口縁内壁は横位にそれぞれ刷毛目かかる。	①普通 ②微粒石英 ③黄褐色	
4	狭肩部口 縁部片 (土師)	15.5×6.5 ×0.3	内傾した肩部から口縁部は直線的に外傾し立ち上がる。外壁面は表面処理不均一で凹凸面でざらつき多い。内壁面は意匠で施す。	①脆い ②石英粒子 ③黒褐色	
5	台付残片 (土師)	4.0×3.0	腹部と台部の接続の残存であるが、胎土の粗悪剥離面多い	①脆い ②石英粒子 ③黄褐色	
6	底部部 (土師)	11.5×5.0 ×4.0	底面中央の僅かに凹みのついた底部から内湾し立ち上がる。外壁は当初削りを施した後、斜位に刷毛目を施す。内壁面は虫食いの剥離状態である。	①普通 ②石英粗粒 ③黒褐色	
7	磨石	5.0×5.3 ×1.8			溶岩
8	磨石	3.0×6.5 ×1.5			砂岩

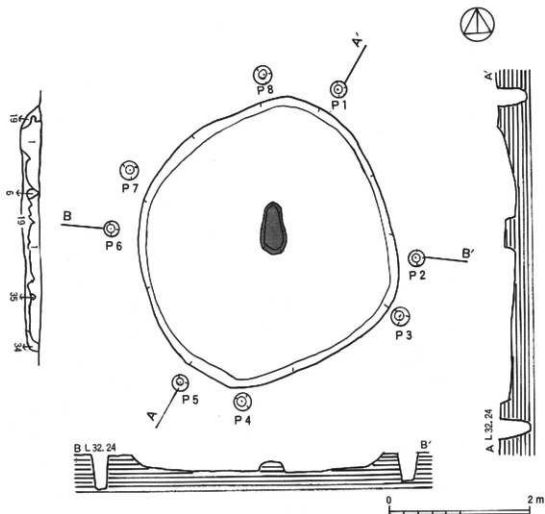


第14号竪穴住居址 (S I 1 4) (第27、28図)

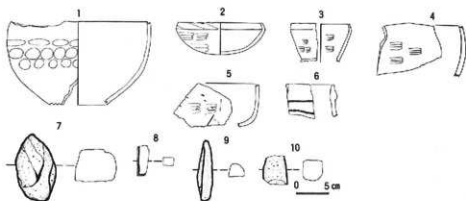
本住はSI12、SI15に隣接する。その平面形状は少々丸型の不整形方形プランをなし、その北側の長さ3.20m、南で同じく3.20m、そして東は3.10m、西も同じく3.10mが計測された。そして軸線を約70°東方へ向けて建てられている。

壁高は20cm、その支柱は外壁上に8柱が認められたが、P 1 (20cm×40cm×18cm)、P 2 (20cm×37cm×18cm)、P 3 (25cm×44cm×20cm)、P 4 (25cm×40cm×15cm)、P 5 (25cm×40cm×15cm)、P 6 (20cm×46cm×16cm)、P 7 (25cm×42cm×16cm)、P 8 (27cm×43cm×13cm)となる 炉は床面中央に67cm×30cm×12cmが造られていた。床面は極めて軟らかく凹凸があり、壁の立ち上がりは摺鉢型を呈していた。

本住からの検出遺物は割合に多く、土師器の甕、坏、壺、甌石、石棒が認められた。



第27図 第14号竪穴住居址平面実測図



第28図 第14号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I-14

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)cm

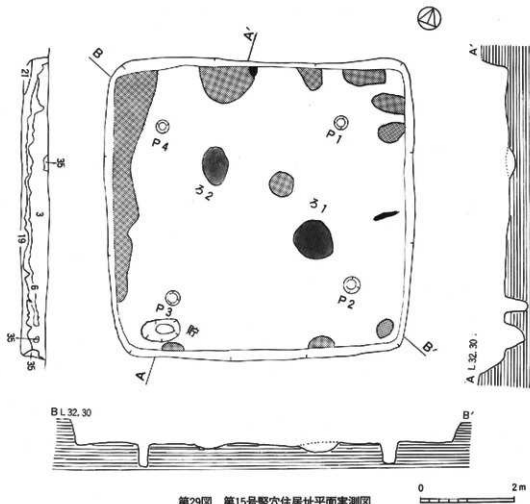
番号	器種	法量cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺片 (土師)	26.0×13.0 ×0.4	推定胴部最大径22.0cmを計る。胴部は底部から内湾し立ち上がり、中央部最大膨らみ部分から内傾し頸部に至る。	①普通 ②石英粒、砂質多し ③黒褐色	
2	坏 (土師)	13.2×5.0	丸底で内湾する立ち上がりで口縁部にて僅かに内傾する。外壁面は横位に筋磨き、内壁は手撫でになる。	①緊まる ②微粒子石英、粘土 ③赤色	完形
3	埴口縁部片 (土師)	8.1×5.5 ×0.2×0.4	胴部から直線的に外傾し立ち上がり口唇部において僅かに内傾する。外壁面は丹念な横位の筋磨きかかる。	①緊まる ②微粒子石英 ③赤褐色	
4	壺片 (土師)	9.5×7.5 ×0.5×0.8	内湾する胴部の残存片である。外壁面は横位の筋磨り	①普通 ②微粒子粘土、石英 ③外面黒色内面赤褐色	
5	壺片 (土師)	8.5×6.5 ×0.4~0.6	内湾する胴部の残存片であり、外壁面は筋磨りであるが、筋磨で器面調整は不均一である。	①普通 ②石英粗粒子、および微粒子。その他胎土の捏不足 ③褐色	
6	壺口縁部 (土師)	4.0×5.0 ×0.5~1.2	口縁部の立ち上がり部分。口縁部は胴部から傾し直線的に立ち上がり外傾の膨らんだ複合口縁となる。	①普通 ②微粒子の石英 ③黒褐色	
7	磨石	6.2×10.5 ×5.0			石灰岩
8	砥石	1.4×4.5 ×1.2	四面共用痕		泥岩
9	磨石	2.5×9.5 ×2.0			石灰岩
10	磨石片	3.5×4.4 ×3.1	両端を欠落		凝灰岩

第15号竪穴住居址 (S115) (第29、30図)

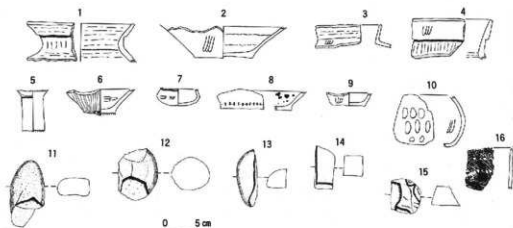
本住はSI12、SI14に隣接する。その平面形状は北側の長さ9.20m、南も同じで9.20m、西と東は同じ9.10mの方形プランをなす。その軸線を約45°東方へ向けて建てられている。

壁高は60cmと整っており、重厚な感じがする。主柱は全て床面に4柱が認められた。P1で25cm×48cm×20cm、P2で30cm×40cm×23cm、P3で30cm×40cm×23cm、P4で23cm×45cm×17cmとなる。炉は2基が検出され、その1は床面中央部より東南側に80cm×70cm×10cmが造られていたが、その2は床面中央部より少々西側に70cm×70cm×16cmが造られていた。本住にはその床面西南隅に貯蔵穴80cm×55cm×40cmが検出された。

本住は和泉期のもとしては規格も大きく大型住の部類に属するもので、床面も平坦で重厚な感じのする住である。床面には焼土やいくらかの炭化財が散乱しているところから、火災にかかったものとみられた。床面上からの出土物も多く、土師器の壺、環、磁石等が認められた。



第29図 第15号竪穴住居址平面実測図



第30図 第15号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 1 5

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

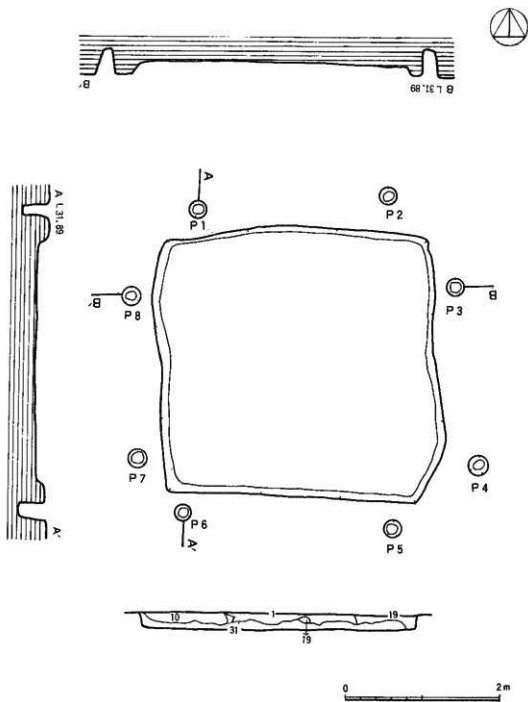
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺口縁部 (土師)	16.5×6.0 ×0.5~0.7	口縁部は肩部から僅かに外反し立ち上がり中央付近でさらに外反を、重ねると共に複合口縁となる外壁面口縁複合部は横に篋削で、立ち上がり部分は縦の篋削で、口縁内壁は篋削による。	①良く緊まる ②石英微粒子 ③淡黒褐色	口縁部 残存
2	壺底部 (土師)	18.0×5.0 ×8.0×0.4 ~0.6	底部から大きく外傾し立ち上がる。外壁面は縦に篋削りであるが、壁面調整悪い。内壁面は輪痕残る。	①普通 ②石英粒及び砂質 ③淡黒褐色	
3	壺口縁部片 (土師)	7.0×3.8 ×0.4	口縁部は直線的に外傾する。外壁面は口縁部横位の手撫でを施す。	①普通 ②石英粒子 ③暗褐色	
4	壺口縁部片 (土師)	8.0×7.5 ×0.5~0.9	口縁部の立ち上がりは肩部から弧を描き乍ら外反し、中央部付近で直線的となると同時に複合口縁となる。外壁面は複合部は縦の篋削き、他は縦の刷毛目を施す。	①普通 ②石英粒 ③黄褐色	
5	高坏脚部 (土師)	5.0×6.5 ×3.8	坏部、脚部の接続箇所から下辺台部まで円筒状をなす。外壁面は篋削り。	①普通 ②石英粒 ③赤褐色	
6	篋片 (土師)	11.0×4.0 ×3.8	篋底部と台部の接続箇所付近の残存片であるが、脚部は内湾する外壁面は縦位の刷毛目を施す。	①普通 ②石英粒 ③淡黒褐色	
7	小型坏	6.0×2.5 ×0.3	丸窓から内湾し立ち上がるが、口唇部を欠損する。内外壁共篋削きを施す。	①良く緊まる ②石英粒子 ③黒色	
8	壺底部 (土師)	8.0×3.0 ×0.3~0.5	底部から当初直線的に外傾する外壁面は縦の篋削り、内壁面は縦の篋削りであるが、虫喰い状態である。	①普通 ②石英粗粒 ③暗褐色	
9	壺底部 (土師)	7.0×2.0 ×0.5	底部から直接内湾し立ち上がる。底面は篋削りで安定悪い。外壁面は縦の篋削り。	①脆い ②石英粒子 ③灰色	

10	磨削部片 (土師)	6.0×7.5 ×0.3	丸底から内湾して立ち上がる球状を呈す。外壁は縦の鋭削りを施す。	①普通 ②石英粒子 ③黒褐色	
11	敲石	5.3×10.0 ×2.5	一部欠損		砂岩
12	敲石	6.0×7.9 ×5.0	1/3欠損		凝灰石
13	磨石	3.0×8.8 ×2.8	1/2欠損		硬砂岩
14	敲石	3.9×6.6 ×3.0			硬砂岩
15	石核	4.5×5.3 ×3.0			チャート
16	葉片 (弥生)	3.9×6.3 ×0.3	口唇部に鋸歯を施し、上辺3.0cm巾横帯に斜縄文を施した上下片に刺突を横位に、さらにその下辺に櫛歯文が施されている。	①普通 ②石英粗粒 ③黒色	

### 第16号竪穴住居址 (S116) (第31、32図)

本住はSI11、SI15に隣接する。その平面形状は北側の長さ3.60m、南も同じ3.60m、そして東側は3.20m、西で3.50mの方形プランをなす。軸線は10°東方に向けられていた。

壁は15cmと浅く、支柱は全て外壁上に8柱が認められた。そのP1(20cm×33cm×20cm)、P2(20cm×30cm×18cm)、P3(20cm×30cm×15cm)、P4(23cm×30cm×15cm)、P5(22cm×33cm×17cm)、P6(20cm×30cm×17cm)、P7(21cm×30cm×17cm)、P8(25cm×32cm×17cm)となる。本住にはがも貯蔵穴も検出されなかった。土器片は土師器の和泉期と思われる甕、坏片が認められた。



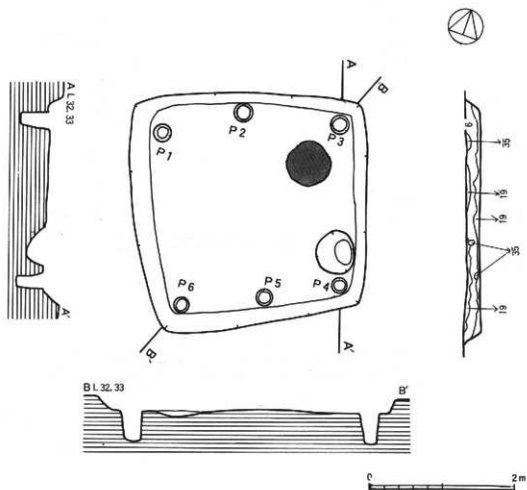
第31图 第16号竖穴住居址平面实测图

第17号竪穴住居址 (S I 17) (第32、33図)

本住はSI18、SI19に隣接する。その平面形状は一辺の長さ全て3.00m正方形プランをなす。そして軸線を約45°東方へ向けて建てられている。

壁高は平均22cmで、主柱は床面に6柱が認められた。そしてそのP1で23cm×45cm×15cm、P2で23cm×40cm×17cm、P3で27cm×37cm×17cm、P4で20cm×38cm×15cm、P5で22cm×40cm×16cm、P6で20cm×40cm×17cmとなる。床面に6柱が建てる住居は珍しい。炉は床面北東部に70cm×60cm×10cmが認められ、そして床面東南部に貯蔵穴60cm×50cm×25cmが計測された。床面は一般に軟らかい。

出土土器は五領期より和泉期に亘る甕片、坏、高坏の脚部等が認められた。なお、遺物については下記の通りとなる。



第32図 第17号竪穴住居址平面実測図



第33図 第17号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 1 7

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器 種	法 量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備 考
1	壺口縁部 (土師)	14.0×6.5 ×9.0×0.9 ~1.0	口縁部は当初垂直に立ち上がり、上辺において外反し、外側に複合口縁を作る。内外壁共に横位の距離でが基調であり胴部と口縁部の接合部は指圧により接着力を因る。	①緊まる ②石英粒子、砂質 ③黄褐色	口縁部 残存 五領式
2	台付き脚 部 (土師)	4.2×5.6 ×9.4×0.4 ~0.6	底縁から円錐状に立ち上がり、胴部と接合する。外壁面は縦に、内壁は横位にそれぞれ刷毛目を施す。	①普通 ②石英粗大粒子混入 ③黒褐色	
3	壺口縁片 及び底部	6.5×4.5 ×0.3~0.5	口縁部は複合口縁を作る。胴部は当初底部から直線的に外傾する。残存外壁面は横位に刷削り両片は同一個体と思われる。	①普通 ②微粒子石英 ③黄褐色	
4	(土師)	11.0×3.0 ×7.0×0.4 ~0.5			

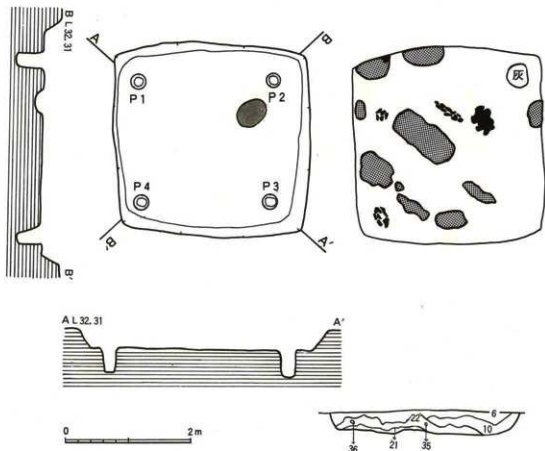


第18号竪穴住居址（S118）（第34、35図）

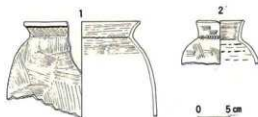
本住はS117、S119に隣接する。その平面形状は北側の長さ3.20m、その南側で3.00m、東で3.00m、西2.70mの不整形の方形プランをなす。そして軸線を約10°東方へ向けられている。

壁高は30cmとなり、支柱は床面に4柱が認められたがそれらは全て住居の中心部に向けて約60°の角度で建てられている。そのP1で24cm×40cm×18cm、P2で24cm×38cm×18cm、P3で27cm×40cm×20cm、P4で24cm×35cm×17cmとなる。床面は平坦で圓い。なお、炉は床面北より50cm×40cm×15cmが認められた。なお、本住は火災にかかったらしく、焼土や炭化財が床面に散乱していた。

出土遺構は土師器片が多く認められた。



第34図 第18号竪穴住居址平面実測図



第35図 第18号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 1 8

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

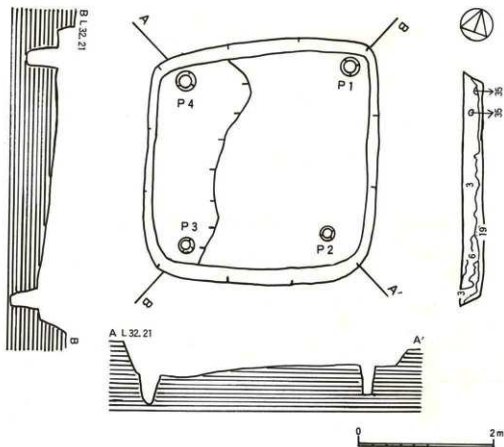
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕片 (土師)	18.0×15.0 ×0.4	内湾する胴部を有し、肩部において内傾し口縁部に接続する。口縁部は直線的に外傾し立ち上がり口唇部において外反を見せる。外壁面は、縦、斜、横の刷毛目を縦横に駆使する。内壁面は上辺のみ横位に刷毛目を施す。	①普通 ②石英粗粒子が散見 ③黒褐色	
2	甕片 (土師)	7.0×7.0 ×12.0× 0.4~0.5	器形は前項と同様である。外壁面は口縁部は横位に荒撫で、胴部は斜右下がりの刷毛目と、横に荒撫でを行い、口縁内壁は横位に刷毛目、胴部に輪痕が残る。	①普通 ②石英粒子多し ③黒褐色	

第19号竪穴住居址 (S I 1 9) (第36、37図)

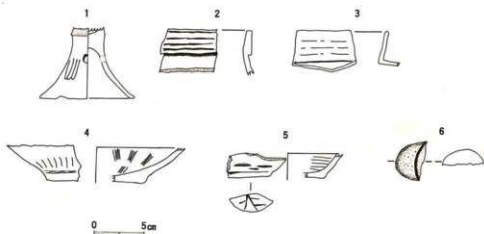
本住はSI20、SI17に隣接する。その平面形状は北側の長さ3.20m、南も同じ3.00m、そして東で3.40m、西で3.20mの不整形の方形プランをなす。そして軸線は約20°東方に向けて建てられる。

壁高は40cm~25cmとなるが、それは本住が東面の傾斜地に造られたからである。支柱は床面に4柱が認められたがP1で30cm×45cm×20cm、P2で25cm×40cm×23cm、P3で20cm×40cm×18cm、P4で30cm×40cm×25cmとなる。床面は平坦で軟らかい。

遺物は全て破片として検出され、土師器の甕片が認められた。



第36图 第19号整穴住居址平面实测图



第37图 第19号整穴住居址遗物实测图

(B) S I - 19

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

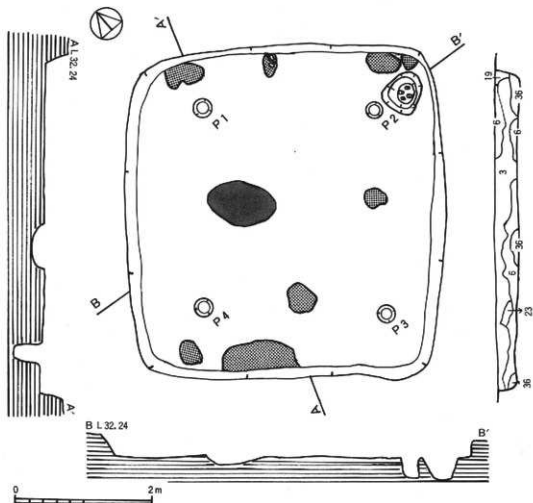
番号	器 種	法 量 cm	器 形 の 特 徴 ・ 整 形 の 技 法	焼 成 ・ 胎 土 ・ 色 調	備 考
1	器台脚部 (土師)	3.0×7.0 ×9.6×0.3 ~1.5	底辺から内傾し立ち上がり、台部と接続する。外壁面は従の篋削り。壁面に3個の径1.0cm円窓を穿つ。	①普通 ②石英粒子 ③黄褐色	
2	壺口縁部 片 (土師)	6.0×5.5 ×0.3~0.6	口縁部は複合となる。外壁は横位の篋削り	①普通 ②燧粒子 ③灰褐色	
3	壺口縁部 片 (土師)	5.5×3.0 ×0.3	口縁部は胴肩部から直線的に外傾し立ち上がる。外壁は横位の篋削り。	①良く緊まる ②燧粒子石英 ③小豆色	
4	甕底部 (土師)	8.0×3.0 ×8.0×0.4 ~1.2	底部から大きく内湾し立ち上がる。外壁は縦の篋削り、内壁は細い刷毛目仕上げが施されている。	①緊まる ②燧粒子石英 ③黒褐色	
5	甕底部 (土師)	8.0×3.0 ×0.6~0.8	残存片は底部から直線的に立ち上がる。外壁は横の篋削り、内壁は横位に細い刷毛目。底面木の葉瓦板。	①普通 ②燧粒子石英 ③外面赤褐色 内面赤褐色	
6	磨石片	6.0×5.0 ×2.5			集塊岩

## 第20号竪穴住居址 (S I 2 0) (第38、39図)

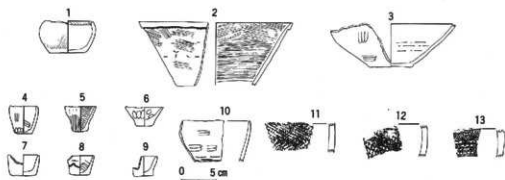
本住はSI14に隣接する。その平面形状は北側の長さ4.60m、南側で4.90m、そしてその東で4.50m、西側で4.50mの方形プランをなす。軸線は約20°東方に向けて建てられる。

壁高は30cmとなり、支柱は床面に4柱が認められた。そのP1で30cm×40cm×20cm、P2で23cm×30cm×20cm、P3で24cm×30cm×15cm、P4で24cm×35cm×18cmとなる。炉は床面中央に100cm×60cm×10cmが計測されたが、割合に規格の整った炉と認められた。貯蔵穴が床面東南コーナーに50cm×60cm×30cmが認められた。床面は凹凸があったが固かった。

出土土器は極めて多く、それは土師器の甕片、器台、燧石等であった。



第38图 第20号竖穴住居址平面实测图



第39图 第20号竖穴住居址遗物实测图

(B) S1-20

(法量 1.口縁径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

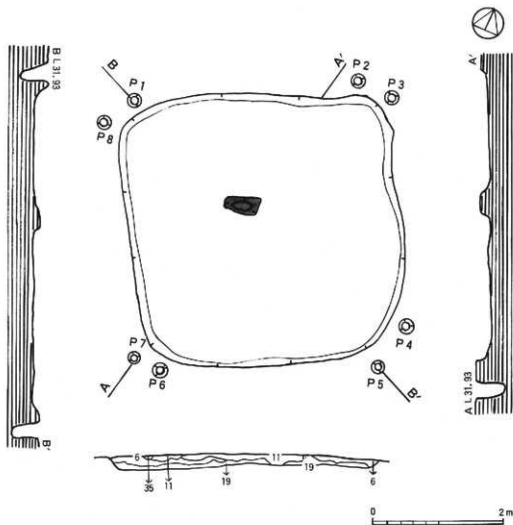
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	小型環 (土師)	6.5×4.5 ×4.8×0.3 ~0.4	平底から内湾し立ち上がり、肩部付近で内傾し口唇部に至る。外壁面は刷毛目が僅かに残る程度である。	①普通 ②微粒子石英、粘土 ③淡黒褐色	完形
2	甗胴部片 (土師)	推定口径 28.0×9.0	底辺から直線的に外傾し口唇部へ至る。口唇部は折り返しの場合となる。内外壁面共に刷毛目を施すが輪痕が残る。	①普通 ②微粒子石英、粘土 ③黄褐色	
3	甗底部片	15.0×3.5 ×5.0×0.3 ~0.4	底部は安定悪く、胴部は内湾する外壁面は縦、横の筥削り、内壁は手撫による。	①普通 ②粘土質 ③黒褐色	
4	小型環	4.0×4.0 ×2.5×0.2 ~0.3	手づくね器であるが、均衡が良い。	①普通 ②粘土質 ③褐色	完形
5	小型環	4.2×3.4 ×2.2×0.2 ~0.3	全体的器形はいびつであるが、内外壁面は刷毛目が施されている。	①普通 ②石英微粒子 ③淡黒褐色	完形
6	小型環	5.4×2.8 ×2.2×0.4 ~0.5	胎土を指先でこねた素雑な作りである。	①普通 ②石英微粒子 ③茶黒色	完形
7	小型環	4.4×3.0 ×4.0×0.3 ~0.5	前項と同じ。	①脆い ②粘土質 ③灰褐色	
8	小型環	4.0×2.8 ×2.8×0.3 ~0.5	外壁は不整形であるが、内壁は刷毛目が施されている。	①普通 ②石英微粒子 ③黒色	
9	小型環	4.0×2.8 ×2.8×0.3 ~0.4	内外壁共に整形悪い。粘土粒子が荒いため脆い。	①脆い ②石英粒子粗 ③黒色	
10	塔口縁部	6.5×6.0 ×0.3~0.5	残存破片外壁面は横位の筥削り内壁面は縦の筥削りが施されている。	①普通 ②石英粒 ③淡黒褐色	
11	深鉢片 (縄文)	7.0×4.0 ×1.1	羽状縄文を施す。	①普通 ②石英粒 ③出色	
12	深鉢片 (縄文)	5.2×4.0 ×0.9	残存破片上縁に横位の沈線二本下位に斜縄文を施す。	①普通 ②粒子細かい ③黒褐色	
13	深鉢片	4.0×4.2 ×0.8	残存破片上部に山形沈線を配し下位に半波竹管文を横位に配す。	①普通 ②石英粒子 ③黒褐色	

第21号竪穴住居址 (S121) (第40、41図)

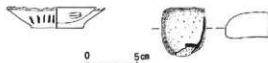
本住はS120、S123に隣接する。その平面形状は一辺が4.00mの正方形プランをなす。軸線を約30°東方へ向けて造られる。

壁高は15cm~10cmとなり、支柱は全て外壁上に8柱が認められた。そのP1 (21cm×40cm×15cm)、P2 (20cm×43cm×15cm)、P3 (23cm×40cm×17cm)、P4 (22cm×40cm×15cm)、P5 (20cm×40cm×13cm)、P6 (23cm×40cm×16cm)、P7 (20cm×42cm×24cm)、P8 (22cm×40cm×24cm)となる。炉は床面少々中央部で50cm×20cm×11cmが計測された。

床面は平坦で軟らかい。なお、床面東南コーナーに50cm×60cm×30cmの貯蔵穴が認められた。遺物は土師器の破片が多くみられた。



第40図 第21号竪穴住居址平面実測図



第41図 第21号竪穴住居址遺物実測図

(B) SI-21

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器 種	法 量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備 考
1	壺底部 (土師)	10.0×1.8 ×5.4×0.3 ~0.5	胴部は当初底部から直線的に外傾する外壁は 縦の寛削り、内壁は横位の寛削りを施す。	①普通 ②微粒子石英、粘 土 ③黒褐色	
2	磨石	4.5×5.0 ×2.5			砂岩

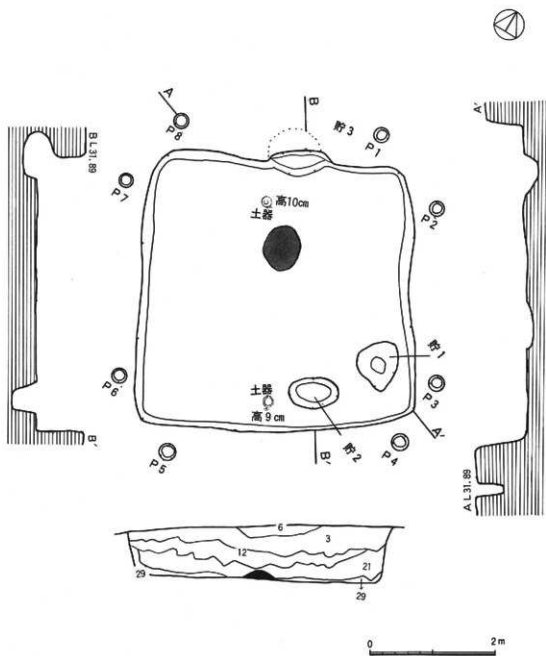
### 第22号竪穴住居址 (SI22) (第42、43図)

本住はエリアの東北端に位置し、SI23、SI24に隣接する。その平面形状は北、南の長さ共に4.30m、そして東と西で4.70mとなり、方形プランをなす。軸線を約30°東方へ向けている。

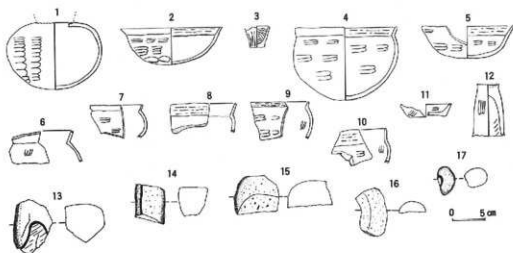
壁高は64cm~90cmとなり極めて重厚な感じである。支柱は全て外壁上に8柱が認められたが、P1 (26cm×46cm×30cm)、P2 (24cm×50cm×18cm)、P3 (22cm×45cm×16cm)、P4 (24cm×45cm×17cm)、P5 (25cm×47cm×18cm)、P6 (24cm×45cm×17cm)、P7 (22cm×45cm×15cm)、P8 (26cm×45cm×20cm)となる。炉は床面中央に70cm×60cm×10cmが計測され、貯蔵穴は2基が検出されたが、そのIは70cm×60cm×25cm×20cmとなり、貯2は50cm×70cm×45cm×33cmが計測された。なお、貯3は貯蔵穴用に造られたものであろうか、北側壁面を掘り込んで造られており、それは巾80cm、高さ60cm、奥行50cmの楕円状を呈していた。遺物等は検出されなかった。

本住は規格の整った極めて重厚な感じのする中型住で、床面は平坦で固く、遺物は多くは破片で出土したが、中には土師器の坏、壺がほぼ完形で見受けられた。





第42图 第22号竖穴住居址平面实测图



第43図 第22号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 2 2

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種 (土師)	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	埴 (土師)	4.5×10.2 ×0.3~0.5	丸底から内湾し、肩部附近で最大に膨らみ、内傾し口縁接続部に至る扁平球状を呈す。外壁は横位に寛磨き。	①良く緊まる ②緻密な粘土、石英粒子 ③赤色	口縁部を除き他は完形
2	坏 (土師)	15.0×6.0 ×0.3~0.4	平底から内湾し立ち上がり口縁部に至る。口縁部は直線的に外傾する。外壁面は横位に寛磨き、口縁内壁は手撫でによる。	①普通 ②微密な石英粒子、粘土 ③赤褐色を基調とするが使用のため煤付着	完形
3	小型坏 (土師)	4.0×3.2 ×2.4~0.3	丸底から僅かに外傾する如く立ち上がり器高1/3附近からさらに直線的に外傾し口唇に至る。整形は内外壁共に刷毛目仕上げ。	①普通 ②微粒子石英 ③淡黒褐色	
4	坏 (土師)	15.5×11.5 ×0.3×0.3 ~0.4	径3.0cmの小さい平底から内湾し立ち上がり肩部にいたり最大の膨らみを見せ内傾して口縁部に接続する。口縁部は直線的に垂直に立ち上がるが、口唇部に至り僅かに外反する。内外壁面は横位に寛磨き、口縁部内外壁は手撫でによる。	①普通 ②微粒子石英 ③黒褐色	完形
5	坏 (土師)	14.0×5.0 ×3.0×0.3 ~0.4	平底から内湾し立ち上がり、最大径となった附近で外反する口縁を作る。内外壁面共横位に寛磨き、口縁部は手撫でによる。	①普通 ②微粒子石英 ③赤褐色	4/5 残存
6	壺口縁部 (土師)	6.0×5.0 ×0.3	大きく張り出し肩部から直線的に外傾する口縁を作る。外壁面は縦位に寛磨きを施す。	①普通 ②微粒子石英 ③褐色	
7	壺口縁部 (土師)	5.5×5.9 ×0.3	球状に膨らんだど胴部から肩部が内傾し、直線的に外傾する口縁部を作る。外壁は横位に寛磨き、内壁は斜位に寛磨きを施す。	①緊まる ②微粒子石英 ③赤褐色	

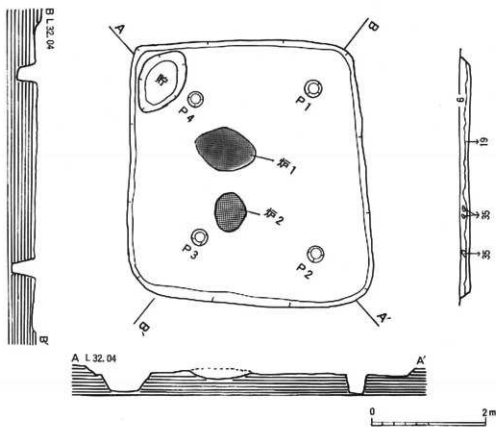
8	裏口縁部 (土師)	6.0×4.5 ×0.3	内傾する肩部から直線的に外傾する口縁部を作る。口縁外壁面は横位に寛幅で、内壁面は手撫でを施す。	①緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色	
9	坏片 (土師)	5.6×5.9 ×0.4	丸底から内湾し立ち上がり、中央部附近で内傾し、直接的に垂直に立ち上がる口縁を作る。外壁面は横位に寛削り、内壁面は縦位に寛幅でを施す。	①普通 ②微粒子石英 ③黄褐色	
10	坏口縁部片 (土師)	6.0×5.5 ×0.3	内傾する肩部からほぼ直線的に僅かに外傾する口縁である。外壁面は横位に寛削り、撫でを施し、内壁面は縦位に寛幅でを施す。	①良く緊まる ②微粒石英、粘土 ③赤褐色	
11	壺底部片 (土師)	7.0×5.5 ×0.3~0.6	やや平坦を欠く底部から直線的に外傾し立ち上がる。外壁面は胴部下辺、底面共に寛削り。	①普通 ②石英粒子 ③淡黒褐色	
12	高外脚部 (土師)	3.4×8.0 ×5.0	台部から僅かに内湾する如く立ち上がり、さらに、肩部附近において内傾して、坏部に接続する。外壁面は従位の寛削り、内壁は紋り。	①普通 ②石英粒 ③淡赤褐色	
13	敲石	6.0×8.0 ×5.5			粘板岩
14	敲石	4.6×6.0 ×4.2			輝石安山岩
15	敲石	6.5×6.0 ×4.0			輝石安山岩
16	磨石	4.5×7.5 ×1.9			集塊岩
17	磨石	2.8×4.5 ×3.0			砂岩
18	敲石片	6.8×6.0 ×4.0			安山岩
19	磨石片	4.0×7.5 ×1.9			砂岩
20	磨石	2.8×4.5 ×3.0			砂岩

### 第23号竪穴住居址 (S123) (第44、45図)

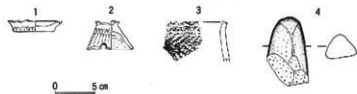
本住はSI22、SI25に隣接して所在する。その平面形状は、その北側で3.80m、南で4.00m、そして東側の長さは4.40m、西側で4.30mを計測する方形プランをなす。そして軸線を約30°東方へ向けて建てられている。

壁高は10cmと極めて浅く、主柱は床面に4柱が認められ、P1で30cm×33cm×18cm、P2で30cm×40cm×15cm、P3で30cm×30cm×20cm、P4で25cm×30cm×25cmとなる。そして北西コーナーの床面に110cm×90cm×30cm、その底径80cm×60cmの貯蔵穴が検出された。本住は床面に炉2基を有し炉(1)で60cm×60cm×10cm、炉(2)で100cm×60cm×15cmとなる。

出土遺物は土師器が多かった。なお床面は固く平坦であったが、規格の整った住居と認められた。



第44图 第23号竖穴住居址平面实测图



第45图 第23号竖穴住居址遗物实测图

## (B) S I - 2 3

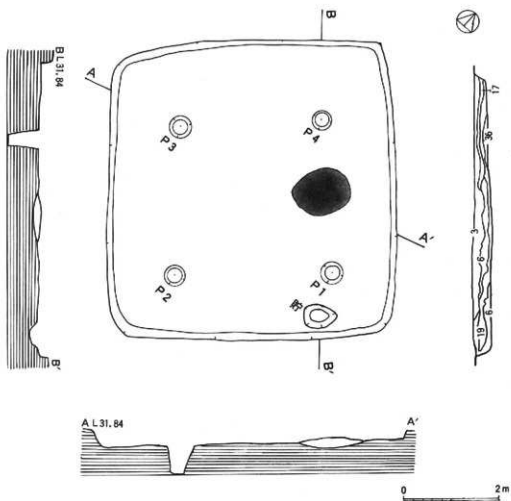
(法趾 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器 種	法 量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備 考
1	壺底部 (土師)	7.0×1.3 ×5.8	底部両壁を指圧により胴部と接続整形し底面は篋削りによる。	①普通 ②石英粒子 ③黒褐色	
2	壺台脚部 (土師)	3.0×3.8 ×6.0	円錐状に立ち上がった脚部に台部が接続する。脚壁に径1.0cmの凹窓を穿つ。外壁は縦に、内壁は横にそれぞれ篋削きをかける。	①紫まる ②微粒子石英 ③黄褐色	
3	深鉢片 (縄文)	5.0×5.5 ×0.9	頸部附近の残存片であり、所直に直線的に立ち上がる胴部から口縁部は直線的に外傾する。外壁口縁部は横位に篋削きの山形文を配し、胴部はL Rの太線を施す。	①普通 ②微粒子石英 ③黒色	
4	敷石	5.0×9.0 ×4.5			輝石安山岩

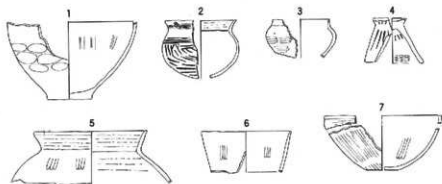
## 第24号竪穴住居址 (S I 2 4) (第46、47図)

本住はSI23に隣接して所在する。その平面形状は北、南側共に6.00m、そして東で5.60m、西で5.40mの方形プランをなす。そして軸線を約35°東方へ向けて建てられている。

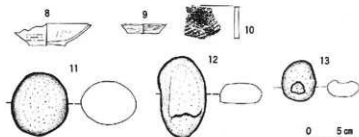
壁高は40cm～30cmとなり、支柱は床面に4柱が認められたが、P 1は40cm×65cm×25cm、P 2で45cm×58cm×30cm、P 3で42cm×55cm×30cm、P 4で50cm×60cm×40cmとなる。炉は床面北側に検出されたが、110cm×80cm×15cm、が計測された。なお、床面東壁面に60cm×50cm×20cmの貯蔵穴があった。床面は固く平坦であった。そして本住は中型住としては規格のよい部類に属し、出土遺物も破片が多かったが、数多く検出された。特に壺、杯等は半形品として出土した。



第46图 第24号竖穴住居址平面实测图



第47图 第24号竖穴住居址遗物实测图



(B) S I-24

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

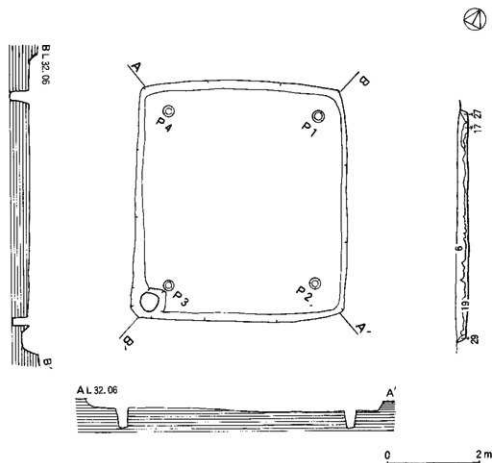
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕底辺部 (土師)	20.0×12.0 ×6.8×0.4 ~0.6	底部から内湾する如く立ち上がる。外壁面は横位の篋削りを施す。内壁面は縦に篋削りが施されている。	①普通 ②石英粒子広く内外壁面に露出 ③黒褐色	和泉式
2	坏 (土師)	11.0×9.0 ×0.3	丸底扁平球状を呈し、口縁は僅かに外反する。外壁面は上辺に横位に、胴部は斜右下がり、底辺は横位に刷毛目を施す。	①普通 ②微粒子石英 ③黄褐色	
3	坏 (土師)	12.0×5.0 ×0.2~0.5	丸底に内湾しながら立ち上がり、胴部において最大の膨らみとなり口縁部に接続する。口縁部は直線的に垂直に立ち上がる。外壁面は横位の篋削り、内壁は手撫による。	①良く緊まる ②緻密な粘土、石英粒子 ③褐色	
4	台付蓋脚部片 (土師)	3.0×6.8 ×0.3~0.5	底辺から直線的に内傾しながら立ち上がり胴部と接続する。外壁面は従位の篋削り、内壁は上辺は縦に下辺は横位に篋削りによる。	①普通 ②石英微粒子 ③黒褐色	
5	甕口縁部 (土師)	17.0×8.0 ×22.0× 0.3~0.4	内湾した胴部から直線的に外傾する口縁部である。外壁面胴部は縦の篋削り、口縁部内外壁及び胴部内壁は手撫で。	①緊まる ②石英粒子微粒 ③黒褐色	
6	埴口縁部 (土師)	14.0×6.4 ×11.0× 0.3	口縁部は直線的に外傾し立ち上がる内外壁面は縦の篋削り。	①緊まる ②石英粒子 ③丹塗り	
7	甕底部 (土師)	18.0×7.0 ×4.5×0.3 ~0.4	底部中央に径1.5cmの内孔を穿ち、底辺から胴部は内湾し立ち上がり、口唇部に至り垂直となる。口唇部断面はM字状となる。	①普通 ②石英粒子 ③黄灰色	
8	甕底部 (土師)	12.0×3.5 ×5.5× 0.3~0.4	底辺から直線的に外傾して立ち上がっている。外壁面は横篋削り、内壁面は縦の篋削り。	①普通 ②砂質 ③黄褐色	
9	甕底部 (土師)	7.0×0.5 ×5.0×0.4 ~0.5	底辺から直線的に外傾し立ち上がっている外壁面は横位の篋削り。内壁面は横位の刷毛目。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色	
10	深鉢片 (縄文)	5.5×5.0 ×0.5	直線的に立ち上がった胴部を有する器で外壁面はL Rの太縄文を施す。	①普通 ②石英微粒子 ③丹黄褐色	
11	敲石	8.0×10.0 ×6.5			硬砂岩
12	敲石	12.0×12.5 ×3.0			凝灰岩
13	磨石	5.5×6.3 ×2.8			硬砂岩

第25号竪穴住居址 (S125) (第48、49図)

本住はSI23、SI26に隣接する。その平面形状は、その北側の長さ4.80m、南でも同じ4.80m、そして東5.10m、西でも同じく5.10mの方形プランをなす。そして軸線を約30°東方へ向けて建てられている。

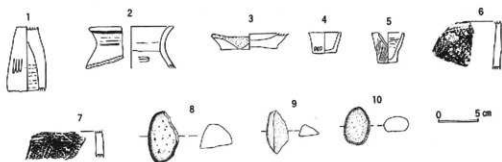
壁高は15cmと浅く、支柱は床面に4柱が認められたが、P1で25cm×40cm×25cm、P2で24cm×40cm×20cm、P3で23cm×37cm×20cm、P4で25cm×40cm×20cmとなる。炉は床面からは認められなかった。そして床面南西コーナーより60cm×20cm×40cmの貯蔵穴が検出されたが、貯蔵穴があれば炉がなければならぬが、多分炉は外であったものであろうか。床面は軟らかく少々凹凸が認められた。

出土遺物は土器類が多く、土師器の高坏胴部や脚部、甕片が検出された。



第48図 第25号竪穴住居址平面実測図





第49図 第25号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 25

(法量 1.口縁径 2.高さ 3.厚さ 4.底径 5.高台径)

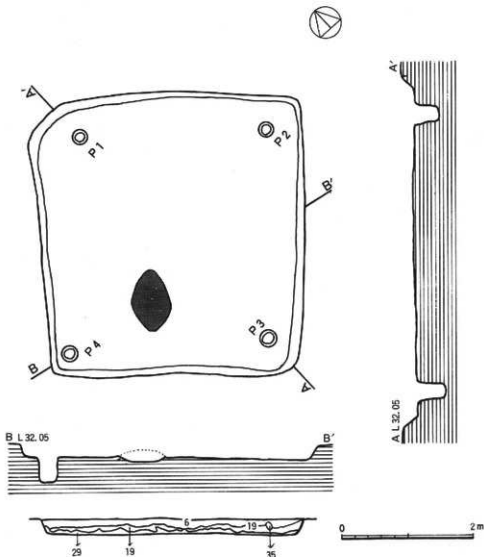
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高坏胴部 (土師)	2.5×8.0 ×4.5	底辺から当初直線的に垂直に立ち上がるが、肩部付近において内傾する。外壁は縦の篦削り、内壁は指撫で。	①緊まる ②石英粒子 ③朱塗り	
2	壺口縁片 (土師)	7.0×5.0 ×0.5	内傾する肩部から、口縁部は垂直に立ち上がり口唇部に至り外反する。内外壁面は篦削り。	①普通 ②石英微粒子 ③褐色	
3	壺底部 (土師)	9.0×2.0 ×7.0×1.0 ~1.3	底面は篦削りにより荒く仕上げられる。	①普通 ②石英微粒子 ③黒褐色	
4	小型坏 (土師)	4.0×2.5 ×3.0×0.3 ~0.4	手づくね器である。指頭で仕上げ。	①普通 ②砂粒 ③灰色	完形
5	小型坏 (土師)	4.0×3.8 ×2.2×0.2 ~0.3	手づくね器である。内外壁は刷毛目の使用痕を残す。	①普通 ②微粒胎土 ③黄褐色	
6	深鉢片 (縄文)	5.5×6.0 ×1.0	残存部片上縁に2条の沈線を横位に下辺は右下がりの斜縄文を施す。	①普通 ②石英粒子も入る ③黒褐色	
7	深鉢片 (縄文)	7.0×3.0 ×0.9	山形沈線で区画し、斜縄文を施す。	①普通 ②微粒子、石英、 胎土	
8	磨石片	4.0×3.0 ×3.0			輝石安山岩
9	磨石片	3.0×0.6 ×0.5	使用面を僅かに残し他は欠損。		硬砂岩
10	磨石	4.5×3.5 ×2.5			安山岩

第26号竪穴住居址 (S126) (第50、51図)

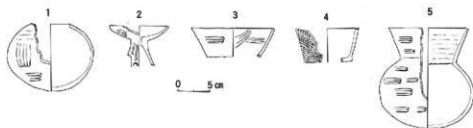
本住はSI25、SI26に隣接する。その平面形状は、北と南側の長さ4.20m、東と西で4.00mが計測されたが、方形プランをなしていた。そして軸線を約35°東方向に向けられていた。

壁高は20cmとなり、支柱は床面に4本が認められたが、P1で26cm×20cm×40cm、P2で23cm×20cm×40cm、P3で30cm×40cm×20cm、P4で30cm×40cm×18cmとなる。炉は床面中央部少々南側で、90cm×50cm×15cmが計測されたが、貯蔵穴は認められなかった。

出土遺物は土器器片が多く、それは高坏、壺片、坏等が床面より検出された。



第50図 第26号竪穴住居址平面実測図



第51図 第26号壺穴住居址遺物実測図

(B) S I - 26

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

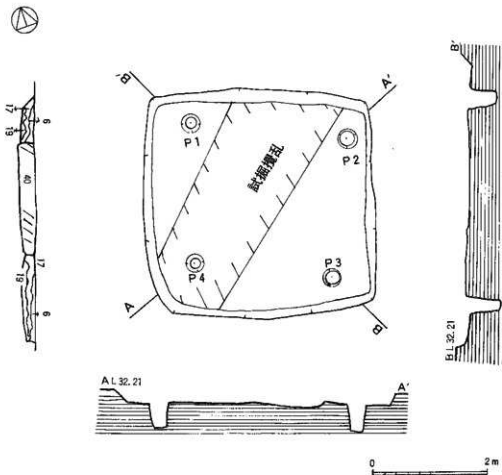
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	6.0×10.5 ×0.3~0.4	丸底から球状に内湾し口唇部に至る。外壁面、上辺下辺部は横位に、中央部は縦位に篋削り。	①普通 ②砂質 ③黄褐色	1/2残
2	甕台片 (土師)	9.0×6.5 ×0.3~0.5	底縁から直線的に内攻し立ち上がり受け皿と接続し、受皿は僅かに内湾し口唇部に至る。外壁面、受皿部は斜めに、脚部は縦位に篋削り。受皿中央から脚部中央に径1.0mの円孔を貫通する。	①良く緊まる ②緻密な粘土 ③赤色	
3	甕口縁片 (土師)	13.0×4.5 ×0.4	脚部から70°外反して立ち上がる甕の口縁片である。外壁面は横位の篋削り、内壁は横位に刷毛目。	①普通 ②砂質、石英粒子 ③黄褐色	
4	深鉢底部片 (縄文)	6.0×6.0 ×0.4~0.5	底部から僅かに垂直に立ち上がったあと直線的に外傾する。外壁面は羽状縄文を施す。	①普通 ②石英微粒子 ③褐色	
5	甕 (土師)	12.5×15.5 ×0.3~0.4	丸底から扁平化した球状の胴部から上辺脚部において内傾し口縁部へ接続する。口縁部は直線的に外傾し立ち上がる。外壁面は口縁部を含め横位の篋削り。内壁面は手撫でを施す。	①普通 ②石英粒子多し ③黄褐色	和泉式 2/3 残 存

第27号竪穴住居址 (S I 2 7) (第52、53図)

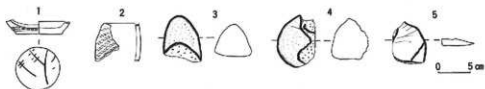
本住はエリアのほぼ中央部に当たり、SI28に隣接する。その平面形状は、北と南側で3.60m、そして東と西側は3.90mの規格の整った方形プランをなす。そして軸線は約20°東方に向けられる。

壁高は10cm×20cmと浅く、支柱は4本が認められたが、P1で30cm×20cm×45cm、P2で30cm×24cm×47cm、P3で30cm×25cm×55cm、P4で27cm×23cm×20cmとなる。炉は床面からは認められなかったが、外炉になっていたものか。床面試掘の所にあったか。貯蔵穴も検出されないが、床面は固くて平坦であった。

出土遺物は土師器の小片が多かったが、石砲丁と縄文土器片も見受けられた。なお、土師器釜底部に木葉江痕が認められた。



第52図 第27号竪穴住居址平面実測図



第53図 第27号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 2 7

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

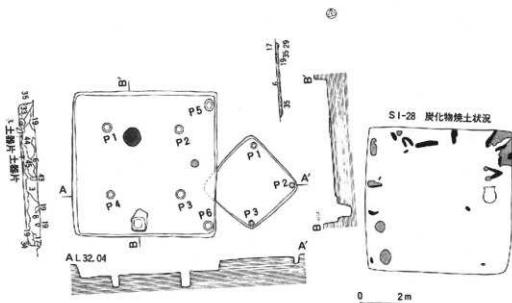
番号	器 種	法 量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備 考
1	深鉢底部 (縄文)	10.0×2.0 ×7.0×0.8 ~1.0	底部から外反して立ち上がる底部に木の葉圧痕。	①普通 ②石英粗粒 ③褐色	
2	深鉢片 (縄文)	3.8×5.8 ×0.7	斜縄文を施す。	①普通 ②石英粗粒 ③褐色	
3	磨石	7.0×7.5 ×5.0			1/2残 安山岩
4	磨石	5.0×8.5 ×6.5			1/2残 角閃安 山岩
5	削器	5.1×6.2 ×1.0			けつ岩

### 第28号竪穴住居址 (S I 2 8) (第54、55図)

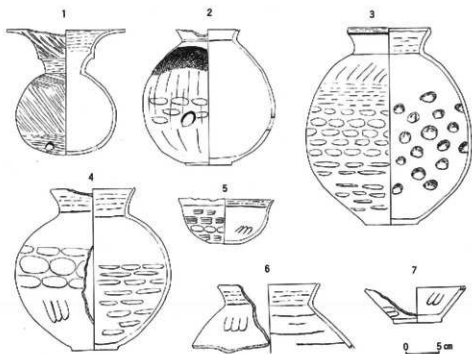
本住はSI26に隣接し、SI29の北側を少々切り込んでいる。その平面形状は全壁面の長さが7.20mの正方形プランをなす。そして軸線を約10°東方に向けている。

壁高は65cmと重厚な感じをもち、主柱は全て床面で4柱が検出され、そのP1で45cm×30cm×60cm、P2で45cm×30cm×55cm、P3で45cm×30cm×55cm、P4で45cm×30cm×55cmとなる。なお、P5(40cm×30cm×20cmはP2の、P6(40cm×30cm×15cm)はP3の補助柱として建てられたものか、炉は床面少々中央部に90cm×70cm×10cmが認められた。貯蔵穴は60cm×60cm×40cm(方形)が計測された。そしてこれは有段状に造られていた。なお、本住は廃屋になってから火災にかかったものか、炭化材と焼土が床面に散乱していた。

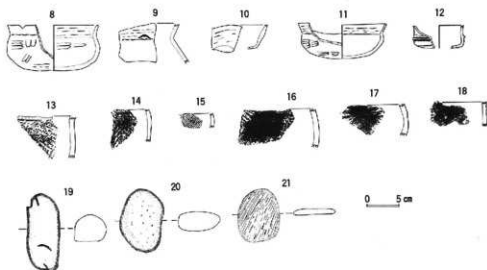
遺物については土師器が数多く出土したが、特に壺3、坏が認められ、縄文土器片(安行一式か)弥生土器片も出土した。床面は固く平坦となっており、そしてこの住も規格のよい大型住と認めてよさそう。



第54图 第28号竖穴住居址平面实测图



第55图 第28号竖穴住居址遗物实测图



(B) S I - 2 8

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器 種	法 量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色割	備 考
1	壺型土器 (土師)	18.2×19.2 ×0.4×4.0	胴部は大きく内湾して立ち上がり中央部付近で最大径に膨らみ爾後内傾して頸部に至る扁平球状のやや膨れした部を呈し、口縁部は僅かに外反して立ち上がり複合する口縁部が極端に外反する。底部附近に径2.0cmの円窓を穿つ。外壁面は丹念に篋削りが施されている。	①緊まる ②緻密な粘土、石英粒子 ③丹塗り	復元完形 五領式
2	壺 (弥生)	10.0×21.0 ×0.3~0.4 ×7.0	胴部は大きく内湾して立ち上がり中央部付近で最大の径に膨らみ、内傾して頸部に至る扁平球状を呈する。口縁部は僅かに外反して立ち上がる外壁面は篋削りの後、縦位の手撫でを施すが細かい傷を残しざらついている。更に肩部に巾3.2cmの掛糸文を施す。胴部に2.0×3.0cmの窓を穿つ。	①普通 ②石英粒子 ③丹塗り	口縁部を除き 完形 弥生系統
3	壺 (土師)	12.6×30.5 ×0.4~0.5 ×8.0	胴部は大きく内湾し立ち上がり大きく膨らみ、内傾して頸部に至る球状をなす。口縁部は總やかに外反し乍ら立ち上がり口唇部において僅かに内傾ぎみに縁取りが施され、均衡の取れた作品である。外壁面は横位の篋削りと、肩部に斜めの刷毛目痕が残されている。内壁面は口縁部は横の刷毛目、胴部は石の叩き痕を残す。	①良く緊まる ②石英微粒子 ③赤褐色	完形 五領式
4	壺 (土師)	14.0×25.0 ×7.0×0.6 ~0.8	底部から内湾し立ち上がり、中央部よりやや上部付近で最大膨らみを見せ内傾して口縁部に達する。口縁部は当初かすかに外反しその後外反角度が大きくなる。外壁面は中央部附近は横位に、下辺部は縦位に篋削り口縁内外共に手撫で、内壁面は横位に篋削り。	①緊まる ②砂質及び石英粒子 ③茶褐色	2/3残 五領式

5	坏 (土師)	14.5×7.0 ×4.5×0.3 ~0.5	底部から内湾して立ち上がり、最大膨らみを示す時点で口縁部に接する口縁部は直線的に外傾する。外壁は横位の寛削り、壺で、内壁は斜めに手撫で、口縁部は内外面共にかかる刷毛目。	①普通 ②石英及び雲母微粒子 ③黒褐色	ほぼ完形 和泉式
6	甕口縁部 (土師)	13.0×14.0 ×0.4~0.5	内湾した胴部をもつ甕で、内傾した肩部から直線的に外傾した口縁部が立ち上がるが、口唇部において外反する。外壁面は縦位の寛削りを施し、内壁面は輪積板が層然と残っている。	①普通 ②石英粒子 ③黒褐色	
7	甕底部 (土師)	16.0×5.5 ×7.0×0.8 ~1.0	底部から僅かに内湾する立ち上がり部分のみ残存するが、球状を呈する甕であろう。外壁面は横位に内壁面は斜左下がりに寛削り、底面に木の葉状痕残る。	①普通 ②石英粗粒子 ③黒褐色	
8	坏 (土師)	14.0×7.0 ×0.3	帯る底から内湾して立ち上がり、肩部付近で最大膨らみとなり、僅かに内傾して口縁部と接続する。口縁部は直線的に外傾し立ち上がる。外壁面は縦横、斜めの寛削り、内壁面は横位の手撫でを施す。	①普通 ②石英粒子 ③黒褐色	1/3残
9	甕口縁片 (土師)	6.0×6.0 ×0.5	内湾する胴部から、直線的に外傾する口縁部である。内外壁共横位の寛削り。	①普通 ②微粒石英 ③赤褐色	
10	坏片 (須恵)	5.0×4.0 ×0.3~0.4	平底から僅かに内湾して立ち上がる底面は非常に薄く胴部は厚い。		
11	坏 (土師)	14.0×5.2 ×0.4	丸底から内湾し立ち上がり肩部付近で最大径となり僅かに内傾して口縁部に至る。口縁部は直線的に外傾する外壁面は横位の寛削りによる他に同一個体の口縁部片11.0×8.0あるが復元不可能である。本器は当該住居地の貯蔵穴内にあったものである。	①普通 ②石英粒子多し ③黒褐色	3/5 残存 和泉式
12	坏片 (須恵)	4.0×2.0 ×0.4	ロクロ整形の坏の立ち上がり部位であるが、平面の底面から直線的に垂直立ち上がっているようである	①緊まる ②緻密な粒子、石英 ③灰色	
13	深鉢片 (縄文)	5.5×6.5 ×0.8	深鉢の頸部附近の破片であり、外壁文様は上部に山形の沈線を配し、下部は斜縄文を施す。	①普通 ②石英粗粒子 ③黒色	
14	深鉢片 (縄文)	4.0×5.0 ×0.8	深鉢の口縁部の一部と胴部の一部残存するものであるが、器形は僅かに内湾する膨らみをもつ器で、口縁部は僅かに内傾を示す。外壁は口縁部と胴部の接ぎ部分に凸帯を横位に、口縁部は竹管文を横位に、胴部に斜縄文を施す。	①普通 ②石英粗粒子 ③黒色	
15	壺片 (弥生)	2.0×3.8 ×0.2	細かに斜縄文を施した胴部残存部分。	①普通 ②微粒粘土 ③茶褐色	
16	深鉢片 (縄文)	8.5×6.0 ×0.6	隔壁面上縁に斜縄文、その下位に横位に刺突文を2列に記し、胴部全般に斜縄文が施されている。	①普通 ②石英粒子 ③黒色	
17	深鉢片 (縄文)	7.0×4.8 ×0.5	口縁部は横位に半截竹管文を配し、胴部から下辺胴部へかけて斜縄文を施す。	①普通 ②石英粒子 ③黒色	



18	深鉢片 (縄文)	6.0×3.5 ×0.4	横位に沈線が施されている。	①普通 ②雲母微粒子 ③暗褐色	
19	敲石	5.0×11.5 ×4.0	3ヶ所使用による亀裂を生ず。		輝石安 山岩
20	敲石	7.0×10.0 ×3.1			輝石安 山岩
21	磨石	6.5×8.5 ×1.0			玄武岩

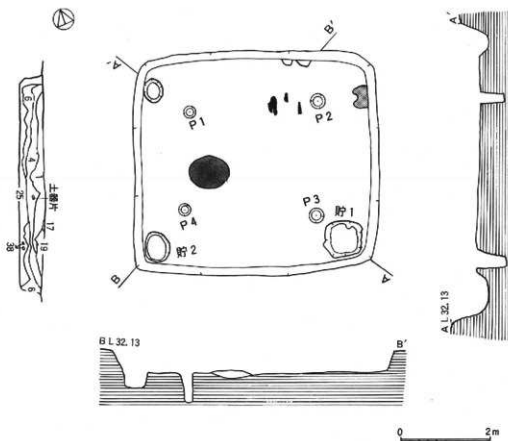
### 第30号竪穴住居址 (S130) (第56、57図)

本住はSI29に隣接する。その平面形状は北側の長さ5.10m、南側で5.30m、東4.50m、西で4.70mとなり不整形方形プランをなす。そして軸線を約30°西へ向けている。

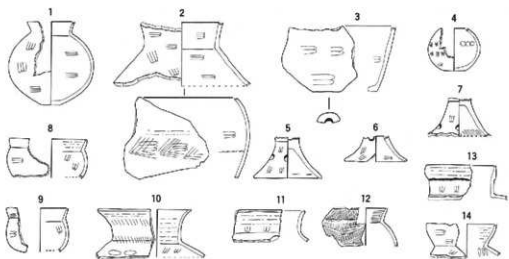
壁高は52cmとなり、支柱は全て床面に4柱が認められた。P1で30cm×23cm×50cm、P2で32cm×20cm×55cm、P3で30cm×20cm×65cm、P4で30cm×20cm×62cmとなる。なお、P5は貯蔵穴になるものなのか、45cm×40cm×20cmが床面西北コーナーに認められた。炉は床面中央部よりいくらか西側にかたよって70cm×70cm×15cmが認められた。更に本住には貯蔵穴2基が検出されたが、貯(1)で65cm×52cm×32cm、そして底径は50cm×40cmとなり、貯2で80cm×80cm×25cm、そして70cm×70cmとなる。

床面は平坦で固かったが、床面に焼土や炭化材が僅かに散乱していた。

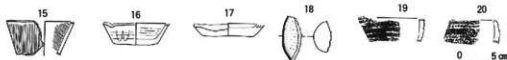
出土遺物は土師器の破片がおびただしく、また、礫石も2が検出された。



第56图 第30号竖穴住居址平面实测图



第57图 第30号竖穴住居址遗物实测图



(B) S I - 3 0

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	7.0×12.2 ×3.0×0.3 ~0.4	小さい(径3.0cm)丸底の底部から内湾し立ち上がり肩において内傾し球状を呈する。口縁部は頸部から直線的に外傾し立ち上がる。外壁面は胴部上辺から中辺へかけて縦位に、下辺は横位に、内壁面は横位にそれぞれ寛削りを施す。	①普通 ②微粒子石英 ③黄褐色	4/5 残存
2	壹冑、口縁部 (土師)	12.0×9.0 ×20.0× 0.4~0.6	内傾する肩部から直線的に外傾する口縁部を作る。外壁面、口縁部および頸部は横位に、肩部は斜位にそれぞれ寛削りを施す。内壁面、口縁部および肩部は横位にそれぞれ寛削りを施す。	①胎土の骨材粒子 広い ②石英粒子 ③黒褐色	
	同上 胴部片	12.2×11.5 ×0.5	上記口縁部と同一個体である。内湾した胴部をもち、外壁面は横位の寛削りと刷毛目を施し、内壁面は横位の寛削り、輪痕を残す。		
3	甗片 (土師)	10.0×8.5 ×0.6	底辺に1.5cmの円孔を穿つ平底から直線的に約45°外傾する胴部を作る。内外壁面は横位の寛削りを施す。	①普通 ②石英粒子 ③黄褐色	
4	小型壺 (土師)	3.5×6.5 ×3.0×0.3 ~0.4	平底の底部から内湾し立ち上がり肩部で内傾する球状の小型器である。外壁面は小刻みに横位に寛削り、内壁は指圧により整形を施す。	①普通 ②微粒子石英 ③淡赤黄色	1/2残
5	器台脚部 (土師)	3.6×6.0 ×10.0× 0.3~10.0	円錐状に立ち上がった脚部の頸部で折損する。外壁は縦位に寛削り、内壁は横位に寛削りを施す。脚壁に径1.0cmの円窓3個を穿つ。	①普通 ②微粒子石英 ③黄褐色	
6	器台脚部 (土師)	3.5×3.5 ×9.5×0.3 ~0.5	円錐状に立ち上がった中央部附近で折損する。外壁は縦位に、斜位に寛削り、内壁は横位に寛削りを施す。脚壁に径1.0cmの円窓3個の痕跡を残す。	①普通 ②微粒子石英 ③黄褐色	
7	器台脚部 (土師)	3.2×5.4 ×9.0×0.4 ~0.5	円錐状に立ち上がった台部接縁部および下縁部で欠損する。外壁部は縦位の寛削り、内壁は刷毛目を施す。脚壁に径1.0cmの円窓3個を穿つ。	①焼き緊まる ②石英粒子 ③赤褐色	
8	坏片 (土師)	12.0×7.0 ×0.3~0.4	内湾した胴部が肩部において内傾し直線的に外傾する口縁部を作る。外壁面は横位に内壁面は斜位に寛削りを施す。	①焼き緊まる ②微粒子石英粒子 ③赤褐色	
9	坏片 (土師)	15.0×7.0 ×0.3~0.4	前項と同じ。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色(内面黒色)	

10	覆口縁部 (土師)	13.0×7.0 ×0.3	口縁部は内傾した肩部から直線的に外傾して立ち上がり、さらに上縁において外反し、口唇部に至る広い口縁部である。外壁面は斜位に刷毛目を施し、内壁面は横位に篋撫でを施す。	①普通 ②砂質多し ③黄褐色	
11	壺口縁部片 (土師)	7.0×4.5 ×0.3~0.4	内傾した肩部から口縁部は外反して立ち上がる。外壁面は上辺横位に篋撫で、頸部附近は縦位の篋削りを施す。	①堅く緊まる ②微粒子 ③褐色	
12	壺口縁及び胴部片 (土師)	6.0×5.5 ×0.3	内傾した肩部から外反して立ち上がる口縁部をもつ。外壁面全般及び口縁部内壁は刷毛目を施す。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色	
13	壺口縁部片 (土師)	6.0×5.0 ×0.3~0.5	肩部から直線的に外傾し立ち上がり、口縁外壁上部に複合口縁となる。外壁複合部は横位の篋撫で、下辺は縦位に篋削りを施す。	①普通 ②砂質多い ③黄褐色	
14	増口縁部片 (土師)	10.0×4.5 ×0.3~0.5	内傾する肩部から口縁部が僅かに内湾する如く立ち上がる。外壁面、肩部は斜位に、口縁部は横位に篋削り、内壁面肩部は縦位に篋削り口縁部は横位に篋撫でを施す。	①普通 ②石英粗粒子混入 ③黒赤色	
15	増口縁部片 (土師)	6.1×5.0 ×0.5	口縁部は直線的に外傾する。外壁面は従位に、内壁面は斜位に刷毛目を施す。	①普通 ②石英微粒子 ③淡黒褐色	
16	壺底部 (土師)	10.0×3.0 ×6.5×0.5 ~1.2	器底が僅かに丸みを帯びている作りから、胴部は内湾し立ち上がる。外壁面は縦位の深い篋削りを施した後、横位に篋撫でを施す。内壁は横位に篋撫でを施す。底内壁に亀裂が生じている。	①堅く緊まる ②全般的に微粒石英であるが粗粒が散見される。 ③赤褐色	
17	壺底部 (土師)	11.4×2.2 ×7.6	不均一な底面及び底部の作りである僅かに残る立ち上がりは直線的に外傾する。	①普通 ②石英粗粒子 ③黒褐色	
18	磨石	2.8×6.5 ×4.5			安山岩
19	浅鉢片 (縄文)	6.0×3.0 ×0.3~0.5	浅鉢の口縁部附近の残存片であり等間隔の巾、横位に半竹管文を施す。	①普通 ②石英粒子 ③黒色	
20	深鉢片 (縄文)	5.5×3.1 ×0.3~0.5	深鉢の口縁部、横位に貝殻文を施す。	①普通 ②石英粒子 ③茶褐色	

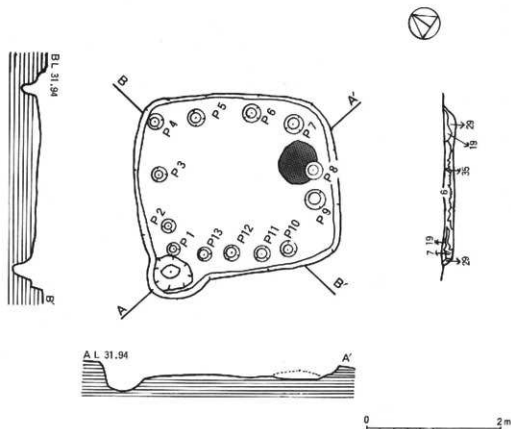
第31号竪穴住居址 (S I 3 1) (第58、59図)

本住はSI30に隣接する。その平面形状は、一辺が2.70mの正方形プランをなす。そして軸線を約25°東方にむける。

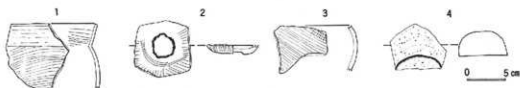
壁高は20cmとなって浅く、その支柱は床面に13柱が認められた。本住は小型住に属するが、極めて狭い床面にその支柱が、西側に3、北側に4、東側3、南側3がたてられている。そのP 1 (22cm×22cm×13cm)、P 2 (20cm×20cm×20cm)、P 3 (20cm×15cm×17cm)、P 4 (25cm×20cm×16cm)、P 5 (25cm×25cm×20cm)、P 6 (24cm×20cm×15cm)、P 7 (26cm×23cm×17cm)、P 8 (26cm×26cm×15cm)、P 9 (24cm×20cm×16cm)、P 10 (25cm×25cm×15cm)、P 11 (20cm×20cm×15cm)、P 12 (23cm×20cm×14cm)、P 13 (20cm×24cm×15cm) となる。

炉は床面東南部に小規模のものが認められ、それは35cm×30cm×10cmとなる。また床面西北コーナーに50cm×40cm×20cm、底面径35cm×30cmの貯蔵穴が少々壁面外にはみ出した形で検出された。床面は平坦で軟らかい。

出土遺物は土師器片が多く、特に燧片が数多くみとめられた。



第58図 第31号竪穴住居址平面実測図



第59図 第31号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 3 1

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1. 2. 3.	台付壺片	11.0×8.5 ×0.4  7.5×7.0 ×0.5  6.5×6.1 ×0.4	No 1, No 2, No 3 は同一個体である。 1. 胴部及び口縁部の一部であるが、内湾した胴部から直線的に外傾し立ち上がった口縁部をもつ。 2. 胴部と台部の接合部分 3. 胴部の最大膨らみ部分。外壁面は共に刷毛目仕上げ、内壁面、口縁部は刷毛目、その他は算刷りが施されている。	①緊まる ②緻密石英、粘土 ③黒褐色	
4	燧石	7.5×6.0 ×3.0			凝灰岩

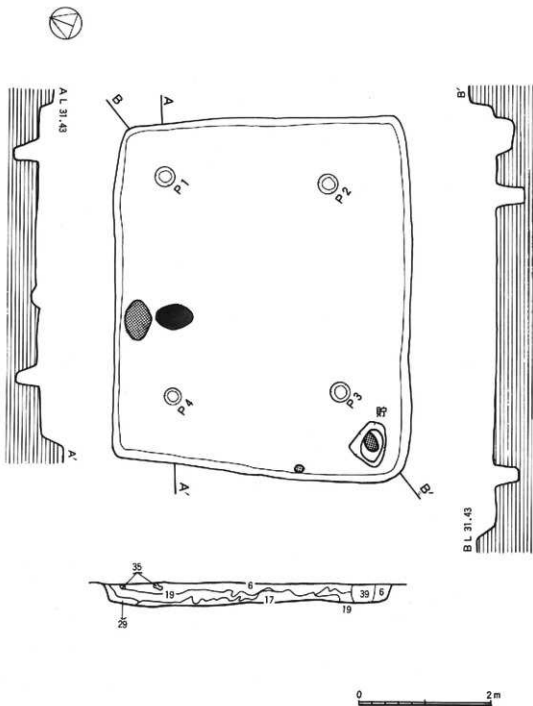
### 第32号竪穴住居址 (S I 3 2) (第60、61図)

本住はエリア東端に位置し、SI34に隣接する。その平面形状は北側と南側で5.00m、そして東4.30m、西側4.50mの方形プランをなす。軸線は約50°東方を向いている。

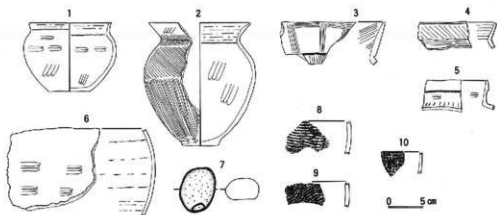
壁高20cm～30cmとなるが、これはその台地が谷津におちこむ斜面に建てられたから谷津に近い壁高が20cmとなったわけである。炉は床面中央部少々北寄りに50cm×40cm×10cmが計測されたが、それは極めて貧弱なものであった。

支柱は床面に4柱が認められたがP 1で30cm×25cm×17cm、P 2で30cm×40cm×18cm、P 3で30cm×45cm×22cm、P 4で30cm×30cm×20cmとなる。床面南西コーナーに貯蔵穴が設けられたが、その底部に焼土が認められ、土師器の壺の胴部が出土した。規格は65cm×50cm×30cm、そして底径は45cm×30cmとなる。床面は軟らかく平坦となっていたが、その床面には壁面近く焼土が3ヶ所ぐらい散在していた。炭化材は認められなかった。

本住の床面より弥生後期の土器片8片を検出したが、同じ床面より五領期の土器片が混在していることである。もっとも弥生後期の遺構は下木有戸C遺跡より6軒も検出されたことから、500m位いしか離れていないB遺跡にも弥生後期の遺構は存在したかも知れない。更にまたC遺跡より何かの形で持込まれたものかも知れない。



第60图 第32号竖穴住居址平面实测图



第61図 第32号竪穴住居址遺物実測図

(B) S1-32

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・管形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	小型壺 (土師)	11.5×10.0 ×6.0×0.3 ~0.4	平底から内湾し立ち上がり肩部で最大の膨らみを見せ、その後内傾して口縁部に接続する。口縁部は僅かに外反する。内外壁面共に篋磨きかかる。	①良く緊まる ②微粒子石英 ③赤褐色	完形
2	壺 (土師)	15.0×18.0 ×5.5×0.3 ~0.5	底部から内湾して立ち上がる肩部で内傾し口縁部と接続する。口縁部は直線的に外傾し口唇に至る。外壁面は上辺は斜に、中央~下辺に至り縦に刷毛目をかける。内壁は斜に篋磨きかかる。	①良く緊まる ②微粒子石英 ③赤褐色	2/3 残存
3	壺口縁部 片 (土師)	10.5×6.0 ×0.3~0.6	巾広い口縁が直線的に外傾して立ち上がり口唇に至る。外壁は壁面一杯に櫛描きによる逆台形文様で区画する。内壁は斜に刷毛目をかける。	①良く緊まる ②石英粒子 ③内外共に黒色	
4	台付壺口 縁部片 (土師)	11.0×4.5 ×0.3	口縁部は頸部から直線的に外傾する。口唇部は外側に翻って直載。外壁、口縁は斜に肩部は横に、内壁、口縁、肩部共に横に刷毛目を施す。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色基調に煤 付着	
5	壺口縁部 片 (土師)	6.5×5.5 ×0.3~0.5	口縁部は頸部から直線的に外傾し、複合口縁を作る。内外壁面は横に篋磨り、口縁部と肩部の接続部位は縦位に篋磨りを施す。	①緊まる ②石英粒子 ③黒褐色	
6	壺胴部片 (土師)	18.0×14.0 ×0.5	内湾し立ち上がった球状を呈する胴部で、外壁面は横位の篋磨り、内壁面は輪痕残る縦位の篋磨りを施す。	①普通 ②石英粒子 ③黒赤褐色	
7	磨石	5.0×6.0 ×3.2			安山岩
8	深鉢片 (弥生)	6.0×4.8 ×0.3	壁面は細斜縄文を施す。	①緊まる ②微粒子石英 ③褐色	
9	深鉢片 (弥生)	5.9×3.6 ×0.3	前項に同じ。	①普通 ②石英粗粒多い ③黒色	



10	深鉢片 (弥生)	3.5×3.8 ×0.3	格子目に沈線を施し、さらに細縄文を横位に 施されている。	①普通 ②石英粒子、砂質 ③黒褐色	
----	-------------	-----------------	---------------------------------	-------------------------	--

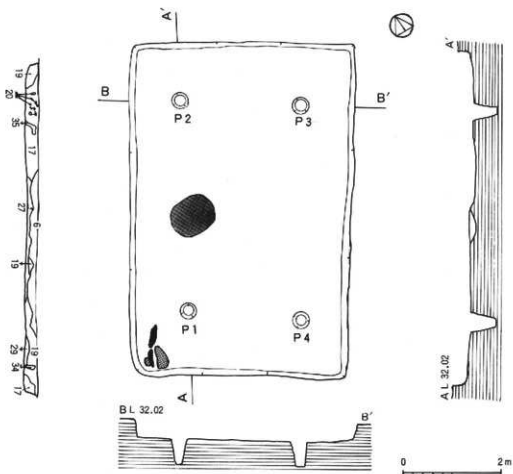
### 第33号竪穴住居址 (S133) (第62、63図)

、本住はSI34、SI32に隣接する。その平面形状は北側と南側で同じく6.80m、そして西と東で共に4.50mの方形プランをなす。そして軸線は約60°東に向けられている。

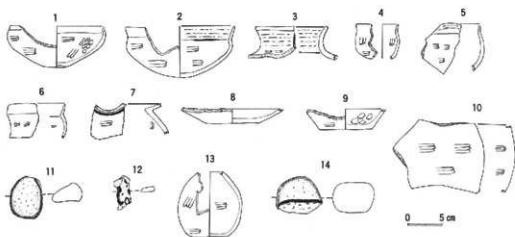
壁高は50cm、そして主柱は全て床面に4柱が認められたが、そのP1で55cm×38cm×20cm、P2で55cm×30cm×18cm、P3で54cm×30cm×18cm、P4で50cm×35cm×20cmとなっており、その規格は大きい。炉は床面中央より少々西方にかたよって造られ、その規格は100cm×90cm×15cmと立派である。

本住はその規格が立派で少々大型の部類に属するものと思われる。床面も平坦で固い。床面一帯に焼土が散乱し、炭化材は極めて少ないが、その一部が火災にかかった住と思われる。

出土遺物は大変に多く、それは土師器片が多く認められた。特に坏、壺片があげられる。なお、特記すべきは鉄製品が検出されたことである。五領期より和泉期に亘る住居より鉄製品が認められたのは本住のみであった。



第62图 第33号竖穴住址平面实测图



第63图 第33号竖穴住址遗物实测图

## (B) SI-33

(法址 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

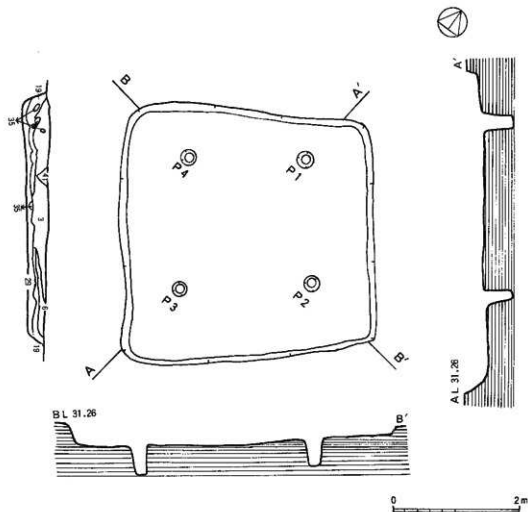
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 (土師)	13.8×6.0 ×2.8×0.3 ~0.4	底辺中央部の凹んだ底面から当初直線的に外傾し立ち上がり、肩部附近において内湾し垂直に立ち上がる口縁部を作る。外壁面は横位の篋削り、内壁面は上辺を横位に、下辺及び底辺を縦位に篋削りを施す。	①普通 ②微粒子石英 ③赤褐色	2/3 残
2	坏 (土師)	16.0×7.5 ×0.3~0.6	丸底から緩く内湾し立ち上がり肩部にいたり内傾し直線的に外傾する口縁に接続する。内外壁面共に横位の篋削りを施す。	①緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色	2/3 残
3	甕口縁部 (土師)	10.0×4.0 ×0.6	口縁部は本体頸部から外反し立ち上がり口唇部においてさらに外反角度大となる。内外壁共に刷毛目を施す。	①普通 ②微粒子石英 ③褐色	
4	坏口縁部 (土師)	8.0×5.0 ×0.3~0.4	内湾する肩部に直線的に外傾する口縁を作る。外壁面は上辺は横位に、下辺は縦位に篋削りが施されているが不均一である。内壁面は縦位に篋削りを施す。	①普通 ②微粒子石英、粘土 ③赤色	
5	坏口縁部片 (土師)	5.0×7.5 ×0.3~0.6	内湾する肩部に直線的に僅かに外傾する口縁を作る。内外壁面は横位に篋削りを施す。	①普通 ②微粒子石英、粘土 ③赤褐色	
6	坏口縁部片 (土師)	4.8×5.3 ×0.3~0.4	器形は前項同様である。内外壁面共に片念な篋削きを施す。	①焼き緊まる ②石英粒子 ③黒褐色	
7	甕口縁部片 (土師)	5.7×4.5 ×0.3~0.5	極端に肩の張った本体頸部から直線的に外傾する口縁部を作る。外壁面は横位の、内壁面は縦位の篋削りによる。	①普通 ②微粒子石英 ③黒色	
8	甕底部 (土師)	15.0×2.0 ×8.0×0.5 ~0.8	胎土、焼成、調整の不具合による壁面の剥離により胎土が露出しそのために器形が崩れている。	①脆い ②石英粗粒子及び砂質 ③黒褐色	
9	甕底部 (土師)	12.0×3.0 ×8.0×0.3 ~0.5	底辺から直線的に外傾し立ち上がっている。外壁面は横位の篋削り、内壁面は剝離虫喰いの状態である。		
10	甕胴部片	13.0×9.0 ×0.3~0.4	内湾した肩部をもつ器で、外壁面は横位の篋削りを施す。		
11	磨石	4.5×6.2 ×2.9			砂岩
12	刀子片	2.0×5.0 ×0.5			
13	小型甕	3.0×10.0 ×5.4	底辺から内湾し立ち上がる肩部において内傾する。外壁面は斜位に篋削り底辺部は横に篋削り、内壁面は横位にそれぞれ篋削りを施す。	①器 ②微粒子石英、粘土 ③黒色	
14	磨石	6.5×4.0 ×4.4			安山岩 1/2残

第34号竪穴住居址 (S I 3 4) (第64、65図)

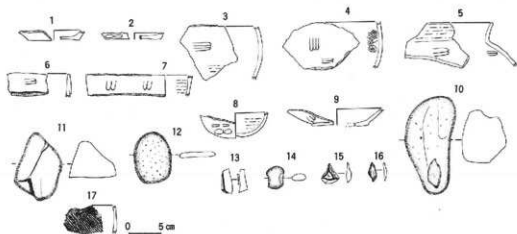
本住はエリア東端に位置し、SI32に隣接する。その平面形状は北側3.80m、南の長さ3.60m、そして東側で4.00m、西3.90mの少々不整形の方形プランをなす。そして軸線を約40°東方に向けて建てられている。

本住は斜面に造られたからその壁高20cm~35cmとなっており。支柱は床面に4柱が認められたが、P 1で55cm×33cm×15cm、P 2で43cm×30cm×20cm、P 3で45cm×26cm×15cm、P 4で44cm×25cm×15cmとなる。なお、柱のむきはP 1で斜め内側にかたむき、P 3、P 4は外側にかたむいて建てられる。そして床面は軟らかく平坦となっていたが、貯蔵庫と炉は認められなかった。

出土遺物は壺、坏片が認められた。



第64図 第34号竪穴住居址平面実測図



第65図 第34号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 34

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

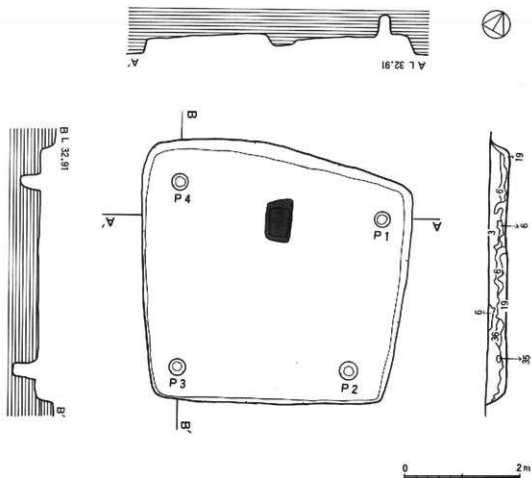
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺底部 (土師)	7.8×5.0 ×0.4~0.6	底面中央部が僅かに凹み窪磨きをかけるが、外壁は表面処理荒い。胴部は底部から直線的に外傾する。	①普通 ②砂質 ③黒褐色	
2	壺底部 (土師)	8.0×4.5	底面中央部は僅かに凹み窪磨き、胴部は底部から直線的に外傾する。外壁面は横位の窪削り。	①普通 ②微粒子石英 ③黒色	
3	壺胴部片 (土師)	9.0×8.5 ×0.5	内湾する胴部で、外壁面は横位の窪削り、内壁面も同様である。	①普通 ②微粒子石英 ③黒色	
4	壺胴部片 (土師)	11.5×6.0 ×0.4	内湾する胴部を持ち、外壁面は横位と縦位の窪削り、内壁面は剝離虫喰いの状態である。	①普通 ②微粒子石英 ③黒褐色	
5	壺口縁部片 (土師)	9.5×6.5 ×0.6	内傾した肩部から口縁部は弧を描くように外反する。口唇部は丸く縁どる、口縁外壁は窪磨き、口縁内壁は全面剝離、胴部内外壁は横窪削りを施す。	①良く緊まる ②石英微粒子 ③黒色煤	
6	壺口縁片 (土師)	7.0×4.5 ×0.3~0.6	僅かに残る頸部から直線的に外傾し立ち上がり複合口縁となる。内外壁は窪磨きによる。僅かに残る頸部外壁に刷毛目あり。	①緊まる ②石英微粒子 ③黄色	
7	壺胴部 (土師)	22.0×0.4 ×0.5	輪転みにより形整されたもので、その継ぎ目部分から分離残存したものである。外壁は縦窪削り、内壁は横の窪削り痕残り、また剝離面多い。	①普通 ②石英粗粒子 ③赤褐色	
8	小型壺底部片 (土師)	10.0×4.5 ×1.2×0.3 ~0.4	径1.2cmの僅かな凹みをつける底面から内湾して立ち上がる。外壁面は横窪削り、内壁は横窪磨き。	①脆い 握れ状態悪く ひび割れ。 ②微粒子石英 ③黄褐色	

9	焼底部片 (土師)	8.0×5.5 ×0.3~0.8	篋削りを施した底部から直線ぎみに外傾し立ち上がる。外壁面は斜篋削りを施す。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色、内面煤	
10	敲石	7.0×15.0 ×0.8			砂岩
11	敲石	6.5×10.5 ×5.5			石灰岩
12	磨石	5.5×7.5 ×1.0			安山岩
13	磨石片	1.8×3.8 ×1.3			粘板岩
14	磨石	2.8×3.5 ×1.5			硬砂岩
15	石錐	2.5×3.3 ×0.9			黒曜石
16	細石刃	1.2×2.8 ×0.4			チャート
17	深鉢片 (弥生)	6.0×4.5 ×0.4	上辺に横帯に縁描文、その下位にRLの細網文を施す。	①普通 ②石英粒子多い ③黒色	

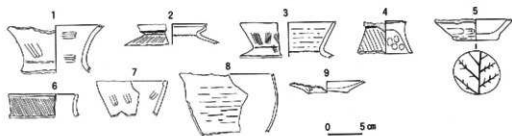
### 第35号竪穴住居址（S135）（第66、67図）

本住はエリア最西端に位置し、SI36に隣接する。その平面形状は北側で3.80m、南の長さ3.40m、そしてその東は4.00m、西3.90mの方形プランをなす。そして軸線を約35°東方に向けて建てられている。

壁高25cmと浅く、主柱は全て4柱が認められるが、P1で30cm×30cm×20cm、P2で30cm×30cm×20cm、P3、P4も同じく30cm×30cm×20cmとなる。炉は床面中央部より少々北側に造られているが、それは60cm×40cm×10cmとなる。床面は平坦で固い。出土遺物の多くは破片となる。



第66图 第35号竖穴住居址平面实测图



第67图 第35号竖穴住居址遗物实测图

(B) S I - 3 5

(法量 1.口縁部深 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器 種	法 量 cm	器 形 の 特 徴 ・ 整 形 の 技 法	焼 成 ・ 胎 土 ・ 色 調	備 考
1	帯口縁部 (土師)	推定 14.0×6.8 ×11.0× 0.4~1.0	胴部との接続部から直線的に外傾し立ち上がり、口唇部においてさらに外傾する。外壁面は斜右下がりに、内壁面は横位にそれぞれ寛削りをなす。	①青通 ②石英粗大混入 ③赤褐色	
2	帯口縁部 (土師)	7.0×2.5 ×7.0×0.3 ~0.35	球状に膨らんだ胴部をもつ器で、口縁部は胴部接続部から直線的に約60°外傾し、さらに口唇部は垂直に立ち上がる。外壁面は斜左下がりの刷毛目仕上げ。	①青通 ②微粒石英 ③黄色	
3	斐口縁部 片 (土師)	8.0×3.5 ×8.2×0.4	口縁部は直線的に外傾する。外壁面は、斜位の刷毛目、内壁面は横位にそれぞれ刷毛目を施す。	①紫まる ②石英粒子 ③褐色	
4	台付斐胴 部片	6.0×4.6 ×8.0×0.4 ~1.0	底縁から直線的に内攻し立ち上がり胴部と接続する。外壁は斜右下がりに刷毛目、内壁は手撫でを施す。	①青通 ②石英粗 ③褐色	
5	斐底部	10.0×2.5 ×6.0×1.0	底縁から徐々に外反し立ち上がる。外壁は下縁附近において横位の寛削りが見られる。底部に木の葉状痕跡やかである。	①青通 ②石英粗粒子 ③黒褐色	
6	壺口縁片 (土師)	17.0×3.1 ×0.3~0.5	口縁部は頸部から僅かに外反し立ち上がる。外壁面は斜めに刷毛目、内壁は横に寛削りを施す。	①焼き緊まる ②石英粗粒多い ③茶褐色	
7	小型環口 縁部片 (土師)	15.0×6.0 ×0.3~0.5	胴部は直線的に外傾し立ち上がり、口唇部に達し、口唇部は内側に折り曲げる。内外壁面は斜位に寛削りを施す。	①青通 ②石英粒子多く砂質 ③黒褐色	
8	台付斐胴 部片 (土師)	8.0×10.0 ×0.3	内湾した胴部をもつ。内外壁面は横に寛削りを施す。器壁が薄い。	①青通 ②石英粒子 ③黒褐色 (外壁面は使用のための煤厚い)	
9	斐底部片 (土師)	6.0×1.9 ×0.3~1.0	底面中央は凹みをもつ、平底よりの底部から大きく外傾して立ち上がる。外壁底部附近は斜に寛削りを施す。	①固く緊まる ②石英粒子 ③黒褐色	

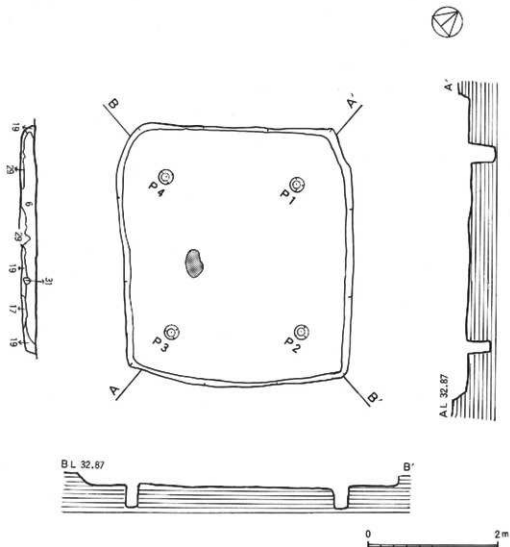


第36号竪穴住居址 (S I 3 6) (第68、69図)

本住はSI35に隣接する。その平面形状は北側3.30m、その南で3.40m、東4.00m、西で3.90mの方形プランをなす。そして軸線を約45°東方向に向けている。

壁高20cmと浅く、支柱は床面に4柱が認められた。そしてP1で38cm×23cm×20cm、P2で26cm×26cm×30cm、P3で25cm×33cm×15cm、P4で23cm×25cm×20cmとなる。炉は床面中央部より少々西方側に40cm×30cm×不明が認められたが、破壊されている。床面は軟らかく平坦であった。

遺物は全て破片となって検出されたが、壺片が多かった。



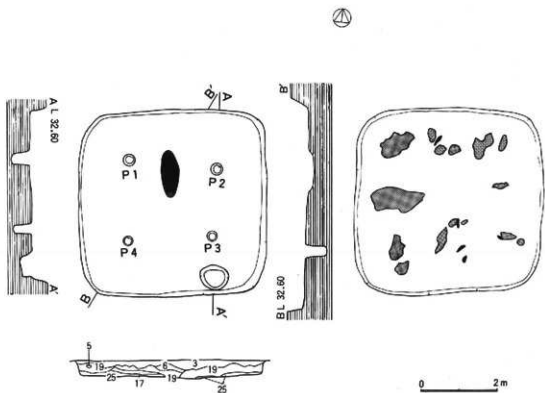
第68図 第36号竪穴住居址平面実測図

第37号竪穴住居址（S137）（第69、70図）

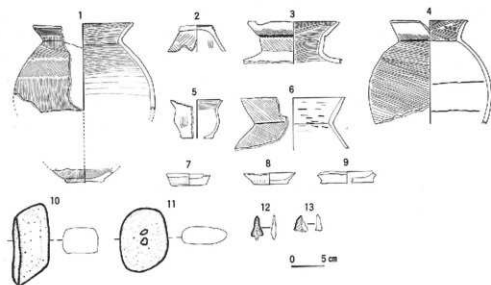
本住はSI18、SI38に隣接する。その平面形状は一辺の長さが4.70mの正方形プランをなす。そして軸線を約10°東方に向けて建てられている。

壁高は45cmと重厚な感じで、支柱は全て床面に4柱が認められるが、そのP1で55cm×30cm×20cm、P2で50cm×35cm×20cm、P3で45cm×27cm×20cm、P4で55cm×30cm×25cmとなる。炉は床面稍々中央に1.20m×80cm×15cmが計測された。なお、本住にも貯蔵穴が認められたが、それは60cm×30cm×40cm、となる。

本住は中型住としては床面も平坦で固く、炉も大きく、重厚な感じの住居である。本住も火災にかかったものか焼土と炭火材が床面に散乱していた。遺物については下記のとおりである。



第69図 第37号竪穴住居址平面実測図



第70図 第37号竪穴住居址遺物実測図

(B) S1-37

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	裏口縁胴部片	11.0×13.5 ×0.3~0.4	内湾した胴部をもつ球状の器で胴部で内傾し、外反する口縁部と接続する。外壁面は口縁部上辺で横位に、口縁部と頸部の接続面で縦位に、胴部上辺で斜位に、さらに胴部下辺で角度を変えて斜位に、胴部中央部は縦位にそれぞれ刷毛目を施し、内壁面は全般的に横位に刷毛目が施されている。同一個体と思われる底部が残存し内外壁の刷毛目は同様である。	①緊まる ②石英粒子 ③黒褐色	胴部 1/3 残存 底部 1/2 残存
2	台付頸脚部片	4.6×4.4 ×0.3~0.5	底辺から内傾し立ち上がり、台部と接続する。外壁面は刷毛目、内壁は鏡削り。	①普通 ②緻密粘土 ③黒褐色	
3	壺口縁部(土師)	14.0×6.5 ×0.5~0.6	内傾した胴部から頸部が垂直に立ち上がり、さらに複合する口縁部が大きく外反する。内外壁共に刷毛目仕上げとなっている。	①普通 ②石英粒子多い ③黄色	
4	裏口縁部片(土師)	推定 13.0×22.0 ×0.4~0.5	球状の胴部を有し、その内傾した胴部から口縁部は直線的に外傾する。口縁部内外壁及び胴部外壁面は斜位に刷毛目が全面にかかる。胴部内壁は輪襖痕残る。	①普通 ②砂粒粒、石英粒子 ③茶褐色を基調とするが、外壁全面に煤付着	1/3残
5	小型壺片(土師)	6.0×6.0 ×4.0×0.3	平底から内湾して立ち上がり胴部において内傾し、直線的に外傾した口縁部となる。外壁面は縦に鏡削で、口縁内壁は横に刷毛目を施す。	①普通 ②微粒子石英 ③暗褐色	

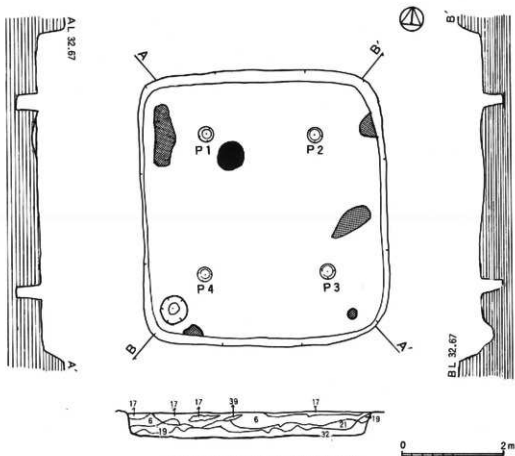
6	腰門縁片 (土師)	10.0×8.0 ×0.3~0.5	胴部との接続部から直線的に外傾する口縁である。外壁面は斜位刷毛目、内壁は横位の筥削り。	①普通 ②微粒子石英、粘土 ③淡黒褐色	
7	竇底部 (土師)	7.0×1.6 ×5.5	平底の底部外壁は縦の筥削り、内壁は刷毛目。	①普通 ②微粒子石英、粘土 ③褐色	
8	竇底部 (土師)	8.0×1.9 ×5.5	平底の底部、内外壁共に筥削り。	①普通 ②石英粗粒 ③赤褐色	
9	竇底部 (土師)	9.0×2.0 ×8.0	平底の底部内壁はひび割れの亀裂縦横に走る。	①納い ②石英粗粒 ③黒褐色	
10	敷石	5.5×18.0 ×4.0			安山岩
11	磨石	8.0×9.0 ×2.8			集塊岩
12	石鏡	2.0×4.0 ×4.0			チャート
13	磨石刃	2.0×2.5 ×0.8			チャート

### 第38号竪穴住居址 (S138) (第71、72図)

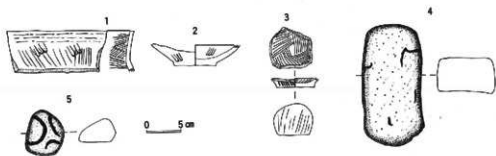
本住はSI37、SI38とはさまれる。その平面形状は北側と南側の長さ共に4.70m、西と東とで同じ5.10mとなり、方形プランをなす。そして軸線を約20°東方に向けられている。

壁高は50cm~40cmと厚く、支柱は床面に4柱が認められたが、そのP1で30cm×37cm×20cm、P2で37cm×30cm×20cm、P3で45cm×32cm×23cm、P4で38cm×30cm×20cmとなる。ピットの規格もよいが、配列も整っている。炉は床面中央部より少々西方側に60cm×50cm×15cmが計測された。また、貯蔵穴は床面西南コーナーに20cm×50cm×30cmが計測された。

本住は中型住としては大変に形の整った住で、床面も平坦で固い。なお、床面に焼土が少々散乱していることから、その一部が火災にかかったものであろうか。



第71图 第38号竖穴住居址平面实测图



第72图 第38号竖穴住居址遗物实测图

(B) S I - 3 8

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

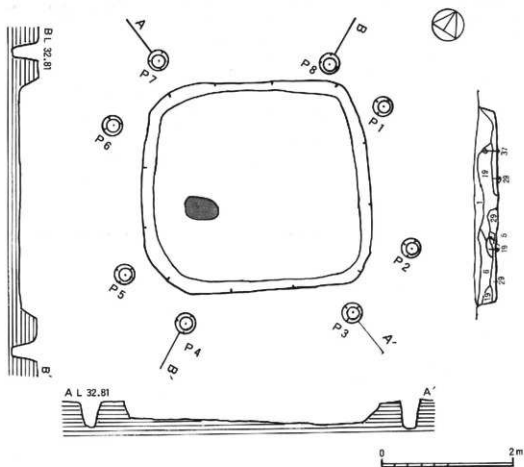
番号	器 種	法 量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備 考
1	裏口縁部片 (土師)	20.0×6.0 ×0.3~0.5	口縁径22.0cmが推定される甕である。口縁部は直線的に外傾し立ち上がる。外壁面は斜位に縦位の篦削り、内壁面は横位の刷毛目を施す。	①普通 ②石英粒子及び砂質 ③褐色	
2	甕底部 (土師)	底径 6.0cm	表面処理の悪い底部である。胴部は底部から直線的に外傾し立ち上がる。内外壁面は篦削りを施す。	①普通 ②砂粒子荒い ③暗黄色	
3	甕底部 (土師)	底径 5.5cm	内外壁面は刷毛目が施されているが、特に内壁底部は渦巻状に刷毛目がかかっている。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色	
4	敲石	7.9×17.5 ×5.0	裏面は剥離する。		輝石安山岩
5	磨石	5.5×6.8 ×3.4			安山岩

## 第39号竪穴住居址 (S I 3 9) (第73、74図)

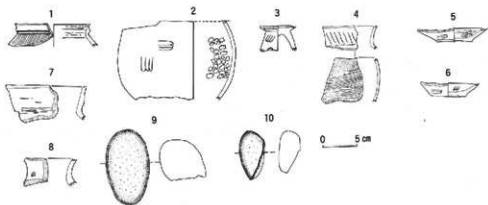
本住はS140に隣接する。その平面形状は北側3.10m、南の方で3.30m、そして東の長さ2.80m、西側で2.70mの方形プランをなす。その軸線を約60°東方に向けられている。

壁高は28cmとなり、支柱は壁面外面に8柱が認められた、そのP 1 (37cm×30cm×28cm)、P 2 (37cm×30cm×45cm)、P 3 (40cm×30cm×20cm)、P 4 (34cm×30cm×20cm) P 5 (40cm×30cm×20cm)、P 6 (37cm×33cm×20cm)、P 7 (37cm×30cm×20cm)、P 8 (37cm×30cm×20cm)となる。炉は床面南側に40cm×30cm×5cmが計測されたが、その規格は小さかった。

遺物については下記に示したとおりとなる。



第73图 第39号竖穴住居址平面实测图



第74图 第39号竖穴住居址遗物实测图

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色面	備考
1	壺口縁部片 (土師)	5.5×3.2 ×0.3~0.5	口縁部は外反して立ち上がるが、外壁に凸帯文様を横位に施し、その位置から口唇部は垂直に立ち上がっている。口縁内外壁は手磨いで、肩部外壁は斜位に刷毛目を施す。	①固く緊まる ②石英粒子 ③灰褐色	
2	集卵部片 (土師)	17.0×12.5 ×0.4	内湾した胴部外壁面上辺は横位に、中央、下辺は縦位に篋削りを施す。内壁面は虫喰い剥離状態である。	①普通 ②石英粒子 ③褐色	
3	器台脚部片 (土師)	5.5×3.0 ×5.0	円錐形状の脚部をもち、脚壁に径1.1cmの円窓4個を穿つ。外壁は縦位の篋削りを施す。	①普通 ②石英粒子 ③褐色	
4	台付頸口 縁部及び 胴部片 (土師)	5.1×3.5 ×0.4  6.0×6.8 ×0.3	内湾する胴部で器壁が薄い。外壁は羽状に刷毛目かかる。口縁は虫喰いの外傾し、更に口唇部において外反する。内外壁は斜位に刷毛目を施す。	①普通 ②石英粒子 ③黒褐色	
5	壺底部 (土師)	8.5×5.5 ×0.3~0.5	中央の僅かに凹んだ底面から大きく外反して立ち上がる。外壁は横位に篋削り、内壁底面は横位に刷毛目かかるが虫喰い剥離する。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色	
6	壺底部 (土師)	7.2×6.8 ×0.5~0.7	中央の凹んだ、しかも調整の悪い底面から大きく外反して立ち上がる。外壁は横位に篋削り、内壁は斜位に篋削りを施す。	①普通 ②石英粒子 ③黒色	
7	壺口縁部片 (土師)	9.0×5.1 ×0.5	口縁部は直線的に外傾し口唇に至る外壁は荒削りの篋削り、内壁は磨きを施す。	①固く緊まる ②石英微粒子 ③赤褐色	
8	壺口縁部片 (土師)	7.0×6.5 ×0.5~1.0	口縁部は分厚な唇部から弧状に外反する立ち上がり、内外壁共に横位に篋削りを施す。	①普通 ②石英粒子、砂質多い ③茶褐色	
9	巖石	6.2×10.5 ×10.7			安山岩
10	巖石	3.5×7.2 ×6.0			硬砂岩

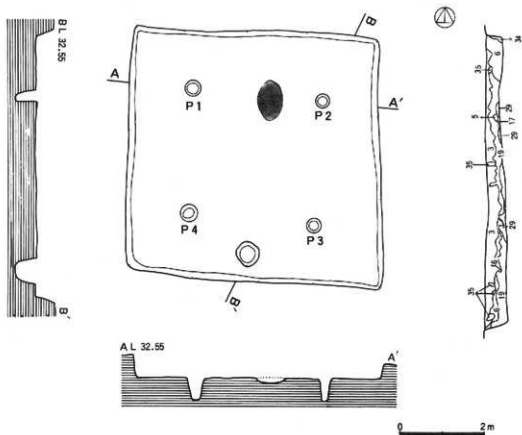
## 第40号竪穴住居址 (S I 4 0) (第75、76図)

本住はSI43、SI38との間に所在する。その平面形状は、北側の長さ9.00m、南側で9.30m、そして西と東に共に9.00mとなり、方形プランをなす。その軸線は約10°東方に向いている。

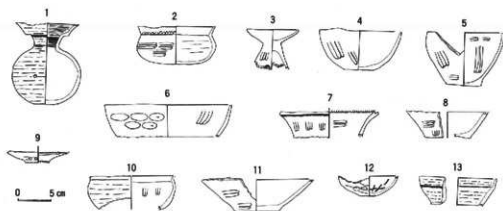
壁高は50cmとなり、支柱は全て床面に4柱が認められたが、そのP1で50cm×40cm×22cm、P2で50cm×32cm×23cm、P3で45cm×35cm×23cm、P4で55cm×40cm×23cmとなる。炉は床面北側寄りに95cm×70cm×10cmが計画された。なお、床面の南側に58cm×50cm×48cmの貯蔵穴があった。

本住の床面は平坦で固く、全体的にみて規格の整った大型住と判断された。床面からの出土遺物は極めて多いが、それは破片となっていた。特に環、甕、壺は数多く見られたが、その主なるものは下記のとおりである。





第75图 第40号竖穴住居址平面实测图



第76图 第40号竖穴住居址遗物实测图

(B) SI-40

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種 (土師)	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕形土器 (土師)	11.5×5.8 ×3.0×0.3 ~0.5	底部から内湾し立ち上がり、胴部中央部附近で最大径となり内傾し口縁部と接続する扁平球状を呈する。口縁部は直線的に僅かに外傾して複合する口縁部に至る。口唇部は大きく外反する。胴中央部に径0.3cmの円窓を穿つ。外壁、胴部は横位に寛削り寛磨き、口縁部は手撫で、口縁内壁は刷毛口かかる。	①緊まる ②石英微粒子 ③黄褐色	五領式 完形
2	杯 (土師)	11.5×5.8 ×0.3~0.4	丸底から内湾し立ち上がり、胴中央部附近で内傾し口縁に至る。口縁は僅かに外反し立ち上がる。外壁胴部は横位の寛削り、胴部と口縁部接点是指頭圧による。	①緊まる ②粘土質 ③黄灰色	ほぼ完 形
3	甕台片 (土師)	8.0×6.0 ×0.3~0.5	脚部は底部から、直線的に内傾し立ち上がり受皿部に接続し、受皿は僅かに内湾しながら口唇部にいたる。脚部外壁は縦位の寛削り、受皿部内外面は手撫でによる。脚部に径1.0cmの円窓3個を穿つ。	①普通 ②石英粒子 ③褐色	
4	杯 (土師)	12.5×6.0 ×4.5×0.3 ~0.4	底部からほぼ直線的に外傾し立ち上がり口縁部附近で垂直する。また口縁の一部に焼成時のものであろうか内ひねりをみせる。外壁面は斜右下がりの荒い寛削りである。	①普通 ②砂質 ③褐色	完形
5	杯 (土師)	11.6×8.2 ×5.6×0.3 ~0.4	底部から僅かに内湾し立ち上がり口縁部附近で垂直に立ち上がり口唇部に至る。外壁上辺は斜右下がりに、底辺部は横に寛削り施す。内壁上辺は横に、下辺は縦にそれぞれを施す。	①普通 ②石英、砂質 ③褐色	2/3残
6	壺口縁部 (土師)	20.0×5.0 ×15.5× 0.4~0.6	口縁部のみ残存するものであるが、本体接続部からほぼ直線的に外傾して立ち上がる。外壁面は横削り、内壁面は縦の寛削りがそれぞれ施されている。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色	
7	壺口縁部 (土師)	15.0×4.0 ×9.5×0.4 ~0.6	口縁部は本体接続部から弧を描き乍ら外反し、さらに口唇部を作るものと思われるが、口唇部の欠落している外壁面は縦に内壁面は横に寛削り。	①良く緊まる ②微粒子石英、粘土 ③褐色の強い、黒色	
8	壺底部片 (土師)	9.5×2.5 ×3.5×0.3 ~0.7	底部中央部が極端に薄く、底面が凹レンズ状にくぼんでいる。胴部底辺は底部から直線的に外傾する。	①普通 ②微粒子石英、粘土 ③外面黒色 内面褐色	
9	高杯片 (土師)	9.5×3.0 ×3.5×0.9 ~1.1	杯部の底部のみ残存するが、杯部は脚部の接続部から約90°せり出す形である。杯部内は凹面なく平坦	①普通 ②石英屑混入 ③赤褐色	
10	杯片 (土師)	16.0×5.0 ×12.0× 0.3~0.5	胴部は内湾し立ち上がり、内傾して口縁にいたる。口縁部は垂直に立ち上がる。外壁面は横位の平削り、内壁は縦に寛削り。	①緊まる ②微粒子石英、粘土 ③丹色	
11	壺底部片 (土師)	18.0×5.0 ×6.8×0.5 ~1.2	底部から直線的に外傾し立ち上がる。外壁は横位の寛削り。	①普通 ②石英粗粒 ③淡褐色	
12	杯底片 (土師)	9.0×3.2 ×2.8×0.2 ~0.3	くぼみのある平底から内湾する胴部を作る外壁は横に寛削り、内壁は底部に副って平削り。	①普通 ②石英微粒子 ③黄褐色	

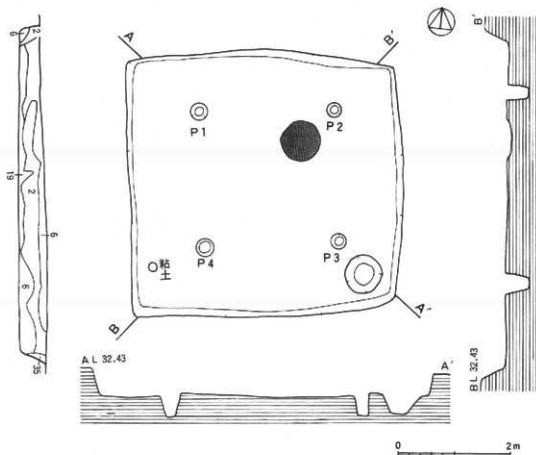
13	壺口縁部 (土師)	9.0×4.6 ×4.0×0.3 ～0.5	胴部との接続から直線的に外傾し立ち上がり、その後口唇部は直線的に垂直に立ち上がる。内外壁共横位の手摺による。	①聚まる ②石英微粒 ③褐色	
----	--------------	-----------------------------	--	----------------------	--

### 第41号竪穴住居址 (S I 4 1) (第77、78図)

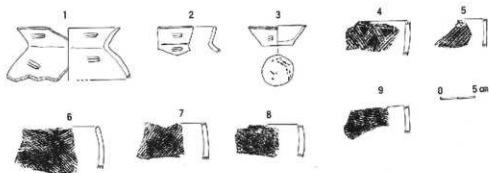
木住はSI40に隣接する。その平面形状は北側の長さ4.80m、その南で4.60m、そして東は4.30m、西で4.60mの方形プランをなす。その軸線は約10°東方に向けられている。

壁高40cm～45cmとなり、支柱は全て床面より4柱が認められたが、そのP1で30cm×25cm×22cm、P2で37cm×30cm×20cm、P3で37cm×30cm×20cm、P4で40cm×30cm×23cmとなる。炉は床面中央部より少々東側に80cm×70cm×15cmと規格の立派なものが認められた。なお、貯蔵穴は床面東南コーナーに37cm×30cm×20cmが計測された。床面は平坦で固く南西コーナーに20cm×20cmの粘土の塊がみられた。

出土遺物はその殆どが破片の土師器であったが、特に斐片、高杯等があげられる。



第77図 第41号竪穴住居址平面実測図



第78図 第41号竪穴住居址遺物実測図

(B) SI-41

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

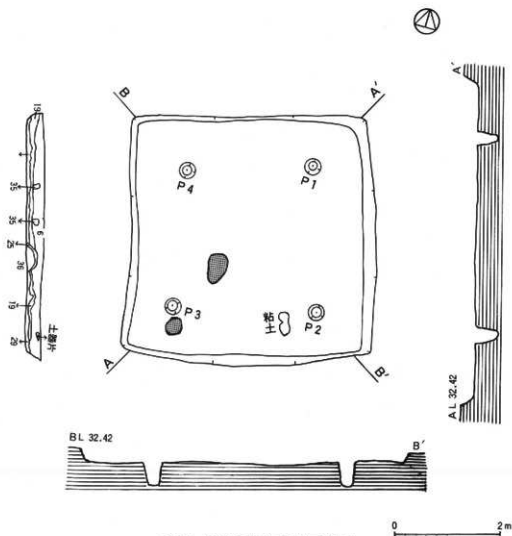
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	大口縁部 (土師)	15.0×7.5 ×17.0× 0.4~0.5	内傾した肩部から直線的に外傾する口縁を作る。口縁部内外壁面は横に寛磨き、肩部外壁は斜めに、内壁は横にそれぞれ寛磨きをかける。	①普通 ②石英粗粒子 ③黒褐色	
2	狭口縁部片 (土師)	5.6×4.5 ×0.4	本器肩部から直線的に外傾する口縁である。内外壁面はよこに寛磨きをかける。	①固く緊まる ②微粒石英 ③赤褐色	
3	塊底部 (土師)	9.0×3.2 ×4.6×0.3 ~0.4	こぶくりの底部から直線的に外傾し立ち上がる。外壁面、底面共に寛磨り。	①普通 ②石英粗粒子混る	
4	深鉢片 (縄文)	8.0×5.0 ×0.7	3条の半截竹管文による山形及び変形に区画する。	①焼き緊まる ②微粒子石英 ③褐色	
5	深鉢片 (縄文)	5.0×4.0 ×0.5	上方に轉突文を横位に配し、その下方にI.Rの細縄文を施す。	①普通 ②微粒子石英 ③茶褐色	
6	深鉢片 (縄文)	8.5×6.0 ×0.8	深鉢の口縁辺であるが、内湾する胴部から、そのまゝ口唇部に至る。外壁面は羽状縄文を施す。内壁面は寛磨り。	①普通 ②石英微 ③黄褐色	
7	深鉢片 (縄文)	6.0×5.0 ×0.7	外壁は斜行縄文を施す。	①普通 ②石英粒子荒い ③黄褐色	
8	深鉢片 (縄文)	6.0×4.0 ×0.6	上部に横位に沈線を施し、下辺に斜縄文を施す。	①普通 ②石英粒子 ③黒色	
9	深鉢片 (縄文)	6.5×4.0 ×0.6	斜縄文を施す。	①普通 ②石英粒子多し ③茶褐色	

第42号竪穴住居址 (S I 4 2) (第79、80図)

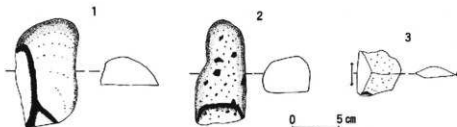
本住はSI43と、SI44との中間に所在する。その平面形状は北側の長さ4.50m、南で4.60m、そして東は4.70m、西で4.40mの不整形方形プランをなす。その軸線は約60°東に向けられている。

壁高30cmとなり、支柱は全て床面に4柱が認められた。そのP1で40cm×28cm×20cm、P2で40cm×33cm×20cm、P3で43cm×30cm×23cm、P4で40cm×33cm×20cmとなり、その規格は大きい。炉は床面には検出されなかった。貯蔵穴もなかった。床面は平坦で固いが、その床面北東側に25cm×30cm×20cmの粘土塊があり、石英の粉末を入れてこねられていた。

遺物については下記に示したとおりである。



第79図 第42号竪穴住居址平面実測図



第80図 第42号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 4 2

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	敲石	6.5×11.5 ×3.0			砂岩
2	敲石	5.5×9.0 ×4.0			凝灰岩
3	敲石剥片	5.0×4.0 ×1.2			花崗岩

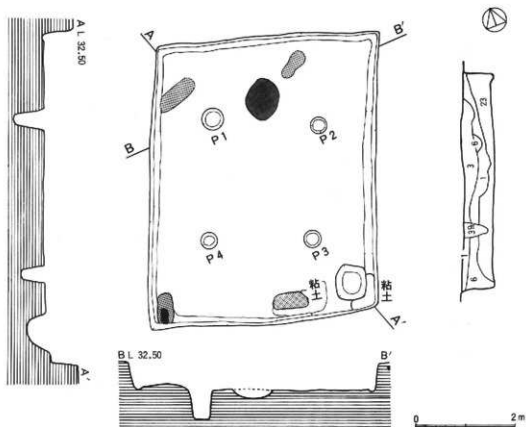
### 第43号竪穴住居址 (S I 4 3) (第81、82図)

本住はSI42に隣接する。その平面形状は北側と南側の長さは同じく4.60m、そして東は5.50m、西で5.70mの方形プランをなす。その軸線は約35°東方に向けられている。

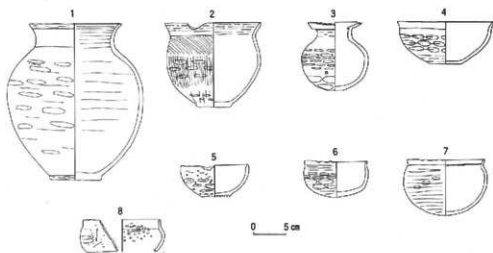
壁高58cmと重厚な感じで、主柱は全て床面に4柱が認められた。そのP1で55cm×40cm×23cm、P2で50cm×30cm×23cm、P3で45cm×30cm×20cm、P4で60cm×35cm×20cmとなり、その規格は割合に大きい。炉は床面北側寄りに88cm×60cm×15cmが計画された。本住には周溝が10cm×5cmの規格で4周していた。貯蔵穴はみられなかった。床面は平坦で固いが、その床面東南コーナーに粘土塊40cm×30cm×20cmが認められた。

本住は中型住としては規格のよい住であるが、その床面に焼土や炭化材が散乱していることから、その一部が火災にかかったものと思われる。

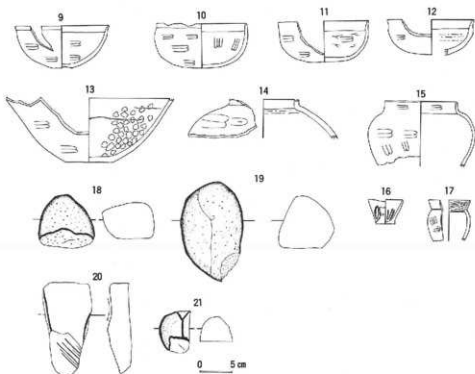
出土遺物は多く、特に甕、坏等が完形で検出されている。



第81图 第43号竖穴住址平面实测图



第82图 第43号竖穴住址遗址文物实测图



(B) SI-43

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 (土師)	14.2×24.2 ×0.5~0.6 ×8.0	胴部は大きく内湾し立ち上がり、中央部付近で大きく膨らみながら内傾して頸部に至る。口縁部はやや直線的に立ち上がり口縁部において外反する。器面の整形は全体的に横位の篋削りを用いる。内面は簡単に刷毛目痕を残す。	①青褐色 ②粘土の微粒子に石英粒 ③使用痕であろう黒く輝いている。	完形 五領式
2	甕 (土師)	14.6×13.0 ×0.3~0.4 ×5.2	胴部は大きく内湾し立ち上がり中央部付近で大きく膨らみ、やや内傾しながら頸部にいたり、口縁部は直線的に外傾する外壁面は横位の篋削りの後、胴部は横位の篋削りの後、胴部は右下がりの、胴部は上から下への刷毛目を施す。口縁部内壁は横の刷毛目、内壁は横の手撫でを施す。	①紫褐色 ②石英粒及び微粒子 ③赤褐色	完形
3	小甕 (土師)	8.0×10.5 ×0.35× 0.4×2.5	底部は径2.5cmと小さく、胴部は内湾しながら立ち上がり、中央部付近で大きく膨らみながら内傾し頸部に至る扁平球状をなす。口縁部は直線的に立ち上がるが、複合部から極端に外反する複合口縁をなす。外壁面は細かに横位の篋削り、口縁部を含む内面は手撫でによるまた胴部のやや下寄りに径0.3cmの小孔を穿つ。	①普通 ②石英微粒子を含む ③紫褐色	ほぼ完形



4	坏 (土師)	15.0×6.5 ×0.3~0.4 ×5.0	径5.0cmの底部を有し、大きく外反しながら立ち上がり、肩部付近で最大径の膨らみとなり、やや外反する口縁部となる。内外壁共に篔削りと手撫でで調整が施されている。	①良く緊まる ②石英微粒子 ③黄褐色	完形 和泉式
5	坏 (土師)	10.5×4.5 ×4.0~0.5 ×4.0	底部の作りは不整形で欠落の状態であるが、底部からの立ち上がりは内湾する如く口縁部に至る。手づくねの器で内厚で外壁は篔削りを施してあるが、ひび割れ虫喰いの状態である。内壁は手撫でによる。	①脆い ②石英粒子 ③淡褐色	ほぼ完形
6	坏 (土師)	9.8×6.0 ×0.3~0.5	丸底篔削りを施した器で、口縁部附近で僅かに稜を有し、口縁部は僅かに外反する。	①普通 ②粘土及び石英微粒子 ③内外共に黒色	4/5残
7	坏 (土師)	12.0×9.0 ×0.3~0.4	丸底から胴部へ内湾し、中央部で最大径となり内傾し口縁に至る。口縁はやや外反し立ち上がる。外壁は横位の篔削り、内壁は横位の手撫でによる。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色	
8	坏片 (土師)	12.0×5.0 ×0.3	胴部が内湾し、口唇部は垂直に立ち上がる。外壁面は横篔削りが見られるが、線傷が多く器面調整が良くない。内壁はむしうしい状態である。	①脆い ②微粒子石英 ③茶褐色	
9	坏 (土師)	14.5×6.5 ×3.0×0.4 ~0.5	僅かに安定を保ち得る小さな平底から内湾して立ち上がる。肩部に至り僅かに内傾し直線的に立ち上がる。口縁部と接続する。内外壁共に横位の篔削りを施す。	①普通 ②微粒子石英 ③黒色	4/5残
10	坏 (土師)	14.0×6.5 ×4.0×0.3 ~0.4	僅かに安定を保ち得る小さな平底から内湾し立ち上がる胴部に至り僅かに内傾し直線的に立ち上がる口縁部に接続する。外壁面は横位に、内壁面は縦位に篔削りを施す。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色	
11	坏 (土師)	14.0×6.2 ×0.4~0.6	丸底の薄底から内湾し立ち上がり直線的に僅かに外傾を示す口縁部を作る。内外壁面は横位の篔削りを施すが特に内壁面はひび割れ多い。	①普通 ②石英粒子 ③黒褐色	
12	坏 (土師)	12.0×5.0 ×0.3~0.6	殆ど丸底と思われる薄底から内湾し立ち上がり僅かに外反する口縁部を作る。内外壁面共に篔削りかける。	①普通 ②微粒子石英、粘土 ③赤褐色	1/3残
13	甕底部 (土師)	26.0×10.0 ×7.5×0.4 ~0.6	平底から内湾し立ち上がる。外壁面は横位の篔削りを施すが、撫での表面処理態く不均一である。内壁面は輪痕痕残り、また全周的に虫喰い状態の剥離甚しい。	①脆い ②石英粒子 ③黒褐色	
14	香口縁片 (土師)	14.0×9.0 ×1.0	胴部の大きく張り出し部が想定される。口縁部は垂直に立ち上がっている。外壁面は横に篔削り。	①普通 ②石英微粒子 ③黒褐色	
15	甕 (土師)	11.5×10.0 ×13.6× 0.5	胴部は内湾し、肩部において内傾し垂直に立ち上がる口縁部に接続する。外壁面は横位、斜位の篔削り、口縁内外壁及び内壁面は手撫でによる。	①普通 ②微粒子石英 ③黒色	1/2残
16	小型坏	5.2×3.5 ×4.0×0.2 ~0.3	底部から直線的に外傾する如く立ち上がる手づくねの器である。	①普通 ②石英微粒子 ③褐色	完形

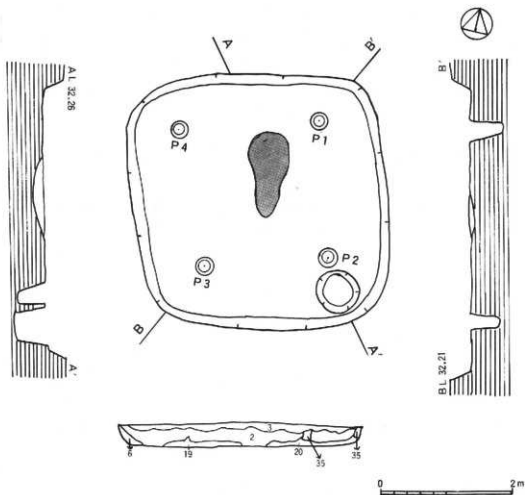
17	小型壺	6.0×6.0 ×0.3	底辺から内湾する如く立ち上がり肩部付近で最大膨らみ、内傾し口縁部と接続する。口縁は直線的に外反し立ち上がる。外壁面は上辺は縦位に下辺は斜めの篋削り。内壁面胴部は手撫で、口縁部は刷毛目仕上げ。	①普通 ②石英粒子 ③黒褐色	
18	敷石	8.0×6.0 ×5.5			流紋岩
19	敷石	15.5×9.5 ×8.0			花崗岩 一部欠損
20	磁石	7.0×14.5 ×3.5			泥岩
21	敷石	7.0×4.5 ×3.8			頁岩

#### 第44号竪穴住居址 (S I 4 4) (第83、84図)

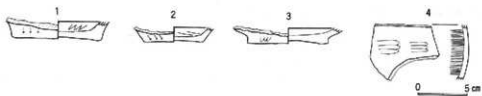
本住はSI46、SI42の中間に所在する。その平面形状は一辺が3.50mの正方形プランをなす。そして軸線を約20°東方に向けて建てられている。

壁高は30cmとなり、支柱は全て4柱が認められたが、P1では50cm×30cm×20cm、P2で40cm×27cm×20cm、P3で44cm×27cm×20cm、P4で40cm×20cm×20cmとなり、その規格は割合に大きい。炉は床面中央部に1.30m×55cm×15cmが計測されたが、この規格は大きい。なお、床面南東コーナーに62cm×45cm×50cmの貯蔵穴を有する。床面は平坦で固い。

出土遺物は破片が多いが、特に壺、坏は多く認められた。



第83图 第44号竖穴住居址平面实测图



第84图 第44号竖穴住居址遗物实测图

(B) S1-44

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

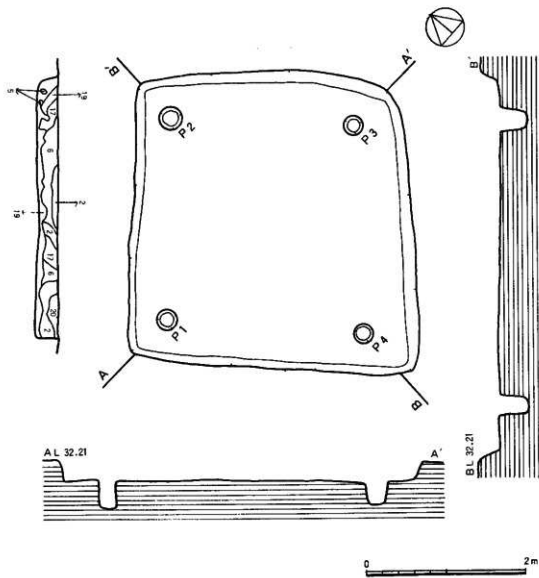
番号	部 位	法 量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備 考
1	蓋底部片 (土師)	7.0×5.0 底部推定径 9.0	外底面僅かに凹み、筒削り、内底面は篋削りを施す。	①普通 ②石英粗粒子 ③赤褐色	
2	器底部片 (土師)	7.0×5.5 底部推定径 7.6	外底面は僅かに凹む。内底面は刷毛目かかる。	①普通 ②石英粗粒子 ③黄赤色	底部 1/4残
3	壺底部片 (土師)	6.0×6.0 底部推定径 7.0	外底面は中央が僅かに凹み不整形な面である。外壁面は篋削りを施す。	①普通 ②粒子微細 ③黒褐色	底部 1/3残
4	壺胴部片 (土師)	6.5×5.5 ×0.4	内湾している胴部である。外壁面は横位の篋削り、内壁面は横位に細かい刷毛目が施されている。	①緊まる ②石英微粒子 ③褐色	

#### 第45号竪穴住居址 (S145) (第85、86図)

本住はSI33と、SI44との中間に所在する。その平面形状は北と南側で3.40m、東方で4.60m、西で4.70mの方形プランをなす。そして軸線は約40°東方に向けて建てられている。

壁高25cmと浅く、支柱は全て床面に4柱が認められた。そのP1で36cm×26cm×20cm、P2で32cm×30cm×20cm、P3で26cm×32cm×20cm、P4で35cm×27cm×26cmとなる。そしてこの支柱は床面中央方向に約20°かたむいて建てられている。がは認められなかった。床面は平坦で固い。

遺物については、土師器が大部分であったが、破片となって検出された。遺物については下記のとおりである。



第85图 第45号竖穴住居址平面实测图



第86图 第45号竖穴住居址遗物实测图

(B) S1-45

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

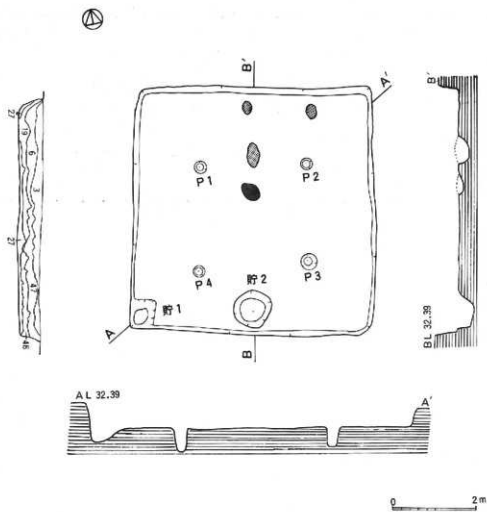
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺底部 (土師)	10.5×2.0 ×7.2×0.4 ~0.5	僅かに底面中央部の凹んだ底部から内傾し立ち上がる器形をなす。外壁面は横距削り、内壁底辺は刷毛目を施す。	①普通 ②石英粒子 ③黄褐色	
2	壺底部 (土師)	6.0×1.8 ×0.3~0.5	平底の底面から直線的に外傾し立ち上がっている。外壁面は縦位の距削り、内壁は距削りを施す。	①普通 ②微粒子石英 ③赤褐色	
3	壺口縁部片 (土師)	5.5×3.8 ×0.6~0.7	口縁部は弧を描く如く外反し立ち上がっている厚手の器である。外壁面は縦位の距削りを施す。	①普通 ②微粒子石英 ③黄褐色	
4	磨石	3.8×5.8 ×4.1			安山岩

#### 第46号竪穴住居址 (S146) (第87、88図)

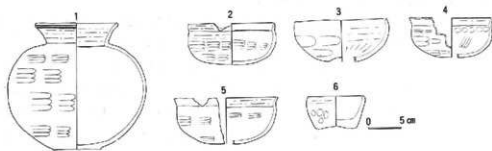
本住はエリアの南端に位置し、SI47に隣接する。その平面形状は北側の長さ5.50m、南で5.80m、そして東は5.90m、西で5.80mの方形プランをなす。その軸線は約70°東方へ向う。

壁高50cmと重厚な感じで、支柱は全て床面に4柱が認められたが、P1で43cm×30cm×20cm、P2で45cm×30cm×25cm、P3で50cm×36cm×20cm、P4で53cm×30cm×18cmとなりその規格は大きい。炉は床面少々北側に50cm×40cm×15cmが計測された。貯蔵穴は2基が認められ、貯1は床面西南コーナーに53cm×30cm×18cmが計測され、貯2は南側に80cm×40cm×60cmが認められた。

本住は床面も平坦で固く、中型住としては規格が整っているように思われた。出土遺物も極めて多く、特に甕、坏等は多く認められたが、それについては下記の通りとなる。



第87图 第46号竖穴住居址平面实测图



第88图 第46号竖穴住居址遗物实测图

(B) S1-46

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

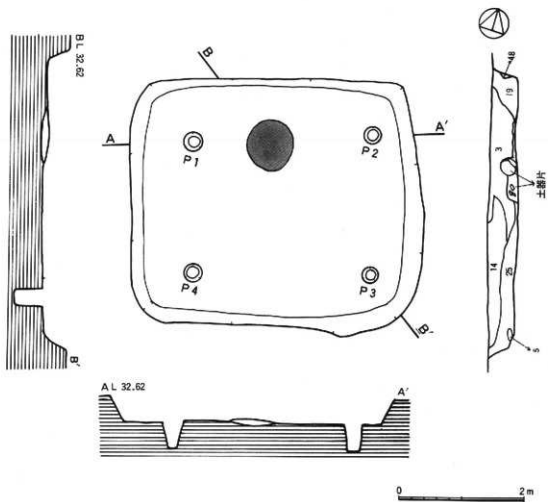
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 (土師)	12.5×19.5 ×7.5×0.4 ~0.6	底部から内湾する如く立ち上がり中央部において最大の膨らみとなり内傾し、頸部に至り、扁平球状を呈す。頸部から外反する如く立ち上がり口縁部を形成するが、口唇部は断而M字状となる。外壁面は横位の寛削りを施す。口縁部内外壁面共に横位に細い刷毛目施す。	①緊まる ②粒子の細かい石英 ③褐色を基調とするが使用痕の煤外用に付着	完形 和泉式
2	坏 (土師)	13.5×6.5 ×0.3~0.4	丸底から内湾し立ち上がり、肩部附近で最大膨らみとなり僅かに内傾し口縁部へと続くが、口縁部は垂直に立ち上がる。内外壁共寛削りを施したうまにかすかに刷毛目のこる。	①普通 ②石英粒子に不純物混ざる ③赤褐色	4/5残
3	坏 (土師)	9.0×6.5 ×0.4~0.7	丸底から内湾し立ち上がり、口唇部において僅かに内傾する外壁は横位の寛削り、内壁は内面底に削って寛削りを施す。	①緊まる ②微粒石英 ③赤褐色	2/3残
4	坏 (土師)	13.0×6.5 ×0.4~0.5	丸底から内湾し立ち上がり、肩部において最大に膨らみ、その後僅かに内傾し口縁と接続する。口縁は直線的に外傾する外壁は横位の寛削り、内壁は内面底に削って寛削りを施す。器形は前項坏に同じ。内外壁共横位の寛削りであるが、底部内側は制限する。	①普通 ②石英粒子 ③黒褐色	2/3残
5	坏 (土師)	16.0×7.0 ×0.4~0.6	器形は前項坏に同じ。内外壁共横位の寛削りであるが、底部内側は制限する。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色	1/3残
6	坏 (土師)	9.0×4.8 ×6.7×0.6 ~1.2	底部から直線的にやや外傾して立ち上がり、肩部附近で最大径となり、その後内傾して口唇部に至る。平づくお器であり、外壁面は横削り。	①青磁 ②微粒子石英 ③黒色	完形

#### 第47号竪穴住居址 (S147) (第89、90図)

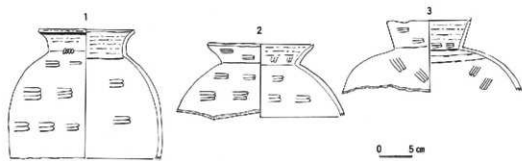
本住はエリアの最南端に位置し、S146に隣接する。その平面形状は北側と南側は共に4.20m、そして東と西では3.60mとなり、方形プランをなす。その軸線は約15°東方に向けられている。壁高40cmとなり、支柱は全て4柱が床面で認められたが、そのP1で30cm×40cm×20cm、P2で30cm×42cm×20cm、P3で30cm×40cm×22cm、P4で32cm×40cm×22cmとなる。引は床面中央より北にありで70cm×68cm×10cmが計測された。床面は平坦で固い。

出土遺物は土師器の破片が特に多く認められた。

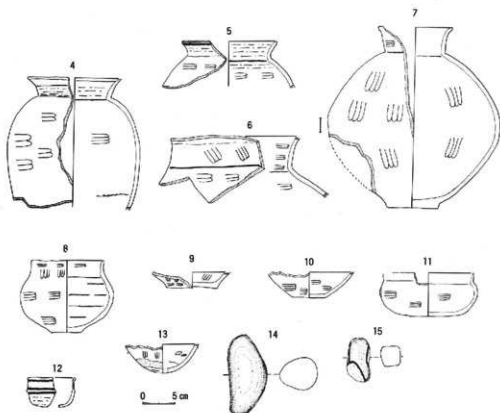




第89图 第47号竖穴住居址平面实测图



第90图 第47号竖穴住居址遗物实测图



(B) S I - 47

(法量 1.口縁径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

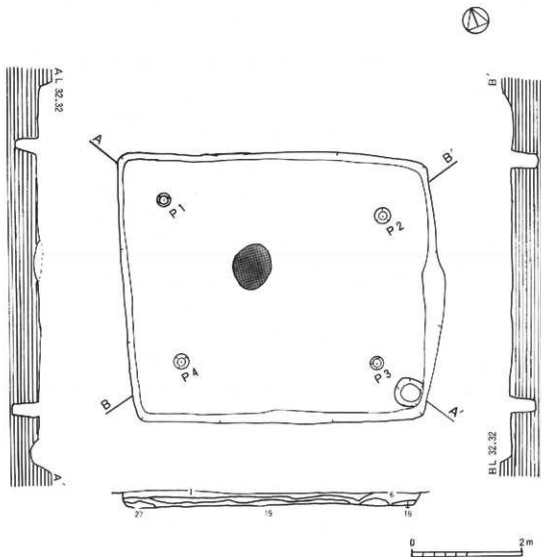
番号	器種	法量 cm	器形の特徴・整形の技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 (土師)	14.5×20.0 ×22.5× 0.5	内湾し立ち上がる胴部で、胴中央部附近において内傾し口縁部へ接続する。口縁部は当初直線的に垂直に立ち上がり口唇に至り外反し縁端は断面三角凸起をめぐらす。内外壁面共に横位に篋削り、口縁部は内外共に横位に手撫でを施す。	①緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色	胴部、 口縁部 残存
2	壺 (土師)	16.4×11.4 ×26.0× 0.5~0.6	内湾し立ち上がる胴部で、胴部において内傾する。口縁部は直線的に外傾する。内外壁面は横位に篋削り、寛磨きをかけ、口縁部内壁に一部縦撫でを施す。	①緊まる ②石英粒子 ③淡黒褐色	胴部、 口縁部 残存
3	壺 (土師)	13.0×11.0 ×23.0× 0.5	内湾する胴部から肩の張り出した肩部へ内傾し、直線的に外傾する口縁部を作る。口縁部外壁面は横位に篋削り及び撫でを行い、内壁面は寛撫でを施す。胴部内外壁は斜位に篋削り、内壁上部には2条の輪積痕残る。	①普通 ②石英粒子 ③黒褐色	口縁部 及び肩 部残存

4	薬 (土師)	14.4×17.0 ×1.9×0.5 ~0.6	球状に内湾し、中央付近で内傾し肩部に接し、口縁部は直線的にやや外傾し立ち上がり、中央部で外反し口唇に達する。内外壁面共に横位に筋削り、内壁には輪覆板を残す。口縁部は内外壁共に寛磨きを施す。	①普通 ②石英粒、砂質 ③黄褐色	1/2 残存
5	器口縁部 (土師)	15.0×8.0 ×0.5~0.6	内傾する肩部から外反して立ち上がる口縁部を作る。内外壁面は横位に筋削り、口縁部内外壁は手撫による。さらに口唇先端部分は刷毛目を用い、三条の細い辻線模様を作る。	①緊まる ②石英粒子 ③黒色	
6	器口縁部 (土師)	15.0×7.0 ×0.7~1.0	内傾する肩部から直線的に外傾し立ち上がり口唇部において外反を見せる。口縁部外壁は斜位に寛磨り、肩部内外壁間、口縁部内壁面は全て横位に筋削りを施す。	①緊まる ②石英粒子 ③黒褐色	
7	壺 (土師)	集定口径 11.5×28.0 ×8.0×0.4 ~0.5	底部から内湾し立ち上がり、中央部付近で最大径となり内傾し口縁部に接続する。口縁部は直線的に外傾し立ち上がり、口唇部においては外反する。全体的に扁平球状を呈す。本体内外壁面は斜位の筋削り、口縁外壁は横位に筋削りを施す。	①普通 ②石英粒子及び砂質 ③赤褐色	2/5 残存 五領式
8	壺 (土師)	11.2×11.2 ×4.6×0.4 ~0.5	底部から内湾し立ち上がり、中央部付近で最大の膨らみとなり、以後内傾し口縁部に接続する。口縁部は直線的に垂直に立ち上がりそのまま口唇部へと続く。外壁面は横位に筋削り、口縁部は横位に筋削り、口縁部と肩部との接続面は斜位に寛磨りを施す。	①普通 ②石英粒 ③赤褐色	完形
9	器底部 (土師)	10.0×7.0 ×0.5~0.7	凹面の底部から肩部は直線的に外傾する外壁面は斜位に寛磨りを施す。	①普通 ②微粒石英 ③灰褐色	
10	器底部 (土師)	14.0×4.0 ×5.0×0.3 ~0.5	平底から内湾し立ち上がる。外壁面は横位に筋削りを施す。	①普通 ②石英粒子 ③赤褐色	
11	坏 (土師)	14.0×5.7 ×0.3~0.5	丸底から内湾し立ち上がり、肩部で内傾し口縁部に接続する。口縁部は僅かに外反し立ち上がり口唇部へ達する。内外壁共に筋削きかかる。	①緊まる ②微粒子石英、粘土 ③赤褐色	2/3 残存 和泉式
12	坏片 (須恵)	6.0×7.0 ×0.3 ~0.41	丸底ロクロ仕上げによる。口縁外壁と坏部の接点に断面三角形の凸起模様を付す。	①緊まる ②石英粒子、白土 ③灰色	
13	坏片 (土師)	11.0×4.5 ×0.5	丸底から内湾し立ち上がる。底辺に径1.5cmの円孔を穿つ。内外壁共に筋削りを施す。また外壁は刺離状態である。	①幅広い ②石英粒 ③黒褐色	
14	敲石	6.0×12.5 ×5.0			石灰岩
15	磨石	3.5×6.8 ×3.0			硬砂岩

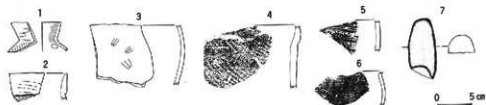
第48号竪穴住居址（S148）（第91、92図）

本住はエリアの最南部にあたる。その平面形状は北と南の長さは共に5.00m、そして東5.60m、西で5.40mとなり、方形プランをなす。その軸線は約10°東方向に向けて建てられている。

壁高30cmとなり、支柱は全て床面に4柱が床面で認められたが、P1で30cm×30cm×50cm、P2で30cm×30cm×45cm、P3で30cm×30cm×50cm、P4で30cm×30cm×45cmとなる。炉は床面少々北側寄りに60cm×48cm×15cmが計測された。床面は平坦で固い。



第91図 第48号竪穴住居址平面実測図



第92図 第48号竪穴住居址遺物実測図

(B) S I - 4 8

(法量 1.口縁部径 2.高さ 3.厚さ 4.底部径 5.高台径)

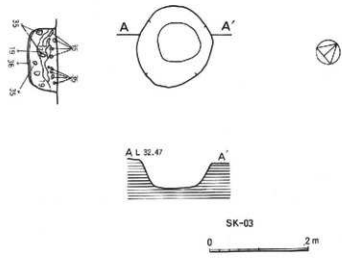
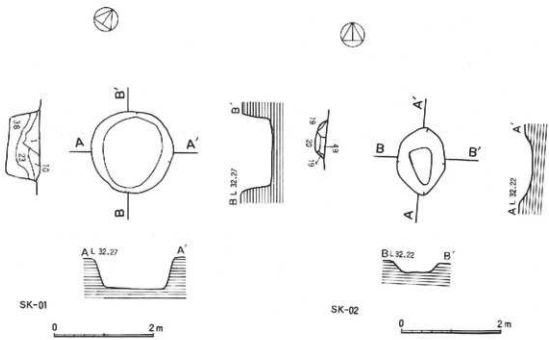
番号	器 種	法 量 cm	器 形 の 特 徴 ・ 整 形 の 技 法	焼成・胎土・色調	備 考
1	壺口縁部片 (土師)	10.5×3.5 ×0.3~0.4	口縁部は内傾した頸部から直線的に外傾し立ち上がり口唇部に至る。外壁は寛撫で、肩部は斜に刷毛目、内壁は横に刷毛目をそれぞれ施す。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③黒褐色	
2	壺口縁部片 (土師)	6.0×5.0 ×0.3~0.5	口縁部は直線的に外傾し立ち上がり複合を作る。内外壁面共に寛撫でを施す。	①固く緊まる ②微粒子石英 ③黄褐色	
3	甕胴部片 (土師)	9.0×8.0 ×0.5	内湾する胴部の最大膨らみ部分である。外壁面は寛磨き、内壁は寛削りを施す。	①固く緊まる ②石英粒子 ③黒褐色	
4	深鉢片 (縄文)	9.0×8.4 ×1.1	深鉢の頸部から胴部の残存片であり外壁は横位に羽状縄文を施す。内壁は横削り。	①脆弱性あり ②微粒子石英 ③褐色	
5	深鉢片 (縄文)	5.0×4.0 ×0.6	直線的に垂直に立ち上がる胴部をもつ。外壁は横位に2条の沈線と瓜型文を交互に配したものである。	①普通 ②微粒子石英 ③茶褐色	
6	壺片 (土師)	7.0×5.5 ×0.3	小型壺の内傾した肩部の残存片である。外壁は斜に刷毛目をかけ、内壁は横に寛磨きかかる。	①固く緊まる ②雲母微粒子 ③茶褐色	
7	磨石	4.0×9.0 ×2.5			粘板岩

## (2) 土壇状遺構 (SK) について (93, 94, 95図)

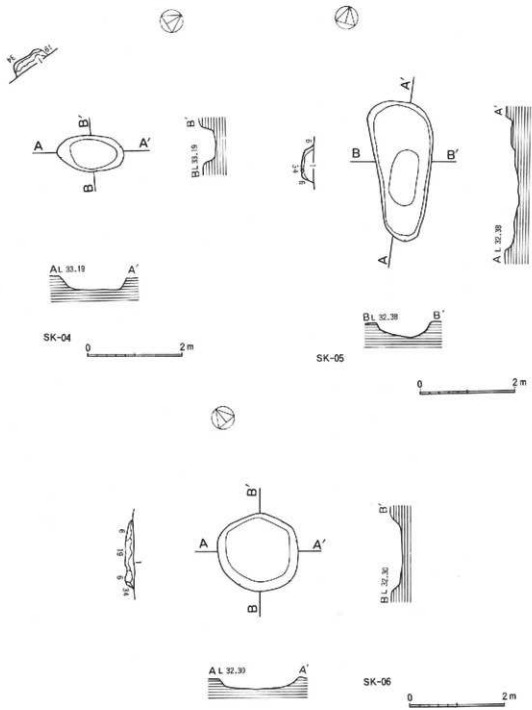
本エリアより土壇状遺構が7基検出された。その形状等によっては、貯蔵穴や墓壇状遺構と認められるものもあったが、出土遺物も極めて少なくその判定は困難であった。ただSK07はその形状等から判断して動物捕獲穴ではないかと判断された。その覆土より縄文土器片2、土師器片3(坏胴部小辺)が出土したが、これによって本遺構の時代相を決定つけることは少々困難かと思われた。本集落の繁栄していた頃、集落内に捕獲穴を造ったものか。また、本エリアでは縄文遺構は検出されなかったが、縄文土師器片、石鏃・摺石等が数多く認められたこと等から、すくなくとも狩猟地域になっていたものと推定される。この主の遺構は他の地域の遺構からは数多く検出を見ないもので、注目に値するものではなからうか。

以下土壇状遺構を表にしてその概要をみたいと思う。

番号	位置	平面形	規格 (cm)	壁	底面	遺物	備考
			長径×短径	(深さ) cm			
SK01	SK09、SK02に隣接	円形	160×160	123cm・30'の傾斜	平坦・軟い	なし	土壇墓か
SK02	SK09、SK01に隣接	楕円形	140×90	30cm・60'の傾斜	舟底形・軟い	なし	不明
SK03	S I 09の西壁面を隔込む	円形	150×170	30~40cm	舟底形	なし	不明
SK04	エリア北側SK13に隣接	楕円形	140×80	30cm・60'の傾斜	舟底形	土師器片坏片五箇後期	不明
SK05	SK16、SK17に隣接	不整形の方形	270×110・50	20~30cm	巾の使い方が深い	なし	不明
SK06	SK17、SK18に隣接	円形	150×140	30~20cm、底部真中が少々深くなる。	平坦で固い。積々摺鉢形・120cm×120cm	なし	不明
SK07	エリア中央SK33・SI30に隣接	不整形・楕円形	380×125 (巾)・60 (巾)	深い所210cm・浅い所200cm・直立して傾斜はない		縄文土器片 土師器片	動物捕獲穴か。縄文時代か、五畿期に属するかの判定は困難。

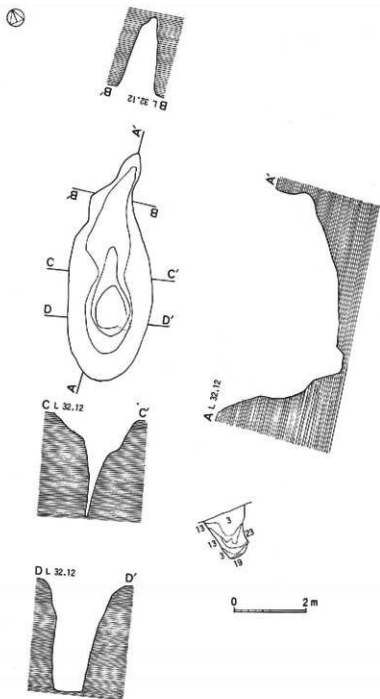


第93图 第1·2·3号土坑状遗构平面实测图



第94图 第4·5·6号土坑状遗构平面实测图





第95图 第7号土堆状遺構平面実測図

### 3. おわりに



### 3. おわりに

#### (一)

本遺跡については全てこれを「1. 本遺跡の概況」のところにおいて記述したので、ここでは特に留意されるものだけについて述べてみたいと思うのである。

① 本遺跡はそのC遺跡より500m離れた台地上に所在するが、それはやはりC遺跡と同じ台地上にあることを先づ述べておきたい。なお、調査はC遺跡より開始されたが、それは作業等の都合によってなされたものであった。

② 本遺跡より竪穴住居址48軒と土壇状遺構7基が検出されたが、それらは五領期末期より和泉期に亘るものと判断された。そして本遺跡には土壇状遺構や道路状遺構、溝状遺構等が極めて少ないことから判断すると、集落の中心はそれよりもっと西北方の台地上にあったものと思われる。

③ 竪穴住でその規格が大型住と認められるもの4軒、中型住24軒、小型住18軒となり、大型のものは壁高深く、貯蔵穴2、炉2を有するものもあり、その構造が重厚である。小型住で炉を有しないものが8軒もあった。大型住は全て主柱は床面に4が認められたが、中小住においては主柱は壁面状に設けられるものが9軒あった。

④ 遺物は土器片が大半を占め、鉄器類の如きは僅かに1片がみられただけであった。なお、土器類には祭礼用の器台、高坏、ミニチュア土器類も多く認められたことは注目すべきである。また、祭礼用の有孔石器、玉類は検出されず、漁具の類も見られなかった。

⑤ 土壇状遺構については動物捕獲穴と見られるものが検出されたが、その時代の判定については明確なことはわからなかった。

⑥ 本遺跡より僅か50m離れた台端に円墳3基が残存する。それらは今回調査の対象にはならなかったが、この集落に付属するものとしてとらえるべきものであろう。

⑦ 本遺跡は前述のとおり五領期末期より和泉期に亘る集落址として、ここに48軒の住居址が検出されたが、住居址は東北部へ密集しているものと判断されることから、全体的にみてこの集落の規模は大きかったものと思われる。しかしながらこれらは調査区域からははずれていたため、調査の対象とはならなかった。さきに「II. 本遺跡周辺における歴史・地理的環境」の節において述べたとおり、本遺跡は関本地区に付属する地域の一環としてとらえるべき性格のものと思われる。関本の地区は当時新治国の拠点として重要な位置を占めていたところで、五領期9、和泉期7、鬼高米11を数えるが集落址が判明しており、それに付属して首長級の古墳も数多く残されている。本遺跡もやはりそれらの一環としての重要な政治的・経済的役割を演じていた所ではな

かろうか。

## (二)

ここに半年に亘る発掘調査は滞りなく終了した。本調査の結果は前述のとおりであるが、この調査をとおして関城の地がその当時これらの地方の重要拠点を占めていたことがほのかに理解されたわけである。

本調査を終了するに当たり先づお礼を申し上げたことは、本調査に従事された関城町の有志の方々が、終始一貫献身的な努力をされたことである。昨年の夏は雨がなく異常な暑さであった。ちょっと動いただけで猛烈な砂ぼこりのする中を、夏休みを利用して奉仕してくれた生徒諸君の姿も実に印象的であった。また、これに寄せられた本町の人々のご好意もすばらしく、中には芋を煮てボール箱につめ数回も運んで下さったご老人の姿には、まことに頭がさがる思いであった。

なお、本調査にすばらしいご指導、ご援助をいただいた本県開発公社の方々、ならびに本県教育庁文化課、歴史館、教育財団、更には国学院大学当局に対し、感謝の誠を捧げる次第である。

# 圖 版



## 図版1 遺跡景観



(1) B地区遠景(南方から)



(2) C地区遠景(西南方から)



(3) B地区近景(北方から)



(4) C地区近景(北方から)



## 図版 2 遺構確認状況



(5)遺構確認状況

### 図版3 遺構全景



(6) B地区全景(東南から)



(7) C地区全景(南方から)

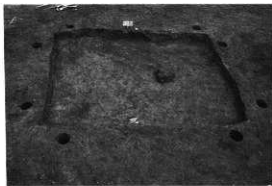


(8) 同上(北西から)

# 图版 4 B地区竖穴住居址



(9)SI-01



(10)SI-02



(11)SI-03



(12)SI-04



(13)SI-05



(14)SI-06



(15)SI-07



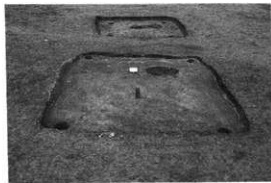
(16)SI-08



(17)SI-09



(18)SI-10



(19)SI-11, 10



(20)SI-12



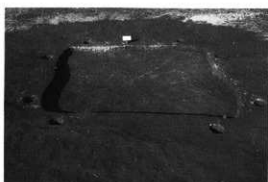
(21)SI-13



(22)SI-14



(23)SI-15



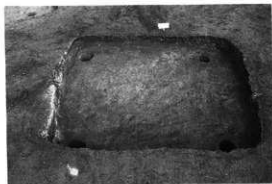
(24)SI-16



(25)SI-17



(26)SI-18



(27)SI-19



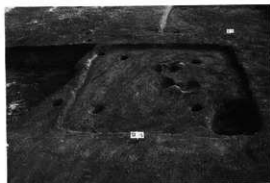
(28)SI-20



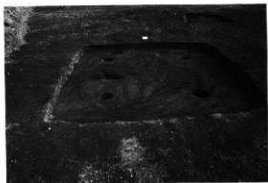
(29)SI-21



(30)SI-22横穴貯蔵庫に留意



(31)SI-23



(32)SI-24



(33)SI-25



(34)SI-26



(35)SI-27



(36)SI-28 SI-29複合状況



(37)SI-30



(38)SI-31



(39)SI-32



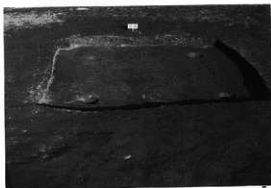
(40)SI-33



(41)SI-34



(42)SI-35



(43)SI-36



(44)SI-37

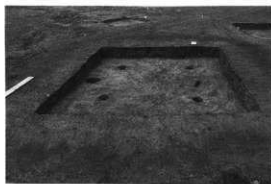




(45) SI-38



(46) SI-39



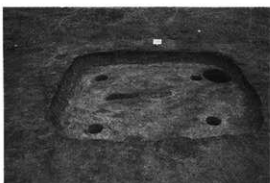
(47) SI-40



(48) SI-42



(49) SI-43



(50) SI-44



(51)SI-45



(52)SI-46



(53)SI-47



(54)SI-48

# 図版 5 C地区豎穴住居址



(55)SI-01



(56)SI-02 (有柄石鏃出土住居)



(57)SI-03



(58)SI-04



(59)SI-05



(60)SI-06



(61)SI-07



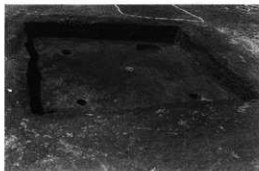
(62)SI-08



(63)SI-09



(64)SI-09 かまど (完形カマド)



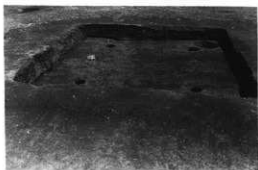
(65)SI-10



(66)SI-11



(67)SI-12



(68)SI-13



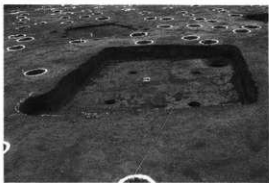
(69)SI-14



(70)SI-14 烧土炭火物出土状况



(71)SI-15



(72)SI-16



(73)SI-17



(74)SI-17 かまど (両袖に土器使用)



(75)SI-18

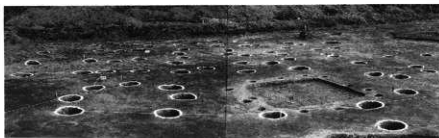


(76)SI-19

## 图版 6 C地区掘立柱住居址



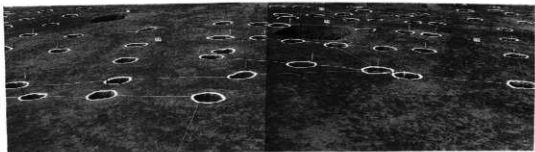
(77) SB-01, SI-16複合状況



(78) SB-02, 03 SI-15複合状況



(79) SB-02, 03複合状況



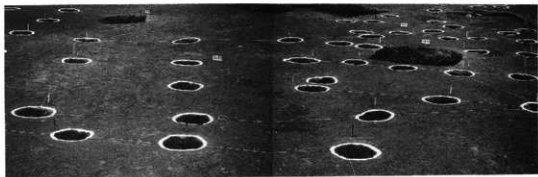
(80) SB-05, 06, 07SK-01複合状況



(81)SB-06, SK-01複合状況

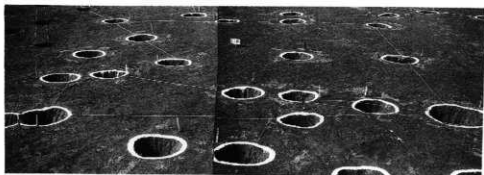


SB-08

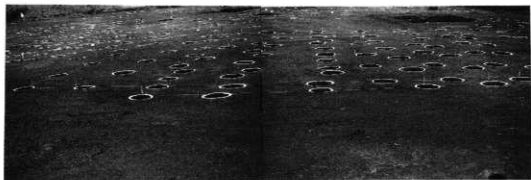


(82)SB-07, 06, SK-01複合状況





(83)SB-08



(84)SB-09, 16複合状況



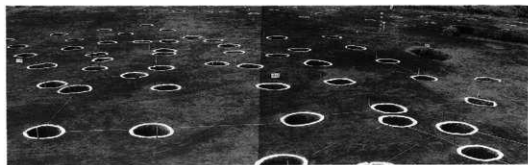
(85)SB-10



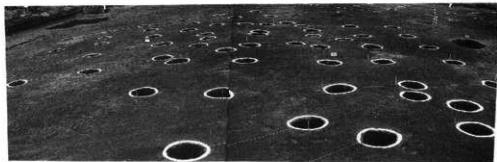
(86)SB-11



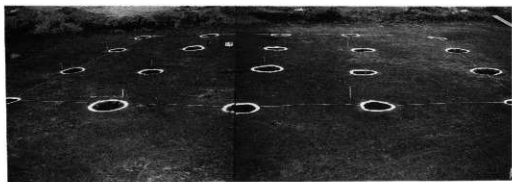
(87)SB-12



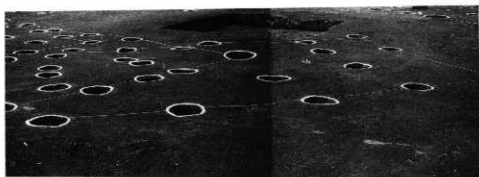
(88)SB-13



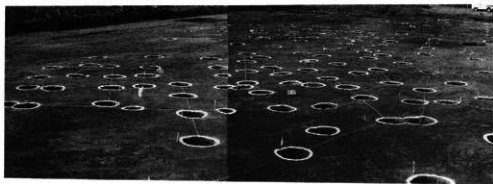
(89)SB-13, 14複合状況



(90)SB-15



(91)SB-17



(92)SB-18, 12, 10複合状況

図版7 C地区溝状遺構



(93) SD-01

# 図版 8 B地区土壌状遺構



(94) B地区SK-01



(95)SK-02



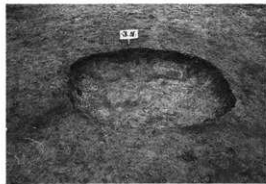
(96)SK-03



(97)SP-04



(98)SK-05

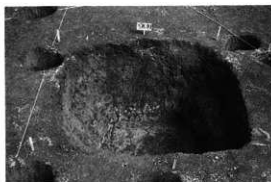


(99)SK-06



(100)SK-07

## 図版9 C地区土壌状遺構



(101) C地区SK-01



(102)SK-01(セクション)



(103)SK-02



(104)SK-03

图版10 C地区掘立柱住居址柱穴断面



(105) C地区SB-02~P19



(106)SB-03~P19



(107)SB-05~P4



(108)SB-06~P3



(109)SB-09~P9



(110)SB-11~P16





(111)SB-12~P7



(112)SB-SB~P5



(113)SB-12~P4



(114)SB-13~P2



(115)SB-16~P37



(116)SB-17~P1



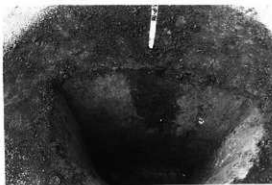
(117)SB-18~P21



(118)SB-18~P5



(119)SB-18~P15



(120)SB-18~P15

# 图版11 B地区遺物出土状态



(121) B地区 SI-06甕出土状态



(122) SI-06炭火物等出土状态



(123) SI-07土器出土状态



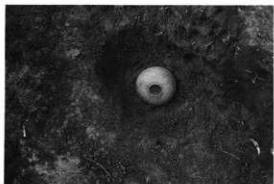
(124) SI-13甕出土状态



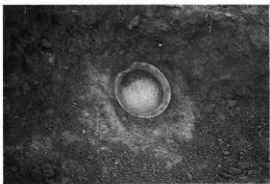
(125) SI-13土器出土状态



(126) SI-20小型坏出土状态



(127) SI-22 增出土状态



(128) SI-22 坏出土状态



(129) SI-28 增出土状态



(130) SI-28 土器出土状态



(131) SI-28 壺出土状态



(132) SI-22 壺出土状态



(133)SI-32壺出土状態



(134)SI-32土器出土状態



(135)SI-37貯蔵穴の中の土器出土状態



(136)SI-40土器出土状態



(137)SI-43土器出土状態



(138)SI-43壺出土状態



(139)SI-44壺出土狀態



(140)SI-46壺出土狀態

## 図版12 C地区遺物出土状態



(141) C地区SI-02石鏃出土状態



(142) SI-06土器出土状態



(143) SI-07壺出土状態



(144) SI-08かまど附近土器出土状態



(145) SI-09甗出土状態



(146) SI-09かまど内土器出土状態



(147)SI-10壺出土狀態



(148)土器出土狀態



(149)SI-13高环出土狀態



(150)SI-14甕出土狀態



(151)SI-16土器出土狀態



(152)SI-17甗出土狀態





(153)SI-17鎌出土状態



(154)SI-17刀子出土状態



(155)SI-17杯出土状態



(156)SI-17甕出土状態



(157)SI-17かまど内土器出土状態



(158)SI-17壺出土状態



(159)SI-17刀子出土状态



(160)SI-18土器出土状态



(161)SI-19盖出土状态

図版13 C地区出土遺物



(162)SI-02深鉢(弥生)



(163)SI-10壺(土師器)



(164)SI-17壺(土師器)



(165)SI-14甕と甑



(166)SI-17甕(土師器)



(167)各遺構出土甕(土師器)



(168)SI-08壺片(須惠器)



(169)SI-17甕(須惠器)



(170)SI-40甕(須恵器)



(171)SI-17(左) SI-40壺と壺(土師器)



(172)SI-07高坏, 壺, 甗(土師器)



(173)SI-07(左) SI-13甗(土師器)



(174) SI-17長頸瓶。腕付杯(須恵器)



(175) SI-17高台付杯(須恵器)



(176) 各遺構出土土師器杯(上)SI-13,16(下)SI-13,16,10,18



(177) 各遺構出土須恵器杯(上)SI-17,18,07(下)SI-17,10



(178)SI-17出土遺物



(179)SI-18出土遺物



(180)SI-13, 07, 18环



(181)SI-13出土, 环, 高环, 壶



(182) Si-10高环



(183)各遺構出土高环



(184) Si-05, 15, 17紡錘車

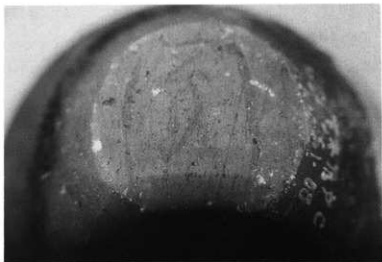




(185)SI-08墨書土器



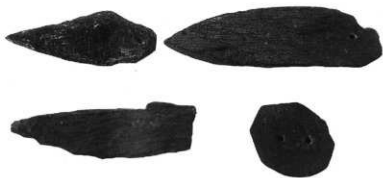
(186)SI-17墨書土器



(187)SI-08墨書土器



(188)SI-07墨書土器



(189) 各遺構出土石製標造刺



(190) 各遺構出土石鏃



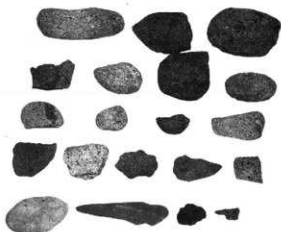
(191) 各遺構出土石刃(1)



(192) 各遺構出土石刃(2)



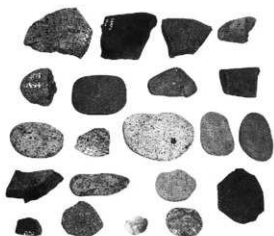
(193)SI-04石器類



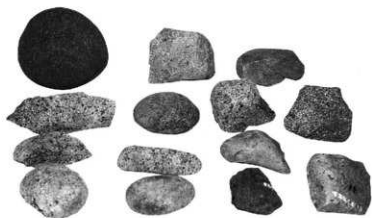
(194)SI-07石器類



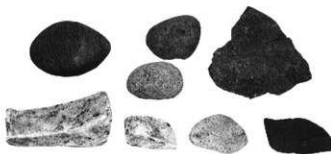
(195)SI-12, 17磁石外



(196) SI-10, 08磨石外



(197) SI-13, 08磨石外



(198) SI-18砥石外



(199)SI-17馬具



(200)SI-17鐮



(201)SI-17, 18鍗



(202)SI-15鉄鍗



(203)SI-17鉄器

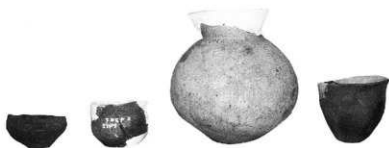


(204)SI-17刀子



(205)SI-07手斧

図版13 B地区出土遺物



(206) (B) SI-03 坏と壺(土師器)



(207) SI-03 壺(土師器)



(208) (B) SI-12 台付壺(土師器)



(209) SI-44, 13 壺型土器(土師器)



(210)SI-13罍(土師器)



(211)SI-22, 26罍(土師器)



(212)SI-28壺型土器(土師器)



(213)SI-28壺型土器(土師器)





(214)SI-29壺(土師器)



(215)SI-28壺(土師器)



(216)SI-30器台と甕(土師器)



(217)各遺構出土壺(土師器)



(218)SI-32, 46號, 壺(土師器)



(219)SI-40壺(土師器)



(220)SI-40器台と坏(土師器)



(221)SI-43坏(土師器)



(222)各遺構出土壺型土器



(223)SI-46坏(土師器)



(224)SI-47壺と壺(土師器)



(225) SI-47坏(土師器)



(226)各遺構出土小型坏



(227)各遺構出土坏(土師器)



(228)各遺構出土壺口縁部片(土師器)



(229)各遺構出土坏(土師器)



(230)SI-43, 32壺と口縁部片



(231)各遺構出土壺底部片①



(232)各遺構出土壺, 壺底部片②



(233) 各遺構出土器台

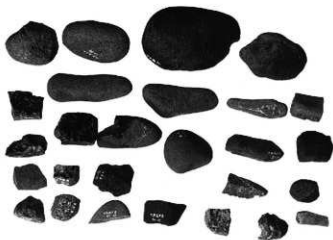


(234) 各遺構出土器台脚部片



(235) 各遺構出土高坏脚部片

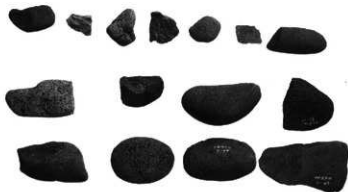
(236) 各遺構出土石器類



(237) SI-11~15石器類



(238) SI-22~28石器類



(239) 各道橋出土磨石①



(240)各遺構出土磨石②



(241)各遺構出土磨石③



# 图版14 表採遺物



(242) 陶文土器片



(243) 古銭



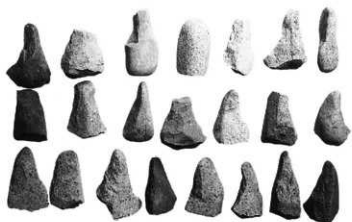
(244) 骨壺 (須志器)



(245) 石器類 (定角石斧, 石鏃, 石鏹)



(246)磨石



(247)敲石



(248) 円筒植輪

## 図版15 その他



(249) 事始神事



(250) 遺跡から筑波山



(251) 関城址全景



(252) 関城址開宗祐墓



(253) 船玉古墳羨道入口



(254) 船玉古墳



(255)遺骨出土に伴う供養



(256)作業風景①



(257)作業風景②



(258)発掘従事者一同

---

平成3年10月1日発行

茨城県

下木有戸遺跡発掘調査報告書

発行 茨城県真壁郡関城町  
編集 つくば関城工業団地埋蔵文化財発掘調査会  
印刷 鶴エリート印刷  
茨城県牛久市柏田町3269  
Tel 0298(73) 2 2 3 1代

---